山岳

第三年

山岳會

第參號

山岳

第三年
第三號

本號目次

（明治四十一年十月廿五日發行）

○圖版

○蘆安方面地藏岳腹、霧燒の小舍より望める同岳及び農鳥山　高頭　式氏撮影
○槍ヶ嶽の大雪溪　辻村　伊助氏撮影
○田代池の燒岳　三枝威之介氏撮影
○燒岳噴火孔　高野　鷹藏氏撮影
○立山龍王岳と槍ヶ嶽　辻本　滿丸氏撮影
○槍ヶ嶽の南望　榎谷　徹三氏筆
○槍ヶ嶽より立山を望む　同

○本欄

北海道の火山　理學博士　神保小虎……一頁
飯豐山（出羽探山記の一）　大平　晟……一六
越中小鳶山　辻本滿丸……三四
槍ヶ嶽の巔　榎谷紫峯……三九
秩父の一角（後半）　河田梅澤親光　默……四九

新高山紀行　尾崎白水……七一
白峰山脈の記　小島烏水……八〇

○雜　錄

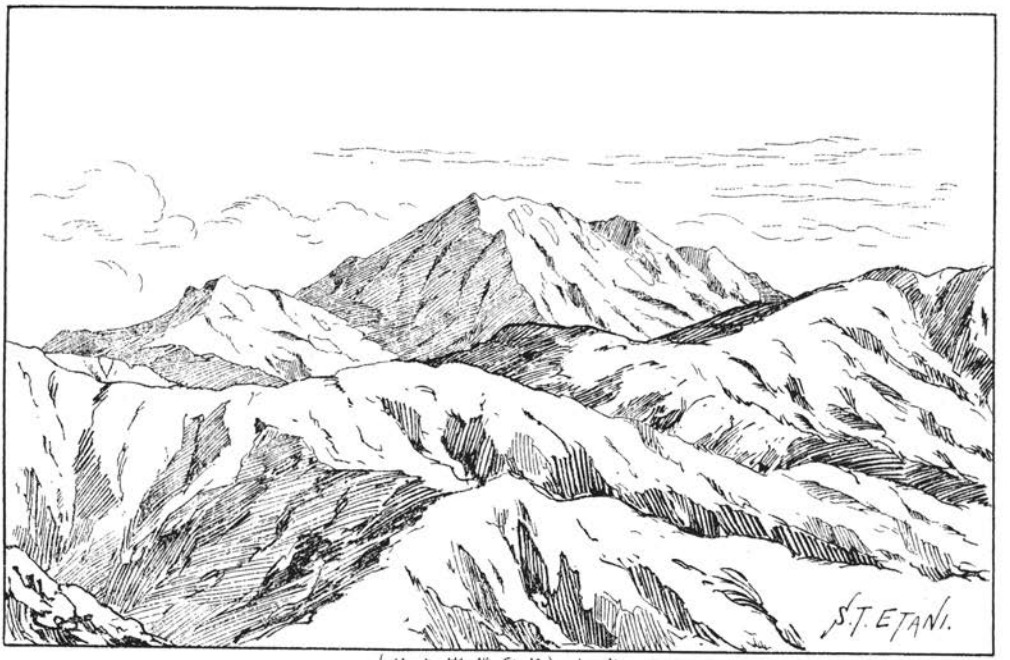
○劍ヶ峰最初登山者(式)○越中劍岳先登記(K、K)○越中劍岳先登者に就ての疑問(辻本)○甲州仙丈岳と奥仙丈岳附白峰の新登路(烏水生)○日本北アルプス中央部横斷の旅行談(一)(河田生)○八ヶ岳山上の禁札(辻本)○金峰山御室及駒ヶ岳屏風岩小屋の燒失(辻本)(河田)○硫黄岳登山(たかの)○劍山を見ざりし記(塚本樂山)○十和田湖談(山本巓坊)○震災豫防調査會に望む(小島)○飛驛叢書の出版(小島)○山岳寫眞と松本市保里寫眞館(たかの)○山岳圖書批評○立山案内(辻本)○富岳誌(小島)

○雜　報

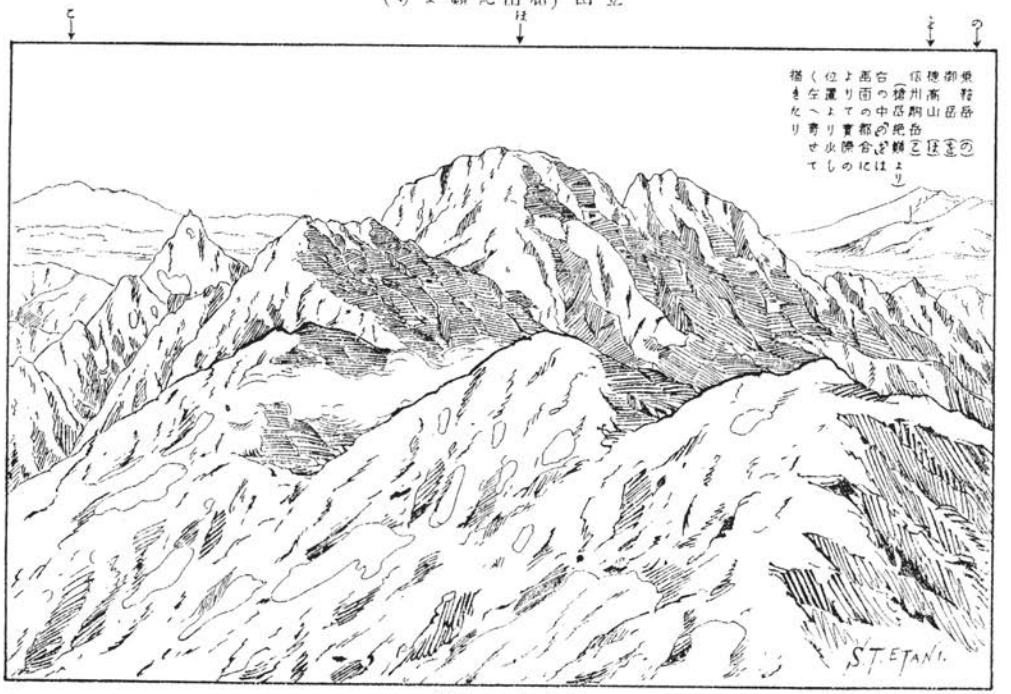
○本年の富士初登山○富士山と最高齡者○富士山の最低溫度○富士登山の新道(實は舊道の修理復活)○飛驛山脈の晩雪○外人の淺間登山談○淺間山は何時破裂するか○中禪寺湖に包める秘密○筑波山上の紀念圖書館○燒岳の話○箱根初花の瀧○岩手山登山會○大岩尊の秋祭○蝦夷富士の大火○臺灣の山岳鳴動○高山植物會の流行○北海道高山の初雹○投書一束(雜誌「山岳」に對する意見)(會員章を造りて如何)

○會　報

○特別會員荻野音松氏逝く○會員登山報○交換を望む○雜件一束○新入會員○寄贈圖書



立山（槍岳絶巓より）



槍ヶ岳の南望

高頭式氏撮影

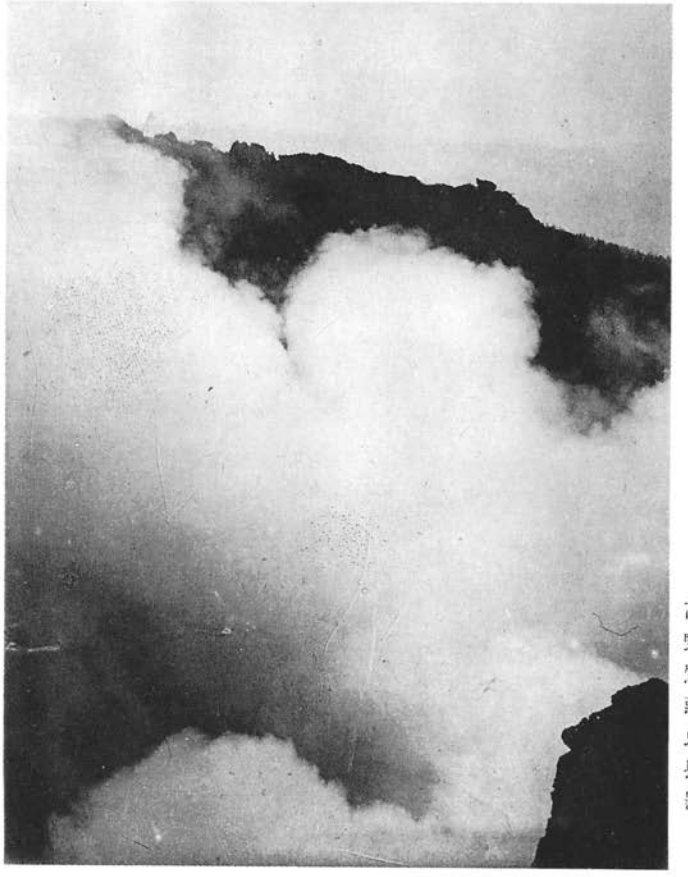
芦安方面地藏岳腹霧燒の小舍より望める間岳及び農鳥山

辻村伊助氏撮影

槍ヶ岳の大雪渓

三枝威之介氏撮影

田代池の燒岳



高野鷹藏氏撮影

燒岳噴火孔

立山龍王岳と槍ヶ岳

辻本滿丸氏撮影

山岳

第三年第三號

明治四十一年
十月廿五日發行

（禁轉載）

北海道の火山

理學博士　神保小虎

石狩國（明治二十五年の記事）

石狩國に二ヶ所の火山あり「ヌタッカウシペ」と「オッタテシケ」是なり。「ヌタッカウシペ」「イシカリ」上流の大枝

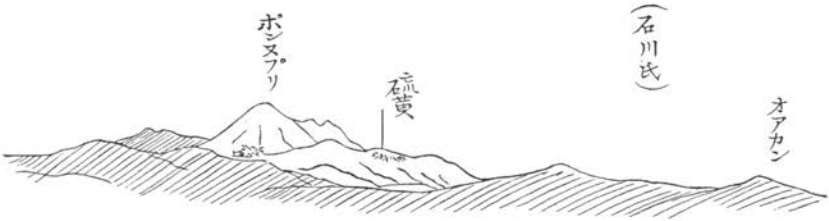
「アンタラマ」の水源に立ち、其形正しき火山形をなさずと雖も、其西側即ち「チュプペッ」の支流「ピウキナイ」の水源には、一の褐色なる溪谷ありて、其端に噴汽すれども、其山の頂點には、全く火山力を示すと無し、明治十七年に於て開拓使の福士成豐氏と、高橋不二雄氏「イシカリ」川の支流「アンタラマ」より此山に登りしが、眞の頂上には何も噴火せる跡を見ず、又た西側に向て下だらざりしが爲め、遂に一の噴烟をも見ざりしと云へり、故に本邦人は、未だ一人として「カミカワ」平原より望むべき噴烟の所に達し、之を實見せし者無しと云ふ、然れども福士氏の說く所に因れば、「アンタラマ」より上ぼるとは甚だ容易にして、凡そ其河口より三日を費すのみ、山の頂上にはハヒマツ密生して、中部には笹繁生せりと云ふ、之れが爲め、夏日は全く他側より上ぼるとを得ずして、唯「アンタラマ」より登るとを得るのみなりと云ふ。

十勝國（明治二十五年の記事）

「オヅタテシケ」　頂上の記事は明治廿四年横山壯次郎氏幷に明治廿年、大日方一輔氏の實見に因る者にして、「オヅタテシケ」と稱するは唯に一峯を指せる語に非ずして、「トカチ」川水源なる「トカチ」岳より「フラヌイ」川水源に至り、更に「ソラチ」川水源「カムイメトッ」幷に「ホロカメトッ」（共に六千尺以上）の山岳に至る全部を總稱する者なり、「オヅタテシケ」の最高點は、凡そ六千五百七十尺程にして、其峯の平均の高さ六千尺なりと云ふ、此山塊の南側は、傾斜緩にして雜草幷に灌木繁茂し、其西側には「フラヌイ」川の水源あり、岩壁屹立し、又岩塊の突出するを見る、今此山巔に昇りて溪間を見下ろす時は、

（保　神）　む盛なクシテタプオリよ流上川チラソ

恐ろしき響と共に、盛んに硫汽を噴出するを見るべし、此噴烟の所は、頂上より下、凡そ千五百尺の所に在りて、硫黄の堆積するを見る、「オッタテシケ」の西側には頂上より凡そ千二百尺を下だりて、火坑あり、直徑凡そ三十五間にして、深さ大ならず、圍むに岩壁を以てし、壁の高さ種々異りて、其傾きも亦た四十五度より六十度に至る、火坑の北壁最も高くして、凡そ百尺に達し、西側は壁最も低くして、坑底に緩斜せり、坑底には更に廿尺程を下だりて、直徑十間を有する小噴口の底に達し、其内に硫煙盛に噴出す、此小坑の上に於ける平地にも、亦た所々に硫烟あり、又た硫黄幷に土砂を以て小丘を作れり、更に此火坑を出で、全く噴口の外に出づれば、復其山の南側等に小池ありて、硫烟を放てり、又此の大火口の上部に於て、直徑二丁程の凹みありて圍むに絶壁を以てす、恐らくは舊火口にして、其北側は、破れて溪谷に通じ他の三方は、皆絶壁にして、西壁は砂を以て掩はれ、西方には安山岩の破片夥し、然れとも全く硫黄無く、又た硫烟を見ず、硫黄の堆積は、唯新火口内に有り、此火口より更に下だりて、一の山背を越へ、「フラヌイ」の一枝の水源に於て、一の小硫汽口あり、其邊盡くハヒマツ幷に笹を以て掩はれ、此所にも亦た硫黄の堆積あり。



アカンノ筋川よりメアカンを見る　（石川氏）

釧路國

（明治二十五年の記事）

釧路國には左の火山あり。

「メアカン」岳　釧路國の西北方に在りて、「アカン」湖に臨めり、余は其東部「オンチヌプリ」の大噴火口を見・横山莊次郎氏は西部熱湯地を爲せる小噴口を視察せり、此火山を東側より望めば、硫汽を噴出する「オンチヌプリ」火口の左に「ポンヌプリ」と稱する小圓錐を見るべし、余は明治廿一年其硫黄（大日方氏が實見せし者）を見、且つ「ワックカクニッ」の澤（水濁れるを以て名く）に於ける少量の硫黄を見んが爲め登山し、横山莊次郎氏は廿三年「アショロ」川より、此山の西側に登り、頂上まで視察せり。

「オンネヌプリ」　は海面上凡四七九〇尺の高さを有し、傾斜大抵急にして、其西北側なる「オータンベ」の澤より上ぼるを以て、最も便なりとす、火口は凡そ三丁の徑を有し、其底は甚平かにして、二個の扁平なる小丘あり、火口壁は甚だ高からず、且つ甚だ急ならず、頂上幷に底は火山噴出物の細片の堆積あり、又た「オータンベ」にも硫黄ありて、其量少からず、「オンチヌプリ」の一部は明かに成層火山の組織を示したり、「ポンヌプリ」は唯に一の小圓錐にして、上部に少く缺損せる所ありて、山側は四十度に近き傾斜せり、「アショロ」川支流「ラワン」の水源に在る噴口は、横山氏の視察に係り、「ポンヌプリ」の北方に在りて山の高巔に立ち、略ぼ圓形にして、徑凡そ貳百「メートル」あり、火口壁の高さは、凡そ百「メートル」、其中にある湖水の徑は、凡そ三四十尺にして、此湖は「ポントー」と名く、湖内の水は暗色にして熱度高からざるも、湖の西側に於て蒸氣常に騰上せ

西に向てメアカンを見る　（神保氏）

り、火口壁は絶崖を爲し、東側に最も高く、南方は最も低く、漸々上ぼりて高き平地と爲り、其上に裂隙ありて、蒸氣を噴き四邊に硫黄堆積せり。

「オアカン」岳　「メアカン」と相對し、「アカン」湖に臨み、明治廿一年農學士秋山謙造氏の實見に因れば、外側は盛なるトドマツの森にて蔽はれ、火口の上部は、ヒマツ群生し、火口内は平地にして低き小草の外、全く植物なく、火口の徑は三丁以上にして、火口壁に五個の尖峯あり、「オアカン」は其高度凡そ五千尺なりと云ふ（或人の説に此山は決して頂上まで登る事を得ずと論ぜり）

「アトサノボリ」　「クシロ」港の北、凡そ三十里に在る有名の硫黄山なり、此火山は略楕圓形にして、頂部に一小火口あり、深さ三百五十尺あり、此火山の高度は、海面上凡そ一六五〇尺にして、其小谷は、中央の粗質火山岩塊を圍むが如く、自ら一の火口壁中に此小山塊あるが如し、「アトサノボリ」火山の西側には、更に一の平地ありてハイマツ其他の樹木あり、土質は灰に似たる火山岩分解物なり、硫黄の堆積は主として、小谷の内部所々にあれども、又火山の外側に有るもあり、硫汽は硫黄多き所に於て最も盛んに噴出すれども、山麓の所々にも亦之を見るとあり、余は明治廿一年並に廿三年此山に登れり。

「マシウ」火山　根室の東岸に注ぐ所の「ニシベッ」の水源に立ち、高さ海上凡そ三千尺、西北は千島帶の山岳に續き、外見稍獨立せる一の火山なり、傾斜極て、緩にして、外貌は通常の小山の如し、其頂上に上ぼれば腎形の一湖（周圍凡そ三里、水面は海上千三百餘尺）南北に延長し、舊火坑の跡を顯はし、其側に深き圓形の新噴出口あり、深さ凡そ五百尺、周圍凡そ廿丁、其壁と底は樹木密生し湖に下だる所の溪谷は水なも者多きが如く、其最も大なる者は南東に在りて、兩側と底に笹を生じトドマツ

の密林あり、湖は西の方に壓せられ、東方に廣き溪を殘せり、此火山外側の溪流は、多く乾きて或る者は「ニシベッ」並に其支流「シェワン」の源をなせり。

新火坑壁は急にして、其北壁の尖端屹立して、別に「イケシュイヌプリ」の名あり、火山破裂の口牌全く傳はらず、全山輝石安山岩にして、其露出は內部に多く、又稜角ある安山岩破片噴出せられ、火山の上を掩ふ、カルイシは岸上にも在れとも、多くは內部の溪谷に滿ち、特に安山岩の破片と混じ、湖岸の絶壁を成せり、（以上明治廿三年觀察）

クシロよりオアカンを見る（神保氏）

北見國（明治二十五年の記事）

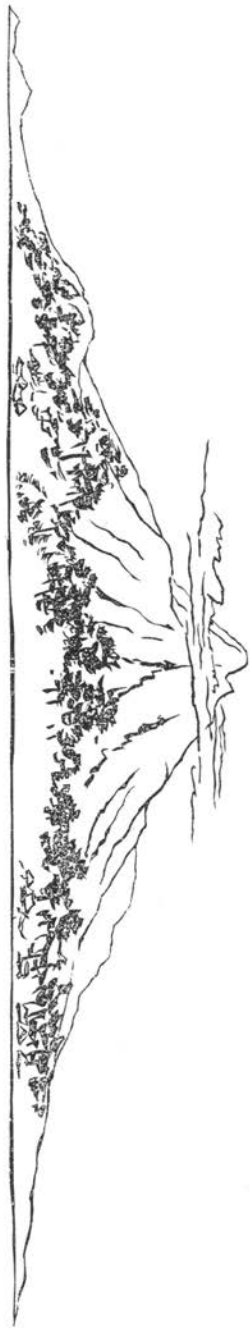
「シレトコ」硫黃山　「シレトコ」半島の上に聳えたる高峯に「ラウシ」と云ふ者あり、其高さ恐らく四千五百尺に近く、其北側には「シレトコ」硫黃山と稱する新噴火口あり、「ラウシ」の頂上は禿げたる低地ありて、少しく火坑樣の觀あり、余は明治廿三年「シレトコ」山に登りしに、新噴火口なる硫黃山の坑口は略圓形にして、三百歩の周圍を有し、海岸「イタシベウニ」の小流に接したる鑛業事務所より凡二十八町にして達す、坑の傍に「タキノサワ」と云ふ溪流ありて、其水は事務所の傍に於て瀧を爲して下だり、坑內の熱湯は激しく動搖して盛んに硫汽を發せり、坑の緣は別に高きと無く、唯明治二十二年噴出の硫黃粒あり、層を成して堆積し、其厚さ東側にて凡そ六尺、西側は崩れて硫黃層の斷面凡そ二十尺の厚さあり、硫黃は殆んど純粹に近く、唯其內に數個の極て薄き白灰の層を挾めり、又坑邊には其硫黃粒廣く散在して地を掩ひ、坑緣より平均凡そ三四十間の處にて全く盡く、其北と東とは尙ほ灰色不純の硫黃（明治二十三年噴出）を以て薄く其上を掩ふ者あれども、其區域廣き者に非ず、明治二十三年の噴出には、烈しく吐き出し、爲めに前年一時に堆積せし硫黃粒を多く溶解して、湯と共に「タキノサワ」を下り、海水に注下せしめたり、其損失未だ之を知り難しと雖も、此時に溶解せし硫黃、尙ほ其溪流を掩ひ、黃色美觀を呈せり、事務所より坑に達す

る道は、少く急にして、路上幷に坑邊には輝石安山岩と其稜蠻岩あり、稜蠻岩は海岸事務所の傍に在ては、流狀安山岩と交りて層狀を呈する所あり、又全く安山岩と密接して境界を分ち難き所あり。

「シレトコ」山破裂　同山は從來極て靜穩なりしが、明治二十二年八月九日に至り、俄に破裂し、尙續きて十月頃に至る迄噴出屢あり、最初の破裂ありし後、直に「シャリ」驛の巡査を送り、同十一日着山せしが、噴烟の爲め狀況を詳にすることを得ず、唯松樹の枝に硫黃附着して所々發焰ありしのみ、後同村戸長永田氏行きて初破裂後第十四日に着したる時は、火坑邊に二三尺の硫黃堆積あり、坑は凡そ二十間と十間の徑を有し、殆楕圓形にして、中には熱湯を充し、其烈く沸く時には灰色を呈し、靜まれば青色なりと云ふ、其後に至り硫黃は勿論增加せし者なるが、俗人の談話には、其全量三四十萬石に達せりと云へり、然れども此俄然に生じたる硫黃堆積は、不幸にして二十三年六月十五日頃に至り、再び破裂に會し、凡そ十五日間夥しく、熱湯を噴出したるを以て、其多分を流し去り、之を「タキノサワ」に因て海中に落下せしめたり、此損失は實に廣大なるべし、現に火口の西壁は此際に破損せし者なりと云ふ。

離　島　(明治三十五年の記事)

「リシリ」島　北見の西北部に二個の島ありて、其一なる「リシリ」は火山なり、秀でたる圓錐形を顯はし周邊略ぼ圓形なる一島なり、道廳殖民課員水科七三郎氏は、東京氣象臺和田雄治氏と共に、明治卅四年此山に登り(春日には村民之に登ること多しと云ふ)、水科氏の記事に因れば、高さ凡そ五千三百尺にして、東側は西側よりも著しく急なりと云ふ、頂上は全く岩石にして、頂部の傾斜は四十五度に達し、熔岩の塊は粗くして相重なりたる者、容易に崩れ落ちて登山甚危險なりと云ふ、山の低部にはトドマツエゾマツ幷にンラカンバ多く海上六百餘尺の處迄其密生するを見る、此點を越ゆれば「ダケカンバ」多く海上三千餘尺に至ればハヒマツ現はれ、頂上に至る迄密生せり、此山の頂上には別に火口なしと雖も、頂部は傾斜俄に急なり、又た此島には熊、狼を見ず、唯狐と鼠多しと云ふ、頂上は雲に秀て北見國北部の海岸にありてすら、西を望めば遙に「リシリ」の頂巔を



（氏川石）　る見なリシリて向に東度五十四南

望むことを得べし、水科氏登山の時（八月十一日）頂上にて午後寒暖計攝氏六八を示せり、又た石川貞治氏明治廿二年の實見に因れば、此島の沿岸は大抵絶壁にして、灣入淺く、海水に多く岩塊岩礁突出し、海岸の絶壁は暗色の熔岩（新時代に噴出せる）より成り、其上に在る段階には、近時の噴出物有り、砂丘は島の南側にのみ有り、諸川は多く乾きて河床には新時代の噴出に係る火山岩塊あり、段階は沿岸至る所にありて、最も廣き所は幅一里に達す、又た最も高き者は「オシドマリ」の南に在り。

クナシリ島（明治二十五年の記事）

「チャチャノボリ」　美しき重圓錐形にして、一の富士形の頂上に、復一の小富士山を載せたるの觀あり、余は唯「チノミノツル」の邊幷に「エトロフ」島より之を望見せしに過ぎざれども、横山氏は明治廿四年其麓を一周せられたり、上部の小圓錐は其形少しく缺損し、其一方は少しく低くして中央に低地あるが如く、其傾斜も一方（東側）は凡そ三十四度にして他側は凡そ二十八度なり、下の圓錐は上部に於て凡そ三十度の傾斜を示せり、小圓錐の頂上は全く不毛にして岩石突出するが如く、其下部にはハヒマツ群生せりと云ふ、下部の大圓錐は多くの溪谷ありて深き溝を成し樹木密生し、其下底に近き所には針葉樹の美林あり、此山は未だ日本人の頂

上まで登りたること無しと雖も、「チノミノッ」の飯塚某が下部の圓錐の頂上まで登りしに人の唱道する如く其處に湖水あることは全く認めずして、其頂上の平坦なる處には多孔質の火山噴出物堆積し、其より上部は岩石粗鬆にして全く登り難しと云ふ、「チャチャノボリ」は高さ凡そ海上五〇五八尺なり、(寫眞あり)、

「ルルイ」岳　「チャチャノボリ」の西に立ち、頂上は嶮岨にして、中央に凹所有りて火口の如く、未だ其頂上を詳記せる者なしと雖も、恐らく火山なるべし、高さ海上凡そ四九一六尺

「ラウス」岳　外形不規則にして、山側には深林ありて三個の硫汽坑を有し、各硫黄の堆積あり、一は南側に有りて「ラウス」硫黄山と稱し、第二は東南側に於て「トゥカリモイ」の硫黄山と呼び、第三は西側に屬し、「シュマノボリ」硫黄山と云ふ、「ラウス」山の眞の頂上は、海面上凡そ三〇二〇尺にして、硫黄山は皆二千尺の高さに在り、硫黄産出地は別に火口等の跡なく、唯溪谷の上部に在りて、岩石の露出は普通の安山岩と、其硫汽の爲め變性して白色の土樣に化したる者より成る、而て硫煙は單に岩石の裂隙より噴出し、火山破裂の記事は、「シュマノボリ」の外は之を得べからず、「ラウス」山側の深林は、多くエゾマツ幷にダケカンバより成り、低き處には種々の濶葉樹を混ぜり、又た山の高點にはハヒマツ群生せり、温泉の高熱にして、攝」氏九十七度に至る者は「シュマノボリ」にあり。

「タチウス」岳　クナシリ火山の内にて、最も低く、「ラウス」よりも一層傾斜緩なり、南側は知らず識らず高原地に降下し、一見火山にあらざるが如し、然れども山の北側には「イチビシナイ」幷に「ポントー」の二火山湖ありて、「イチビシナイ」の傍には硫黄採掘場あり、又た「ポントー」は灰黑色の温水を以て充たし、湖底より噴騰する蒸氣と共に硫黄の細泡浮みて、湖岸に僅か一二尺の層を成せり、「ポントー」は直徑凡そ九百尺、其西北側に一の小山あり、岩石突出して山側險なり、他の方向には土地開きて小丘起伏す、「ポントー」の湖岸には一の温泉あり。

エトロフ島（明治二十五年の記事）

島中火山多く、而して火山は本島の地勢上甚だ肝要なるを以て、以下各火山に付て、稍詳細に述ぶる所あらんと欲す（以下火山の記事は「ペレタラベッ」を除くの外皆石川氏に因る）

(1) モヨロ山　(2)「チルブ」山
(3) シャショウシ山　(4)「ヘチラヌプ」山
(5) レブンシリ山　(6)「シトカプ」山
(7) アトサ山　(8)「ペレタラベッ」山

南に向てモヨロを見る（石川氏）

以上八火山の内「モヨロ」、「アトサ」の二山は明治廿三年石川氏が登山せし者にして、「チルブ」は中途まで登りしのみ、其他は「ペレタラベッ」（廿四年神保氏登山）の外、大抵山形を遠望し、又たは踏驗者の直話を聞きしのみ。

(1)「モヨロ山」　島の東北隅に在り、山上三峯に分れ、麓に孤立せる一小火山あり、ポンヌプリ」と云ふ、山上より南方を望めば、一連の崖壁西方より南方を限れり、壁下に半月形の湖水あり、周圍凡そ二里、該岩壁は蓋し舊噴火口壁にして、「モヨロ」山は新に其内部に顯出せしものなり、三峯中東北隅に在るものは富士狀をなし、海岸に屹立す、海拔三千四百七十五尺、山上にはハヒマツ密生し、二個の小噴火口あり、共に耗損して僅に其形跡を存し、風化せる熔岩露出せり、之に接する第二峯は、高さ三千四百尺、山上に噴火口無きも、暗褐色を呈せる安山質の熔岩層あり、此熔岩は磁性強くして著しく携帶の磁針を轉動せり、第三峯は土人呼で「シュプヤヌプリ」と云ふ、所々硫氣を吐き硫黄堆積す、「モヨロ」山の名をして鑛業社會に嘖々たらしむるは此の鑛產あるが爲めなり、山上濃霧に會し硫氣之に和し觀察充分ならざるも、該山上及び第二峯に接する凹所に於て、少くも五個の舊噴火口あり、此峯現今低くして海拔二千九百八十尺なるも、昔時は三峯高さ相似たりと云ふ、此峯の東西兩麓には暗黝色を爲せる安山質溶岩奔逸して奇觀を呈せり、兩側に全く

火山迸發物の碎片より成れる小隆起あり。

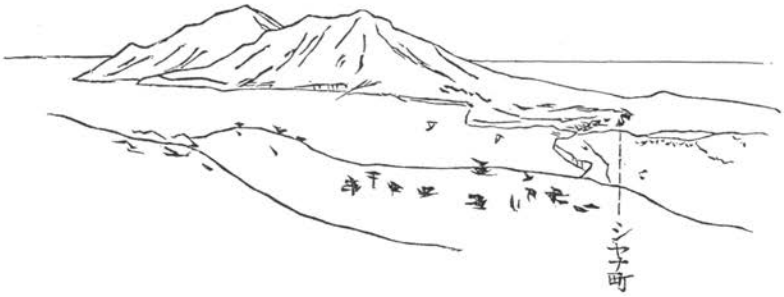
「ポンヌプリ」は明治十六年二月迸發せし小山なり、海拔千七百尺餘頂上二分す、頂上に近く周圍凡そ百五十間の噴火口あり、南方に向て開き口壁瓦斯を發散す、之れより流出せし溶岩南方に溢るゝこと十數丁湖畔に達す、十六年の噴火の際、燒石火山灰等湖中に沈積し、湖水爲めに其大さの半を失へりと云ふ、山上火山迸發物の碎片中、小き美麗なる熔岩錐を得たり。

モヨロ火山　（石川氏）

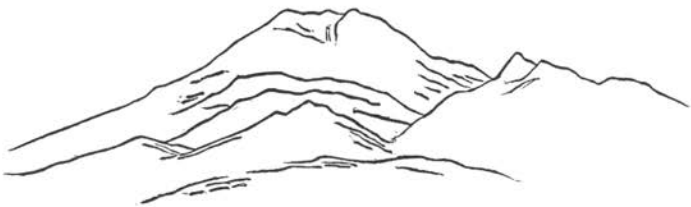
A ポンヌプリ　B モヨロ西部

(2)「チルプ」山　西北海岸「シャナ」、市街の西北に在り、沿岸凡そ十六里の半島をなし、二峰あり、高さ相伯仲す（海軍省出版海國に據れば高さ五千四十尺）、「ヤンゲペシュイ」川、二峯の間より發して西流す、此流を遡れば、西岸絶壁聳え、之を過れば溪谷稍廣く、一部に温泉湧出し、蒸氣昇騰す、之れに接して白色の泥狀硅質物に混じて、石膏の堆積するを見る、四邊盡く赫色の焦土にして、燒石磊々たり、側に松樹散亂燼灰中堆沒腐朽せるものあり、尙其形狀を存す、此事實と「シャナ」に於ける一土人の話より推測するに「チルプ」山は凡そ三十

ナイホノ湖よりアトサ山を見る（神保）



アリモイの邊よりチルプを見る（石川氏）



南三十五度南に向てシヤシヨウシを見る（石川氏）

年前に噴火せしことあるべし。

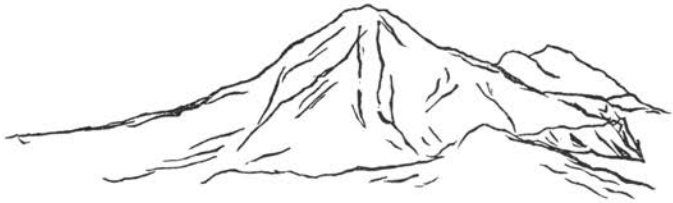
(3)「シャショウシ」山　「シャナ」市街の東方に聳え、其形圓錐狀をなし、「チルプ」山の西麓より望めば、當山の南側は三十六度の傾斜を呈す、山上硫氣を吐き、山麓沸騰せる溫泉を出すと云ふ。

(4)「ヘチラヌプ」山　「ルベツ」市街の東南に在り、「シャショウシ」山と相距る遠からず、極めて峻嶮なる總峯にして、山巔臼狀を呈し、岩角稜々たり、其南側は傾斜五十度にして、全山岩石より成れるが如し。

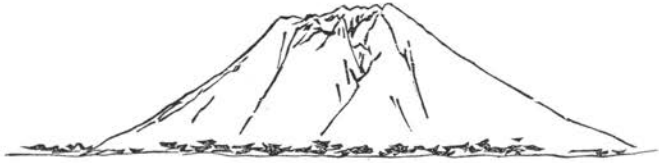
(5)「レブンシリ」山　「ヘチラヌプ」に近接して、其西南に聳ち、崩壞せる圓錐狀を呈し、山の北側は四十六度の傾斜をなす。(因に記す「ペッエトコウシ」火山とは、當山及び「シャショウシ」等の總稱にして、單獨の山岳にあらずと「シャナ」の一土人語れり)

(6)「シトカプ」山　「アトサ」山と東西相對して、高さ「チルプ」山と略ボ相等し、或は云ふ、島中の最高山なりと、西方より望めば富士狀にして、山頂高濶岩石峨々たり。

(7)「アトサ」山　島の西南半に在り、「チルプ」と同じく半島を成して、海中に屹立す、二重富士形に



ペツトブよりチルを見る　（氏川石）

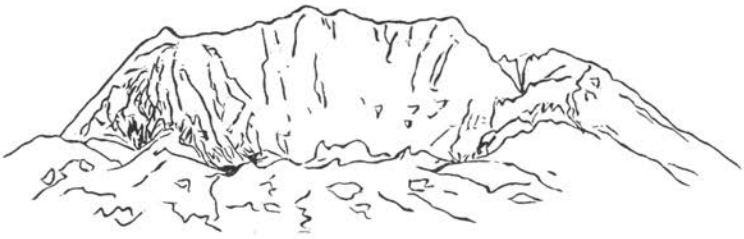


アトサ山の南よりシトカプを見る　（氏川石）

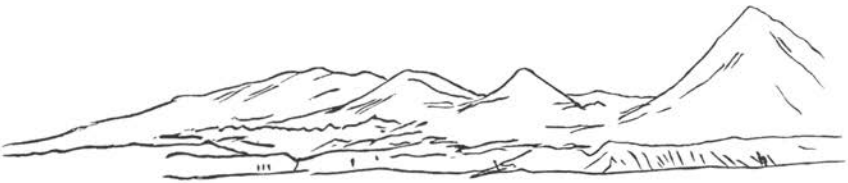
南三十度西に向てシトカプ火山を見る　（氏川石）

して、外輪山は西部崩壞して、只東部を存するのみ、全體の形狀より云へば、完全なる欠頂圓錐にして「エトロフ」火山中の最美なる者なり、山頂に一大噴火口あり、南北二百間、東西之に半し、深さ凡そ三百五十尺口壁の內部溶岩及び火山灰等の交層を露出し、各層四方に傾下せり、噴口の南北兩端は欠開して熔岩流出の門口をなせり、當山頂の熔岩も亦著しく磁力を有すること、「モヨロ」山上の者に似たり、高さ四千二十尺（海圖に據れば四千五十尺）

(8)「ペレタラベツ」の火山　此火山は今僅に硫汽坑となりて存在し、別に著るしき火口無く、白濁の流れを爲せる「ペレタラベツ」の上部に有り、此川は磧礫に淡褐色の沈澱物附着し、上流には必ず硫泉地あるを示せり、溪谷の上部には、殆ど草木無く、其處に露出せる岩石は、輝石安山岩並に其硫汽に因て、白泥狀に變質せる者にして、



エトロフ島アトサ火山　(石川氏)



オンネモイよりエンヌプリの諸峰を見る　(石川氏)

淡水には多量の明礬を含み、又た硫汽を噴出する岩石の裂隙には、岩面に明礬附着せり、此溪谷にある硫黄は、嘗て坑業せし者あれども、其量極て少くして、全く採掘に堪へず、此山の最高巔は凡そ三五〇〇尺にして、硫黄の堆積は頂上より少しく低き所にあり、山の高所には「ダケカンバ」多く、又た草木少き岩石地には「キバナシャクナゲ」等多し、然れども他所に多く見る所の「コケノキ」は殆ど見ることを得ず、「ハヒマツ」並に「クマザサ」は山の高所のみに限らず、其低所幷に海岸にも多少有り、海岸に降だれば「コケノキ」亦多し、此山は昔時硫黄を運搬せし木道の存する者あるを以て、笹幷に雜草繁茂すれども、昇降困難に非ず。(二十四年觀察)

以上列記せる火山の外に、尚ほ此島の海岸に於て破壞せる舊火口の痕跡處々に存在せり、西岸「オエト」の南にある「ポロポロ」幷に東北部「ラッキベッ」「モヨロ」間に於ける、幷に「モイケシ」灣の如き是れなり、「モイケシ」は先きに述べたるが如く(ミルン氏も既に明治十九年に之を記せり)絶壁は成層火山の如き構造を示し、諸層は外面に向て傾斜し、頂上も亦四方に緩斜を示し、全體圓形なる灣は「モイケシ」島と共に、舊火口壁を成す者の如し、此火口の全周回を想察すれば、長さ凡そ六里にして、絶壁の高さは凡そ三百尺に越へ、水底は岸を去ること六十間にして、六十尋の深さ有る所あり、而

て崖上の最高所は千二百尺以上にして西岸に立てり、「トーロ」湖は周圍凡そ一里にして水頗る深く、湖中に安山岩の小丘あり、又た湖畔に安山岩幷に凝灰岩露れたり、此湖の海に面する方は、狹き砂地を以て限られ、海中には安山岩の柱ありて、地勢上此湖水も亦一つ火山湖なるが如し。

ウルプ島（明治二十五年の記事

火山の最も明らかなる者は島の中央より少く東方に有りて、「オトイマモイ」の南方に當る、常に硫汽を吐き、一見して其火山なるを知るべし、余之に登りて其硫黄の極て少なきを證せり、山頂は正しき舊噴出坑中に、一の塊を有し、舊壁は北方に破損して、直に溪流に下れり、其摺鉢形の中央に塊狀の山（海上二千八百餘尺）ありて、周圍一里に近かるべし、其上に多くの坑ありて、最大なる者は東南に偏し、盛に硫汽を噴けり、是れ即ち遠望し得る所の噴烟にして、圓形の坑中より發せり、此火山は名無きを以て余之に新稱を附し、「スリバチヤマ」と云ふ、高さ凡そ二千尺、中央の塊狀の部分は全く輝石安山岩にして、外輪を成す所の舊火坑壁は、安山岩の層片より成りて成層せり、塊狀の部分即ち今の噴汽口の在る所には、處々に硫汽を噴出し、爲めに岩石變じて白色の灰狀を爲し、之を掩ふに明礬の皮殼を以てす、此堅き安山岩變じて灰樣に成りたる者は、初來の人誤て眞の火山灰と信ずる所の者にして、實は灰に非ず、此火山の噴出物は全く火山岩の破片のみにしてカルイシも極て少し、「スリバチヤマ」の溪流は皆極て嶮にして、高瀑多く、此山に登らんと欲せば余の如く其の東方の窮谷（余名けて屏風ダニと云ふ、上方に噴汽あり、水は西方に向て下だり、急流を爲す）より上ぼるべし、火山頂上より海岸溪口まで、凡そ三里にして、五時間を費すべし、此火山破裂の口碑今尋ぬべからず、此火山より下だる所の溪流は皆白濁色を帶ぶ。

ミルン氏が記する所の「モントノブ」Mount Nobu と云ふは、恐く此火山の南なる小き圓錐形の山岳（「セッコ！ザン」山）なり、而して海圖に畫きたる噴烟は、恐く「スリバチ」山の噴汽なるべしと信ず、「スリバチ」山の外、余は他に火山なりと信ずべき山岳を認め得ず、又た遠望して稍褐色の圓錐形岩質山岳なりと信ぜしもの

も多くは之に近よりし時、決して火山に非ることを證明せり、余は濃霧の爲め島の東側の山岳は多く認め得ざりしが、「ミルン」氏の「モント、ノブ」幷に其他の山岳にして、火山を爲せりと云ふは、容易に信じ難きを以て、爰に疑を存する者なり。

右神保氏北海道火山の原稿は、主として神保氏北海道地質報文より抄出せし者にして、本誌三十九年分に二回出で、其續きは是れにて大尾とす

飯豐山（出羽探山記の一）

越後　大平晟

第一　燃ゆる水

二年前の宣誓に基き、今年は先づ下越第一の名山飯豐山（イヒデサン）を尋ね、朝日、月山を經て、出羽富士と仰がるゝ鳥海山を訪はんと欲し、特に飯豐の見學には、佐藤國二郎君と男圖斌とを伴ふことゝせり、二生は會て予と共に、苗場山七釜の鍛錬旅行に、米山（ヨネヤマ）頂上の夜營に、妙高山探檢の夜行に加はりしもの、今は皆中學生なり。

颯爽たる朝風に、莫蓙を飜し、赫燿たる旭光を右頰に受け、閭門を出で立ち、北越線によりて、新津（ニヒツ）に下車せしは、明治四十年八月十一日午前十時四十分とす。

新津は、東京街道と會津街道との岐點に位し、村松、新發田（シバタ）兩兵營交通の衝に當り、特に近年油田地として頗る活氣を帶ぶ、滋賀の朝「越の國より燃ゆる水を獻ず」とあるは、即ち此地方なりしと傳ふ、史を按ずるに、新津の附近、柄目木（カラメキ）の山中に、草生水（クサウブ）の出づる池二個あり、かくま（即わうれん）といふ草にて、油と水とを分つ、慶長十八年、眞柄仁兵衞といふもの、越前より來り住み、始めて燈火に用ふと、草生水とは、臭き水の意即ち石腦油なり。

豪族桂氏を訪ひ、夫人の案内によりて、庭園を觀る、夫人は國二郎君の令姉にして、我校の出身者なり、園内池水清く湛え、古松の深緑は將に滴らんとし、蓮華の芳香は馥郁人を襲ひ躑躅の老株は、春の紅を飾るべく、水田の美稻は、秋の瑞穗を想はしめ、幽邃の景、純潔の氣、身の都邑に在るを忘れしむ、該家は　今上陛下北巡の際、行在所となりし所、近年東宮殿下亦御駐憩あらせられ、有栖川宮殿下親く園景を御撮影あらせられしと云ふ、巡覽終り、晝飯の饗にあづかり、直ちに腕車を驅り、水原を經、午後三時三十分、中浦村大字大傳に著す、新津より約六里とす、此日午後の行程十里强なれば、餘儀なく腕車を驅りしなり、途上福島潟を左方に臨みては、往古蒲原の平地が、渺茫たる淺海たりしを想ひ、輕炭瓦斯の燃料に供せらるゝを睹ては、越後七不思議の一と呼ばれし火井の、到る處甚だ夥しきに驚きぬ、越後一の地價持ち市島氏の村落に於て、路右牛頭天王と標せる社域に、湯殿山と刻せる石塔あり、湯殿山は、今回予が前途の日程中に屬するものなれば、何となく快感を催しぬ。

今夜の宿泊地赤谷まで尙ほ約五里、而かも生路の行なれば、茶屋の主人を煩はし、荷擔兼案内者を雇ひ、四時松原を發し、新發田中學校を左手に眺め、田間の細徑を貫き、五十公野街道に出づ、これより大道垣々、夕陽を背に浴びつゝ、古松の並樹、路の兩側に相連れる中を急進し、米倉を過ぐれば、日は既に沒し、飯豐山の餘脈は、左右に現はれて漸く高く漸く迫り、二百餘萬石の米穀を產する越後平を辭し、始めて山逕にかゝる、中山といふに到れば、駿河なる小夜のそれにはあらねども、人には逢はで、淋しくも殘螢の唯彼方此方に照すあるのみ。

八時三十分、赤谷に著し、直ちに小學校長土田隆松氏を尋ね、豫て飯豐登道の報告にあつかりし厚意を謝し、小川屋に投宿す。

第二　赤谷

赤谷村大字上赤谷は、戶數約百五十、北蒲原郡の東南端に位し、新發田より津川に通ずる縣道に當り、郵便

局あり、局前の標柱には「距新潟里程元標十七里五町」と註せり。

此地は、飯豐山入口最終の山村なれば、剛力齋藤平吉（三十七歳）、杉原森吉（五十歳）、の二人を雇ひ、郷里より携帶せる食品の外、野宿準備品を購入する左の如し、

白米一斗、　味噌五百匁、　砂糖半斤、　鹽鮭一尾、　福神漬一鑵、梅干、鹽、漬物

右代金三圓八十七錢

瀨戸引鍋一個、椀數個借入る。

十二日快晴なれば、早朝出發せんものと急ぎしも、昨夜の投宿遲かりし爲め、諸般の準備意の如く捗取らず八時上赤谷を發し、郊外にて津川街道と別れ、左折東に向て狹逕に入る、されど赤谷鑛山道なれば、幅は始終六尺餘の新道、左は却下數十丈に飯豐川（又赤谷川と云ふ、加治川の上流なり）、を瞰下し、右は概ね開削せる粘板岩の山側を仰ぎ、正面には標高四千餘尺の蒜場山（ヒルバサン）を望む、殊に飯豐の溪流は、堪えて深藍の潭を作り、流れては蒼龍の鱗を閃めかし巨岩に激しては、忽ち雪花珠玉を散ず、兩崖洞底は灰白色なせる花崗岩にして、谷は清く、水は澄み、赤谷を距ところ未だ幾許ならざるに、風色既に俗界のものならず、「溪容水態既に深山の相なり」とは、二學生の口により、頻りに歡呼せられぬ、溪流所々に、綸を垂るもの、是れ文王を釣らざるも、寧ろ鮎や魚岩を希ふの徒なるべし。

上赤谷より谷に入ること約十町、對崖の瀧谷新田には、算盤珠石（玉髓）を產す土俗之を菊面石、或は粒石と稱す、剛力の語る所によれば、政府は此地に赤谷製鐵所の發電所を設置し、製鐵所より鐵索によりて、福島潟まで送運すべき計畫なりしとて、其鐵材は浴道數ヶ所の小屋に今尙空しく保存せらるゝを見る。

上赤谷より一里計、右方に釜ヶ澤金山、琴澤銅山あり、近傍より石炭を產す。

十時赤谷製鐵所に著す　上赤谷より二里强、海拔約九百尺とす、事務所主任留守代理安田民雄氏、精細なる圖面を開き、鑛脈分布の有樣を說明し、鑛石數品を示さる、氏が語る所によれば、字寺釜平（ナラガマダヒラ）は露出鑛石を直ちに碎取し、字簀立（スダテ）は坑道によりて採掘し、附近石灰岩に富み、鑛石は雲母鐵にして、僅かに黃鐵鑛を夾雜す、

本山は明治三十三年に著手し、三十五年中止後其まゝ今日に至れるものなりと云ふ、役員の案内を以て、對岸に建設せる本局を巡覽す、新築の舍内、疊新たに、床間清く、浴室便所まで既に備はり居れど　絶えて人氣のなきは、假令政府事業とはいへ、可惜物なり。

第三　飯豐溪谷に一夜

午前十時三十分、製鐵所を辭し今夜の宿泊地たる瀧谷温泉場に向ふ、上谷赤より製鐵所まで、道は始終飯豐川の左岸に沿へりしが、こゝより川の右岸に移り、道幅俄に挾く、崎嶇屈折一上一下始めて山逕の感あり、此日は炎暑烈しくして、喝を訴つること夥しければ、十一時三十分、左方より流下せる溪水を認め、頭上を蔽へる樹下に就き、脚を清流に浸しつゝ、剛力の擔へる「へんご」より團飯を取出し、一飲一喫漸く蘇生の心地しぬ、「へんご」とは、繩にて編みし叺(かます)の俗稱なり、崖側にタマガハホト、ギスあり、土俗之をうりなと稱す、其若芽を切り碎き、味噌を添へて食はゞ、胡瓜の風味あればとて、斯くは名けしものなりと、剛力語れるまゝ、之を嘗むるに果して然り、附近に多くダイモンジサウを見る。

逕は始終飯豐川の右岸に沿ひ、左方より流下せる溪水を徒渉する幾回なるを知らず、殊に溪流概ね深刻、巨岩重疊、時には兩岸絶壁數丈の下、深潭藍を湛ふるに接し、大迂回の縋下攀登をなし、或は散亂せる舊材を拾ひ集め、尚新に雜木を伐採して其足らざるを補ひ、辛うじて麁朶橋を架設せしこと亦數回、身體徒に疲勞し時を費すこと夥し、今夜は温泉場に早着し、大休養以て英氣を蓄へ、翌日一舉飯豐山巓を占領すべき豫定なりしも製鐵所より約三里といへる温泉場には未だ到らずして、斜陽既に暮色を呈せるに、通路の狀況に由り、温泉場の開場覺束なきを案じ、後れ勝ちなる剛力に先ちて歩を早め、程なく飯豐川の河床に下れば、水際近く沈澱物の綠色なせる泉あるを認め、試みに手を入るれば、温泉なり、我等之に力を得て、四近を視廻らせども、更に温泉場らしきものなし、やがて前方の小高き小平地に登れば、木材を積み重ね、苫もて蔽へるもの數塊を認む、これ温泉場屋舍の遺骸とす、時に午後五時三十分なり、附近は數里に亘れる濶葉喬木帶にして、樹下コタニワ

タリ、ミヤマフタバラン、ミヤマカタバミ等を見る。

温泉場は、新潟市人會津某の所有にかゝり、毎年夏季浴場を開き、其他の時季は撤回して住人なきは勿論なりしが、深山の奥、路遠くして險なる爲め、浴客甚少く、到底算盤珠にも合はざれば、今年は開場を斷念せるものゝ如し、さるにても入口村落の人々にして、此事を知らざりしは怪し。

我等は既に大休養場を失へり、今夜は豫算外の露營をなさゞるべからず、但入浴して汗を流し、疲勞を治するの必要上より、せめては浴槽の所在を探らんものと、屋舍遺骸地を乘り越して、再び河岸に降り、漸く浴槽を發見せり、浴槽は五尺四方大のもの二個あり、されど木葉淤泥塡塞し、蟇の死骸まで浮べるには、頗る失望せしも、やがて二生と共に赤裸となり、旅順ならぬ槽内に、大掃海を施し、其澄めるを待ちて投浴せり、時に剛力も來會し、炊事準備に取りかゝりぬ。

瀧谷(タキダニ)温泉、土人は之を赤谷の湯、或は單に湯場(ユバ)と稱し、上赤谷を距る東方約五里なるに、陸地測量部地圖を始めとし、通運會社の里程圖、其他皆赤谷の東北對岸半里計の瀧谷に温泉場を記入せるは奇と謂ふべし。

温泉場は、飯豐川の右岸に位し、谷はこゝにて最も迫り、後は二王子岳の山脈を負ひ、前は對岸直ちに烏帽子岳の嶮脚を仰ぎ、狹き赤谷は僅かに飯豐川の奔下を許すあるのみ、浴槽の崖側花崗岩罅より、温泉の迸り出づるもの數ヶ所、其丈餘の瀧をなせるもの、水量頗る多く、温度は百度を稍超えるならん、炭酸泉なるが如し、附近に冷泉の涌出するあり、浴槽は飯豐川の水面より高きこと二丈餘なれば、餘程の出水にあらざれば、浸害を被らざるべし。

文久年中、米澤の獵夫數人、此地に獵し偶ま其一人過つて崖下に轉落し、大負傷の爲め死に瀕しけるに、無情にも他の獵友は數日の食糧を殘して歸鄉しけるが、負傷者此温泉に浴して全癒し、無事生還せり、これ該温泉發見の初なりとは、剛力の語れる所なり。

八時石蠟燭下に晩餐を濟し、附近繁茂せる蓬、薇を刈り集めて地に敷き、莫蓙を展べて横臥し、油紙にて體を蔽ひ、菅笠を顏上に翳す、斯かる純粹の露宿は二生に於て初めての經驗なれば、終夜眠り成らざりしが如し。

夜は更けぬ、下には谷川の音に和せる、河鹿の聲の愈淸きを聞き、上ははは兩崖に限られたる、狹き空の益冴えて、唯流星の屢閃くを覩るのみ。

十三日味爽頗る冷氣を感じ、檢溫器を探れば、六十五度を示せり。此日は出來得る限り、早く出發し、飯豐山頂に向ふべく手配せしに、茲に忽ち一蹉跌を生じぬ、そは剛力の一人杉原なるもの、足蹶に數個の肉刺を生じ、疼痛堪へざればとて、從軍免除を願ひ出でしなり、予は露宿に初陣の二生より、或は支障生ぜんかと心配せりしに圖らざりき禍は此に起らずして彼に生せんとは、剛力の荷物を總計すれば、十四五貫にも上ること故、一人の剛力にては、堪ふる所にあらず、さりとて杉原を歸し、其代人の來るを待つべく、尙一日此地に滯留すとせんか、炭燒營業時季の山村なれば、代人の來ることも必し得べからず、予は種々刺激奬勵を加へ、且つ彼が荷物の半を齋藤に分擔せしめ、辛うじて出發の途に就きぬ、時に午前七時とす。

出發の途に就くとはいへ、製鐵所以來此地までは、險惡には相違なきも、尙通路の形を存せしが、こゝよりは人跡絕無の境に入らざるべからず、唯一の羅針盤は齋藤なり、彼は屢測量部員に從て、登降の經驗を有するものなればなり。

浴場の背後、雜草身を埋むるばかりの急崖を攀ぢ登り、薄暗き榛莽の裡を穿てば、再び飯豐川を脚下に瞰下し、始終其右岸に沿ひ、高き崖側を辿り、幾度か左方より急下せる、溪流といはんより寧ろ瀧と稱すべきものを橫ぎり、或は花崗岩の絕壁、僅かに其小突起小裂罅を便りて、蝸附蟹行し、或は密樹叢篁の下を、魚貫匍匐す、茲に至りては、人間亦四手類、四足類たるを免れず、此際齋藤は腰にせる煙草入を何れにか遺失しぬ、進むに從ひ、兩崖愈迫り、峽谷益深く、飯豐川の水面は、杳茫數百尺の脚下にあり、峽谷を塡塞せる殘雪は、或は高く或は低く、兩崖に連架し、或は斷、或は續、長きは雪の隧道の如く、短きは氷の橋に似たり、剩へ溪流の碧潭銀沫を、其間に隱見するに至りては、其奇其壯名狀すべからざるも、若し一擧手一投足を誤らんか、身は岩鑿の粉碎に遭はずんば、深谷の呑噬を免れず、其危險極まれりと謂ふべし、這般の深峽削壁は、予が未だ曾て覩ざりし所、之を我國の「コロラド」河と稱するも亦過言にあらざるべし。

十一時十五分、前面右方に當りて、不動瀧を瞰る、乃ち左方より落下せる、小溪流の巨岩床に踞し、此偉觀を賞覽しつゝ喫飯す、附近崖壁より採集せる白馬葱（シロウマアサヅキ）に、味噌を添へて食せしに、風味の佳脆を感じぬ、崖壁往々黃褐色の蟋蟀を見る。

不動瀧は、飯豐川の本流、大日岳下を掠めて來り、方向を右に轉換するや、俄然として瀉下し、其右崖を穿ちて奇形の穹洞を作り、直ちに復第二第三段の瀉下をなして、雪下の深潭に落ち込み、忽焉左折奔下するものにて、高約二十丈、其奇景亦無比と謂ふべし。

こゝより稍飯豐川を離れ、濶葉喬木帶中、五葉松を交へし、廣き丘陵を乘り越し、午後三時四十分、頗る廣く深き溪谷を横ぎる、之を「アカソブ」澤と稱す、溪水の沈澱物、赭色を呈すれば、「アカソブ」（アカシブ）とは、或は赤澁の意ならんか、對崖の急斜面を攀ぢ、「センダクシタ」の小屋場に達す、時既に四時を過ぐること十五分、瀧谷温泉より、飯豐山巓まで、約五里と稱し、此「センダクシタ」の小屋場は、殆ど其中央に位せりとのことなれば、我等は朝の出發より此に至るまで、九時餘を費し、僅かに約二里半を進み得しのみ、此時衆皆疲勞甚だしく、如何に强行するも、到底山巓に達すべくもあらねば、豫定を變更し、此に露宿の準備をなせり、此地小屋場と稱するも、其實山腹に位せる十坪許の小平地にして、絶えて小屋の遺跡だに無し、唯前面即西方は、深谷に臨めるも、後に山を負ひ、左右は雜木を以て風を遮り、南隅の樹下に、湧出せる冷泉は、以て渴を慰ぶべく、以て炊事に供すべし、此清泉と燃材とありて、地に濕氣なきは、好個の宿地と稱するに足れり、想ふに温泉道にして修理せられんか、健脚家は、未明に上赤谷を發し、其日の夕方、此地に達するを得ん。

晩餐をしたゝめ、やがて大空を屋根とし、大地を褥として、臥睡を試みんとせしに、雷鳴俄に後方飯豐本山に起り、轟々殷々倏忽として、右は風倉、二王子に、左は大日、烏帽子に及び、黑雲走り、電光閃き、白雨點點面を打ちければ、衆皆蹶起し、雜木を伐り來りて、葉附のまゝ小屋を作り、油紙を以て屋根を蔽ひ、辛うじて其内に蟄居せしに、暫時にして雷歇み雲斂まり、滿天燿星を見しは幸なりき。

此地標高約三千尺、當日の夕方は、温度八十度なりしが、翌朝は六十度に降れり。

第四　飯豐の山巓

十四日快晴、「センダクシタ」の小屋を出發せしは六時三十分とす。

小屋場の背後、急斜面を攀ぢ登れば、降ること少許にして、稍廣き凹凸なせる濕地あり、之を「センダク」原と稱す、子マガリダケ、イタヤカヘデ、タニウツギ、マンサク等の茂れる下に、ジャカウサウ、サンカエフ、ヤブレガサ、タマガハホトヽギス、ツバメオモト、ミヤマカラマツ、モミヂショウマ、ミヤマカタバミ、カニカウモリ、オホモミヂガサ、サラシナショウマ等を見る。

七時三十分、「センダク」尻に達す、此邊より漸く、灌木帶となり、榛莽密樹の難を免れしに、忽ち山蚊の襲來に接し、一行啞然たり。

小峰を乘り越え、八時十分、幅一間許の小流を渉る、之を「センダク」川と稱す、即ち加治川の最上源也、想ふに「センダク」とは、或は洗濯の意にして、昔時越後方面より、登れる道者輩が、身を洗ひ清めしより、名けしものならんか。

これより加治川即ち飯豐川、一名「センダク」川に沿ひ溯れば、漸く草本帶となり、行歩大に易く、トリカブト、イハイテフ、オホバミゾホヽヅキ、ヤマハヽコ、キンカウクワ、マウセンゴケ、ムシトリセキシャウ、ナンキンコザクラ、ヨツバシホガマ、キバナノシホガマ等の山草見參に入り、大に我等が疲勞を慰めぬ、ナンキンコザクラは、可憐なる美花なれば、齋藤は昨年新發田中學教員の案内をなし、本山に登りし際、聞きし由にて、能く記憶し居りき、此附近にて、紅花のダイモンジサウ、黄花のトリカブトを得たり、オタカラカウ二三尺の巨大を呈し、シロバナヘビイチゴは發育旺盛を極め、其累々たる米實は、我等をして試嘗を縱にせしめ、佳香仙味西洋苺に優ること數等。

九時二十分、川盡きて山脊に達し、始めて偃松に接す、標高約五千二百尺とす、附近を飾れる山艸には、ミヤマタウバナ、イブキトラノヲ、ハクサンフウロ、ミヤマクワンザウ、アキノキリンサウ、チングルマ、タカ

○飯豐山　大平

越後口御田原より望める飯豐本山　（四十四年八月八日）

子ワウギ、タテヤマウツボ、ヒメシャジン等あり、特にマツムシサウは非常の旺盛を呈し、深紫の大花、一莖數十を戴き、最も衆目の賞矚を博しぬ。

山脊は、飯豐本山と、前飯豐山即ち杁差岳（イブリザシ）とを連絡せるものにして、西は越後、東は羽前とす、茲に奇なるは、此山脊を界として、東西其趣を異にするの甚だしきにあり、西側は御花畑百花爛漫の春色を呈せるに、東側は玉川深谷の大殘雪面を摩して、吹き上ぐる風は、凛冽冬候の如し。

我等は此春の國より、數歩にして冬の國に入り、寒氣防禦策として、緩斜面の雪上を、駈足もて横ぎり、五六町にして、御手洗池（タラシ）に達す、池は長三十間、幅十間、深數尺に過ぎず、周圍は偃松瀰蔓し、フジザクラの紫黑實は、我等が賞味を待つものゝ如し、附近にナンキンコザクラの一大花叢を見る、濃紫色のもの、紅紫色のもの、或は淡紫淡紅、或は全く白色のものあり、數町歩に亘りて、殆ど他の雜草を交へず、ナンキンコザクラの御花畑として、予が未だ嘗て接せざりし美觀とす。

これより頗る廣き大緩斜の峯側を經過するに、草は短くして數寸を出でず、紅黄白紫の花は散點して、一面に毛氈布き詰めたるが如く、往々淺き小潴水を見る、此邊一帶御田原（オタバラ）と稱す、但越南の名山、苗場山頂の御苗場の如く、繁多ならず。

御田ノ原の佳境、天女の織成せる、毛氈に箕坐し、喫飯す、時

に十時四十五分とす、附近には、短柯玉葉、帶黄白葩、清洒極りなきチングルマを始めとし、ウメバチサウ、ヒメウメバチサウ、イハカヾミ、アヲノツガザクラ、ハクサンイチゲ等あり、ミヤマクワンザウ、クルマユリの橙黄、朱紅は、前方遞下なせる斜面を染めて、殘雪の白と相映發し、南には近く、飯豐山塊の盟主たる飯豐本山、即ち西岳、雲表に聳え、三角尖頭天を刺し、崇高極りなし。

零時十五分五町餘に亘れる、傾斜の雪田を横ぎれば、雪面に晏如喨吟せるエゾゼミあり、國二郎君は、標本として數個採集せり、此時前方七八町に當り、大日岳頂より西岳に連亙せる、山脊上を馳する、數個の人を認め双眼鏡もて之を望むに、褐色の洋服を著けたるものあるが如し、昨年蓮華、立山の清遊を共にせる志村氏より、本夏は、東北の山遊を試みんとの前信もありしなれば、若しも志村氏ならんには、奇遇の極なりと、快感禁せず、近づけば志村氏にはあらで、山上測量調査する吏員の、三個の人夫を從へるにてありき。

零時四十分、石片崔嵬たる賽の河原に至る、偃松散布の間、マツムシサウ、ミヤマリンダウ、ミヤマクワンザウ、コバメバナ、ハクサンイチゲ、タカネタウキ之を縫ひ、往々純白のマツムシサウを見る、前には一白鏡の如き雪田ありて、甚だ壯觀を極む、之を東蒲原實川溪谷の上部とす。

山背の西南側、十數町に亘れる雪田を渉ること數次、雪田傾斜頗る急、加ふるに此時濃霧屢襲ひ來りて、數歩前の人影を認めず、高山の雪田は、快晴の日と雖、概ね濃霧を生じ、登山者爲めに厄を招くこと屢なり、予は迷霧滑落の禍害を防ぐべく、絶えず二生を戒めぬ。

飯豐溪谷跋渉の二日間は、衆皆喝を設ふること甚だしく、苟くも溪流に接せんか、必ず掬飲、寧ろ鯨飲するを例とし、終日の量は、當に數升なるべきに、一人も中毒なかりしは、清心丹、寶丹の功といはんより、寧ろ奮鬪的生活の威力ならんか、而して本朝「センダク」以來、清流を渉り、雪上を履むも、敢て之を口にせんとの念なきは、前日の反動に加ふるに、天界氣象の異なるにもよれるならんか。

五王子（ゴノワウジ）の西南側を經、午後二時、四王子（シワウジ）本社前の石室に投ず、測量部地圖に、三國岳と記せるもの、即是なるが如し、三國岳とは、其名の示せる如く、越後、岩代、羽前三國の境界點に位するより名けしは、勿論なれ

ども實際三國岳なるものゝ所在不明なるは、嘗て我黨會員石川氏の既に說きし所なり、圖の縮尺によれば、三國岳の位置は、更に東南方草履塚(ゾウリブカ)邊に當れるが如し、何れにもせよ、本山々塊は、固より三國に跨れるも、其最高點即ち西岳(五王子)は、越羽の境界に位し、毫も岩代の地を認めず、若し三國境界點を、草履塚とせば、本社も亦全然岩代の地を脫すべきに、古來岩代が、本山獨占の觀ありしは、越の東蒲原地方、會津所領たりし因習の久しきに由れるものならんか。

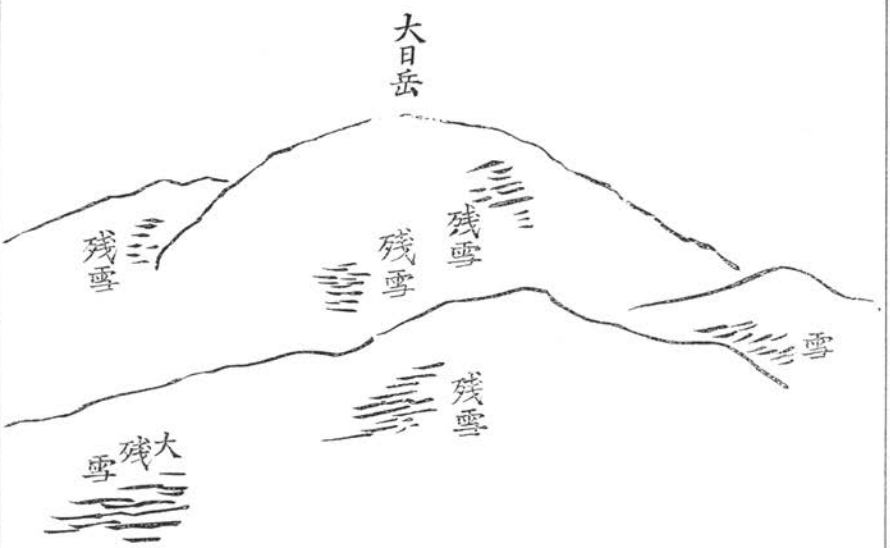
四王子の石室は、我等が今夜の宿所なれば、荷物を卸し、直ちに輕裝出發し、西北方の最高點西岳に遊ぶ、石室を距る五町餘、十分時を費せり、西岳は飯豐山塊の帝座を占め、三角點あり、予が空盒晴雨計によれば、約七千二百尺とす(二二〇〇米)附近は花崗崖岩嵬重疊し、これより東南一帶の峯頭、皆飾るに花崗碎片を以てし、一望灰白、日光に映じては、閃々玻光を射る、本山は山勢雄大、脈終十餘里に亘り、實に下越の重鎭とな すに足れり。

飯豐山又飯出山に作り、普通「イヒデサン」と稱すれど、或は「イヒトヨサン」とも呼び、八月の交、櫻花を觀、杜鵑を聞き、黃葉と白雪とを履むより、又四季山の雅號ありと云ひ、或は「イヒデ」は湯出の義ならんとも云ふ。(『日本山岳志』に據る)

三角臺下に踞して、眸子を放たんか、近く西々南に方り、鈍踞齒の圓頭、獨り本山と其高を競ふもの、之を本山の支峯大日岳となす、此間一里强、峯脊相連り、半は仙花點々たる草本帶を履み、半は蟠幹錯枝の偃松帶を泳ぎ、其絕巔の三角點に達し得べし、絕巔の石祠は大巳貴命を祀る、北微東には、雄大なる朝日岳の背後、遙に鳥海の英雄を望むべく、東北には、玉川の溪谷を隔て、直距約三里なる、地藏岳の稍右に當り、遠く藏王岳あり、東々南には、吾妻、磐梯の活火山相連り、三年前予が彼の山頂より、本山の殘雪を羨望せる、當時の感想を喚起しぬ。

我等は白閃々たる花崗岩の屏風を負ひ、光照々たる斜陽に、身を浴するや長時、天に一點の塵なく、地に一毫の汚を認めず、快なる哉、嗚呼世の人々よ、希くは羽化登仙の語をして、徒に空想的文字に終らしむること

○飯豐山　大平



西岳より望める大日岳　（四十年八月十四日夕方）

勿れ、此時に當り、二生は數日の疲勞を忘れ、無我の境に逍遙し、タカヲミツバワウレンは國二郎君により、ツマトリサウは園斌によりて、見參に入りぬ、其他主なるものは、イハウメ、イハギキヤウ、ヨツバシホガマ、マヒヅルサウ、ウラシマツツ、ジ、コメバツガザクラ、ナンブトラノヲ、シロバナシヤクナゲ、ハクサンイチゲ等ありて、コケモ、の紅果、ガンカウランの黑實は、我等の口に上りぬ、タカヲミツバワウレンとは予が私に命名せるものにして、其葉ミツバワウレンに比すれば、甚だ厚くして玄綠光澤著しく、花色雪白瓣亦廣くして鈍頭なるを異なりとす。

予は先年、白山立山、蓮華を探り、今足を本山に入るゝに及び、予が常に愛敬する偃松の、生活狀態に對し、大に感ずる所あり、そは偃松が、山峯の東側に於て、甚稀なるに反し、其西側即日本海方面に於て、生々繁殖するにあり、是に於てか、予は益汝が英姿凛々、西比利亞大陸より吹き寄する朔風に向て、勇往邁進的態度を執るの氣慨を推さゞるを得ず、至囑す、偃松、北方の發展、夫れ汝に依りて指導を得ん。

四時四王子に歸著し、本社に詣づ、堂は東南に面し、奥行七間、間口三間、内に事務所の區劃はあれど、季節尚早きを以て、神職の出張なく、唯年來の留守居番たる、硯箱、

火鉢、急須、椀、米櫃、籠、下駄及び奉納せる古劍の、彼方此方に彷徨せるを見る、殊に人目を惹けるは、堂の內外を問はず、西岳三角點附近まで、米粒の散亂せるにあり、これ山名に因み、詣客が撒米以て五穀の豐穰を祈れるものなり、堂內第一の額には。

「飯豐山　明治二十二巳丑年八月大願成就日
山形縣西置賜郡豐原村大字椿
發願施主　小松榮太郎」と刻し

第二の額には、

「五社大神　奉納明治十年秋八月
岩代國會津郡若松　藤田永陰　謹書」と刻し、堂前の石燈には、「飯豐山嘉永元年戊申秋八月」と刻せり、

石室とはいへど、全部木材を以て作り、唯板葺の屋上石を載せ、屋外周圍、高六尺許の石垣を繞らせるのみにて、富士石室の如く、土牢的のものにあらず、我等が室內に入り憩ふや、程なく調査部員の一行亦歸著し、予が菅笠に太く「青山白水、山岳會員」と書せるを認めし彼は、莞爾として予が許に來り、名刺を交換し、予が名を見るや、「貴下の紀行文は、豫ねて『山岳』誌上に於て、拜見して居りました」と述べ、欵話は忽ち山岳に入りぬ、彼は長野大林區署員佐藤善吉氏にして、鳥海山下の人、體格魁偉、善く談じ、予が前途に賚せしこと多大なり、氏に據り、大日岳は西岳と標高殆ど相等しきこと、飯豐本山は全然岩代の地內に在らざること、三國岳などいふべき格別なる峯巒なきこと等を知り得たり、又氏は頻りに、石川氏が、本山會津登路を以て、峻峻極まれるが如く、誇大に形容せるを難じ該路の如きは、山道として國道の部なりなど、哄笑氣焰、唇を衝いて迸りぬ。

此日朝「センダク」の小屋場に於て、溫度六十度、晩景飯豐山頂亦六十度を示しゝが、夜に入り、天風怒號寒威漸く加はり、深更五十六度に降り、室內假松榾火の烟に咽びては、室外に飛び出で、身を刺す如き寒風に辟易しては、復室內に逃げ込み、徒に人夫等の鼾聲雷の如きを羨む。

第五　米澤口降り

飯豐の登路は、東南口即ち會津口の、耶麻郡一ノ木村大字一ノ戸よりするを、表口とし、西岳の絶巓まで六里强、(『日本山岳誌』に一ノ戸より山頂まで、二里廿八町とあるは誤なり)路甚だ佳なり、東北口即ち米澤口の、南置賜郡(今多く「オキタマ」と云ふ)中津川村大字岩倉よりするもの、之に次ぎ、里程七里强、西置賜郡小國驛より、小玉川温泉(八月中旬より五十日間許開場)を經て登るもの、頗る險、我が越後口の赤谷よりするは、昔時年百人内外の參詣者ありしも、今は殆ど絶無の姿なり、毎年二百十日より二週間位は、表口よりする詣者多きにより、頂上の本社附近、及ひ御前坂、其他處々に、小屋を設け、休憩宿泊に便すと云ふ。

予は初め本山を經て、古來「越の高根」の尊稱を縱にし、越羽の境に隱然覇王の觀ある、朝日岳を究めんと企て、出發前西置賜郡小國本村小學校長小池百太郎氏、及西村山郡西五百川村役場に照會し、其精細なる回答に基き、南麓五味澤より登り、北麓立木に降る豫定なりしが、時日の不足と且つは赤谷口の豫期以上險惡にて、疲勞極まれるにより、朝日岳の跋涉を廢し、幸ひ降路に就ける佐藤技手に二生を托して、會津口により歸鄉せしめ、予は月山に向ふべく、單身米澤口に降ることゝはなしぬ。

十五日味爽、日の出を拜すべく、寒風を冒して、飯豐山巓の屋外に立つ、東天の微白は、漸く微紅となり、黄となり、橙黄となり、次いで鮮麗極りなき橙綠となるや、赫々燿々たる玉體は、其姿を顯はし、矢を射る如き薄霧は、屢右方より前面を掠め去り、紫金色なせる旭彩は、變幻極りなく、凝雲溪谷を罩め、遠きは旭光に映じて、黄金色の覆輪を呈し、近きは潔白、絮の如く、雪の如く壯觀美觀、衆をして快哉は呼ばしむ、昨夕の快、今朝の壯、艱難に克たずんば快樂なしとは、二生の口より我耳に傳はりたる言なりき。

此朝往復五日間の賃金四圓五十錢、及慰勞金を二人の剛力に遣はし、赤谷に歸らしむ。曾て測量部員に從ひし時、一日四十錢(口は雇主持ち)の賃金を受けしも、物價騰貴の今日なればとて、四十五錢と約束せり、彼の勞苦に對し、賃金を貪らざる、其質樸嘉すべく、殊に齋藤は、予が鑵詰の「パイナップル」を分與せしに、

曾て布哇に數年出稼せしことありなど、物語り、氣は利き、眞面目に働き、且つ溪谷跋涉の輕捷なる、多く其比を見ざる好漢なりき、杉原は予が爲に始めて飯豐の參詣を果せりとて、喜び謝して歸りぬ。

午前六時二十分、佐藤技手の一行四人、予及二生、合計七人の一隊打連れ、頂上の石室を出發し、三王子、二王子、一王子、御前坂を一走りに走り、同四十分御來迎の發現を以て名高き御秘所（又ゴヒソ）の鐵鎖を經、同五十分草履塚を越え、七時劒神社に達す、此間次第下りにして、花崗碎岩、磊々簇々、御秘所、草履塚などの突起を見る、風烈しきにより、莫蓙を卷きて背に結びしも、尙屢吹き飛ばされんとせしが、降るに從ひ、風力漸く減じ、劒神社以下は、格別の風もあらざりし、草履塚邊には、イハウメ、アヲノツガザクラ多く、ハクサンヲミナヘシ、タカ子ハ、コグサ、ムシトリスミレを見る。

劒神社より、頗る長き降り坂にかゝり、往々殘雪を踏み、イハカヾミ、ナンキンコザクラ夥しく、七時二十分切合（又きりあはせ）に著きぬ、これ一ノ戸より本山に登る路と、米澤路との交叉點に當り、路は稍平坦となりて、山腹に沿ひ、會津路種蒔に至る、予は衆と別れて、單身六里無人の境を跋涉すべく、米澤路の溪間所謂御澤に下る、此澤殘雪數十町に亘り、雪下溪流ありて、危險甚だしき故、米澤口は、二百十日以後にあらざれば、通行するものなく、本年此口の道開きは、予を以て初めとなすとは、會津人夫の語れる所なり、此溪流は、越後荒川の上流、の水源となす。

殘雪の擦下により、路の形など、毫も辨じ得ざる急崖を經、次第下りの雪溪を進めば、溪流の激聲雪下に轟き、雪下の空洞は、高さ時に身長以上に及び、戰々競々薄氷を履むの語も、思ひ出で、心地惡きこと限なし、溪間頗る狹く、兩崖急にして、側腹迚るべからず、已むを得ず、雪下の流聲、微小なる方を擇び、且つ成るべく崖側近く歩を運べり、これ流聲微小なるは、鎖せる雪の厚き部分か、若くは溪流の直上を距ること、比較的遠き部分にして、崖側近く歩を運べるは、萬一踏める雪の陷落するも、比較的攀ぢ登るの便あるべければなり雪上の危行約半里、崖側雪の消えし所、シナノキンバイ、ミヤマキンポウゲ、ナンキンコザクラ、ミヅイテフ等、今を盛りと、妍を競ひ、笑を呈す。

八時右崖僅かに逕形を認めて攀ぢ登り、十分時にして山背に出で、これより次第上りの峯背を北進すること約二里、十時地藏岳頂に達す、此間右方脚下、赤土崩れ、岩面碎けし所、辛うじて樹枝に縋りつゝ、歩を移すこと數次、シラネガンビの白花雪の如きを見ること屢。

地藏岳は標高約五千尺、三角點あり、今朝佐藤技手の指示により、米澤路の目標とせしもの是なり、飯豐山頂より約四里とす、半ば敗壞せる木堂あり、長五間横二間、素より無人の小屋なれど、水樽の存せるは、登山時季の休泊所なりしならん、屋前虎杖の中を貫き、直進降りに就きしに、暫くにして甚だ怪しき有樣なれば、引き返し、屋後の三角標に登り、地圖と磁石とを取出し、北西の溪間を瞰下せば、直距三里計に、村落の如きを認めしは、小玉川ならんか、岩倉路は東々北に降らざるべからず、腹拵の後、更に進路を索めんと、乃ち屋内に踞し、團飯をしたゝめんとするに、朝來一滴の水をも飲まず、途中コケモヽ、クロズミにより、僅かに渴を慰めしのみなれば、口中乾燥甚だしく、殆ど嚥下すること能はず、二三口にして中止の已むを得ざるに至れり。

十時四十五分、屋前岐路の右なるを取りて降れば、十一時又岐路に接す、左するは小玉川路か、若くば登山時季に於ける、前記無人の小屋より、水汲場に通ずるものか、右を取り降れば、灌木帶は漸次濶葉喬木帶となり、落葉足蹠を沒し、數抱の山毛欅は、往々朽僵れて、交通を遮斷す、同四十分小木堂を路左に見る、堂後周圍二丈餘の老杉聳え、附近寄生植物ヤガラタケ簇立す。

午時これまで辿りし、地藏岳尾根の極端に達し、俄然路の形を滅す、前は榛莽紛錯得て進むべからず、剩へ斷岩絶壁、唯微に谷川の流聲を聞くのみ、左は五十度以上の傾斜をなして、樹林蓊欝の裡、雜草身を埋めんばかりなり、普く四周を探れども、路らしきもの更に無し、已むを得ず、木根草莖に縋り、左側面を降りしこと數十間、忽ち夥しき物音に、耳を欹つれば、音は次第に近づき、やがて一個巨大の動物、而かも其體の一部を樹葉草莖の隙間より、僅かに窺ひ得しのみ、千鈞の弩は鼷鼠の爲に發せず、否予が護身刀、拳銃は、巨大の猛獸に對し、効力覺束なければ、四十八手の一の手を取り、草鞋を去るの暇もなく、直ちに樹上に攀ぢ登りて凝

視すれば、豈圖らんや牛ならんとは、既に牛を見る、草苅人も居るべく、人里もさほど遠からじと、打ち喜び、大聲誰何すれど、圏として應ずるものなし、能く能く見れば、手綱も無ければ、或は野牛にあらずやなど、思は此より彼に移りし間もなく、彼は一聲高く喘ぎぬ、聲は木靈に轟きぬ、忽ち物音四方に起り、彼方の樹下より、此方の叢裡より、白きあり、黑きあり、赤に斑に、集り來れる牛は數十頭、予が登りし樹下を圍み、仰いで予を視る、此時予も牧牛たりしを察せしも、攢まり邀へる彼が突角の槍先、直樣降らん勇氣も出でず、鳥ならぬ山人、樹上に惱むこと數十分、斯くて日暮れなば甚だ妙ならじと、彼等の倦みて散ずるもの、或は草を覓むるものありて、稍閑なるに乘じ徐々降りしに、散て迫らん氣色もなし、想ふに深谷數里の奥々に放牧せられ、人間を見るの珍らしかりし故にや。

試みに降りし急崖は、程なく幸にも路形を認め、尙ほも數回、幾十の牛軍を貫き、午後一時五分左より來れる、幅約六尺の谷川に到る、左岸に小木堂あり、老杉二株聳ゆ、谷川に就き顏を洗ひ、咽を濕し喫飯し、漸く蘇生の感あり、後土人に質し、此急崖は「サンギ」坂と名くる、有名の危坂たりしを知りぬ。

谷川に沿ひ下ること數町、川は右より來れる大なる谷川に會す、是れ飯豐の支峯赤崩山(アカクツレ)より發し、其餘脈と、地藏山脈との間を奔下せる白川にして、最上川の水源となす、これより路は始終白川の左岸に沿ひ、緩き爪先下りとなり、溪亦漸く廣く、三時五分、少許の稻田に接し、始めて人界に出でし感あり、同十五分、路傍人家二三點を見、五時岩倉に着し、土豪伊東鶴治郎氏を叩き、宿泊を請ひ、主人夫妻の款待に接せしぞ嬉しかりき。

岩倉は中津川村に屬し、全村の戸數三百に滿たざるも、延長三里に亘り、中に十四大字あり、而して三十八戸の岩倉を以て、其巨擘となす、沿道の土人、洋裝せる予に逢ふ毎に恭しく敬禮を表せるは官吏と思ひ違ひしならむ、官尊民卑の遺風なるべきも、一面其淳朴を察するに足れり。

昔時米澤地方より、此地を經て飯豐に參詣するもの、年千人を以て數ふる程なりしが、今は其十分の一にも及ばずと云へり。

○飯豐山　大平

第六　米澤城下

夜雨はありしも、十六日の朝に至り、雲は漸く散じ、程なく快晴となれり。

七時四十五分、岩倉を辭し、八時四十分、下屋地郵便局に到り、不用品を小包もて鄕里に發送し、上り一里餘と稱する、菅沼峠の頂上に達せしは十一時とす、前には米澤の盆地を瞰下し、後に飯豐の雪峰を望む、幾度か小丘陵を上下し、午後三時口田澤に出で、若松より喜多方を經て來れる大道に會し、四時米澤に着す、岩倉より約八里半とす、直ちに上杉神社に詣づ、我が北越の英傑謙信公を祀れるなり、社は松ヶ崎公園の正面に位し、別格官幣社に列す、公園の北方に石碑あり、高約二丈「從三位上杉曦山公之碑」と題す、樅樹亭々之を擁せり、往時の大手門といへる、舞鶴橋の石橋を渡り、立町茜屋（高橋新助）に投宿す、流石神戸と共に牛肉を以て、海内に鳴りし地、其料理の特に佳なるを感じぬ。

米澤は東に松川、西に鬼面川を控へ、上杉氏三十萬石の城下にして、舊と舞鶴城と稱し、城趾は今公園となる、縣立工業學校、中學校あり、人口三萬を有する都會なれど、近年の新築にかゝる、旅館大商店を除くの外は、低き茅屋相並び、邸内果樹多く、一見市街田舍の混成地たるが如き觀ありて、形容甚だ揚らざるに似たれど、人情敦厚、興業振ひ、安永年間、藩主の命によりて始めたる、米澤織の如き、年額五十萬圓以上に及ぶと云ふ、鷹山公の遺風見るに足れり、晩餐後散歩の途、菓子店小川榮作方に立寄り、名物時雨の松を試む、豆粉の菓子にして、旨くも無く不味くもなし、市内店頭多く甜瓜を鬻ぐ。

越中小鳶山

辻本滿丸

立山溫泉場の廣庭から眺めると、南々東に當り、凄まじい赭色の峭壁が、近く頭上に連亘してゐるのが見える、是れ即ち小鳶山（コトンビヤマ）の爆裂火口の殘壁で、山體の缺損した工合や、岩石の露出した有樣は、一寸信州の箕冠岳（硫黃岳）に類似してゐるけれども、此の方が宏大であつて、且つ一層荒蓼たるものである。大鳶山（オホトンビヤマ）は小鳶の裾山に蔽はれて、此處から見ることが出來ぬ、然し今少しく左の方に眼を移すと、鷲ヶ岳と云ふ峻峰の兀立するのがある、頂上は丸くして中々峻しい、之は富山圖幅に大鷲岳と記されてあるものであらう。溫泉場から湯川の危橋を渡つて少し上ると、前に記した小鳶の裾山の後から、兜の鉢形した山が、漸々頭を出して來る、地圖の方向に依つて余は之を大鳶と推定した、氣のせいか鳶の頭に似たやうにも見える、大鷲岳も猛鷲が頭を擡げたやうにも思はれる、此やうな感じは、湯川筋の溫泉道、又は上瀧あたりの遠方から、此の二つの山を望んだ時、殊に深いと覺えた、よしや山形がどうあるとしても、大鳶の方が大鷲より小さくもあり、低くもあり、鳶と鷲との相違位は、確に兩者の間に認められるのである。

溫泉場で大鳶と小鳶の位置を聞いて見ると、正確な答をするものが餘りない、或者は小鳶峭壁を大鳶であるとして居る、甚だしいのになると「小鳶はあれです」と湯川の右岸を指すものさへあつた、現に『立山權現』と云ふ書物には「大鳶山は浴舍近く頭上に聳ゆるものにして、頂より麓まで一大崩壞を成し、其面赭色を呈せるは、昔しの地震の紀念なり」としてある、又今年出版された『立山案内』には「湯の東南に聳立つ禿山あり、一は大鳶山、一は小鳶山」と記してある、余の大鳶と認めたものは、頂上まで綠衣に包まれた山であるから、此禿山とは別物であらう。溫泉場では單に鳶山（トンビヤマ）と云ふ名稱が、一般通用されてゐる、しかして之れは主に小鳶の方を意味するらしく思はれた。

富山圖幅說明書に依ると、小鳶山は立山の西邊を北々東に横走する火山脈中の一員で、舊時は頂上の噴火口から水烟を蒸散して居つた、活火山であつたが、安政五年二月二十六日、午前一時俄然崩壞飛散し、其岩塊泥土は常願寺川を下つて川筋を破壞し、田畑を埋沒し、餘勢は六里餘の下流なる永橋町近傍にも及んだ（地獄谷も此時爆裂して、現狀を生ずるに至つたと云ふ）、此小鳶爆裂口には、雨水が潴溜して、湖水の觀を呈したが、三十日を經て缺壞流出し、潰水は沿岸の村落を流し、平原に溢れ、前月よりも一層甚しい災害を生じたる由である。

今日の小鳶山は、舊小鳶山の東南部が、僅に殘つたものに過ぎぬので、爆裂火口壁は、稍や馬蹄狀若くは半環狀を成して、西の方に口を開き、內部は刳り取つたやうに崩壞し、岩壁と磊石とで、過半赤裸々たる有樣である、溫泉場を出て一里許り川筋道（右岸）を下ると、此爆裂口を正面から仰ぎ眺めるので、最も凄愴と跌宕とを極めてゐる、此光景に對して、自然力の如何に偉大なるかに舌を捲かぬものは恐らく無からう、此峭壁は蘆辭寺からも、上瀧からも、一層遠い富山平原からも、望見することが出來て、其恐ろしい赭色は、立山群嶺の一部に一特徵を與へてゐる、玆に面白いのは、此山と磐梯山との比較である、地質學上の六ヶ敷議論でも何でもなく、只だ小の字のついた小磐梯が飛散して、大磐梯が無事であつたのは、此小鳶對大鳶の關係に全く同一であつて、何か一種の因緣がありそうに思はれるのである。

小鳶と大鳶とは、斯樣な歷史を持つた山で、從來登山の紀行も見受けることが無い故、余は此二山を究める目的で、今歲七月二十三日立山溫泉場から登山を試みたのであるが、天候の不良と、前夜來の雨で、出發時が遲れたのと、同伴した中語が此山を知らぬので、進路を尋ねるのに、時を消費すること多かつた爲めとで、漸く小鳶の壁上に達した丈けで、大鳶には一歩も踏み込まず、下山すべく餘儀なくされた、希望の半分も充さぬ故殘念がら記すべき材料も甚だ少ない。小鳶山は前記の如く馬蹄狀の峭壁で、横には長いが、著しく高く突起した處が無いから、何處を絕頂と云つて宜いか一寸分らない、余は凡そ其眞中位の處を目標として登攀した、登りは馬蹄狀の左の端から、右は峭壁（爆裂口內部）左は普通の山側（小鳶山外部）である、其界ひ目に沿ふ

て登り、歸りは壁上から直に馬蹄狀の內部に下つて、岩石磊々たる狹谷を縱下したのである、書いて見れば甚だ簡單な地勢のやうであるが、此爆裂口內は丁度擂鉢の線のやうに、上から下に走る山稜に依つて、多數の狹谷に分たれてあるから、橫行するにも縱行するにも、此山稜や狹谷が、邪魔になつて案外面倒を感ずるのである。

溫泉場を出たのが朝の八時十五分で、其後から南の方に行くと、前面は小鳶の爆裂口に連なつた河原で、當時砂防工事の最中である、之は常願寺の河水を灌漑に使用するに、其混濁を防拒する爲めであつて、溫泉場に入り込んで居る土工は、數百人に達するそうである、夫から左に行折れて、樹木の茂つた急斜の山側を登る、即ち小鳶外側の裾で、此處には路も立派にあるゆゑ、左程の困難もなく、白樺の林などを穿つて三十分許り登ると、土工の小屋がある、其右下は裸々たる絕壁で、つまり我々は今馬蹄狀壁の一部に達したのである、側の壁面には、小さい硫氣孔が二つ三つある、土工は此處の岩壁でも、砂防工事を行つてゐる。小屋の後から林の中を東南の方に、又た半時間も登つた處で、路が遂に消失せてしまつた、元來小鳶山は登山者もないこと故、路のないのは素より覺悟の上であるが、流石に迷惑を感せざるを得ない、先づ無理に右方に少し登つて見ると、右は前の峭壁の續き、左は樹木はあるが、之も恐ろしい急斜で、下の方で急流の音がするが、木で見ることが出來ない、或は瀑であつたかも知れぬ、要するに此處劒の刄渡りとも云ふべき難處で、殊に此峭壁は時時崩れる恐がある、雨後は一層危い、今朝も溫泉場から壁面の一部に、崩壞の起つたのを親しく實見した程であるから、今にも乘つて居る崖と共に崩れ落るかと思ふと、殆んど戰慄を禁じ得られない、然し他に前進の方法がないので、木のある方の山側を枝にぶら下り、押分々々け登ると、前途の樣子は益々險惡となる許り、時間もかゝつて何時目的を達せられるか見込がつかない、幸ひ右下の峭壁に、少し傾斜の鈍い處を見出したので、辛くも之を下つて馬蹄狀の內部に立つた、之から峭壁の內側に沿ふて岩から岩に飛び移りつゝ登つて行く、小さい水流もあるので、今朝來の渴を醫すことが出來た。まだ餘り登つたやうに思はぬが、西の方を振り返ると、高く雲表に聳えた鍬崎山の右手から、遙かに富山の平原が見える、白く畝つて居るのは神通川と常願寺川とで

あらう、富山灣は雲烟の裏に消えて、確とは分らぬ、鍬崎山の手前の目の下には可也大きな池がある、刈込池は溫泉より湯に沿ふて其上にある筈で、之とは違ふ、或書物にあつた多枝原（ダシハラ）の池と云ふものであるまいかと想像する。

追々登つて遂に此縱谷の頂巔に達した處で、急斜面を登つて、又爆裂口の緣の上に出で、樹林の中に入ると路のやうなものが切れ〳〵にある、之を賴りに暫く行くと殘雪のある窪地に至つて、跡方もなく消えてしまつた、此處から又右に下り壁內を登つて十一時一大岩の下に達し、前方を見ると小鳶頂上の峭壁は已に眼前に迫り、此邊から左方の壁に登り、之を傳つて行かなければ右に行く程愈々急となつて、登れそうにもない、漸く一ヶ處弱點を見つけて、之に近づくと、一丈許りの殆んど直立した岩壁の下に來つた、足場の惡い上、水が滴り落ちて滑りさうである、中語は種々苦心して先づ之を攀ぢ登つた、好んで危險を冒す必要もないから彼の差し出す杖にぶら下つて、余も續いて登る、夫から上は又た茂林でハンノキであつたか、ブナであつたか、五月蠅い樹木を押し分けて、少時攀ぢ登ると遂に突然草許りの一寸した平地に出た（十一時四十分）。

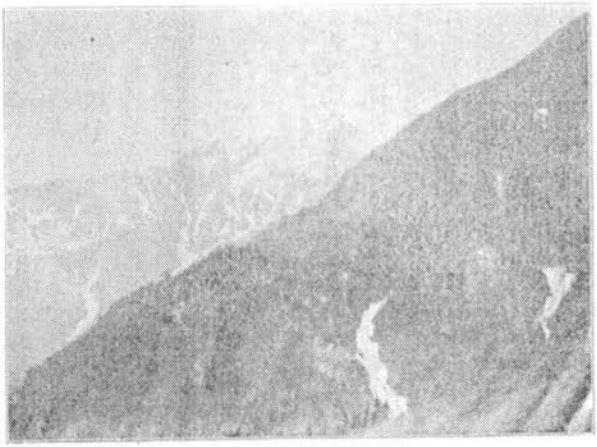
此處は小鳶山殘壁の上部で、即ち頂上の一部である、平地にはチングルマ、イハカヾミ、アヲノツガザクラなどが開花し、彌陀ヶ原の餓鬼の田に似た小さい水溜りもある、北の方の緩斜面には殘雪が澤山ある、此時雲がかゝつて、雨さへ降り出し、寒さと空腹とを覺へたので、傍なる針葉樹林にもぐり込み、富山名產と銘打つたれど之も名物の味には漏れぬ蒲鉾の罐詰で中食を認める。

扨て考えてみるに此登山は案外時を費したもので、少々馬鹿にしてかゝつたのは、大に間違であつた、實の處を告白すると、早朝溫泉を出發することが出來たら小鳶、大鳶を極めた後、其日直に蘆鱗寺まで下らうと云ふ豫定をさへ抱いて居つたのであつた。

暫くして西北の風は一時雲を吹き拂つて、日光の漏れ來つたに勢を得、林の中から出て見ると前面（東南方）には大鷲岳と大鳶山とが、眼前に突立して其間には、大鳶より遙に高い一大山脊が聳えて、頂上の三角標がよく見える、參謀本部の圖に依ると、鬼ヶ岳と云ふものに當るが確言は出來ぬ、大鷲岳の左には淨土山が高く聳

えて其溪谷には殘雪が夥しくある、南の方には雲間に出沒する藥師岳の莊嚴なる頂が見える。急ぎ一二枚撮影すると、間もなく此壯景は又たも雲に蔽はれて天候は元の不良に立ち返つた。

今目擊した處では、此處から大鳶の頂上まで、大した距離は無いが、樹木の中を登攀するのであるから、少くも二時間位かゝると見込まねばならぬ、此雲では登つた處で眺望は皆無であるから遂に斷念し、小鳶の峭壁を南方へ巡らうとしたが、之も雨に濕つた樹木と惡戰せねばならぬのみか、先へ行つたとしても、今居る處と高さも景色も、大差ないと認めたので、結局此處から下山することにした。大鳶を二千二百三十メートル（富山圖幅に依る）とすると、此處は漸く二千メートル內外で、溫泉場（千四百二メートル、同上に依る）から六百メートル程登つたに過ぎまい。十二時三十分、前路を彼の絕壁まで戻つて之を下り、爆裂口の斜面に從つて一つの縱谷を下つた追々下ると谷は狹くなり、溪流が增水する、此河床の岩石は火山岩でなく花崗岩である、蓋し爆裂に依つて下層の地骨を露出したものであろう、此邊で中語が蠅取草と云つて採つて呉れたものを見ると、モウセンゴケであつた、餘程下ると溪流が瀧となつた處が二つ程ある、辛くも其側を下ると、又た第三のものがある、今度は數丈の絕壁で、とても下ることが出來ぬので、左の急な山稜に攀ぢ登つて、他の溪谷に移つた、此處にも又た二間許りの瀑があつて、之を下る時、腰から下の冷水注加を食つたが、無難に過ぎ、遂に磊石壘々たる廣き河原に出で、三時北方遙かに溫泉場の家屋を望むことを得た、此處から頭上の峭壁を望むと、今朝過ぎた土工の小屋の處も、劒の刄渡のやうな山稜も、



小鳶山より大鷲岳を越て淨土山及龍王岳を望む
（辻本滿丸氏撮影）

溪流も、大岩も。絶壁も一々指示することが出來て、過去の記錄を繰り返し見るやうである、今日登つた終點は、決して小鳶峭壁の最高處でなく、夫より南の方にある黑味を帶びた岩壁の處の方が、少し高いのは爭ふことが出來ぬ、登路は研究したら、一層便利のものがあるであろうと思はれた、六七町で今朝の路に合し三時四十五分温泉場に着いた。「骨の折れた割に面白くなかつた」とは中語と共に此登山に下した結論である。

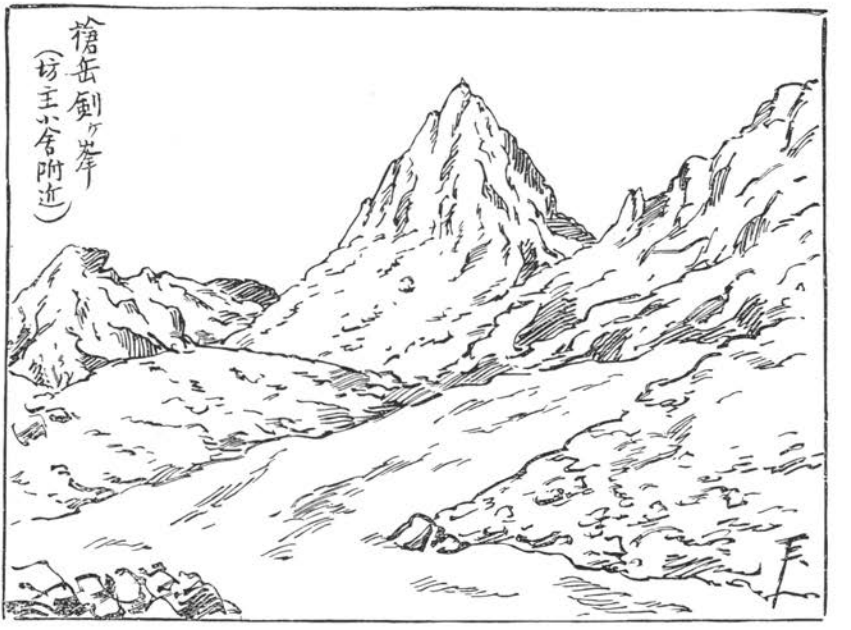
然し大鳶に登り、大鷲岳をも究めたら、確につまらぬ登山でない、殊に大鷲岳は最も登攀の價値がある、此山はザラ峠の方から登るのが便利であると聞いた。余の中語は蘆辭寺の佐伯平藏（三十一歳）と云ふ男で、山も達者であるし、又た良く忠實に働いた、彼は此登山で小鳶につきては、多少の經驗を得たから、今後此山の案内は一通り出來るであらう。

槍ヶ嶽の巔

榎谷紫峯

一、坊主小舍

槍の根元には大きな雪田、灰がゝつた磊々の亂岩。餘り見事なのでスケッチをする。鉛筆を持ち乍ら凝乎、眺めれば眺める程、その高く〳〵壁立した英姿は、此處に蝸附する六個の人影を、頭の上からうんと壓へ着けてるやうで、如何にも氣高くて、嚴かで、無限の威武を藏めてゐるやうに思はれる。乘鞍から望んだ時、萬山の奥に傲兀するあの鋭い槍の切先へは、到底這ひ上ることが難かしからうとさへ嘆じたその槍が、今は眼前咫尺の間に迫つて來たのである、あすの朝は、あの尖つた頂に立つことが出來る。これ迄神々しいと打ち仰いだ身がその時は最早他から打ち仰がれることになる。槍の神體と同化することになるのだ。



○槍ヶ嶽の嶺　榎谷

下界の景象でないのは勿論のこと、日本アルプス中にも、これ丈けの場所は斷じて無比だらうといふ樣な想ひがする。

辛つとのことで夕暮前、佛像と、その傍に蟠龍上人といふ文字とを刻んだ一尺程の立石が、一個の巨大な巖上に安置してある所迄登つた。その巨巖の基部に、人の這ひ込むことが出來る程の穴が明いてゐるつまり人工の岩窟である。今夜宿る豫定にして置いた坊主小舍といふのは此處のことだ。うちに這入つて見ると眞暗で、氷の如うな空氣が、人間を凍えさうにするやう。一週間程前迄は、窟内一面の氷や雪で、到底寢ることなどは出來なかつたもんださうだが、けふ日では全く融けて了つて、下はぢく〳〵の泥土みたやうな冷いものが一杯になつてゐる。獵師の二人は、右手に遠く見える絶崖から、蓆や焚火の料にと二三回も、背負ひ切れない程多量の偃松を刈つて來る、類藏は窟前で火を焚いて米を仕掛ける、高野豆腐の味噌汁を作る。六人はそのぐるりに團座して、雪のやうに灰の降りかゝるのも關はず、白樺の小枝で茶碗を挾んで、その熱い〳〵汁を啜る。言ひやうのない味である。

軈て夕が來た。大氣の溫度は刻々に下降して行く。こゝ一帶の大きな窪谷は、蒼茫として薄闇の幔幕を下ろし掛ける、東、つい眼の前に螺を伏せた如うな形の崇高な常念ヶ嶽、それに續く高い連山の後ろから、俄に輪廓の鮮かな白雲が立ち上つたが、見る〳〵うちに、その下からゝゝゝ次々と湧き騰つて、重り合つて、高く低く、濃く淡く、悠々として次第に、雲の峰の大奇觀を極盡する。下界とは違つてこの雲の峯は、輪廓といひ色彩といひ、明暗といひ、餘程鮮かな麗しいものである、この時落日は、天火と燃え立つ槍續きの巖壁の後ろの空隙から、斜に射かける紅の光。入道雲の半面を、ぱつと赤く輝かせる。透明な緋色に、純い茜に丸らんだ陰は薄つすらと鼠に、爽々して今紫に。而もこの夕雲は、その形をその色を、絶えずおもむろに變化させてゐる。と常念の右の肩の邊りから、殊に目立つた一團の隆起が初まつて、緩かに靜々と蒸上したが、何處迄も〳〵高く〳〵、滾々として大虛を蹴上げること幾萬尺。

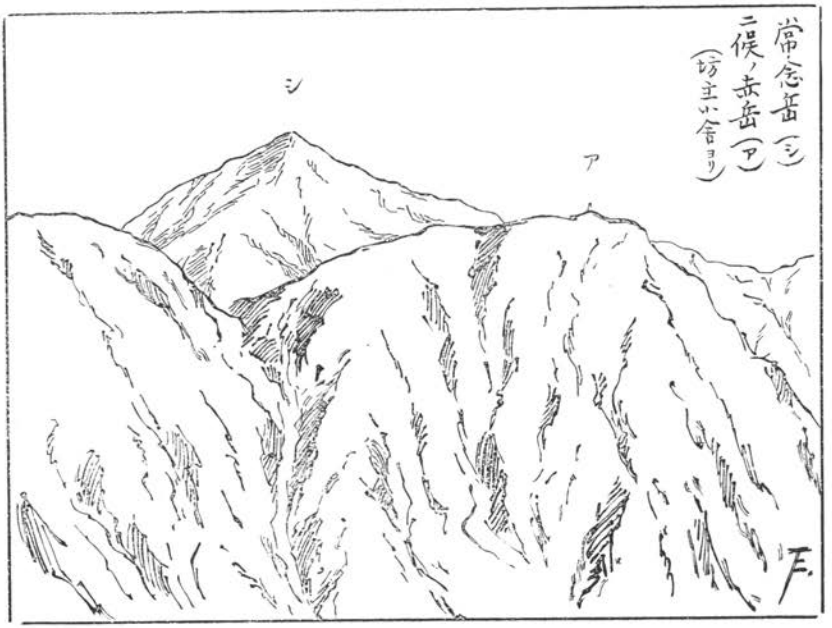
うす紅に匂ふ半面の潔かさ。崇高とも、森嚴とも、書きやうが無い。

暫くのうちに攢簇し、凝立した入道雲の右の端が崩れて來て、千切れ初めて、茫々と薄れて、段々と消えて行く。常念の左、大天井の後ろからは、惡魔とも地圖とも、形容の出來ない恠偉の姿をした、外廓の朦ろげなる濁り色の濃雲が、むら〳〵と湧き上つた。眼の高さにある二ノ俣の赤嶽の肩には、白い羽毛のやうな横雲が二た片、いつの間にか靡き懸つて凝乎そこに屯してゐる。と大天井の奥の方で、遙に雷の氣勢。電光が華やかに、幾筋かの曲つた細い銀線を虛空に閃かす。夕雲の美觀は、最早その面影を收めやうとする。四邊は大分暗くなつて來た。

「御神立が來るづらな。」

「なーに大丈夫であらず。この按排ぢや明日も好い陽氣だ。」類藏は頰笑むでゐる。

雨は到頭一滴も落ちなかつた。入道雲も夕立雲も、混合になつて輪廓を亂しかけると、脚底の谷一面に、壓し着けたやうな雲が、瀰曼つた。常念や大天井や、赤岳や蝶岳は、肩から上なる暗菫の膚を、この茫々たる雲の海から擡げてゐる。天界と下界とが今全く分たれたのだ。



日はとつぷり暮れた。自分達は防寒用具に身を固めて、窟内に焚火を圍んだ。一體岩屋で火を焚くといふのは危險至極であるが、こゝ丈けは天井の墜落する氣遣ひが無いのである。獵師共が日暮れ前から掛つて、ぢく〳〵の泥土の上へ敷いて呉れた偃松の蓆は、それでも心地が宜い。火は活々として一行の顏を紅に輝かしてゐる。煙は立つことの出來ない低い濕つた一枚巖の天井を偃つて、濛々と門内に籠つてゐる。夕飯も濟んだし、ノートの記入も明るいうちに出來て了つたし、最早あすの朝迄は用事が無い。けふの跋渉の話、類藏の山駈の話・熊狩の話。

宛として太古の民だ。(自分は島々から獵師と二人で來たのだが、上高地の宿で、きのふ僕が無理に登山を勸めた有明の吉田君と、けふ二ノ俣で、大天井から轉んで來た一人の青年＝慶應の生徒＝と二人の獵師と一緒になつて、今は一行六人となつた譯である。)

最う寢やうかと八時過ぎ、窟外へ出た時、薄霧が槍の巔から起つて、三五に近い月影は、その輪廓を朦ろにしてゐた。

岩の隙間から氷のやうな、寒い風が絶えず靜に訪

ねて來るので、幾たび目を覺ましたか知れない、自分とくつ着き合はん計りにして居る慶應君も、幾度となしに寢返りをやる、獵師も時々起きては偃松を燃べる。足は縮めた儘伸ばすことが出來ず、帽を被つた儘、偃松の枝を枕にしてゐる頭のすぐ上は、冷かな水が濡々と濕つてゐる巖壁である。迂濶に首も上げられない。窮屈なことは非常だ。これから見ると、幾ら寢苦しかつたといつても、乘鞍の新室堂は結構なものだつた。これで若しも獵師が、終夜焚火を絶やして呉れたならば、我々は凍死する程の寒さを感じたに違ひない。

二、劍ケ峯

明治四十年八月二十日午前三時五十分、冷かな岩窟内の夢は覺めた。乘鞍で懲りたから、足先の冷えないやうにと、昨夜寢しなから草鞋を穿いて置いたので、目が覺めるとその儘、直ぐに窟外へ出た。他のものも皆起きてゐる。曉闇の空はほがらかに霽れ亘つて、隅の隅迄聊の曇翳が無い。黑無地に染んだ常念の後ろ、空は純潔の紅を發して、燃え上らん計りに、ぱつと下から大きな洹しをしてゐる、東南の方、蝶ケ岳一帶の連山の上、全で凝結したやうな、沈々たる灰鼠色の綿雲は遠く廣く、横に靡き亘ると幾千里。大虛に在ます曙の御神は、その大御手でこの雲をぢつと抑へ着けたか、小い丸らんだ凹凸を、その上面に限りなく作つた儘、結晶して了つたやうに、微動だも起こす氣勢がない。綿の海と誰かゞ形容したが、巧く云つたものだと、獨りで感じ入る。

この曉雲の大瀛の漣瀚を突破して、菫藍の膚清やかな、秀麗比ひもない崖偉な靈峯が、遠く〳〵その均齊な外廓を、鮮明に描いた、富士である。富士の左に當つて八岳の群山、右に赤石一系の連嶺、いづれも混濁の世を閉す雲のわだつみから、稜々した巖作りの島が羅列してゐるやうに、桔梗色に平染せられた神々しい寶冠を捧げ出してゐる。

震え上る程寒い、澄み切つた大氣、纔の音響も傳はらない日の出前の山上。自分等は無限の靜肅、寂莫に包まれた。峯の奥から岳烏が三聲四聲。

日の出る前に絶巓迄辿り着かうと、ひたすらに磊石の急斜面を攀登したが、つい頭の上に見えてゐる槍の根迄でさへも、中々容易なことでない。それに傾斜は益す加はる、亂岩の足掛りは愈惡くなる。起きた儘の顏、昨晩なりの腹、唯大自然の壯觀に憧憬れる心ばかりに引き立てられて、踉々として力杖を突き立て〳〵登るのである。振り返ると、慶應君と類藏とは、ずつと後れて下の方にゐる。そのうちに槍の穗先が、目を醒したやうにぱつと赤く燃え立つて、骨立條々の膚には、强烈な明暗が鮮やかに作られる。

忽ち見る、そこなる巖の間から、ちよこ〳〵と三羽の雷鳥、小聲に鳴き乍ら。既旭が昇つたのだから悠緩、あれを朝の汁に持つて歸らうと、可愛さうに礫の雨を濺ぎかける。ひら〳〵と暫く飛び立つて又止る。三人の獵師は右に左に、懸崖狀のこの磊石の斜面をば、何の苦もなく走り廻る。年は老つても元氣なものだ、類藏の姿はいつの間にかずつと向方の、暗い絶壁の腹に蠢く、到々親一羽子一羽。別々に、血も出さずに首を垂れた。抱いてやつたが手套の外からでも、未だ温味が傳つて來た。

これで非常に遲れた。もうつい上の方の巖迄、朱い光線が射かゝつてゐる。右手に小い岩窟が見える。殺生小舍である。坊主小舍に雪の殘つてゐる間は、不自由でもそこで寢るのだといふ。辛つと槍の根、信飛境上の馬背に立つた時、寒い身を切るやうな曉の風が、颼々として膚を掠めた。これから槍の穗＝劒ヶ峯に掛かるのだ。何を云つても宇内無比の大奇觀を展披した靈山の絶巓近くだもの、赭と紫と、玄と灰を混ぜたやうな巉巖が、實際傍へ寄つて見ると、殆ど垂直に屹立してゐるのだから堪らない。前人の踵は本當に額を蹴る、どうかすると頭を踏まれるやうだ。巖の角立つてる所を撰んでは手掛りにして行くのだが、賴りと思ふその巖が、ごろ〳〵と剝落するから此上もない危險である。危險は我身一人に止まらず、下から登つて來る人の頭上へも及ぼす。

「天然の巖を掴むだよ。動く奴にや手を懸けるでねえだ。」

類藏は頭の上から注意して呉れる。仰ぐとづゝと高い所に、三角標の屋根裏ばかりが見えてゐる。若しもここで掴んだ岩角が、ごろりと一つ剝げでもしたものなら、下は幽冥なる無限の大深谷生還再び期すべからず。三百尺の槍の穗の、頂近くの處で、取り分け危險な場所がある。剝げ易い岩角は、足を掛けるとぐら〳〵と搖

れて、碎けて、拳程の破片が二つ三つ、普通ならざら〳〵と流れるやうに摩滑つて行くのだが、此處のは然うで無くつて、下の岩角を彈くのだ。彈いては直ぐに跳返へされて、したゝかに空間を飛ぶ。とその勢といふものは、實に凄じいもので、下に居る人の險難なことは云ふ迄もない。

赤裸々の大巖壁石ではあるが、稀に纖姿窈窕たる小葉爪草や、花葩潔雅の彩に豐かなる立山靭草や、金葩點點たる高根菫などが、巖の裂目から、くつ着いたやうになつて覗いてゐる。(駒草は乘鞍の豐富なのに反して、一つも見當らなかつた。黑百合や色古丹草や長之助草は、笠岳の尾根の邊迄傳へば隨分あるさうだと、つい此の間志村君を案内したといふ類藏が僕に話した。)

三、最高點

辛うじて槍の穗先に囓り上つた。昔は全く尖鋭で、恐しくて立つても出來ない程だつたさうだが、先年陸軍三角標を樹てる時に、その巔を八九尺毀つたので、此れ丈けの場所が出來たといふ。それでも纔に標櫓の有る所ばかり六七尺四方、人工的に平準した丈けが、云はゞ平地である。北の方近く、數間を隔てゝ、巖頭にさゝやかな祠がある。奇巖稜々到底至り難しだ。眼を四方に放つ。先づ東の方から書いて見やう。絕谷を隔てた赤岳の絕巘は無論のこと、その向方から、手を伸したら屆きさうに近く見える常念、大天井の兩一萬尺も、今は眼の下になつて了つて、それから更に方向へ、縹渺として遠く連り渡つた氷海のやうな一面の雲の海は、先の儘の姿勢で、沈々として凝つて動かない。丸々した凹凸の明暗は、日光を受けた丈けに、餘程鮮明になつた。その雲の漣波を蹴破つて、明瞭とした輪廓の、濃い桔梗色の淺間山は、紫がゝつた鼠色噴烟を、末廣ごりに緩寛と靡かせて、遙に靜座してゐる。

茫々果てしも知らぬ大わだつみの雲の上に、島嶼羅列したやう、八岳群山から、富士に白峰に赤石山、いづれも菫藍際やかな平染の頭を並べてゐるのが、坊主小舍の前から望んだ時よりは一層明瞭だ。こゝから見ると富士も白峰も、孤聳と攢簇と、均齊と稜嶢とのけぢめこそあれ、高さはどちらも同じことだ。けふのやうによ

く見える日は珍しいと、類藏が感心した程透明な大氣であるのに、どれが駒で、どの隆起が鳳凰山で、何れとどれとが荒川岳と農鳥岳とになるのかゞ、見えて居乍ら分らないのは一方ならず遺憾である。

南を向く。脚下遠く國ざかひを作る馬背狀の障壁が、南へ延びて高低參差、崖嵬の活趣を極めたが、眼の高さに挺聳するに及んで、怪奇絶特の風貌愈嚴しく、此の世に在りとも覺えぬ一大奇巖を捧げ上げた。而もうらゝかな旭は、斜にその紅の光を浴せたので裂開の甚しい、骨脈の變化に富んだこの靈峰は、强烈な麗しい明暗を鮮かに呈はした。日に向つた無數の雪田が、銀盤を懸けた如うに煌々と輝いたのは無論のことである。立派な巖だ、見事な峰だと、暫く恍(うつとり)したが、一體自分は先ず何たる迂濶なことだらう。空氣が稀薄な爲めに、餘り近く見え過ぎたものだから、忘れるともなくつい思ひ浮ばなかつたのである。

これこそは、自分の絶愛措く能はざる穗高山。

前穗高山の極て鋭いい巖頭に、微かな三角點が見える。その左手、二重にも三重にも疊り合つて連つた霞澤續きの低い山脈を越えて、そこにも一面の白

雲の波、木曾駒が腹から上を、うらゝかに雲表へ突破する。三十六峯八千谿と稱へられたその岳は、穗高のやうな飛び拔けたのは別として、兎に角遠目からでも、峯頭が大分稜々してゐる。高邁な奥穗高の右肩、狂瀾姿勢を取つて連蜿する一帶の石壁の上、向ふ方、綿の海からむく〳〵と、赭慮の庞嶺が突つ立つ。丁度その筋に當つて、少し左倚りに遠く、歪んだ富士式の靈山が、それと肩を比べる。近いのは思ひ出多き乘鞍岳、遠いのは木曾の御嶽である。こゝからは乘鞍より御嶽の方が高く見える。穗高はそれより又高い。我が立つ槍が低いのか、御嶽の方が低いのか、その邊は分らない。

南から西へ掛けて、平湯から仰いだ莊麗な笠岳は、赭い骨だらけの荒膚を突つ立てゝゐる。蒲田や平湯はその左の裾の、恐しく深く裂け込んでゐる筋に當るので、惡絶險絶天下無比と唱へられた蒲田の絶谷は、すつと下の方で、天女が銀針を落としたか、きらりと白い。笠岳の向方、そこにも一帶の雲の大洋が延びて、南北に長く〳〵連り亘る溫厚な貌の峯が浮き上がる。視向線が高い丈けに、九千尺に足らぬ加賀の白山でも中々高い。

今度は北。こゝから尾根を傳や樂に行けると、類藏が指した大小笠の脈續き、幽暝甚深目も眩むやうな、絶壁だらけの野口谷を斜に隔てゝ、鷲岳＝地理書には鷲羽岳とあるが、類藏は斯う言ふ＝から横岳山塊一體の群巒、多くは赭色で、脈絡の奇を盡くし外廓の怪を極めて、流前咫尺の間に展列する。これ等の累嶂を越えて、非常に明暗の面白い、氷り着いたやうな奇峯が、額から上を呈はしてゐるのは立山である。右へ倚つて、三角浪が無數に打ち合つたやうな、雪の殊に煌々する、姿態の麗しく爽かなのは白馬岳。

恁うして見渡すと、槍ヶ岳の周圍は目の及ぶ限り、悉く山と谷ばかりだ。山でも五千尺六千尺位のつまらないものは、平湯や上高地の地盤と然う變りがないのだから、等しく澎湃たる雪海の底に埋沒して了つて。その髻頂さへも擡げることが出來ない。玆に稜々兀たる奇巖斷壁を滿身に鎧ひ盡くして、英將が本壘の固めと、衛りと、四圍に犇々居並らんだ豪のものは、日本アルプス中、分けても高峻卓拔の聞えある靈峯ばかり。成る程槍ヶ岳は、今更らしくいふのも嗚呼のやうだが、實に萬山の奥の又奥である、眞に宇内無二の深山である。

（甲州アルプスの論者から叱り付けられるかも知れないが）この聖らかな天の高座に參し得た我は、汚ならし

い濁つた人間の世界が何處にあることかと思つた。

秩父の一角（後半）

河田默
梅澤親光

五　仙元峠の頂上から贊川まで

降りの道は中々急だ、然し前回に感じた程ではなかつた、雲のある日や雪のある際などの紀行は責任をもつて書くべからずだと思ふ、感情から云へば前回と今度とは萬事勝手が違つて何だか別の途ではあるまいかと思はれた事も二三度はあつた位だ、勿論落着て考へれば大して變つて居るのでもないので見覺えのある處も多いのだが霧を通して想像をはせた點は大部分違つて居た、里程の長短等も周圍の狀況や體の具合なぞで大に感違いをするものだ。この峠は人死があつたが爲めに少さい割には有名だ、然し聞きかずしてか或は不便な爲めか越えた人は比較的に少ない、その大半は恐れて通らぬらしい、現に我々が前回に越えた節等にも發程に先だつてその企を告げたら、有名なる旅行家の寺崎留吉先生すらも一行の一人に「仙元を越えるとしたら雪があつて中々大變でせう、精々御大切に」と云はれたと云ふ位な事もある、大切にする事の必要なのは勿論だが、ちと仙元を買ひかぶつて居る樣な氣がする。登山と云ふ事は不具でない人には出來る事だ、で我々は有名とまでは行かずとも仲間内では普通よりは足の弱い連中で而して足下から兎はおろか何のことわりなしに鼠一匹が飛出しても膽をつぶす位に臆病者だ、然しこれまでのわづかな經驗では登山の際に何事の危險にも心配にも遇つた事もやつた事もない、足下から兎が飛出しても驚かないと云へば立派な强膽ものだ山に登るにはそれほど大き

な膽を必要とはしない、或は自分等の樣に危ない事のない樣にと小心翼々でやつて行く方が結句安全なのでがなあらう。

今日は山の南側にも北側にも草刈に人夫が昇つて居るのが澤山見える、澤山と云つてもそこは物は形容で實際の數は兩手の指位なのかも知れない、遠目に見てちよつと何だらうとあやしんだ事もあつた、何れの側にしても麓からのぼるのだから隨分遠い、そこまでわざ〳〵草刈に御出かけは中々御苦勞だ、誰やらの口調をかりれば「田舍は勞動のひどい處です」と感服すべき處だ。しばらく降ると例の道が二本になる、左の方は極めて細くちつと痕跡と云ふのに近いほどで一見して草刈道にすぎないらしく思へる、雪でもなければ右の道を判然と認めるから迷ふべき心配は毛頭ない、否氣をつけなければ左の道を發見するのはむづかしい位だ。前に日原の人足はこの道は障子岩瀧へ行くと云つたが頗當てにならぬ、いろ〳〵の人にその瀧の所在をたゞしたがどうも判然しない、原島熊次郎なぞは「わしはこの年になるまで、この邊の山は谷々どこでも歩いて、おそらく通らない處は少なからうが、そんな瀧は見た事がない、聞くのも今がはじめてだ」と云つた位だ、勿論山一つへだてた方面の事だから判然しないので、地圖の示すが如く浦山川とかの上流にその名を帶びた瀧が存在する事は確かなのであらうが、大した大きなものではあるまいと思つて差支へはあるまい。

早く降らねば腹がへる、雜囊の辨當も食はねば、輕くはならぬ、然しこの降りはドシ〳〵かけるのにはちつと法が大きすぎる、體にひゞくのもいやだから急ぎ足と云ふ程度で武甲山を目の下にしてその方面へとやつて行く、溪間には殘雪が見える、ズットと下の方まで量も多く中々雄大だ、北側はあんまり日の目をみないからでまだ殘つて居るのであらう。頂上から半時間ばかりも來ると旅商人とは思はれぬがとに角商人らしい人が、若い女を連れて二人で登つて來たが、自分等を見て「浦山まではもう二里許りで降り一方ですから一息です」と苦しさうに一息いれて「頂上はもうぢきですか」と尋ねた、頂上から浦山までは二里で自分等は今その三分の一許は來て居る事は、前回の經驗から浦山が奈落の底にでも墮ちない限りは確かな事だ、それを二里と感じたのは先生大分弱つて御座るなと思つたのは後の話しだ、その當座には左樣考へるほどのひまもなかつたが、一

見して大分に疲れの樣子に察したから後二十町許と實際を云ふのも少し氣の毒なり、と云つて法螺を吹くのもと思つたから一寸頂上の一角が近い樣に見えて居るのを指さして「いや難有う頂上はあすこですから一息です」と鸚鵡返しのやうな返事をして行違つた、一息であるか否かはその人のやる事で、自分等が責任をもつべき限りでないから、氣を落さぬ樣に元氣に云つてのけたのだ。この邊から見ると例の山字形の三座の峰は、こちらに近い一角が特に著しく高く見えて、他のがそばに並んだ形が、まるでお稲荷さまの狐の尾の樣な狀を呈して頗る面白い。

降りの道は登りのより無理があると云ふのは、雲取から引つゞいた尾根が日原の方へはとにかく檜木休場の方へつながつて居るから、昇りはいづれにしてもその尾根へのぼつて、主脈へ移るのには少しの降り昇りですんでしまう、然るに浦山の方へはそれほど大きな尾根が出て居ない、有馬山から武甲へつゞく尾根はあるがそれとても主脈とのつながりはうまくない樣だ、その上そんなに遠くまで廻つて行くわけにも行かぬので、山腹からヒダの樣になつて出て居る足の、大きいのに見當をつけて降る樣になつて居るのだ、それ故急でもあるのだ。降口の處しばらくは南側とちがつて林の中を通るがぢきに草山になる、やゝ降ると再木立の中へ入る、日原の方は木が粗で其の上麓の木立をぬけると、可なり上の方からは頂上まで殆草山になつて居る、だから夏は草いきれで中々歩きづらいだらうと思はれる。今自分等はこの木立に入る。傾斜が大分ゆるやかになつてしまつたのは既に山腹と云ふよりは、それの脚の上にのつたからなのであらう。

アカミヤドリキはこの道にもあるやはり栗の木に着生して居る、昆蟲の採集は少しはあつたが、植物の方は別に採るべきほどのものはなかつた、歩調は例の急ぎ足、ヅン〳〵降りて浦山のドンづまり、川又の南はづれ、浦山川と稱するとかきく荒川の一支流の岸に降りついたのは午後一時三十五分であつた。

暑い〳〵、實にあつい頂上邊までは何とも思はなかつたが、可なり降るとおてんと樣の大威力は手きびしく自分等を襲ふて、たまらなくなつた、川のへりの岩が向ひの崖が幸日かげになつて、平な處があるのを占領して息を入れる、川又にはろくに休むべき處もないのは凡そ知つて居るからであつたのだ。休むとなれば悠々

たるものだ、口を漱いで顔を洗つてまづ平常の心地に歸へつた、それから小刀を出して石でとぐ楚の頂羽が戰敗れて自ら劍を研いだのとは考が違ふ、辨當は飯だけを行李に入れて、つゆが出るとやつかいからサイを入れずに來たから鑵詰をあけると云ふ爲なのだ、それには肉もある福神漬もある座禪豆もある、鑵詰は口をあけると持運びに不便だからなるべく小さい鑵がいゝ、處でこの座禪豆は自分等がよく持てあるくのだが中々いゝものだ、肉はうまいものだがちつと高い山なぞに行くと鳥でも獸でも魚でも、どうも味が思はしくないものだとは多くの人の云ふ事だ、低所とは體の工合が變るからのでゞもあらうか。

登山は危いの何のと云ふが、それは行つて見ぬ間か又は歸つて來てからの話しだ、實際に當つては突飛なまねをしない限りは危ない事はないとは大分云ふ人がある、何も山に限つた事ではない、電車の道は平らだからと云つて眞直にどこまでも行けば轢死する。六十間幅の大通りも必要な處は足がふむ處だけであつてあとは無くともいゝのかも知れぬ、道が細いからと云つても足がのらぬ程の處があるではあるまい、手がゝり足がゝりの無い處は歩くわけにはゆかぬから、登れる筈はない從つて登るほどの要もない、傾斜は急と云つても大抵二三十度限り位だから後に引たおされる心配はいらぬ、もつと直立した崖だとて手がゝり足がゝりが充分にあれば大して危いと云ふ程でもあるまい、然し行つて見ぬうちはどんな想像もやれやう歸つてから後はどんな法螺でも揑造が出來る、實物が目の前にないのだから證據があがらぬからだ、だから行つて見ない人の言はあてにはならぬ、歸つて來た人の話しは聞きかたがむづかしい、仙元峠は通路である、日原から浦山へ越えるか、浦山から日原へ通ふかのに開けた道である、それもたゞ通るのではない荷を運ぶのが多くだ、それだから急であるの道が細いのと云つても、それは妻坂峠だの小佛峠だのとありふれたものに比べたまでゞ、危くもなく嶮くもない、然し峠としては道も惡く傾斜も急な方の部類であらうと思ふ。

暑いから岩の上に寢ころんで話しをする、絲をよつて雜囊の綴のとれたのや、損じた處等を縫ひつくろいをやる、流れを渉つてヒカゲツヽジを採る、遊ぶ事一時間餘り二時四十五分、もう飽きたからいざ出發と立つと草鞋がきれた、いんぎが惡いと眉ををひそめる程の事はない、一局の碁に斧の柄が朽ちたと云ふほど遊んだが爲で

はないが昨日からの草鞋だもの切れるのも當然なほどにはかれたからだ、早速新らしいのにかへて出る、のぞき眼鏡で魚を突いて居た子供が不思議さうな顔をして眺めてゐるのを後に。

此處から影森まで、此川に沿つて一條の大道が通じて居る、人家が處々にあつて、車が行違ひうる道の幅砥の如くとまでは行かぬがやゝ降り氣味な、歩くには極上々の處。川又で遊びすぎた自分等は、此道は急いで行かねばならぬ筈だ、然し三千八百萬里の彼方にある怪物太陽の威力は、上衣こそ冬のものなれ、襯衣も夏のを用ひ、チョッキさへ取り去つた自分等を苦しめるつもりでは無からうが用捨なくてりつけて、急ぐどころか日常の速力さへ出させぬ、汗を一歩毎に一滴づゝとは行かぬが一町に二回位推しぬぐつて、湯茶水何でも渇を醫するものを用ひて、處々で休み、極めて悠々たるもので進んで行く、川の水は清い事は確かだが多摩川や日原川の比ではない、景の勝に至つたら比較がとれない事それ以上だ、それ故立止まつて見るほどの事はしなかつた景がせめて日原川位のものがあつたら、暑さがこれほど苦にはなるまいとつぶやきはしたが。

明治四十年の八月二十二日から、東京朝日新聞に秩父山中の小桃源と云ふ記事が數日續いてのつて居た事は御承知の方も多いでせう、然しそれを今こゝに引張り出すのは事がこの浦山にかゝはつて居るからである今その一部分を當時の切りぬきから移して見ると『武甲山の後にあつて深く山嶺に包まれ、東は鳥首峠の嶮を界、南は日原の峰巒に連らなる海拔二千尺の探山に、浮世を遠ざかつた浦山と云ふ小桃源がある……浦山川の急流に沿つて路はたゞ一筋、大宮より浦山までの里程は纔かに三里半强だが、影森を過ぎた中川より以南は、平均二寸勾配の細徑になつて、地盤は悉く綠泥片岩の嶮岨で、而かも浦山部落のドンづまりまでは五ヶ所の難場があつて、大雨の後なぞは危險甚だしい、少し油斷をすると何百尺と云ふ谷底へ轉がり込む虞がある……途中の大ヶ谷釜ヶ淵の深潭、伽平の絶壁などは甲の昇仙境にも讓らぬ景色である、十丈二十丈の瀧は何處にも懸つて居る……』これは幻花と號する人で風俗に就て人類學教室から取調に出張したのに同行した一記者の筆になつたものだ、その記事の主とする處は浦山の風俗習慣等を紹介するのにあるらしい、然し向ふの主意はどこにあつても自分等が茲に此れを引出したのはこの文句に用があるからだ、この文句に用があるからではない、

自分等の云草にこの文句がちと御役に立つからなのだ。

一度この地に遊んだ事のある人はすぐ分るが幻花先生途法もない誇張をやつたものだ。烏首峠と云ふのは名もはじめて承る次第故どんなに嶮かは勿論知らぬが、浦山の東と云へばあんまり高い筈はない、道は嶮でも大したものでない事だけは確かだが、その存在も位置も見當が付かぬからそれはあづかつておいて、海を拔く二千尺と云ふ深山があるのは大に奇拔だ、勿論深の字は高い事とは關係はない、然し二千尺は七百米突に大分足りないから武州の高尾山程度だ深いと云ふ山又山の奥にはそんな低い處はあんまりあるまい、しかも秩父の平野から坦道三里許りの處を深山とは、よく氣がとがめずに書けたものだ、二寸勾配とはどの位について二寸なのか知らぬが通常は一尺進むについて二寸登る割合の傾斜を云ふ樣だ、すると一里について二千六百尺ばかり登る事になる勘定だ、而して中川から川又までは凡そ二里だから川又を海拔二千尺とすれば中川は海面下約三千尺ばかりの處にあるわけになるそれより東京は遙に低いのだから隨分だ、和蘭ではあるまいし海面より低い都が日本にあるものか、出鱈目にも程があらう、形容詞も寸馬豆人なんて云ふのは如何にも景が眼前に現はれて面白いが、こんな風に數字で具體的に示すときは形容は絶對に無用有害なものだ二寸勾配と云へば僅かな樣だが十一度位なものだ、東京の九段坂が十五分の一即ち一尺について七分にも足らぬ勾配であると云ふ事を考へたら、いくら感情でもこんなにひどく形容する事は無法だと云ふ事が分らう、その後もこの流儀だ車が樂に行違ひうるのは東京市中でもあんまり細い道ではない、それほどの道を危いと云ふなら、電車や俥や馬車等の外に自轉車自働車等と云た風來ものゝ通る東京市中の道は尙更あぶなくてたまるまい、川の景は決してよくないよいと思ふ、勿論自分等は何々と名のある名所は知らなかつたから特別に見もしなかつた、然し特別に氣を引かれる程の處はなかつたのだから大した景色ではないと云ひうる、まづ桂川の景に比すべきものであらうか。十丈二十丈はおろか瀧と云ふ稱がおしくない程のものは何處にもなかつた、雨でも降つたら少さいのが出來るかとも思つたが前日まで降つて居たのだから無いときめてもよからう、華嚴の瀧は高さが三十八丈許ある

とかの事だ。あんまり高くないと思ふかも知れないが高さに於ては世界に有數なものだと云ふ事だ、ナイヤガラ瀧は百六十八呎許しか高さがないと知つたら十丈二十丈なんぞと云ふ大瀧を、そんなに粗末に揑造はしまい。新聞記者は社會の木鐸であるかも知れないが造物主ではあるまい、あんまり自分勝手にいろ〳〵揑造するのはよしてもらひたい、飛彈の硫黄岳が噴煙すればやれ御岳の一峯だの乘鞍の一部だのと、ありもしない法螺を吹き、圓木山から煙が出たと云へば地勢を以て察するに富士帶の火山脈が箱根から分派して丹澤山塊に及んで居るのに相違ないなんて出鱈目をならべて見せる、又ちつと舊いが富士山が大崩壞をやつて三島御殿場邊からは寶永山の如き岩山數箇を認めうると云ふが遠くよりは以前の如く白扇倒懸の姿に見えると山岳第二號第三號にも引きぬいてのせてあつた某新聞の記事の如きは寶永山が遠望の際、形の上にどれほどの邪魔になるのかを知つて居るならその岩山が遠くから見えない筈はない出鱈目だとすぐ氣がつかねばならぬ筈だから出す筈はあるまい、言論の自由と云ふ事はあつても、事實變更の自由、揑造の隨意なんて云ふ樣な權能は人間にはまづない筈だ。

と云ふと何だか自分等は新聞記者に恨みでもある樣に思はれさうだが決して左樣な次第ではない、學校で習つたわけでもないが、筆は劍よりも强い事や、社會の木鐸と云ふものゝ有難いものだ位な事は知らぬでもない、然し木鐸も音による聞て不快の念を起させる樣なものは耳ざはりだ等と云ふのは我儘であらうが、鳴つてはならぬ樣な音を發するものは有害だと云ふのは正當だと思う、揑造や法螺は木鐸として鳴るまじき音だと云ふ事をのべたい爲に長々と云つた次第なのだ。其序に今一つの事がある、擊劍には精神の修養が大切なのは用ひ方に因て活人劍にも殺人劍にもなるからだと云ふ事だ、然らば劍より權威のある筆の使ひ方は大いに意を用ふべきものではあるまいか、筆と云つても自分等の樣なヘボクタの使ふ筆は下手な獵師の鐵砲を恐れるのが烏ばかりだと云ふのと一般で使ひ方なんかを搆ふほどの要はあるまいが、筆を上手に使う人はこれで人を活しもし殺しもする否國を盛んにもし滅ぼしもするさうな、筆をよく使ふ人を文士と申し上る、然らば文士たるものは大にその使ひ方に注意してチヽヨロッカにやらぬ樣にせねばなるまい。處でこの文士の遣口に對して誇大だ實に遠

いと云ふ批難があるとかで、第二年第一號の九頁以下で烏水先生が文學者と科學者と兩方の云分を引受けて一人角力をとつて見せられた、處で烏水先生は實は文學者の御一味であると見えて、科學者は可愛さうに喉輪づめにされて壓し倒されると云ふミジメな結果に終つて居る、然し一人角力は昔から纏頭次第でどつちにでも任意に軍配をあげさせられるのだから實際の結果は如何なるか分るものではない、二人ぎりで角力をとると勝負に苦情がついた時に證據が殘らぬから何とごまかされるか分らぬ、角力は行司をいれて三人でやらねばならぬのだ、三人以上に見物が澤山居る事は勿論差支へにない。然し今自分等は二人ぎりだから三人角力をとるには頭數が足りない、その上一人が科學者一人が文學者と云ふ都合には行かぬ、二人とも純然たる彌次馬で、科學者が可愛さうには思ふが助け出す程の力もない、然し生れついた彌次の本性で、取口に對する育目解釋でもやつて見たいと思ふ。六々三十六鱗の雲を放れた龍は文學者には龍らしい感じが起らぬと云ふ事だ、然るにもしそれが雲に入つて一寸爪ばかり見えて居ると云ふ有樣になると科學者には爪とは見えても完全なる龍とまでは認められないと云ふ事だ、もしこのたとへが誠ならばいづれにしても完全ではない、龍は雲の中に居やうが居まいがよしや灰吹きに入らうとも地に入つて土龍と化けやうとも、それを龍だと見極めがつかねば完全に龍を知つたものではあるまい、然し想像の力は人によつて大に違ふ、雲中の爪を見て龍と推斷することはこれを單に爪と見る事より確からしさの程度は劣等なものだ、誤りを惹起す範圍が大きいからだ、實と云ふものは在りのまゝでも見たるまゝでもない、現在にあつては Probability の値が一に至つた limit に於てそのものを實と見做すより外はないものだ、人間は自然に作られたものだ、作られたものは、作つたものが責任をもつて居る代りに權力を持て居る、人間が創造の極到に達しうる能力があるか無いかが分らぬ内に、そこに行かうと考へるのはあまり氣が早や過ぎる、と云つてその能力の有無を考へるには、これを考へる能力の有無が問題になる、これは幾度繰返してもつきない問題になつて、限りなく新らしい問題を生んではてしが知れない、だからその事はあづかりにする事にしても吾々は人間として現在に存する以上、神の如く圓滿なる智識を得ることは到底望めない、從つて疑問が起る、さうすればこれを解決しやうと思考する、それで一つの問題が解決せらるれば其に伴つて

又其中に含まるゝ疑問が起る、かくの如くに吾々の思考は無限で其間に眞理の一部を捕へて後世に傳へ遂に自然の極致に達せんとするのは吾々人間の正になすべき務で且誇とすべき處であらう、即ち人間は疑の動物である、それ故疑問を解決しやうと務めると云ふ事は確かだ、然し解決の方法に至ると文學者と科學者とは行道が違ふ、現在世界で萬能の威力を有すと稱しうべきものはまづ自分等の知れる限り數學である、二二が四は定義であるから雰圍氣の外でも、他の宇宙へ行つても確かに成立する、この全能の力を基として、科學者は主として進むものだ、文學者は感情と云ふ第二の自己を探索に使つて萬事をさぐらせる、この探索はどこへでも行けて他人には目付からぬから理想的によいしろものゝやうだが、元來が自分の影だけに自分以上の智慧はない、それ故に文學者は聖人に非ざる限り萬能である事は出來ないものゝ上に基礎をおいて萬事をやるから誤が多い、即確からしさの程度に於て劣等なものたる事をまぬかれ得ない、唯文學者はどこへでも行けるから進みが早い科學者は根本を定めて進むのだから進歩が遲いのだ、錦の囊を見てその中には馬糞が盛つてある事をかまはずに錦だから尊いと云ふのは全能ではない、感情が錦に眩惑されてしまうからだ、それを錦は錦馬糞は馬糞と分けて一々の評價を下してその和をとるのは仕事が遲い代りに値ぶみをしそこなう場合が少ない、そこが科學者の身代が當り屋の樣に突飛に增減はしない代はりに利子を積んで漸々まして行く所以であるのだ。再び云ふが人間は作られたものだ、天然が作つた一つの器械に過ぎぬ、同じ型の器械は通常似た事をやる、天然は複雜なるよりは尙簡單なる事が好きであるからには人間の心は十人十種ではあつても、一からげになしうる程度のある範圍の內で異なつて、それ以外へ飛び出せるものではない、美しい點のみが頭に寫るなんて勝手な事はまけおしみの弱いものは云はない事だ、またかりにそんな事が出來るとしても、さう感情ばかりで自然の wesen を認めやうとするのは間違つて居る、たとへ文學者の云ふが如く『實』と云ふ事がかりに『在りのまゝ』で即ち『見たるがまゝ』であるとしでもその『見たるがまゝ』と云ふのは『自然の wesen を見たるがまゝ』と云ふことで『感情を以て見たるがまゝ』或は『理性を見て見たるがまゝ』と云ふのとは異つて居るのだ、元來かゝる混同を來すのは生意氣千万にも人間の分在として自然の wesen を見ることが出來るなどゝ思つて居るから起るので

吾人が見得る處のものは恰も吾人の前にある鏡にうつる假像の如きものであると云ふことを知らないからである。要するにかくの如くに考へて一人角力の取口を見ると喉輪につめて推し倒されたと見たはひがめで、實はまだ土俵の中央に取組んだまゝにあるとしか受取れない、これから先きの勝敗は自分等にはとても判るものではない、おつとあんまり横に歩いて浦山川へおちこむまいぞ。

浦山川の風景と、暑い事とに頗まいつて話しをしながらぶら〳〵と、それでもいつか山抓、中川等は過ぎて影森に來てまた一休み、大宮から强石（コワイシ）へ行く馬車の喇叭が聞える、こゝに浦山川を渡るべき橋があつたのだが風習として、八十八夜にそれを徹する事になつて居るとかで、此方の半分ばかりは今日こはしたとかで無い、仕方もないから少し迂路ではあるが、本街道へ出て、馬車の通る大道を、立派な橋で浦山川を渡る、影森から一里にして大宮町に立派な宿があるのに、この夕になつて左に折れたのは、自分等は三峯山に明日登らんとするからなのである。

上田野（カミダノ）の茶店に休んで菓子に空腹の一時しのぎをやる、目の前に低い山が一つ形が武甲山に似て居るがと思へるのがある、聞けばはたしてそれだ、眞の頂上が隱れて居るからでゞもあらうがその少さ、低さ、あれを秩父第一の高山等とは氣違ひならぬ人間には想像もする事は出來ない、暑さにへこんだ自分等はこゝに太陽の威力を避け、これから馬車の通ふ大道を一息に進むつもりなのだ。

店を放れたのは日がかげつてからだ、雜囊の内には燈火の用意もあるが、早く宿について食事がしたいから大分急ぎ足だ、日野を過ぎればしばらく人家がとぎれる、日は全く落ちて星がちらほら見え出して來る、歩きながら見つけて視力の競爭をやる、と行手に當つて大きな流星が、赤い頭で長い尾を引いて飛ぶ中々立派だ、海に魚が居るか如く天に流星が在るとならば、今飛んだ魚は何だらう飛魚よりは大きい格のだらうなんて笑ひ合ふ、その内に白久をすぎて荒川の本流を渡る、河原も廣く水量も多い崖が高い景色が如何やら相模川のある處に似たらしく夜目にも思はれた。

もう道が暗くなつた、提灯をつけて捕蟲網の柄の先きへ吊して持つ事にする行く事しばらくにして八幡橋贄

川橋と一つの橋に二つの名が共に樂書らしく書いてある橋を渡る、途中は夜は暗し先を急いだしよくは分らなかつたが平々凡々なる事うけ合ひだ、かくして自分等は贄川(ニエカハ)の客となつた、叮嚀であるときいた事故因(かくろくと呼ぶ)と云ふ宿屋に入る、中々大きな構えらしい、もてなしぶりも惡くない、三峰の參詣者が大分居たらしかつたが川に面した奥座敷の六疊に通してくれた、時は八時四十分。湯も手早くすませてしまうと食事となる、宿帖をつけにおいでた番頭どの、都の人の食の進むに驚き給ふ事勿れと云ひたい位に平げた、それはいいが三峰さまの火防の御守りが柱に三枚も張りつけてある効能著しく、火鉢の火は消える、燈火は暗しこれには閉口せざるを得なかつた、番頭どのは三峰の樣子につけて當地は夏涼しく蚊等は居らず避暑には至極上々と廣告をして、種々の御世辭をふりまいてまかり退つた、さらばと自分等も仕事を急いで片付け周公の御宅の方へとまかり出た。

六、一と廻り

明る四日はまたも上々のお天氣なり、邪魔な荷物はこゝにあづけて、二時頃までに歸るつもりとたのんで、七時三十分角六を發した、參詣の客は通常早朝から出てひるには歸つて來るとかで、今日この宿を出た客人の内では自分等が殿だつた。

然しまだ左樣あつくもないから平々凡々の別に佳景もないが惡くもない荒川の左岸を溯る向きへ相應な歩調で行く、强石までは馬車が通ふ贄川から半里と云ふ處だ、それから先きも道は依然として立派なものだ、川の向ひにも一條の路が見える、ウスンバロテフが飛び出す。

途中は茶店で山の樣子をきくために一度一寸休んだゞけで、大瀧隧道と稱する短い隧道を通つて、少し行けば左三峰山道としるべがある、それの藪ふるまゝに左に折れて表口へと向つた、坂を降るとクジャクテフが飛んで出る、やがて九時二十五分荒川の岸へ出て有名な登龍橋を渡る、大輪の橋とも稱して荒川第一の名橋だと茶屋の大將は云つたが格別なものでもない、たゞ橋が折れ曲つて居る工合が一寸木曾の鞍馬橋に似て居る、荒

川も河原が大分狹くなつてきたが、まだ先は大分長い事確かなりと云ふやうな水量、流れ方、ありさまであつた、さてこれからが三峰山。

秩父に高山と稱へられて居るものは武甲三峰の二座に過ぎぬ、然るに武甲は僅かに標高千三百十米突で三峰は遙にそれより低い、安房や上總に人となつて鋸山や鹿野山等を難有がる連中でゃもなくば、こんな低い山を高山だ等とは云ひ得まい、然も一見して武甲よりもそのうらの有馬山と稱するものゝ方が高い事は判るそれも秩父の內の筈だ、元來秩父の山とは如何なるものを指したらよからうか、日本山岳誌には關東山脈の內に秩父山塊なるものを分けて居る武、甲、信、上の四國の境の邊にある諸山だ、成程それらは山勢は相つらなつて居るが然し秩父の名を冠するからには、何も秩父郡に限るのでもあるまいが少くとも秩父古生層の山であつてほしい、かくすれば三國山から高尾山に至る脈は親類の小佛古生層だからいゝとしても、初鹿野山から天目山に至る方は小佛層の上に半分閃綠岩が來て居るから少し立のいてもらいたい、まして金峯、奧千丈、國師の花崗岩連は全く排斥せねばなるまい、國師岳は粘坂岩だと云ふ說もあるが、該山に登られた石川光春氏の談によれば黑胡麻の入つた白つちやけた石で出來て居るとの事だからこんな處に突然片麻岩があらう筈もないから農商務省の地質圖に從つて奧千丈とともどもに花崗岩と見做す事が正しからう、かくすれば上野で御荷鋒、稻含の二座、東京府下で御前山塊の外は秩父の目星しい山は皆な秩父郡に入る事となつて甚都合がいゝ、この範圍で最高いのは地圖の示す處では甲武信岳の二千四百五十八米突である、同山は第二年第二號の萩野氏の記文によれば甲州では三國(サンゴク)と稱する由であるが、又石川光春氏は土人がそれとおぼしき峰をトサカ山と敎へてくれたとの事を語られた、今はそんな名まで詮索する要もあるまいからこの三つの名を列記して、この山が即秩父の御大將である事を云つておくだけだ、武甲の高さはその示された標高より遙に低いらしく思へるが左樣でなく今の如しとしても三峰と共に秩父山中の幕の內へ入りうるかどうかは隨分あやしい高さだと思ふ。

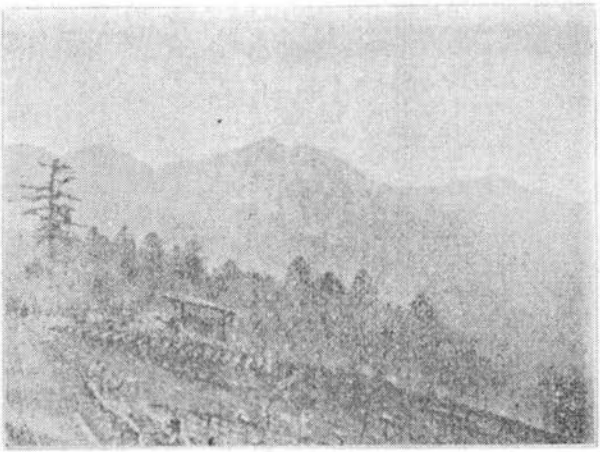
低いから參詣には便利だ、大輪から本社までを五十二丁に分けて標石がある、例に依て各町間の距離は勝手になつてちつともあてにはならぬ、ほんとに一丁あるのはなささうだ皆な近いものだ、初めはテンナンセウ等を

掘つて元氣にのぼつたが、ちきに昨日來の大威力が木立を通して及んで來て燒死ぬかと思ふばかりに暑い、茶店が澤山あるから渴に苦しむ事はないがそんなに休むのはいやだ、參詣の客は驚くべく澤山だ降つて來るのもある、登りの人は自分等と相前後する、いやに元氣に追ひ拔くから、暑いのに御苦勞と思つてゆつくり行くとちき上でへこたれて休んで居るのでまたこつちが先にたつ、葉上大釋迦葉中小釋迦と云ふ次第だ。二十一町目かと思つた處に清淨瀧と云ふ名ばかり立派な人工を加へた瀧がある、そこの茶店は中々大きい人が泊れる樣になつて居るらしい、それより上は益暑い、頂上まで立派な大道は急な處は少しもないが無茶にあつい、杉の並木で幽邃だなんて云ふ案內記につられたら大きな間違だ。七人連の一行と後になり先になりのぼつて行く、左手に削つた樣な形の岩山が一つ、頂に旗が見えるが何の爲ともその當座には分らなかつた、奧の宮だとは後で知つた、四十六町邊から七人連が急ぎ出した先へ行きたい爲だらう、梅澤生は上衣をぬいで手に持て流汗瀧の如しと云つたさまで燒死にさうだと云ふさわぎだが、おいて行かれるのも口惜しいから河田生は急いで七人を追ぬく、六人は譯もなかつたが七人目は中々頑强に爭つた、でも五十二町の處でやうやゝ先に出たから、これでよしと制札を見ながらまつて居ると流石に奮發して梅澤生も急いでその六人を追ひ拔いて直きに到着、そろつて山門をくゞつて本社に御參り申す時に十一時十五分。

本社は頂上ではない、一つの尾根の平な處にあるのだ、可なり廣いから社の處では下の方は見えず、四方はいづれもこゝより高いから山の上なのか谷の底なのか、一寸ケゞンな顏つきがしたくなる、夏は隨分あついとの話しだ、社は中々立派ではあるがそれに比べても尙大きいのは御師の家である、參詣の御方に伺つたら三千人はとまれるとの事だつたが、それは一度にと云ふ事ではないかも知れぬ、然し何も話し八十分の一に聞くほどの事ではない、自分等は詳しく見なかつたからどの位かの見當は一寸つけかねるが常雇の饗應係が三十名計りで折々手不足だと云ふ位だから隨分澤山泊れるのであらう。何しろ腹がすいたからと云ふのでひるめしをたのむと「御代饗御二人」と通してくれる、聲が大きいので叱られる樣な氣がした、すると給仕の子供が「御代饗の方御茶」とどなりながら澁茶をもつて來る、八つから十三位の小供が大勢で代り代りに給仕をする仕組と

見えて、誰の番だ彼れの番だと騒いで居ると、眼鏡をかけた取締らしい男が草鞋ばきのまゝ座敷へ飛上つて、何とか云つて帳面をくつて名を呼ぶ、凄まじい騒ぎだ、十人許出て來て帳面がまちがつて居るとか何とかうるさくやつて居る、一方では提灯屋と見えて、一人の男が御あつらへの提灯が出來た、とかで持て來た、家の軒に澤山奉納の提灯や小旗がある、處でその持て來たのが吊してあるのと型がちがうとかで神官らしいのが何とかきめつける、然し提灯屋はすましたもので「然し九丸と御あつらへで御座りましたからその型になりましたので、吊してある樣なのは尺二と申すのです」とやりかへす「どうもそれだつてこんな型ではくまるじやないか」と苦しいしやれを云つて見たが少し考へて、「じや今一組その尺二のをこしらへてくれ、これは登山の折に『御迎ひ』とでも云つて提げて行つたら定紋だから喜ぶだらうからこのまゝとつておく事にしやう」と名案が浮んだのではたで見ても安心した。左樣彼樣する中に、丸く肥つた色は白いが喧嘩をしたら強さうな子供が「御代餐の方」と呼んで膳をもつて來る、五人ばかり一しよだ「へい御汁」と大藥鑵に汁をを入れて提げて來てついて歩くとその次は大變、「へい御飯」とどなると思ふとガラ〳〵と凄まじい音を立てゝ御櫃をいざり車の樣なものにのせて推して來る、人の膽をつぶさせて食慾を減退させるにはいゝ方法だと思ふかも知れないが、敷座へ草鞋で飛上る手ぎわを前に拜見したから大して驚ろきもしなかつた、幾度かこの「へい御飯」を繰返させて食事を終ると「へい御神酒」とくわへに入れてもつて來た呑むと後から「へい御神酒」とつぎ込むのだから御免を蒙つて、御姿や御守りを少々頂戴して飛出した。三峯の御師の宿は親切でいゝと云ふ事は話しに聞いて居たが泊つて見ない自分等には分らない、それは營利一方の宿屋よりはいゝかも知れないがこのひるめしのありさまでは、また家の作り方や何かで推し考へても親切だかどうかは分らぬが清潔ではない事は確からしく思ふ、多人數の事で手がまはりかねるからの事でもあらうが、また人の信仰を利用して御眷屬拜借なんて愚にもつかぬ事に金を收める處はあまり營利的でないとも云へまいと思ふ、試に三峰山誌をよんで、その神事や緣起の如何に途方もないかを知つたら、又この社の神は伊弉諾伊弉冊の二神であるべきのに大口眞神即狼を御姿としてる處を以て見るに社は如何にもこれに禮拜し、つゝしみかしこんで祈るべき神をあがめてあるのではあらうが、

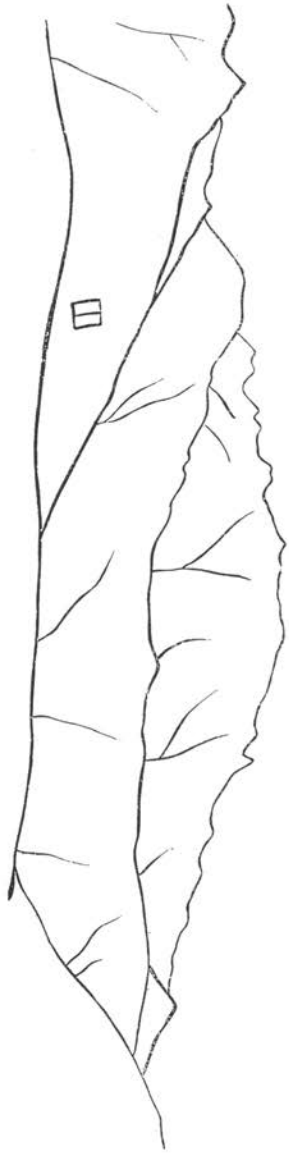
御師は決して親切な人間とは稱し得ない種類の人であるだらうと考へられるのは是非もない事だと思ふ、然しそんな心の内まで立入らない事にすれば、泊つた人が大抵叮寧にもてなされて居る、處を以て御師の宿は泊るのによい處だと申して間違はあるまいと思へる。



本社近くより雲取の連脈を見る　（河田默田氏撮影）

三峰に登る多くの人はこの本社から歸つてしまう、然し三峰山に登るとなれば更に奥宮を究めねばうそである、その奥宮とはどこにあるか、新篇武藏風土記によるのに『……奥院。雲採・白岩・妙法岳ノ三峰高ク峙テアルヲ以テ山號トナセリ、雲採ハ本社ノ巽向七里半程御林山ノ内ニアリ、此ニ石權現ヲ祭リ、小石祠ヲ立ツ、白岩ハ本社ノ東一里餘ニアリ、白山權現ヲ祭リテ小社アリ、妙法岳ハ本社ノ東三里程ニアリ熊野三社、山王二十一社ヲ祭レリ』とあるその内でなければならぬ、今は奥院とは云はずに奥宮と呼ぶとの事だ、處で御師にきいたら「奥宮へ御參詣ならば東へ一里一筋道でござります、歸りは大日向（オホヒナタ）の方へ降りられるのが順で」と教へてくれた事によつて多分白岩に相當するものだらうと思つたが三峰山誌によれば妙法岳の事ださうな、本社に再び恭しく禮拜して十二時五分本道を左に見て奥宮道をたどる暑いのでくだらぬ處に手間がとれるので行動が遲いのである。

右に雲取山が昨日東面から眺めた姿をうらがへしにした形に見える、その右につゞくのは大洞山等の峰ではあらうが、どれがどれとも判然しない、その先きは近く官林の御山だと教へてくれたやつが高く峙つて居るのに隱れて居るから、見當で察するに雁坂峠はおろか古禮山とある邊までは見えないのであらう、雲取の左には東京から見ても高さがやゝ雲取に比敵するかと思はれる位の一峰



雲取山遠望

が頗るこゝに近く聳えてゐる、思ふに奥院中の雲採と云ふのはこの雲取山の事であらう。

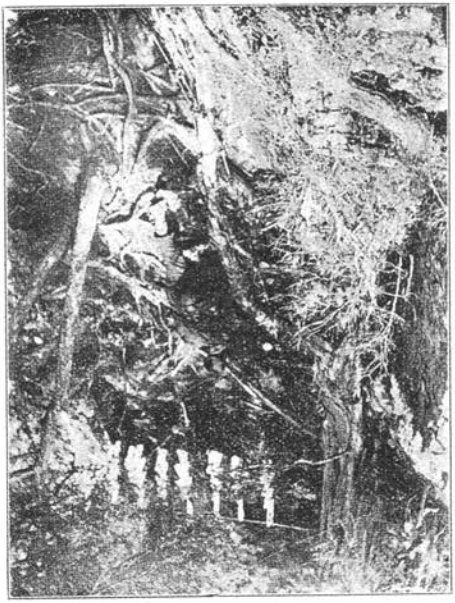
天照大神の御威德は尙著しく、暑さはたえがたい、三峰さまの御利やくで、火防の御守の代りに暑さ防の御守でも出してくれると頗有難いが等と愚にもつかぬ事を考へる、後から一人の男がやつて來て「大日向への道はこれですか」と尋ねる、初めての道故自分等にも判らぬが、默つて居るのも氣が惡くする基と「左樣だと云ふ事です」とやつてのける、男は先へ行つてしまつた。一條の道は二人ならぶには少し細すぎる處もある、やがて南の方がちつとひらけて荒川の對岸の山を越えて、秀拔な一座の峰が見える形は突兀として妙義派の岩山らしい、而して高さも大さもこの南に當つて優に覇を稱するに足るものである、何であらうかと磁石をみる、地圖を展く、手もなく兩神山ときめられた、兩神はあまり人が知らぬが、麓には御師も居るし、參詣の人も多小あるとの事だ、その偉貌は一目見ると飛んで行きたいばかりに人を引く力がこもつて居る。

やゝしばらくして、大日向山道の標木、鳥居があつて奥宮の道は左に切れる、今までは木立の中や草山であつたが、こゝで山貌頓に一變して急に岩山になる、鐵の鎖とも梯子にもつかぬものがある木の根が出て居るか

○秩父の一角　河田、梅澤

ら雨ですべりでもしなければ無くともひどくこまりはすまい、登り降りを二度程いづれもわづかなものだ、最後が削るが如き大岩、こゝは鎖が實際少しは御役に立つので、之れをのぼれば即奥宮、午後一時五十五分と云ふに到着した。

奥宮は小さなものだ、憐れなものだ、何を祭つたのかは分らなつかたが本社と同じく伊弉諾伊弉冊の二柱の神様であらつしやるさうな、そのわきに竹竿に長い旗がつけて建てゝある、旗の文句も分らない、頂上は甚狹い祠を正面から撮影することが出來なかつた位だ、側面からでもやさしくはない、四方は削つた様に下つて居る、五十度もあらうかと思はれる、四方の山は依然としてこゝよりは高いがこの峰が頂上である事は疑ひはない、雲取の左の山から北へ向けて出た尾根にとりついた一塊のコブの山頂が即これなのだ、然しこの處だけが岩山になつてとつゝけた様に飛出して居るのは中々面白い、昇りの本道を遙かに見下す、人が通るか否かは分らぬ



奥宮道の鐵梯（河田默氏撮影）

雲取大洞の連脈は依然として見える、先の方は官林の山だ、左は例の高い峰でそのつゞきは引込んで居るので、それに隱れて仙元の方への脈は見えぬ、その更に左はこれも官林の御山と稱するのが引つゞいて、その外れに武甲が一寸顔を出す、こゝより高い事は確かだがどの位違ふかは分らぬ、その左りは秩父の盆地になつて居る、それからは荒川の向ふの山だ、その上から兩神山が頭を出す、更に轉じては又々官林の御山に隱されてもゝの處に歸る、四周の景色はまづこんなものだ、空が少しどんよりして來たので遠くが判然しなかつたが、こゝが低いからこの上大した眺望はないであらう、官林の御山と稱するものは何れも中々高いも

のだ。

御宮の横に竹皮、ビールの空瓶、牛罐の遺骸等がころがつて居る、誰かゞ一騒ぎやつたのであらう、こんな事をすると山靈を汚す等と云ふ人もあるが、勿論何處だつて酒をのんで騒ぐ等はあんまりほめた話しではない、然し低いと云つてもこれだけの山の上までワザ〳〵面倒をしてこれだけを搬んで來た根氣を思つたら、この處置は品性のあんまり高くない連中が山神の寵を感謝するには適當な方便だと思ひうるであらう、絶頂祭等と云つて、短銃をぶつぱなしたり、詩をどなつたりする狂人騒ぎよりはむしろましだらう、こんな下等の連中の仕業で汚される位な山靈なら汚した處で大した事もあるまい、騒ぎたければ何處でもドシ〳〵騒ぐがいゝ、大は自然の靈と云ふものがもしあつたら、そんな事は氣にも留めない筈だと思ふ。頂上で眺望をむさぼるあて大に外れたが、寫眞をとつたりスケッチをしたりする、それやこれやで大分遊んだので二時四十五分にはいよ〳〵下山。

少し舊路をもどる、鎖のある樣な處は通らぬなぞと、酔狂な奴がありましてね、それをよけて細い急な道が通つて居る處があつた、何もそんな處は通つても面白くも珍らしくも、ましてやえらくは尙の事あるまい。左に折れて大日向山道、三峰で近いときいたからその道にはいる。

道は山腹を横ぎつて一筋、山道にしては樂なものだ、太さは普通と云つておかう、降り七分登り三分の割で行く、山が日を遮つたので大分暑さは遠のいたが、午前にうだつた體はだるいので一向はかゞ行かない、ややしばらくして路傍に雪がある、谷間には前から見えて居たが道が澤を横切る樣になつたので出たのであらう、手にもつてかじりながら歩くと春の季を少し脱けた樣な氣がする、午前が夏で今が冬、平均すれば丁度になるのかも知れないが冬が後だから秋になりさうだ、植物は珍らしいものはないが壯大なアセビが澤山ある、こゝの位大きいアセビはさうザラにはない、相州の塔ヶ岳にあつたのもこれに比敵する位はあつたが。

頂上から隨分來て大日向が思つたよりあまり遠いので、道でも違へたのではあるまいか、然しそれにしても分れる樣な處も無かつたが等と思つて居ると、下の方に人家が見えて來た、少し足が早めになると一人の錠前

直しが荷を擔いで居るのにおひついた、重い荷をかついで鑄懸けやさん隨分御苦勞なと思ひながら、少し話しをしながら歩いたが、如何にもゆつくりなので引こ抜いて、大日向の人家へ降りついた、處は平地で人の家の後ろと云た風、何處へも行く道がないから變だと思つて、その家の人にきくと、家を通りぬけろと敎へてくれた、これは太陽寺と云ふ巨刹なので、隨分廣い構へで、中々立派なものだ、それをぬけて門前へ出ると一丁毎にしるべるが立つて降りの道、こゝも大日向の內だが人家の多くは尙下の方にあるのだとの事だ。

大日向の太陽寺とは名からしてひどくあつさうな處だ、然しもう五時半を過ぎて居るから燒け死にの心配はない、梅澤生は肥つて居るので股擦れがして大分歩きづらいらしく、ゆつくり歩く、大日向山の降りは幅は廣いがいやに歩きにくい道だ、やがて荒川の一支流のへりに降りついて、それを渡つて茶店に休んだ、實は少々空腹になつて來たのに、東京から準備して來た行糧がつきたので、仕入れによつたのだ、然し實際腹の足しになるものがないには閉口した、それでも二三品つめこんで、冷い甘い水を飲む、御主婦さんが水を自慢しながらコップを取つて、ウツカリして居て、それを落してぶちこはしたのは傍で見る目も氣の毒なりけりだつた、日のくれぬ內に一足もと六時十五分此家を離れる。

奧宮はすでに黑く、大岳山を西北から眺めたのに似た形に見える、行手北の方には、槍と尖つた一峰が頂に一寸夕日を受けて居るのが見えた、それもぢきに黑く夜の氣は漸々と襲つて來た、日がおちれば涼しい、涼しくさへなれば股のすれたのも何のそのと、元氣回復して梅澤生が先きに立つて、この川の右岸に沿ふて降る、行く事しばらくにして荒川の岸に出た、對岸はと見れば驚ろいたりな、大輪から僅かに八丁ばかり手前の大瀧墜道の處、然し今は大日向は近いとは云ふが、一時あんまり奧へ入りすぎるものだから大したちがひはないのだ等と愚痴をこぼして居る時ではないから、朝通つた道を對岸に眺めながら急ぐ、道はあまりよくない、登り降りが澤山ある、川の曲り目の多くは外側にあるから對岸のより少し遠からう。それでも提灯があつたから暗い夜ではあつたが岩にも木にもつきあたらずに歩みのけた、空をながむれば日本晴に星淸く、獅子宮は中天に頑張つて、流石の勇士オリオンも頽勢すでに著しくデ＃アナ女神の箭をうけてか、應に沒落せんとするさまだ。低

い橋に荒川を渡つて强石へ出た、それから今朝の舊道を傍目もふらずに贄川へ入つて、再角六に腰しを下したのは八時十分、前夜よりはちつと早かつた。二時に歸るなぞと云つて六時間も遲れたので、番頭どのはこつちの云譯をとりこして「採集などをなさつてはおひまがとれませう」と云つてくれた、然し自分等は一向採集はしなかつたのだから「いや奥宮が思つたより遠かつたので」と云つたら「いや奥宮へ御參詣で、それは大した事で御信心でいらつしやいます、實は今夜は多分三峯へおとまりだらうかと存じました」と云ふ、後で確めたが實際奥宮まで行く人は割に少ないのださうな。

今からどこへも行けるのでもあるまいから再こゝに泊る、急に家人の居る室をあけてくれたのらしく、昨夜の室のすぐ近くに通してくれた、火防の御守をはこゝにもある、夜食もすめば別に仕事もないので、高野君はじめ方々へ手紙を書く、それが終れば毎日の御定り通り。

七　贄川から東京まで

五月五日の朝七時五十分、角六の店を離れる、この宿は相應に親切なよい家であつた、庭には植物園と號して、珍らしくもない木に名札がついて居る、販賣部で種々のものゝ御用を辨じまする、可なり廣いらしく見受けた。昨日よりはちつと荷は多いがまだ朝の内、それに道は最も歩きよいゆるい降りの坦々たる大道、お天氣が如何によくても大して驚く事ではない、あたりは打ひらいて見るものもないから急ぐともなしに足が進む。昨日は三峯に眺望がなかつたので歸りに大分惡口を云つた、それが山神の御怒にふれたのか大分歸りの道が遠かつた、だから今日は三峯も中々趣味のある山だなぞとほめて見た、御利生はてきめんで道が思つたより近い、九時五分には上田野の一昨日の店にきた。今日は武甲へ登るつもりであつた、然し見た處草山らしいから、昨日以上の暑さに苦しむ覺悟がいる、それに武甲がひどく低いのも氣に入らぬ。秩父名代の山だからとは思つたが、今日東京に歸る必要もある事だから、こんなつまらぬ山は割愛して、また他日氣のむいた節を期する事にしやうと相談がきまる、きまればやがて店先を放れる。

浦山川を渡つて影森、こゝに少さな鐘乳洞があるが、二度見るほどのものでもないからよらずに左へとつて直に大宮郷をさす、またも暑さにくるしめられはじめた、三峰への參詣客に大勢行き逢ふ、大宮郷に近づくと武甲山がさすがに大きな貌をする、大宮は武甲の麓にあるのだから、そこからは如何にも武甲は高く見えねばならぬ筈だ、遙か遠く南には、うすく山か何かと思へるのが見える、御荷峰山の見當だらう、大宮郷の關根屋に十時五十分中食の腰を下す。

此邊から汽車の出る羽久禮までは六里ある、平々凡々の荒川の岸を、いかに道がよくともこの暑いのに練て行くのは、如何に醉狂な自分等も大に閉口だ、何も同じ處を幾度も歩くのがいやだと云ふのではない、面白い處は何度も歩けば一度毎に趣味がます、一つ處へ二度とは行かぬと、新らしい處、別な方面と常に心懸る連中とは、自分等はいさゝか考を異にするのだ、然し面白くもない處に求めて苦勞するがものはない、それは馬鹿な事だと思つたから、こゝから羽久禮へ馬車が出るのを幸、十二時發のそれに二人分の席を求めにと會社へ行つた、會社は關根屋のすぐならびだ。そこには二三人の乘客がまつて居る、馬丁等がそれに話しをしかけて居る、その一人は牛乳の瓶からそれをのみながら「どうもこの牛乳のきゝめと云つたら、えらいもんですせ、まづ一合三錢五厘のを四合ものんだら、例へて云へば、そりやー！もー、えーと、寒い時に寒くなかつたり、肥つたりそれは大したものさ、」と誰にもたのまれはしませんがと云ひたい樣な顏つき、するとそれをまにうけてか一人の客は「へーそんなにきくかね、わたしは半年ばかりも一合づゝのんだが一向きかないからやめた、どうも酒の方がきくやうだ、」ともつとも何にきくのかは一向分らない返事をする、もつと話しを聞いて居たかつたが飯の仕度が出來たらうと立歸る、丁度今出來た折だつたので早速片付けてしまつて、まだ大分ひまがあるからゆつくり緣で休む。

正十二時に馬車が二臺出た、一臺には自分等をのせて、前刻の客は商人らしく丁度隣りでいろ〳〵話しをする、酒の効能が顏にあらはれて居るのも面白い「この先きの何とか村で今日村芝居がありまして東京俳優が來るとかで大した騷ぎです、」と云ふ珍談を承つた、村の名をきゝおとしたのは殘念だがせめて俳優の名をと思つ

てきくと「えー坂東某、市川くれがし、嵐何と云つた樣な顏振れです但素人連ですよ」名前も問ひ返せなかつたので判然しないのは殘念だが素人連が頗る振つたものだと感心した。するとまた「この邊は隨分にぎやかな樣ですが實に開けないもんです、現に先日も自働車が通つたのですが何だか判らないでしてね、尤も隨分大きなのでしたが、遂に東京で流行る電車と云ふものだらうと云ふ事にきまつた、と云ふ話しがある位です」と落語にでもありさうな事をきかせてくれる。左樣なうちに可なり時がたつた大宮鄕の外れで荒川を渡つて左岸について下る、道はいゝのだが隨分ひどくゆれる、齒の痛いの位はすぐ癒る代りに頭が痛くなりさうだ、川は流れはゆるやかで中々ひらいて、眺めるほどの景の處はまるでない。途中で馬車のつぎかへがある、今度のつたのは大分古い車だ「その齒止は大分すりへつて居るから氣をつける、あんまり使ふとこはれて車がぶつくりかへるぞ」と他の馬丁が馭者に注意する、隨分のけのんな車もあるものだ、車內の顏振れは大分ちがつた、新に一人眇の男が入つて來た、例の商人が大島先生と恭つた工合、風彩より察するに村學究なのであらう、胴亂や捕蟲網を見て直ちにそれと察してか、採集の話しをはじめる、話しが例の芝居に及んだら「いや何下さらぬもので」と云つたのは學究たる態度からかも知れぬ「先日も名は申せませんがある村で、小學校の落成祝にその役者連を招いて、村芝居をやつたとか云ふ話しもありますが、學校と芝居とはいくら田舍でも不思議な取合はせですな」等と云ふ面白い御話しも承つた　ちよつと都ではまねの出來ない事だと思ふ、この話しの內にも馭者は度々齒止めを使ふ、車がぶつたおれられてはたまらぬからビク〳〵もので安き心地もなかつた、羽久禮に近く崖の上を通る、先日こゝがくづれて馬が車ごとおちた、急用を抱て親の處へ行くべき若者がそれが爲に命を失つた等ときいても、尙更心配の念を强めるばかりだ、それでも馬車は歩くよりは遙かに早く、午後二時五十分に無事に羽久禮についた。

同じく三時羽久禮發の列車は自分等をものせる、上武鐵道は靑梅鐵道が乘客よりも石灰の荷を重く見るが如くに、乘客よりは荒川の礫を運ぶのが主眼らしい、それかあらぬか警報器等も紐は通してはあるが、その端は車內の橫木に縛つてあつて車掌室へはつながつて居らぬから、何の役にもたつものではない、汽車は元來何時何

分で動くものだからいくらあせつても仕方はない、狂ひがあつても少しのものだ、熊谷、赤羽、新宿と三箇所で乘りかへて飯田町についたまで一々の時間表は別に示すほどの要はあるまいが、熊谷からの車中に一人髭を生やした人が居て面白い話しをした、其一節を示すと「平地で通例のひどい風と云ふのは一秒に三十米突内外で、それを越すと一寸歩きにくい事がある、然し富士山の頂上などに至ると氣壓が低いのでひどく感じないから、常に一秒に百二三十米突の風が吹くが春風程にしか體にはこたえないしなんて風だ、いや然し當時はこれを眞にうけてきいて居たのでまるで出鱈目だと分つたのは後だつたが、この他の話しもみんなこの流義で、突標子もない法螺ばかりだつたのだ、何のつもりでこんな出鱈目を話してくれたかは分らない、或は自分等を釣つて見たのか、又は詐欺師になる準備にもつともらしく法螺の練習をやつて居る人であつたかも知れない、車中別に珍事も椿事もなく、愛度無事に飯田町に歸着した頃は日が暮れてから遙に後であつた。

八　しめくゝり

羽久禮以來、しば〳〵車窓から武甲、仙元の諸峰をながめた、五日の旅は短かくとも、歩いた距離はわづかなりとも、愉快であつた事、苦しかつた事は今日尚忘れずに、後になつても記憶されるべきものがある。飯田町を出でゝ飯田町に歸る、自分等の旅行は常にかくの如く、不規則なる形の環を描く、今度は四日目の小さい環が加はつて、齊はざる瓢簞の形をなしたと見られるのは、自分等が常に瓢の如くにぶら〳〵して居る表璋とも思はれるであらう。

人間は何んと云つても動くには時間がかゝる、食事もする、睡眠もせねばならぬ、故に鬼の紀行ならとに角、人間の行動を記くのに何時何分がなく、食事がなければ記行文としては不完全なものたる事はまぬかれまい、また人間は空を飛んで行くのだと云ふ事等を思つては惡い、だから何時何處を如何にして進んだかを判らせない、紀行は、鬼の紀行としての役には立つても人間の行動を記するものとしては、値が少ないものだと云はねばなるまい。然し何時何分何處を動いたと云ふ事はその時に起つた事實と少しちがうかも知れぬ、その土

地の標準時は國で定めたのによるからよいとしても、用ひた時計に狂ひがないとは云へぬからだと計りではない、書き損いもあらうし、見損じもあらうからだ、その上時間は絶對でなくて比較的の量であるとは云ふが、現在の人間の力では、このわづかなる五日の日をも逆に反して見て行く事は不可能である、逆に見られぬから同じ樣に繰返して見樣と云つても尙更出來ない、だから紀行中の事實には全く證據がない、あつても絶對に有力なるものではあり得ない、それ故紀行文は如何に精秘に見て、如何に精しく書いても相當以上に充分なる責任を持つ事は書いた自分等には出來ない、ましてや極めて精しく見たのではなし、充分なる材料を記錄したのでもないこの紀行はわづかの責任しかおひ得ない、その程度ははしがきに大抵書いておいた位なものである。

僅かに五日の平々凡々の出來事を何故にかくの如く長々しく、興味のない筆でかきつらねたかと云ふ事については、次の如く答へる事が出來やう『標本の卸賣りもしないのに、八ヶ岳から馬に二駄も植物を採集して持つて來たある文士や、山草の培養法もよく知らぬのに、白馬の珍草を十七貫目も採つて來て、東京で腐らして見る某特志家等がある以上は、要もないのに幾何かのひまを缺いて、長々と自分勝手な熱を吹いて、これを自分等の紀行文だと稱するものの、二人位は存在して差支へのない筈、否當然存在すべきでがなあるらう』自分等は即その紀行文を書いた醉狂者なのである。

新高山紀行

尾崎白水

▲吳光亮の開路

人寰を距ること二十里、地を拔くこと一萬尺、其中央分水嶺を越えて臺東の平野に通ずべき道路は、當年如何にして開鑿せられしか、爾來風雨三十年今や殆んど荒廢して通行に堪えずと雖も、八通關に至つて其遺蹤を觀るに、坦然たる大道今も尙殘つて、臺東方面に下るべき一路遙かに帶

を曳くが如く、亦以て當年吳光亮が苦心經營せる工事の規模を知るを得べし、請ふ少しく彼れが道路の開鑿に就いて語らしめよ。

抑も支那政府が本島を領有してより以來、二百年の久しきに及びたるも、其政化の普及したる地域は僅かに西部一帶の平野に過ぎずして、中央山脈より以東に屬する東部海岸の如きは、最近三十年前までは全然等閑に附し去られ、單に其政化の普及せざるのみならず、人迹も亦全く到らずして徒らに蕃人の跋扈に任せありしが、同治年間南岬に於ける米船ローヴァー號の遭難並に我が琉球蕃民の牡丹社遭難事件は、端無くも國際上の一大問題を惹起し、外人をして『臺灣島は支那帝國に屬すべきや』との問題を絶叫せしめ、又我政府をして清國に對し『既に版圖と云へば必ず官を設け化導するの實あるべし今生蕃に何等の政教ある乎、又萬國往來し各國皆航旅を保護す今蕃人海路の障を爲し屢々漂民を害するも之を度外に置きて懲辨せず他國の人民を憐まずして唯生蕃殘暴の心を養ふ此の理ある乎』との二個の問目を提出せしむるに至り、結局公法上の原理に據りて無政の地は之を版圖と見做すを得ずとの斷案を下し、終に同治十三年即ち我明治七年に於ける牡丹社討伐の擧となり、天兵一下直ちに兇蕃懲辨の實を擧げ、其餘威の振ふ所能く北京政府を震駭せしめ、終に清國に於いて最後の責務を負ふことゝなり、其結果として清國當局者は初めて本島の邊境即ち東部蕃地の等閑に附すべからざるを覺り、漸く其經營を開始せんと企つるに至れり、勿論是より先き臺東經營の有利なるを唱道したる者決して少なからず、康熙末年に於ける本島の大政論家として有名なる藍鼎元の如きも早く既に其忽諸に附すべからざるを論じ、道光中彰化縣志の編者は山後の卑南寛を開闢するの有利なるを說て『他年此地を開闢せば良田數萬甲を墾し歲に租賦數萬石を得べし』と云ひ、又同治中淡水廳志の著者は山後を開き政務の廳を設け及び臺西より通ずる山路を開修すべきを記せり、然れども當路有司の姑息なる爲め終に之を決行するに至らざりしなり、然るに我が牡丹社討伐の事あつて以來俄かに當路の惰眠を覺醒し、同治十三年十月を以て北京に日清和好の條約を交換すると同時に、其翌十一月を以て時の船政大臣にして臺灣の督辨防務を兼ねたる沈葆楨は、先づ其部下たる海防同治袁聞柝を海路卑南に派して、臺東平野の形勢を視察せしめ、翌十二月を以て、南中北の三路より道路を開鑿するの計畫を奏議し、續いて後山に於ける舊禁を解くの上奏を爲せり、該上奏文は載せて伊能梅陰君著はす所の蕃政志にあり、而して其立議は恰も機宜に投じたるを以て、悉く北京朝廷に採用せられ、翌光緒元年即ち我明治八年一月を以て工事に着手し、三路齊しく進んで臺東に通ずる道路を開鑿せり、南路は即ち海防同知袁聞柝之が統領として三營の兵を督し路を二條に分ちて一は鳳山縣の赤山より山後の卑南に出づるものにして哀統領自ら之に當り計程百七十五清里とし、一は射蔡より卑南に至るものにして總兵張其光之に當り、計程二百十四清里、北路は羅大春統領として十三營の兵を督し、宜蘭縣の蘇澳より山後の蕃萊に至るものにして、計程二百五清里、中路は卽ち彰化縣の林圯埔より八通關を越えて山後の璞石閣に至るものにして、計程二百六十五清里を有し吳光亮は實に其統領として之が經營に當れるなり。

八通關に於ける所謂吳光亮の開路なるものは、斯の如くにして開鑿せられたるものなり、要するに姑息なる清國政府をして、此大工事を決行せしむるに至りたる一大動機は、全く我が牡丹社討伐の與へたる刺戟にして、杖を八通關山の絶巓に立て當年吳光亮が大工事の迹を觀ると同時に、坐ろに我が西鄉都督の英風を聯想するを禁ぜざるなり。

吳光亮は乃ち三營の兵勇を提げ、光緒元年一月を以て林圯埔より工を起し、同年十月に至つて成を告ぐ、當時の情形は沈葆楨の奏疏及び片摺等に詳かにして、蕃政誌は一々之を收錄せり、其の北路中路開山情形疏の一節に曰く、

中路原派前澳總兵吳光亮、帶兩營、駐集集鋪一帶、隨經臣等奏派臺灣道夏獻綸督理開山撫蕃諸事、嗣以道探山路未回、未即動手、本年正月臺南剿務方段、劉璈丁憂回籍、夏獻綸暫兼營務處、遂緩前行、茲迭據吳光亮稟稱、自年底探路歸報、後本年正月九日起、卽率勇、由林圯埔社寮、兩路分開、至大坪頂、合爲一路、進而大水窟、進至頂城、計共開路七千八百三十五丈有奇、二月初七日復由頂城開工、直抵鳳凰山麓躋半山、越平溪、經大坵田、跨扒不坑等處、而入茅埔、計又開三千七百七十五丈有奇、兩處統計一萬一千六百十一文、凡建塘坊八所、沿途橋道溝壑木圍宿、站俱漸興修、分派兵勇、自集々街起、至社寮、大水窟、大坵田、茅埔、南仔脚蔓、東埔、各要隘已逐節配紮、又送到查撫水裏、審鹿等三十九社名册、計歸化番口、凡七千二百九十二人、辰下方循途漸入、斬棘披荊、以出秀姑巒之背、倘能因勢開通、將與北路諸車聯爲一氣、此又中路一帶開山之情形也、

又第二回に上奏したる北路中路情形片に曰く

中路一軍、據吳光亮報稱、自三月初九日起、至四月八日止、由茅埔、越紅魁頭、經社頭仔坪、過南仔脚蔓、至合水止、統共開路四千六百八十丈合計二十六里有奇、遞建塘坊四座、茶亭二所、大小木圍二座、公所二座、小營壘二座、以便往來、自四月初九日起、至五月初八日止、大雨兼旬、工程稍滯、自合水起、歷東埔社心、走霜山横排、至東埔坑頭止、共開三千七百九十丈、合計二十一里有奇、建塘坊三座、石橋兩道、木柵土圍公所兵房、均已隨地建置、以後當再接續前進、復屋工、從牛轠轆、旁開一道、側接茅埔、以便分途、埔裏、集々、社寮、南投各處、使商旅時卑南一帶、署臺防同知袁聞析、現方招集屯丁、建築碉堡、爲經久之計、湖內埔、崑崙坳、諸也葛處、鎭臣張其光、仍駐營彈壓、地方均稱安謐、

右の如く一月九日を以て工事を起し、一は林圯埔よりし一は社寮よりして、大坪頂に至り合して一路となり、鳳凰山を越えて陳有蘭溪に下り、楠仔脚萬、合水、東埔を經て、東埔坑頭に達するまで延長殆んど二十里、工事を四期に分ちて五月八日に至つて止む、此間各所に塘坊を置き又木柵土圍を設けて旅商避難の場と爲し、或は茶亭を構へ或は營壘を結んで以て往來に便にせり、而して別に牛轠轆を經て芽埔に至り、本路に合すべき間道を設けて、埔裏社集々街方面よりの行旅に便にせり、是れ卽ち予等の一行が經過したる所なりとす五月以後十月に至り、東埔坑頭より八通關を越えて、臺南瑛石閣に達する開路の情形に就いては其記載を得ずと雖も、要するに該開路工事の如何に困難なりしかは、左の記事に徵するも亦之を窺ふを得べし、即ち沈葆楨が謝奬劉璈開山出力人員摺に曰く『均係束馬懸軍、縋幽鑿險、隨地隨時、輒碉設堡、臧逆撫艮、艱苦勞瘁、亦比尋常行軍過之、其或襄贊機密於風鶴動心之日、或建築城壘於鴛沙烈日之中、或涉重洋、以購軍需、或冒奇險、以籌接濟、或率偏師、以扼要險、或捕積匪、以靜內訌、或司偵探、以濟兵謀、或聯絡團以固邊圉、均能始終勤奮、著有成勞』之を要するに開路のとたるや單に山河の險のみならず、一面には彼の恐るべき兇蕃をを料理せざるべからず、而して吳光亮は其點に於いて最も苦心經營する所あり、沿道の諸蕃に對する

行動極めて寛厳宜しきを得たるものゝ如し請ふ少しく彼れが理蕃の事績を紹介せしめよ。

吳光亮が道路を開鑿してより以來、此に僅かに三十年の歳月を經過したるに過ぎずと雖も、蒙昧野蠻なる蕃人の間には、其當時に就いて詳細なる記憶を有せず、唯沿道の各蕃社に於いて今も尚ほ噴々たる彼れが威名を傳へ、吳大人の名は彼の阿里山蕃に於ける吳鳳の夫れの如く、深く彼等の頭腦に刻印して忘れざるものあり、當時の傳説として現に蕃人の語る所を聞くに、吳光亮は先づ道路開鑿の前に於いて、附近各社の蕃人を桶仔脚萬[6]に集め宴を設けて大に彼等を勞らひ、同時に一部の蕃人に對しては毒を盛つて之を殺せり、常時死するもの百餘人の多きに達し免れたる蕃人等は爲めに深く其威武に服して工事を助けたりと、又曰く、吳光亮は道路を開亮するに當り、先づ多量の火藥を八通關の項上に運び、蕃人に聲言するに能く來つて工事を助け、奎輿に開通することを得ば、賞として火藥を汝等に與ふべしとのことを以てしたれば、附近各社の壯丁は競つて此に集來し、盛んに工事を助け、幾も無くして竣工したるに吳光亮は約を食んで火藥は悉く之を臺東に運び去れりと、要するに予が蕃社に於いて聞き得たる當時の傳説は唯右の二項に過ぎずと雖も、彼が當時如何に理蕃の宜しきを得て、蕃人をして寸毫も犯す所無からしめたるかは、殆んど一年に渉れる大工事中絶えて蕃害のありしを聞かざりしにても知るを得べく、且つ右の如き傳説は寧ろ蕃人の怨嗟を買ふの事實に過ぎざるが如しと雖も、沿道の諸蕃は現に彼れが威名を説くの外、絶えて何等の怨言を聞かず、殊に彼れが一面開路の工事に經營宜しきを得たると同時に、理蕃の宜しきを得たるものありしは、蕃政誌にも其事實を傳ふる所少なからず、即ち彼れが道路工事中、ツォォ族の沙米居社蕃人納哇浪と云へる者、士武勳部族の蕃人一名を殺害せしに、吳光亮は乃ち命じて其銃を押收し、其の廚薙一所を燒きて之を懲懲し、四箇月の後ち改悛の情あるを認め返附せりと云ふ、斯の如きは一些事に過ぎずと雖も、亦以て彼れが理蕃に尠なからざる注意を拂ひたる一事實として見るを得べし、而して彼れが蕃社に向つて恩威並び加はりしは、一面時に武斷的理蕃の大威力を示すと同時に、一面に於いては工事に盡力したる蕃人に對し、厚く之を勞ふの手段として殆んど遺憾なき策を盡せり、即ち蕃人等は貨幣の貴重すべきを知らざれども、銀牌の如きは之を裝飾品として極めて喜べるを以て、工事に功勞ある者には特に功牌を調製して之を與へ、又官衣を給せり、其功牌は薄き楕圓形の銀板にて、其板面には左の文字を彫刻せり

福　巡撫部院　建

二　功牌

岑　兩

予は未だ其の銀牌を實見したること無しと雖も、梅陰兄の語る所に依れば、阿里山蕃社の頭目の中には現に當時受領したる功牌を保存し居れるものありと云ふ、又官衣と云へるは漢制の官秩衣彩に擬したる衣服にて、胸に山に獅子の縫ひ模樣あるものにて、功牌と併せ給し若くは衣服のみを給せるもあり、功勞に應じて等差ありしものゝ如し、要するに今日蕃界に於いて傳ふる所の彼れが事績は右の如く極めて單純なる事實に過

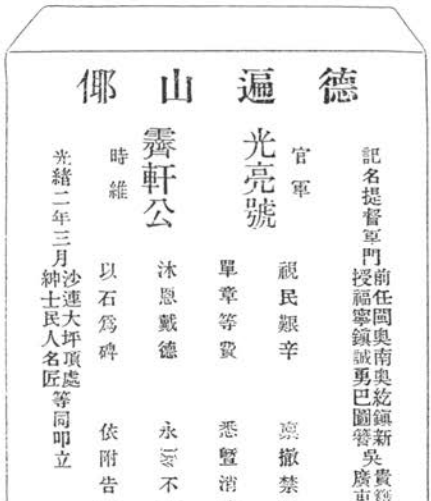
ざずと雖も、尚ほ他に撫蕃の爲めに彼れが經營したる所を視るに彼れは決して單に一個の武人たるのみにあらず、確かに政治的抱負と手腕とを有したる一人才なりしなり、現に予等が登山の强力として伴ひたる東埔社の蕃人の如きは、彼の兇暴濁水蕃の種族として、三十年前彼れが開路の當時までは、盛んに馘首を爲したりしが、彼れが開路と共に之を撫化したる結果として、今は全く馘首の惡弊を絶ち、爾來三十年の星霜を經て、當時の開路は全く荒蕪し盡し、人跡殆んど到る無しと雖も、尚ほ今日予等をして安全に其蕃人を伴ひ、其蕃界を通過して新高山頂を窮むることを得せしむるもの、亦確かに當年吳光亮が事績の餘影に外ならざるを知るべきなり。

斯くて同年十月南中北の三路全く竣成を告げ、清國政府の本島領有以來二百餘年等閑に附せられたる、臺東の平野は初めて政府の行政區域に入るゝことなれり、而して當初臺東を三路に分區し卑南、璞石閣、花蓮港の三所に兵官を駐劄せしめ、尋で統領吳光亮は主として三路の撫蕃事務を辨理せり、當時彼れが撫懇の方針は、蕃人を撫化する爲め適當なる義學を各要地に設立すること、蕃人に產を授けを生理せしめ以て訓化善良の民たるの置礎を爲すこと、蕃地開墾の目的を達する爲め移民を支那本土に募り特別の保護を與へて其の墾成を奬勵すること等に在り、或は撫墾委員の職制を定め、或は招墾章程を設けて、熱心銳意之が經營に當りしを以て、其拓殖政策は着々として成功せると同時に、又蕃政の上に一新正面を開くに至れり、當時の施設に關する詳細なる史料は、載せて蕃政誌に盡せるを以て此に之を贅せず、唯彼れが中路開通以來、臺東撫墾の統領として如何に蕃政の爲めに其神力を傾注したるかは、彼れが化蕃俚言三十二條を制定して、其趣旨を蕃語に譯して各社蕃人に宣講せしめたる一事にても之を認むるを得べし其訓條は縷々數千言に涉り一々之を錄するの繁に堪へずと雖も、試みに其條目を擧ぐれば亦以て大意の存する所を知るに難からざるべし、

一、設局招撫、以便民番。
一、改社爲庄、以示區別。
一、保護商旅、以廣貿易。
一、分別五倫、以知大體。
一、嚴禁淫亂、以維風化。
一、分別稱呼、以敍彝倫。
一、分記歲月、以知年紀。
一、出獵以時、免妨耕種。
一、擧委頭目、以專責成。
一、約束子弟、以歸良善。
一、遭風船隻、丞宜救護。
一、奉養父母、以報深恩。
一、蕭髮打辨、以遵體制。
一、分別姓氏、以定婚姻。
一、宜戒遊手、以絕盜源。
一、檳節食用、以備饑荒。
一、首訓頭目、以知禮法。
一、禁除惡習、以重人命。
一、安分守己、以保身家。
一、夫妻和順、以成家室。
一、穿衣著褲、以入人類。
一、禮宜祭葬、以安先靈。
一、嚴禁偷盜、以安閭閻。
一、宜設墟市、以便交易。
一、分給工食、以資辨公。
一、禁止做孽、以免生事。
一、彼此各庄、宜相和睦。
一、學習規矩、以知禮義。
一、分別姓氏、以成宗族。
一、殷勤攻讀、以明道理。
一、疏通水圳、以便耕種。
一、建立廟祠、以安神祖。

要するに今日の臺東が一廳として立ち、殊に其人口の殆んど全部が、生蕃若くは熟蕃なるにも拘らず、蕃界は比較的極めて靜穩にして、他の方面に於ける蕃情の常に不安なるに反し、同廳の人が着々として新政府の撫育を受け、皇澤に浴するもの日を追うて多きを加ふるに至れるは、當局に於ける施設の宜しきを得たるものある結果に外ならずと雖も、抑も亦吳光亮が當年撫蕃の統領として其化育の方法機宜に適したる幾分の餘

影なしとせず、又前山方面に於いても、八通關を越えて臺東に通ずべき道路を開鑿すると同時に、乾隆以來百數十年間全く封鎖せられ居りし蕃界を開放して其入蕃の禁を解除したる爲め、蕃界に接近したる谷庄の人民は深く之を德とし、其通路の初めて蕃界に入るべき鳳凰山の麓なる新蓁庄に石を建て其德を勒せり、雲林采訪册に「德遍山隙碑、在大坪頂新蓁街、高六尺寬三尺、五書德遍山隙四大字」と云へるもの是なり碑面勒する所の文字左の如し。



新高登山の途中、林圯埔より鳳凰山を越るものは必ず新蓁を經過せり、今や土民既に碑の所在を知るもの甚だ少なしと雖も、建て古廟の中に在り、杖を停めて之を探る亦多少の興味あるべし。

八通關に於ける關門と過化存神の碑とは、今や全く荒廢に歸して之を探るに由なしと雖も、當年吳光亮が道路開鑿の爲めに設けたる、營舍の迹は殘礎尚ほ歷々として蔦蘿の間に横はり、破壞したる陶器の累々たる、燃え殘りたる、木材の半は土塊に化して點々たる抔其年數の未だ久しからざるを示し、井戸も二ヶ所ばかり穿ちありて、水は涸れたれど當時の規模の程も知るべし、殘迹の在る所は八通關の頂上より道路に沿ひて凡そ四五丁ばかり臺東の方に下りたる極めて平坦なる原の中にて、事務所の迹にやあらん三間に四間ばかりの殘礎、稍や小高く築かれたるあり其建築も當時は壯麗なりしならんと想はる、新高山に登らん人は必ず探るべき古蹟なり、一行は通事の案内にて之を探り、寫眞を撮り抔して暫

らく休憩する中、早や正午に近づきたれど、此所にては飲料水を得るに由なく、又一面短草の原野には焚火せん材料も無ければ、通事の誘へる儘に新武路溪の流域に下ることなし、正面に新高山を望みつゝ、鋭き棘ある鬼薊の一面に生へたる野を横ぎりて十丁ばかり行けば、山は七十度以上の傾斜を爲して急に溪底に臨めり、地面には極めて短かき熊笹の類と、其鬼薊の針とのみなれば、手を掛けんものとて無きに、手を放てば身を支へん術無し、左れど蕃人等は譯も無く降り行きて、我等が尚ほ中腹を匍匐せるに、早や溪底にて火を焚き居れり、漸く路を求めて溪底に下れば時は既に一時に近く太陽は丁度中天に在りて、屏風を立て籠めたる如き谷の中に、暫しの晝を照し出せる折なりき、溪底の海拔は九千五百尺ばかりにて、溪流は新高三峰の中間より源を發して、卑南に下るべき卑南溪の上流新武路溪なり、靈山の滴瀝、其清冽なること譬へんに物無し、兩岸に直ちに千尺以上の障壁にて、老樹森々兩岸枝を交へて晝も尚ほ夜の如く、一日の中溪底に在りて太陽を望み得るは僅かに一時間内外に過ぎざるべく、然かも其陰崖に添ひたる場所は終古日光に照されざるなり、日陰の所にては著しく氣温の低きを覺え、日中なれども戰慄を感じたり取敢ず火を焚いて暖を取る。

午餐には鷄卵の汁を炊き、殊に珍味なるを覺えたり、飯は例のボロ〳〵したるなれど、溫かき汁を副へたれば兎も角も喉を下れり、軈て支度を整へ又出で立たんとしたるに、時は尚ほ二時を過ぎざれども、日陰は既に山に入りたれば四邊小暗くなりて、此上遠くは行き難き樣なるに通事の說にて此より新高山の絕頂までは、最早や全く水のある場所無ければ、露營地は此を措いて他に求むべからず、絕頂は此より早朝出發すれば、夕方までには歸り得べしとのことにて、殊に新高山の三峰中何れへか登山せんとの問題も未だ決し居らざりければ、時は尚ほ早けれども今より此に露營して、緩々と翌日登山の用意を爲さんとて、溪底に適當なる露營地を求むることなせり、左れど尚ほ時間あれば溪流に沿ひて溯り行かば、或は量に登山したる川上諸氏の一行が露營したる場所に出でんも知ずとて、蕃人通事等が留むるをも聞かが、予は先に立ちて進み凡そ十丁ばかり行けば、溪は次第に谷りて幾十丈もある瀑布幾重とも無く層を爲して落ち、走獸飛禽も越ゆること能はざる勢なれば、終に引返して元の場所に就き　軈て栂の大木の生ひ茂れる崖に添ひ、火を焚きたる迹のある所を露營地と定め蕃人等は半丁ばかり隔てる所に獵小屋のあるを發見して之に宿することなせり、斯る深山にも蕃人等は獵小屋を構へて時々出獵するものと見えたり。

附近の谷合に覆盆子の實の見事に熟して生れるあり、摘み試むるに飽くまで霜に飽きて美味云ふばかりなし、左れど我等の手の達する場所に在るは多くは獸類の餌に採り盡されて殘れるは何れも猿猴さへ近づき兼れたる者のみ、之を摘まんには非常なる危險を踏まざれば能はざりき。

▲新武路溪の一夜

一行は今や漸く新高山下に辿り着けり、明日は愈絕頂を窮むるなり、此新武路溪上の一夜、其三面に鼎立せる新高山は、屹として三千有餘尺の一大屏風を爲し、人は恰も其屏風裡に在て眠るなり、雲の衾を重ね石を枕として泉の聲を聞きつゝ我等は如何なる夢をや結ばん。

崖の上より倒さまに覆ひかゝれる栂の枝に天幕を張りて、地上の荊棘を刈莚を敷き、桐油紙を吊りなどして席を設け、焚木を捨ひ集めて火を

焚き、夕餉の用意に忙はしき中に、溪は早や全く昏れて新高の峰の上より崩るゝやうに降り來れる霧は、一面に四方を籠めて暫しは咫尺を辨じ兼ぬるに至りぬ、時は尚ほ四時前なれど山と山とに立籠められて、晝も暗きばかりの溪合なれば、日の暮るゝは平地に比すれば確がに二時間以上早き心地せり。

軈て露營の準備全く整ひ、一行焚火を圍んで夜宴を開けり、而して先づ起りたる問題は明日の作戰計畫なり、曰く新高山は其絶頂三峰に分れ共に我頭上に聳え居れり、其中央の一峰は蓋し川上技師の一行が曩に探檢せる所にして、之を前にしては長野、秋山、鳥居諸氏の踏破せる所、又南方の一峰は直ちに溪上に峙ち、最も近きが如しと雖も嘗て熊谷、齋藤、本田諸氏の前後數回之を探檢せるあり、獨り北方に聳ゆる一峰に至つては前人の未だ踏破せるものあるを聞かず、若し得べくんば其絶頂を窮めて前人未到の神秘を開かん哉と、淡海先づ主として其説を唱道し、衆尚ほ逡巡して決せず、或は曰く川上諸氏の登る所は中峰にして最も高し、之を窮めて其紀念品を携へ歸るにあらざれば、下界の俗物或は惑を爲すとて予等を目するに絶頂に達ぜずして歸りたる者と爲さん、殊に其登山の順路の如きも數日前に於いて、一行數十人の通過したる足蹤歷々たるものあるを以て、之れを求めて登れば容易に絶頂に達するを得ん、何を苦んで奇を好み難を求めて笑を招くの愚を爲すの要やあらん、又一人は曰く川上諸氏は鳥居氏の遺迹を探つて其紀念品を携へ歸れり、予等は寧ろ南峰に攀ぢ獨逸人ステーベル氏が留めたる紀念品を求めて之を登山の紀念にせん、殊に其登山は從來登山者の記事を見るに最も容易なるものゝ如し、何を苦んで險に就き又川上諸氏の後塵を踏むを爲さんやと、蓋し淡海の説く所衆皆敢て否認するを欲せざれども、要するに從來何人も之に登りたる者無く、隨行の蕃人と雖も他の兩山の如きは既に其路に熟し居れるを以て、容易に之を伴ふことを得れども、北峰に至つては人迹全く到らざるのみならず、古來神の住める所として之を恐れ、若し其絶巓に攀づる時は忽ち神靈の怒りに觸るゝならんとの迷信を抱けるを以て、彼等は努めて其登山を避けんとするの狀あり、通事の如きも種々説を構へて淡海の議を難じ夜深うして尚ほ決する所あらざりしが、淡海の意志確くして奪ふべからざるものあり、結局一行は其議に從ふことなりしも、蕃人等は尚ほ容易に登山を肯ぜず、命令的に之を作はんとせば或は途中より逃走するの恐れありしを以て、百方手段を盡し利を喰はせて之を誘ひ彼等が唯一の生命とせる烏布、燐寸、藥品の類を懸賞品と爲し、若し明日一行に伴ひ北峰に登攀する者あらば、求むるが儘に之を賞與すべしとて、十人の蕃人に對し應募者を求めしに、尚ほ逡巡決する所あらざりしが、彼等は百方熟議焦慮の後ち、僅かに最も慓悍なる三人の蕃人之に應ずることとなり、通事以下他の蕃人等は事を途中に留め、一行は極めて輕裝を爲し、一回の食料と絶頂の紀念品のみを携へ、未明に出發して日没までに豫定の露營地に下るべき計畫を定めたり。

蓋し新高山三峯は相鼎立して八通關の南方に聳ゆるも、八通關より望見し得るものは、中峰と南峯との二峯にして、北峯は其前山に遮斷せられて之を望むと能はず、殊に南峯は新武路溪を隔てゝ直ちに眼前に聳え、最も近く且つ最も高く見ゆるを以て、從來登山者の途を八通關に取りしもの、悉く新武路溪に下つて直ちに南峰に上り、齋藤農學士、本田博士、熊谷辨務署長、齋藤理學士、獨逸人ステーベル氏の如き皆然らざる無し、又其中峰は最も西方に屹立し嘉義方面より見れば、殊に高く天表を挿せるを以て、何人も其路を誤ると無く直ちに之に登れり、長野中尉

の如き、島居龍藏氏の如き、秋山技師の如き、若くは川上諸氏の一行の如き即ち然り、故に予等一行が伴ひたる蕃人の如きも、新高山と云へば直ちに南峰のことし、一行が他の一峰に登らんとを唱ふるに至つて其意外に驚きたるものゝ如くなりき、新新高三峰中北峯は八通關よりは之を望むとを得ずと雖も、彼等蕃人が其蕃社より望見して、日夕常に其崇高偉大なる感化を受けつゝ或は神の宅する所となし、或は靈魂の鎭する所となし望むべくして即くべからずと爲せる靈山は即ち北峰にして、斗六方面より之を望む時は最も高く聳ゆるものなればなり。

新高山は斯の如く三峰に分れ、而して其望見せる方面に依りて絶頂を異にせるを以て、所謂新高山の眞面目を知らんと要せば、必ず其三峰を悉く攀ぢ盡して、詳細なる觀測を爲さゞるべからず、然るに從來同山を探檢したるもの前後十餘人に及べるにも拘らず、尙ほ往々新高山の眞面目に就いて議論を挾むものあり、殊に其探檢者の記錄に由つて之を觀るに、甚だ疑はしき所なしとせず、是れ實に予等一行が登山に就いて最も苦心したる所にして、予等は初めより植物を採集せんにもあらず鑛物を調査せんにもあらず、若くは氣象を觀測し、動物を採集せんにもあらず唯其新高山を探檢せんが爲めにして、尠なくとも從來疑問となり居れる新高山の眞面目を捉へ來つて、後の登山者の爲めに其指導者たらんとを期したるを以て、登山の前に當り先づ出來得る限り從來登山したる諸先輩の記述せる所を參考し、且つ最近に登山の成功を齎らして歸りたる、川上、福留諸氏の實話を聞き又自から八通關に逢て地圖を參酌して之を攻究し終に淡海子の說の起りたる所以にして、要するに從來登山者の未だ新高山の眞面目に就いて充分なる解決を與ふるに至らざりしは、全く各自に最初登攀するに當り、自己の登りつゝある山を新高山の最高峰となし、其絶頂に達するに及んで尙ほ他にも是と同等若くは同等以上の山あるを認め、終に孰れが眞の新高山なるやを解決すること能はずして空しく下山するが如きもの無しとせず、現に齋藤理學士の如きも其一人たるは紀行文中に於て明かに之を云へり、蓋し新高山は其三峰共に新武路溪の上流を包圍して相鼎立し、頂上に上つて之を呼べば近く相答ふるが如く、遠く之を望めば極めて相接續せるが如しと雖も、其三峰相連亙せる峻嶺は恰も利劍を横へたるが如く、兩面の傾斜最も急なるを以て、決して甲の一峰より乙の一峰に向つて、嶺傳ひに躋攀すること能はざる爲め若し强ひて其別峰を探討せんには必ず一たび三千餘尺の溪底に下り、更に別に路を求めて登らざるべからず、而かも是を實行せんとせば、少なくとも更に二三日の日子を費さゞるべからず、是れ決して限りある糧食と限りある人夫とを以て行ふべからざることなるより、終に從來登山者の今日に至るまで嘗て新高山の眞面目に就いて明確なる解決を與ふるに至らざりし所以なり、殊に從來登山者の多くは天候の不穩なりし爲め、或は雲霧に鎖され或は風雪に遮られて、充分なる展望を爲すと能はざりしものゝ如く、自然新高山の面目は今日まで一般に一種の疑問を以て傳はりしなり、然るに予等は幸にして最近の登山者たる川上技師の一行に依りて、略ぼ其眞面目の在る所を聞き得たるを以て此機に於いて最後の斷案を新高山の眞相に向つて下すべき、最も有望なる使命を齎らしたれば、終に淡海子の動機に從ひ非常なる冒險的探檢を企てたるなり。

夜深くして滿天の露氣全く地に墜ち、陰曆十四夜の月は飽くまでも冴えて、崖樹金を節ひ溪流珠を碎く、千山の夜色悽愴劍の如し、時に淡海子月光を拾つて溪上を步し、泉聲に和して得意の謠曲を奏す、萬籟靜死して百怪皆驚く。

永夜の露營甚だ聊賴無きに苦しみ、烏龍が多少の土語を解するを利用し、通事をして新高山に關し彼れが知れる所を語らしむ、蓋し彼れは久

しく東埔社に在り、新高登山者の同社を經過し、若くは同社の蕃人を伴へる時、彼は必ず之に接し之に隨伴せり、故に彼は嘗て數年前内地人某の登山に當り、蕃人を督して之に從ひ、此地に露營して南方の山に登りたるとあり、其露營地の跡は即ち是にて、現に今諸君の坐し居らるゝ場所は、當年内地大人の露臥せられたる所なり、焚火の跡のありしは其當時の紀念なるべしなど語るに、益々興を催して尚ほ詳しく當時の狀況を問ひ、且つ其内地大人の姓名を記憶せずやと問ふに、彼れは且らく思考して確か『イトウ』と云へりと答ふ、伊藤と云へば内地に珍らしからぬ姓なれど、嘗て伊藤姓の人に登山者あるを聞かず、暫し不審に堪へざりしが全く齋藤の『サ』を遺して『イトウ』と記憶するものと思はれたり尚ほ能く登山の狀況等を聞くに彼れは齋藤理學士の登山に從ひたるものゝ如く、我等は今期せずして故理學士の露營地に宿し、端無くも當年の狀況を聞く、眞に緣の淺からざるを覺え、坐ろに無限の感懷に禁へざりき。

人將に眠らんとする時月方に傾きて斜に我等の露臥せる面上に其光りを放げ、我等の冷かなる夢は髣髴として故人の靈に逢ふの心地せり。

（未完）

白峰山脈の記

小島烏水

一　序說

二　東西南北より見たる白峰山脈

(1)東方の白峰山脈——(2)西方の白峰山脈——(3)南方の白峰山脈　附「甲斐が根」の話——(4)北方の白峰山脈

三　雪の白峰

四　白峰水成岩の美

(1)他の日本の古生層山脈——(2)飛驒山脈——(3)本曾山脈　附　甲斐駒山脈——(4)赤石山脈

五　白峰連嶺の美

(1)其峰(ピーク)(2)其山稜(リッジ)(3)其雪田(4)其絶壁(クリッフ)(5)其斜腹(スロープ)(6)其窪屋(スカー)(7)其峨壁(パットレス)

六　白峰三山の名稱

一　序說

「高山」にして「名山」を兼ねた山岳がある、富士、立山、白山の如きはそれである、「高山」ではないが、「名山」として知られてゐるのがある、比叡、伊吹、筑波等はそれである、「高山」でありながら「名山」と言はれぬものがある、この種の山岳は、日本アルプスの北部なる飛騨山脈、同じく南部なる赤石山系に最も多い、併しながら北アルプスの飛騨山脈は、近來跋渉する人が多くなつて、清い雪と、美くしい高山植物とで、名の高い白馬岳、恠奇なる大身の槍を拔いて、咄々天に迫つてゐる槍ヶ岳——地上から天上を威嚇してゐる唯一の大膽ものは、此槍ヶ岳である——や、常念岳、夢おだやかな高原人の耳許に、不意に噴烟と叫喚を浴びせかけて、膽を冷やさせた燒岳や、これらの高山は北アルプスに攢簇してゐる、同列の木曾御嶽のやうに、名山の列に入ることは、近いうちであらう。

獨り赤石山系の高山大岳に至つては、その山の名は勿論、山體の存在すらも、殆んど世に知られてゐない、彼等の多くは、山頂に神佛の祀られたものなく、山下に人間の歷史を附帶してゐない、彼等は天地創造と共に在る、雲の髮を振り亂し、雪の衣を被いだまゝで今日に至つたといふまでゞある、其山は大、しかして其歷史は簡である、其岩は高、しかして其生成は單である。

赤石山系は白峰山脈と、赤石山脈と二鏈の山脈から成り立つてゐる、山を愛する人は、赤石山の名を知つてはゐる、白峰、荒川岳、農鳥山等の名をも知つてはゐる、併し赤石山系に屬した高山は、これのみではない、『日本山岳誌』を讀んだ人でも、おそらく赤石山系中、西俣岳、荒川岳、千枚岳、河内岳、不動澤山等の名を記憶してゐる人は稀であらう、既にその名を記せず、いかでその山の駿河安倍郡、信濃下伊那郡に跨がり、全山秩父古生層より成り、安倍郡井川村田代より十里三十幾町で、山頂へ達せらる、標高一萬尺云々といふ記事まで、注意を惹いてゐるものがあらう。

我日本に高山峻岳は多いが、一萬尺を超え、又は迫つてゐる山の數は、知れたものである、その中で、赤石

山系中、かやうな高山が、愛山家の注意を一向に免かれてゐるのは、不思議と言はねばならぬ、實際赤石山系中の高山は、上記の山岳にのみ止まらない、自分の今回の旅行によつて、知つた限りでも、白峰の農鳥山に達するまでには、前峰が五つや六つはある、赤石連嶺の中には、間の岳(アヒタケ)がある、魚無河内岳(イナナシカウチタケ)がある、千枚澤岳(センマイサハタケ)(別名惡澤岳(ワルサハタケ))がある、西河内岳(ニシカウチタケ)がある、孰れも海拔一萬尺の峻峯で、殊に千枚澤岳の標高は、或は赤石山を超絶してはゐまいかと思ふ(同伴の獵師はさう明言した)。

赤石山系の蜿蜒してゐる區域は、どこであるか、白峰山脈の走る筋は、何の邊に始まつて、何の邊に終つてゐるか、自分は、これから先に、話さうと思ふ。

二　東西南北より見たる白峰山脈

東方の白峯山脈

中央東線の汽車が、東から山又山の洞門を潛つて、笹子峠の大トンネルを出ると、今まで暗い穴の中から、暗い穴の中へと呑吐されたものが、パッと明るい、平濶な、生々蒼々した平原を見る、煤烟と石炭糟が入り亂れた、臭い、烟つたい空氣が、急に草木が呼吸をして、人間の搏脈と、同じ流動をするかと思はれる、新鮮の空氣と交替する。

と同時に平原の背後に、數列の大屏風を見る、その中で、一番高く、又奥に兀起してゐる幾枚折かの大きいのは、我白峰山脈である、こゝに友人N君が、汽車の窓からスケッチした略圖を、載せる、向つて左の大畝ねりが農鳥山、それから悠つたりと波を打つて列ね土つたところが、間の岳、一番右の端へ鉢形に、峻急なスカイ、ラインを描いてゐるのは北岳――白峰山脈中の最高點、海拔三千百五十一米突(約一萬四百尺)――で、雪か石か白さに孰れと見紛ふほどな、地藏岳の肩を踏まへ、尖つた頭を我に向ける駒ヶ岳を、寄せつけずに、高く天球の底を撫でゝゐる、この靈山から眼を下へ落すと、白い絹と紫の葡萄が産まれて、四萬人の生靈が住む

山三峯白ゐた見りよ西以峠子笹

盆地、この盆地から視角を仰向けると、天柱すつくと立つて雲を裂き、風はヒイ／＼泣いて吹きなぐる白峯山脈、このときハッと思ふ呼吸は、ほんの瞬間で、汽車は甲府盆地の縁を傳ひ、鹽山方面へ俯向き加減に走つてしまふ、日下部、石和となると、自分の立脚地の沈むだけ、最も右の北岳も、地藏岳の後影に落ち込んでしまふ、荻生徂徠の峽中紀行に「農鳥、農牛、鳳凰、地藏、駒岳、次第に遞列す、其二農の上に、巖然たる者、之を白嶺と謂ふ、之を望めば稜々乎として畏るべし、窮髮の嶺、冬時毎に先づ雪ふる、其皎々乎として、草木之を翳虧する有る莫きを以てか」（原漢文）と描かれたのは、おそらく笹子峠附近から見られたのであらう、白峰三山の全容を、東方の平地から仰ぐのは、笹子附近が近くて、明白で、一番宜いやうに思はれる。

甲府市からでは、北岳は勿論見えないが、間の岳も、首だけしか、前山から出してゐない、農鳥山に至つては、三山の中で、高さこそ、やゝ低いが、悠揚な波線を、力強く、肉太の肩に引いて、前山を腰から下に押へつけ、膚に光輝あつて、毛穴一筋かくさず、搖がさずに衝つ立つてゐる、甲府平原に君臨して、時に微笑し、時に威嚇してゐるのは、富士山ではない、地藏、鳳凰、駒ヶ岳でもない、白峰である、更に正直に言へば、農鳥山である、さてこの山のことは、次章に改めて書く。

西方の白峯山脈

大山脈は、富士山や筑波山のやうに、四方を丸裸にして、人の近づくまゝに任せることを、厭ふところがある、白峰山脈は、東方の一部分を除いて、三方皆深山幽谷で、包まれてゐて、迂濶に白い齒を見せない山脈である、殊に深く鎖されてゐるのは、西の方面であらう。

三峰川(ミブカハ)の峽谷、南より北に向ひ、西に轉じて、流れて天龍川に注ぐところ、田代川が南に向つて、殆んど直線的に奔下して、大井川となるところ、之を圍むに木曾赤石の兩大山脈を以てして、一氣峽直に天空を截ち切つてゐる、山で銜けた袋の底が、西の方面である。

信州諏訪と伊那とを連絡する高遠方面には、駒岳、鋸岳、仙丈岳等の、大傑が据はつてゐる、それから木曾街道の方面から木曾山脈が、大城廓を構へてゐる、駒ヶ岳を踰えて伊那に下りても、赤石山脈が高い櫓を築き上げて、その前に日本無雙の天龍川が吼り狂つて奔放してゐる、天龍の本流ばかりではない、白峰山脈と木曾山脈、又は赤石山脈の間から、は溪水の幾千條が、軍人の禮服の胸筋のやうに、東西から注ぎに注いで、三峰川(ミブカハ)――天龍川、又は田代川(タシロカハ)――大井川となつてゐる。

大井川は南方に奔るから別として、天龍川の東岸には、精根盡き果てゝ、力が拔けたやうな、太古層の阜丘が、堆く第一防禦線を張つてゐる、その內側に頭拔けて、崇高な赤石主山脈があり、その又裏に、我が光輝ある古生層の白峰山脈が、彼等を匝ぐらして、自ら衞つてゐるのである、神秘の帷は、西方面に深く垂れたのである、西の方からは大概絕えず風が吹く、霧が起る、山々谷々が鳴動する、「大井川の八日荒れ」と稱して、一日風が吹くと、谷々の隈を狂つて八日は荒れ廻はると、獵師が悚毛を震ふのも、常にこの西方面からの警報である。

されば西の方面から白峰へ近づくのは、少しく南へ偏つて大井川の谷、地は仙丈岳と白峰との間の谷、この一針線を縫つて來る外は、殆んど絕望と言はねばならぬ。

南方の白峯山脈　附「甲斐が根」の話

白峯山脈は、富士川の西側と、大井川の東側に沿つて走り、赤石山脈は、大井川の西側と、天龍川の東側に沿ふて走つてゐる、東海道の三大川は、白峯赤石兩大山脈によつて分水されるのである、その地域は白峯山脈が、甲斐の巨摩（北、中、南）信濃の上伊那、駿河の安倍郡に亘り、赤石山脈が、信濃の伊那（上、下）駿河の安倍、遠江の諸郡に跨がつてゐる、兩山脈を合稱する赤石山系は、初め東北の方向から起つて、次第に西南に偏つて來てゐる、かく高山と深山とが、重なり合つて、南へ陵夷してゐるから、南方東海道の旅客が、白峰山脈又は赤石山脈中の主峰を仰ぐことは、先づむづかしからうと思ふ。併し東海道が。駿河遠江を貫くところで、古今集の歌人が白峰赤石ならずともその山脈中の大峰を仰いで「甲斐が根」吟を作つたことは、白峰を古から、最も有名にしたのである。

古今和歌集第二十の卷、東歌に

甲斐が根をさやにも見しがけゝれなく横ほはりふせるさやの中山

我は名にし負ふ峽の國から、萬山の圍みを出でゝ、こゝまで來たもので、振りかへると懷つかしい甲斐が根を、鮮やかに見たが、情の無い（「けゝれ」は「こゝろ」の方言、東國の人訛りてしかいふ）さやの中山めが、横ッちよに臥て、邪魔をするはよと鄕愁を起したのである、故山の目標なる「甲斐が根」とは、何の山であらうか。

同じく一首

甲斐が根をねこし山こし吹く風を人にもがもや言つてやらむ

「甲斐が根」から峯を越え、谷を吹き、吹き荒して我が冷たい懷に入る風よ、そなたを人にしたい、我を都に待つ人に、言傳てをたもるまいかと、山風に寄せた述懷である、讀人不知であるが、古今集時代より以前の作家であるから、今より一千百年前の人と見てよからう、二首荒らかにブッケて、調が高く、山中を出た客の心地になつて考へると、骨まで泌みるところがある、殊に前の歌がよい。

この「甲斐が根」に就いては、二種の解釋がある、即ち前の歌の「さやの中山、」は遠州で俗説に名高い佐夜の中山で、日阪から菊川に到るまでの間の一里餘、日阪から來ると上りが廿四町に、下りが十四町の阪路で、西方山に夾まれ、谷間が狹い、佐夜は狹谷であらう、こゝから見える高山は、富士山である、故に「甲斐が根」は甲斐を代表した山で、富士のことであるといふ解釋が、古來行はれてゐる、成るほど林春齋の癸未紀行にも佐夜中山で『枕甲斐根横遠州』と結んである、枕の一字は、富士山のやうな孤立した、圓い山で無いと、似合しくない、蕪村の句にも『甲斐が根や穗寥の上に鹽車』といふのがある、穗寥花咲く裾野を、鹽車が推し上げられるやうに挽かれて行く、その上にふわりと冠さるものは、鹽よりも白く、形も鹽尻に似るといふ、富士の高嶺で、配合の妙がある、これで見ると「甲斐が根」即ち富士らしい。

一方には、平重衡朝臣、囚はれて海道を下るとき、

手越を過きて行けば、北に遠ざかりて、雪白き山あり、問へば甲斐の白峰といふ、その時讀める

惜しからぬ命なれどもけふまではつれなき甲斐のしらねをも見つ

これは『平家物語』に見えてゐる、その後、貞應海道記にも『をしからぬ命なれどもけふあれば生きたる甲斐の白根をも見つ』と、前の歌から脫化した一首がある。

さてこの手越といふ地名は、阿佛尼の『十六夜日記』にも見えてゐるが、東海道の丸子驛から、凡そ二十町許、安倍川の西岸で、今は磊々たる磧の中から、河原蓬が生えやうといふ、濕めりッ氣も絕えたし、火も消えた寒村、長田村の大字になつてゐるが、往古（王朝の末から鎌倉時代）は、大軍も屯ろさせるし、鎌倉將軍家も泊つたほどの大驛で、手越の長者の娘などいふ、遊女の名が『平家物語』以下物の本にも殘つてゐるから、よほど殷賑な宿驛であつたと見える、こゝから遙に北に當る雪の白山は、地圖から見て、いかにも白峰であつたらうと思はれる、この雪の「白峰」と前の「甲斐が根」とを、同一體に解釋したもので、順德院の御製に『甲斐が根は山のすがたもうづもれて雪のなかばにかゝる白雲』とあるのも、雪山の半腹に搖曳する、白雲とは、何となく長い連嶺を配合にしたやうにも思はれる、徂徠の紀行にも白峰を「風人の口に藉甚」と稱し『甲斐國

誌』にも『此山、本州第一の高山にして、西方の鎮たり、國風に所詠の、甲斐が根是にして』といふてゐるから、白峰即甲斐が根說も、少くとも二百年以前のものである、自分がこのたび、白峰山下の蘆安村役場へ照會したうちの返書に『白峰……又甲斐が根山ともいふ』とあり、實際土人は、全く此山を甲斐が根と呼んでゐる、ウエストン氏の記載も、チャムバレイン氏の『日本案內記』にも、北岳を甲斐が根として記してゐる。

甲斐が根！自分は此名を好む、自分は思ふ、富士山は甲斐の山では無い、又駿河の山でも無い、一國一州で私する山では無い、日本の代表的名山である、富士を除いて峽の國に、山は多いが、山の中の山は、眞にこの山といふ意味に於て、白峰を甲斐が根と呼ぶことを愛する、友人N君も書信の端に『甲斐の存在は、甲斐が根ありて、初めて認められる心地仕候』と言つて寄こした、自分も全く同感である。

手越から佐夜の中山に到るまでの東海道筋で、果して白峰が見えるかどうか、自分は未だに斷言出來ない、併し白峰の今の別名なる「甲斐が根」が、初めて古今集に見えた緣故に因んで、南方面の白峰を、こゝに加へて置く。

北方の白峯山脈

甲府平原は、西の山で行き詰まる、北へ向いて、左は地質學者が白峰山脈中の一部に入れる地藏、鳳凰、駒ヶ岳の麓の信州街道に沿ひ、八ヶ岳と、その裾野を右に見て、諏訪に入る、諏訪盆地から駒ヶ岳が見えるが、これは火成岩なる花崗の大塊が、迸發した山で、全く秩父古生層から成り立つ白峰山脈とは、何だか他人の血脈を交へたやうな氣がする。

併しその駒ヶ岳の北、釜無山脈となると、又爭はれない古生層地の山脈をなしてゐる、この山脈は、八ヶ岳火山に並行して、西の方に延び、我が白峰山脈の最北の部分を作つてゐる、自然の大冊子を飜へして、白峯山脈の大尾まで眼を通して來ると、諏訪湖といふ勾玉形の印章が、押捺されて、この卷は閉ぢられる。

伊那山脈の成立に就いては、左に專門家の說を借りる。

今此盆地（諏訪）の中なる高島城址の頭に立ち、徐ろに四方を顧みて、本郡の地形を觀察するに、先づ

郡の西南より、西方に亘りて、一帶の山脈が横はつて居る、其山續きは甲斐にあるので、釜無川の源は此山脈の中より流れ出て居るから、吾人は此山脈を呼ぶに、釜無山脈を以てしてゐる、此釜無山脈といふのは、赤石山脈の一部をなせるもので、此赤石山脈なるものは、又本邦の南彎をなせる一大褶曲山脈の一部をなせるもので、しかも其中で、最も雄大なるものである、全體日本の列島なるものは、南北二彎の大褶曲より成り此二彎が本邦の中部、丁度此信濃甲斐の附近で、衝突して、對曲を造て居る、此南彎と稱するものは、遠く支那より連り來りて、九州に現れ、四國の中央以南を東西に走り、紀伊半島より三河に入り、漸次北方に折れて、天龍川の東方に延亘して居るものである、此一帶の大山脈は、其始め出來上りし頃は、無論長く連續して居たものであるが、其後地變のために、所々斷絶し、陷落して、今日の豐後海峽や、紀淡海峽、伊勢の海などを造たものである、其殘つて居る部分の中で、最も高峻で雄大であるのが、今述べた天龍川の東に横はつて居る、赤石山脈であつて、其海拔高距三千米突以上に達し、伊那郡と甲斐との境に於て、其極に達して居るのである、此山脈の北部、甲斐の西北隅に當つて、別に花崗岩より成れる駒ヶ岳が、三千米突の高さを以て聳て居る、其以北釜無川の上流、屈曲部が、甲斐信濃の境を造つて、即ちそれより、これなる釜無山脈が、諏訪領になつて居るのである。

（理學士山崎直方氏、『諏訪郡地質誌』より拔抄）

三　雪の白峯

アルプスに Alpin Glow（山の榮光）といふ詞がある、沈む日が山の陰へ落ちて、眼にも見えなくなり、谷の隅々隈々に幻の光が、夢のやうに彷徨ひ、又消えやうとするとき、二三分の間、雪の高嶺に、鮮やかな光が這つて、山の三角的天邊が火で洗ふやうに耀く、山は自然の心臟から滴れたかと思ふ純鮮血色で一杯に染まるまことに山の光榮は落日である、さればラスキンも『近世畫家論』第二卷に、渚へ寄する泡沫と、アルプス山頂の雪とは、海と山とを描いて、死活の岐れるところだといふやうな意味で書いてある、落日より億万の光線

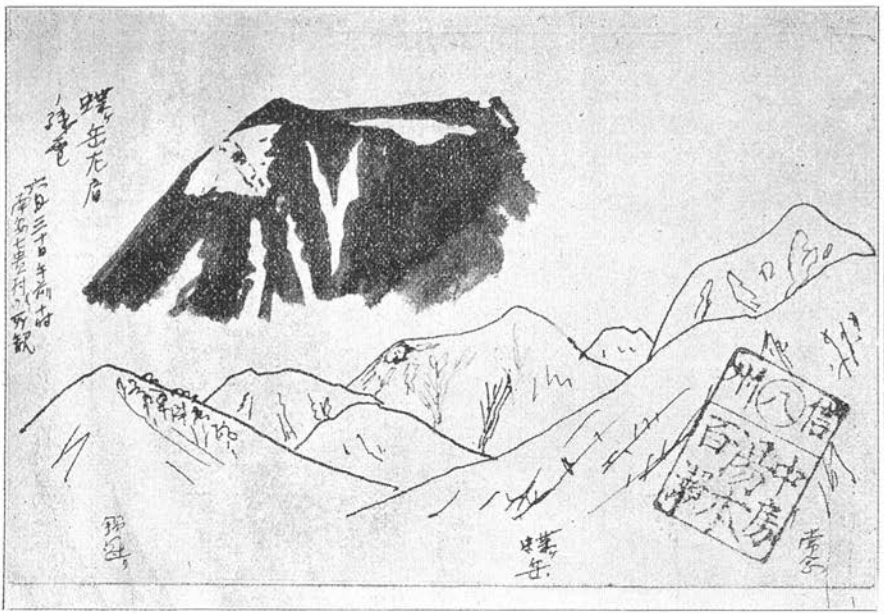
を吸收して、その一本々々に磨きをかけるのは、山の雪である、アルプスばかりでは無い、『甲斐國誌』にも、白峰の夕照は、八景の一なりとある、山の雪は烈しい壓迫のために、空氣泡を含むことが少ないから、下界の雪のやうに、純白ではない、しかも三分の白色を失つて、三分の氷藍色を加へ、透明の微小結晶を作つて、空氣の海に、澄徹に沈んでゐる、群山の中で、コバルト色の山が、空と一つに融ければとて、雪の一角は、判然と浮び上る、碧水の底から、一片の石英が光るやうに。

北岳　間の岳　農鳥山

（精進湖附近より見たる白峰三山）

蒼醒めて、純桔梗色に澄みかへる冬の富士を、武藏野平原から眺めた人は、甲府平原から白峰の三山が、天外に碧い空を拔いて、劃然と、白銀の玉座を高く据ゑたのを見て、その冴え〳〵と振り翳す白無垢衣の皺の、折れ方までが、わけもなく魂を織り込まうとするのに魅せられるであらう、水を打つたやうに肅んみりとした街道の樹も顫へ、田の面の水も、慓然として震へるのを見るであらう。

自分は甲斐精進湖に遊んで、その近傍の山から、冬の白峰を見たことを、鮮やかに記憶



蝶々岳左肩の殘雪　（志村烏嶺氏繪作繪ハガキ）

してゐる、空線の上に、夢みる巨人は、下界の水平線上、青春の國の炎の中に、夢をみる自分と、向き合つた、彼の夢には冷たけれども光があつた自分の夢は、彼に吸收されて、いつしか化石のやうな自分を融かしてしまつた、自分は無意識に古人の言つたことを繰り返へす、「北に遠ざかりて雪白き山あり」もうそれでよい、只白峰でよい。

雪によつて名を得たものに、飛驒山脈の大蓮華山、又白馬岳があるし、蝶が岳もある、併し虛空に匂ふ白蓮華も、翅粉谷の水脈より長く曳く白蝶も、天馬空を行かず、止まつて山の肌に刻印する白馬も、悉く收めて、白峰の二字に在る、「北に遠ざかりて（何等の神秘）雪白き山あり（何等の高潔）」即ち白峰である、何といふ透き通つた感じのする山であらう、この外に何の美しい名も無ければ、何の涼しい名も無い、何のやさしい名もなければ、何の威嚴ある名も無い。

自分は昨年鹽山の停車場で、白ペンキ塗の廣告板に、一の宮鄕銘酒「白嶺」と讀んで、これは「雪の白酒」ではあるまいか、嘸ぞ芳烈な味があるであらう、思つた、又他で製絲所の看板に、白

嶺社とあるのを見て、この絲の光に、天雪の輝きがあらう、衣に織つたらばと、考へたことがある。

富士の農男（北齋「富士百景」所載）

白峰は幾峰にも分れてゐる、が殊に北の三山、北岳、間の岳、農鳥山は、廓白峰全山脈を代表してゐる、その中でも農鳥山の名を忘れてはならぬ、一體甲府邊の人たちは、春の田植ゑや、又秋の麥蒔きなどを、農をするといつてゐる、この二期には、山の雪が消え殘つたり、又積もり初めるときで、綿の入つた厚い峰の白妙衣が、綻び出したり、又縫ひ初められる、そのとき鳥の形が、農鳥山の頂上より、直下、少しも左右に偏することなく、駒壁の上に印せられるので、この鳥形が見え初めると、農にかゝるから、農鳥山の名を獲れたともいふ、殊に晩春から初夏へかけての鳥形は、實に分明なものであるといふ、農鳥といふのは、鷄のことであるさうだが、事實殘雪は、鷄とは見えない、無風流な農夫は、自分に說明して、シャモの雄ン鳥の立つてゐるやうで、段々雪が融けると、尾が消え、腹が拂られ、耡のやうな形をして、消えて了ふと語つた、白い鳥は消えても、注意して見ると、岩壁嚴かめしい赭色の農鳥は、いつ、いかなる時でも、おそらく山が存在する限りは、見えてゐるといふ。

山の雪が動物の形態となつて消え殘ることは、何か因緣があるのかは知らぬが、殊に中央日本の山に多いやうである、自分の知つた限りでも、前記の蝶ヶ岳、白馬、大蓮華の外に、先づ富士山の農男（馬琴の『羈旅漫錄』卷の一、北齋の『富嶽百景』第三編に、その圖が出てゐる、北齋のを上に透き寫す、これで見ると、蝶や農鳥は、雪がその形をするのだが、農男は雪に輪を取られた、赭岩が、人物の格好に見えるらしい）は、名高いもので、殊に越後には最も多い、妙高山の「農

牛」は、甲斐鳳凰山と同じであるし、燒山の蝙蝠は、絲魚川方面からは、分明に見えるといふし、米山に鯉があらはれると、魚が漁れないといふ諺もある、頸城郡の黑姫山の寢牛、同しく白鳥山の鳥など、雪の國だけあつて、山と雪の關係はおもしろい。

農鳥山の鳥形の美はしいことを、自分に說いてくれたのは、前に引合に出した友人N君である、N君は早稻田文科の出身で、創作に俊秀の才を抱きながら、今は暫く峽中で書を講ずるの人となつてゐる、自分はN君の通信から、こゝに二通を拔く、殊に手紙に添えて、送られたN君のスケッチは、頗る緻密なもので、小さい雪の斑點まで、洩らされなかつたのであるといふ後に載せたのがそれである。

白峰より彼鳥を奪はゞ、白峰は形骸のみとならんとまで、此頃は飽かず、眺め居候、……白峰の靈を具體せるものは、誠に此靈鳥の形に御座候、前山も何もあつたものにあらず、東南富士と相對して、群山より超越せる彼巨人の額に、何ものゝ覆ふもの無く、露出せる鳥の姿、スカイラインよりは、僅に一尺も低かるべきか、農鳥の農の字が平野的にて、氣に入らず、又決して鷄とは見えず、首長きところよりも紛ふ方なき水鳥に候、埴輪の遺品に同じ形の鳥と見給ふべし、水搔き迄あり、高さこゝより見て、一間も候べきか、甲府附近を、最も觀望宜しき場處と存候。

誠に晩春より初夏へかけ（こゝの赤裸々となるは、夏期わづかの間に候）最も歷々と仰がるべく、夏にても、形は明確に、白雪山を埋むる今にても、こを戀人とせる小生の目には、同じ雪に蔽はれながらも、此鳥形のみは粗き山の膚（元より白色）の中に、滑らかに平に浮び出で居候が、認められ候。

白峰の壯觀は、空氣澄水の如き朝、明らかにて、正午よりは、淡き水蒸氣に遮られ候。但し日光の工合にて、却て鳥だけは、朝よりも明瞭に仰がれ候（側は陰に入るより）駒ヶ岳の孤峭は、槍ヶ岳を忍ばせ、木食仙の裸形の如く、雪の斑は、宛然肋骨と頷かれ候、八ヶ岳も、少し郊外に出づれば、頭を現はすべく、茅岳、金岳より、近き山々、皆冬枯の薄紫にて、淡き三色版そのまゝ、御坂山脈の方向は富士山なくんば見るに足らず、富士の雪は、夕陽に映るとき、最も美しく候、こゝは猶雪がふらず白峰颪は

大抵一日おき位に、午後より夕まで、又は夕より十二時頃迄、凄まじき音をたて、此夜坤軸を碎く大雪崩の、岩角より火花を迸發する深山の景色を忍び居候。（十二月十八日甲府より）

別紙白峰の拙畫は、今年初秋—四十年に於て、最も白峰を明瞭に仰ぎ得し日の午前寫生せしものを、忠實に寫し直せしものに御座候、赭色なるは雲なき頃とて、皺谷の赤膚を露出するもの、甚だ妙ならず候へ共、スカイラインと共に、山の皺は、いかにも興多きため、忠實に岐脈をも餘さゞりしつもりに候、

（作氏N）岳の間ひ及山麓るた見りよ府甲

中央に鳥形の赤裸なるを御覽あるべく、これが埴輪の鳥形に候なり、これには脚無くして、二股の尾あるを見給ふべきも、此圖は、雪無きときの切崖の露出にて、雪少しにても降れば、此尾は消えて、脚を生じ、例の埴輪の鳥の如き形となるに候、いつれにせよ、鷄ならずして、立派な水鳥、小生の大好きな

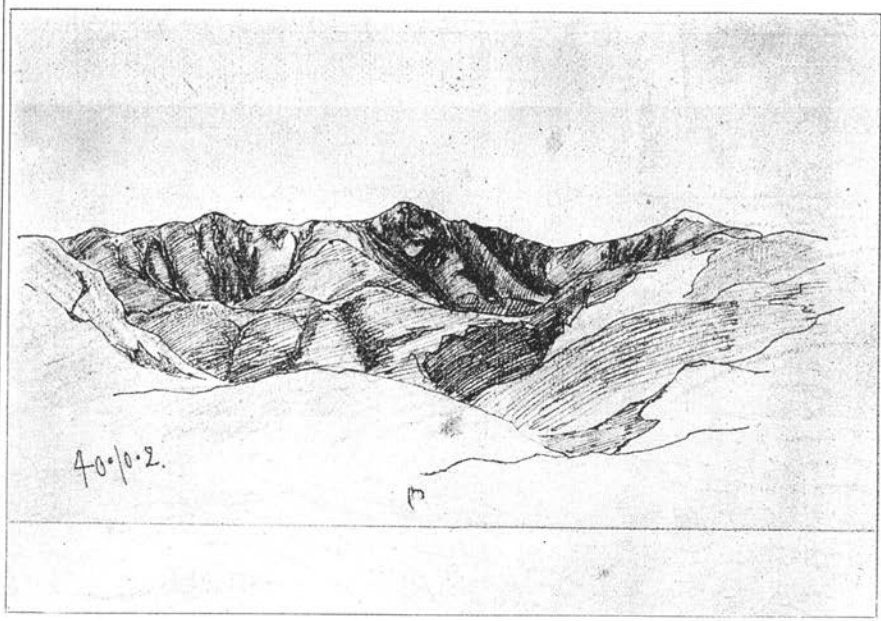
スワン（傳說に最も緣多き）の形に仰がれ候、圖中、鳥形の左なるA形の山は、もと白峰つゞきの山かと存ぜしに、曇日などに白峰見えすとも、此山明かなるにて、別峰なることを知り候、今日此山に、非常の降雪ありし樣に候、雪降りては、農鳥より右は眞白なれど、左は縱谷のみ白く仰がれ、膚は容易に、白くならぬ樣に候。

これより右、地藏鳳凰を越えて、槍ヶ岳の駒ヶ岳と、峭立しては、絕景の極、駒と並べて見て、白峰は益す立派さを增すに候、農牛、農老父、蝶、白馬、これらが信甲駿の空に聳えて、相應する姿、鏡花の『高野聖』に、妖女が馬腹をくゞる時の文句に『周圍の山々は矗々と嘴を揃へ、頭を擡げて、此月下の光景を、朧ろ〳〵と覗き込んだ』とやらありしを思ひ出で、何やら山に靈ありて、相語るが如く、身慄ひせられ申候、昨夜は明月凄じきばかりなりしに、九時頃より一人、後の天守臺に上り、夜霧の彼方に朧ろなる彼の白色魔を眺め、氣のまよひか、白鳥のあたりだけは、鮮やかなるやうの心地いたし候。（十二月二十九日）

その後もN君は、數葉のスケッチを送られた、N君が初めて物の本から讀んで知つた、農鳥の形を見つけ出して、校堂に說くに至つてから、初めは信ぜざりし鳥形が、誰の目にも立派に分るやうになり、七八歲の小童から、中學生さへ、往來を通るにも、西の大壁を仰向いて、足を緩めるやうになつた、初めはくさしてゐた大人も、南向きの白鳥の、優さしく、長く、延べた頸の、曲線（カーブ）の美しさに、恍惚とするやうになつたといふ。

併し農鳥山は、白峰の雪を代表したものでは無い、農鳥山は三山の中、最も南に寄つてゐるから、雪は最も少量である、この神秘（ミスチック）な白鳥が消えても、間の岳は白銀の條を入れてゐる、更に北岳は山の胸にかけて、一里以上もある、凝れる水を幾筋か白く引いてゐる、自分は北方の白馬岳で、氷河的雪の壯觀を說くのは、南の印度で、ジャングル的藪の美を說くのと同じく、當然と思つてゐる、併しながら偉なる哉、南方の雪！　黑潮奔れる太平洋の海風を受けて、しかもラスキンの所謂、アルプスの魔女が紡げる、千古の絲にも似た雪の白い山讃嘆せよ、讃嘆せよ、太平洋岸の表日本には、東に富士あり、西に我白峰あり。

○白峯山脈の記　小島



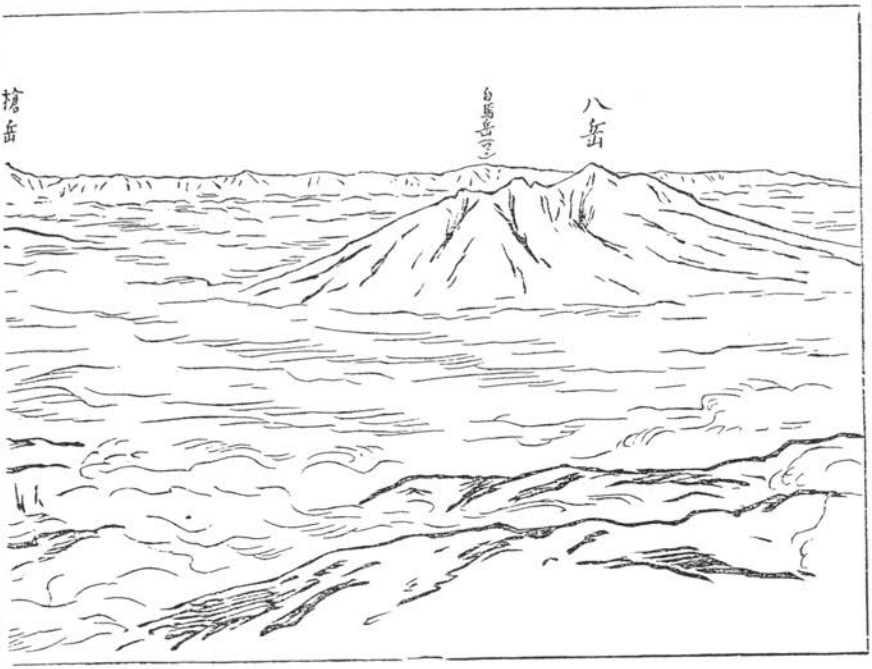
甲府より見たる農鳥山及び間の岳（N氏作）

秋も末になつた、白峰の山色を想つてゐると、N君から馬上の旅客を描いた端書が來た。

此月に入りては、甲斐が根颪一萬尺餘の絶巓より吹きなぐるに、目もあかれず、月の末あたりよりは、山男の鹿の片股、兎、猪の肉など、時々遙々とひさぎに參るべき由、さあらば、熊の皮の胴服などに、久しく無沙汰の芝居氣取など、致して見ばやと笑ひ居候、天長節より時雨つゞき、雨やゝ上りて、雲がなき日の雪ある山の眺め、都人の想像及ばざるところに候、地藏、鳳凰の淡き練絹纏ひし姿は、きもあらばあれ、白峰甲斐駒の諸峰は、更に山の膚を見ず、只峻谷の雪かすかなる、朧銀の色をなして、鉛色なる空より浮き出で巨大なる蛇の舌閃いて、空に躍れる如し、何等のミレージ、何等のミラクル、今朝はやゝ晴れ、白峰滿山の白雪、朝日に映じて瑪瑙に金を含む、群山默として黑く下に參す、富士も大なる白色魔の如く、鈍き空に懸れり、兄を招じて驚嘆の叫び、承はり度候、山を見ては　兄を想ふ、昨日今日の壯觀默つて居られず、かくは

冬近き山家や屋根の石の數

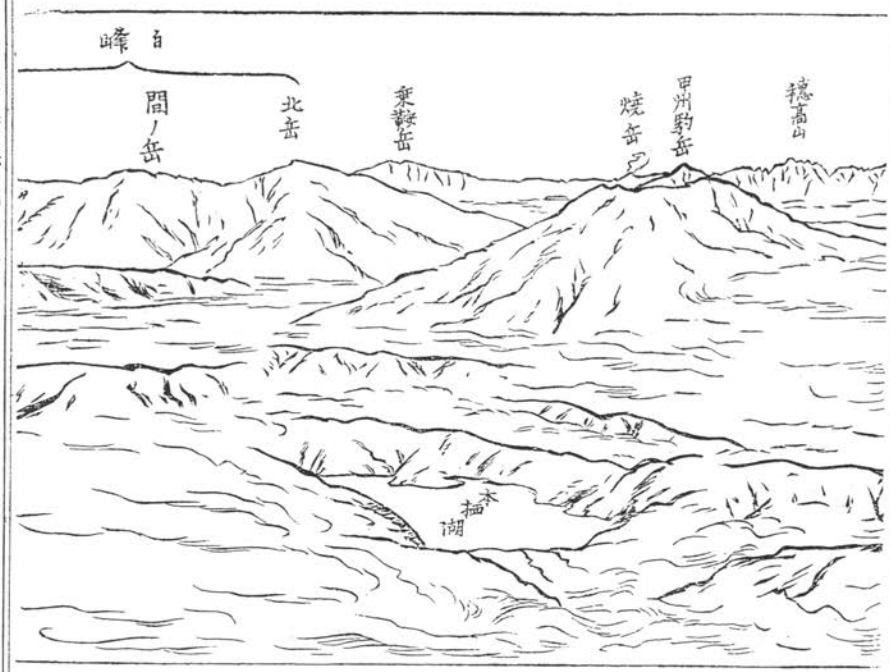
（十一月六日）



之を讀まされると、自分はもう堪まらなくなる、不圖目を擧げて『北に遠ざかりて雪白き山あり……』……、往きたいなあと、拳に力を入れて、机をトンと叩いた。

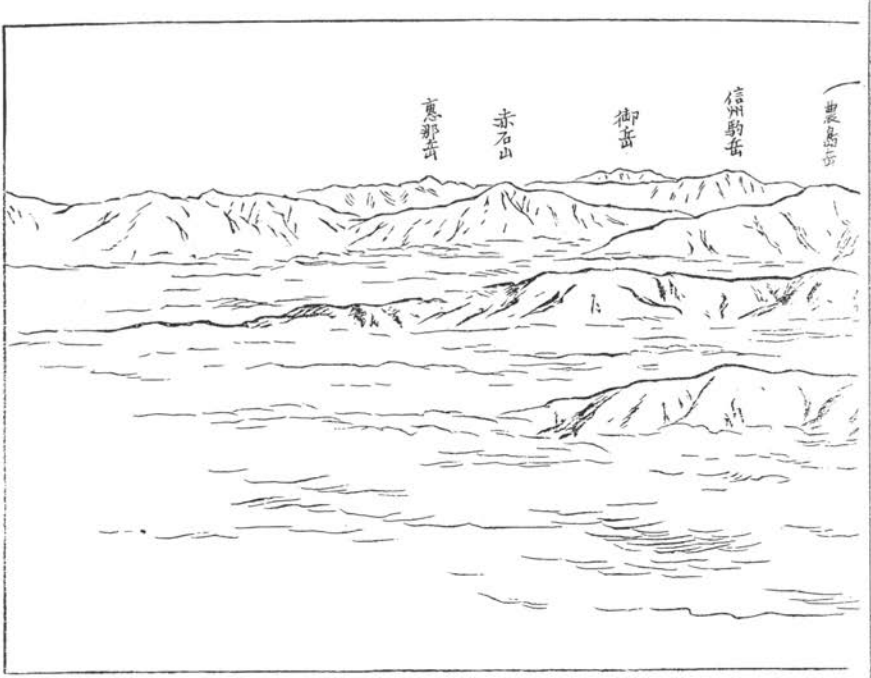
四　白峯水成岩の美

富士帶なるものを、中心點として、日本の山岳を東方西方の二つに分けて見ると、同じ山脈でも、東方は屈曲が多く、高低の差が甚だしいやうである、さうして屈曲の結果（標高が低く、樹木が頂まで茂つてゐる故もあらうが）峰傳ひに、山又山と踏めるのは少いやうである、西の方では、他は知らないが、日本中央大山系、即ち赤石山系、木曾山脈、及び飛彈山脈を通じて、所謂日本アルプスは、比較的に直線に走つてゐる、さうして垂直線に立つてゐる、その高低は、殊に飛彈山脈に於て、平均相を呈してゐて、一概に言へぬかも知れぬが、東方の諸山脈に比べて、日本大アルプスの特色は、その無雙の高度の外に、この儀容の整齊、殊に高峻なる垂直線の美にあると思ふ、我々が甲府平原や、伊那平、松本平から仰いで、大アルプ



スに襟を正すやうな氣になるのは、高低が略ぼ平均した連峰（火山のやうに不規則な亂杭齒を剝き出さずに）が、生え抜きに、根元から直立してゐる點である、惰容ある、緩斜線を、ダラ〳〵引き延ばしたものは、富士山すら、時に「低山性の高山」としか、思へないことがある。

一體日本人は、山といへば、陸地の平坦面に、著るしく凸起してゐるものと思つてゐる、その代表の形式は、富士山である、富士式の山形は、殆んど凡べての火山を包括してゐるが、その外平原に孤立する常陸の筑波山、近江の伊吹山、三上山等凡べて山岳そのものゝ、高低如何に係はらず、周囲から著るしく凸起してゐる點に於て、共通の形式を供へてゐる、故に山らしい山といへば、孤立凸起のものを指す如くに考へられる、神社寺院等によつて、名高いものを除いて、「名山」なるものは、多く此單純なる孤立的山岳が、幼稚なる美觀の標準（簡單にして纒まりのよきを悦び、複雜にして統合のむづかしきを悦ばぬ）から、選ばれてゐるやうである、その結果火山や火成岩のやうな噴出岩が多く選に入つたことは、自然の數と言つ



てよい。

併し實を言へば、單獨孤立の山――多く火山性の山は、先づそれ自身一個の美しさである、數十百個が複雜した、綜合の美ではない、火山にも脈らしいものがある、併し火山は脈を作つて蜿蜒するもので無いから、一個にしては點である、同方向に列なり、同時代に成れるものを、總稱するとしても、火山といふ線である、我白峰山脈や、赤石山脈を、山脈といふ意味に於て、火山脈の語は成り立たぬことは言ふまでも無い。

されば眞實の山岳を代表するに足るものは、大山脈にあること、疑を容れまいと思ふ、即ち日本で言へば、前言の大アルプスで、自分の茲に語らうとするのは、日本アルプスを三分して其一を保てる赤石山系、赤石山系を二分して、其一を保てる白峰山脈である。

白峰山脈は、他のアルプスと同じく、皺の山である、地質上同時代に堀起して赤石山脈と並んで兩々相讓らず、主峰の高度は、赤石山を凌いでゐる（既成地圖に據れば、白峰北岳三千百五十一米突――赤石山三千九十三米突）が、眷屬の山脈は

赤石より短いから、この兩山脈を、赤石山系と呼んでゐる、地質は、農商務省廿萬分一地質圖甲府圖幅に據ると、秩父古生層の色で、全く塗られてゐる、即ち地皮凝化の時に成立した水成岩石で、築かれ、山形の傾斜は峻急で、略ぼ同高度の山が、簇々と列つてゐる、前に述べた白峰山脈中の主峰北岳（三、一五一米突）間ノ岳（三、一二九米突）農鳥山（三、〇四二米突）の如き、孰れも僅々百米突以内の相違で、赤石山も、殆んど同高度である、既成地圖には、名も測高もないが、遠望の目測に據ると、前記の西河内岳、魚無河内岳、千枚澤岳、又大概同高度であるらしい、之を所謂富士帶火山なる、茅ヶ岳、金ヶ岳、八ヶ岳、淺間、戸隱、飯綱、黑姫、妙高の大火山線に比較すると、火山の圓錐形を作つて、其上は形體が缺損し、岩石磊落として、半腹以下は緩斜線を引いてゐるのと、一と目見て、山相の違ひが解るばかりでなく、火山の樣に、亂高下の變化の無いのに、先づ氣がつく。

かくの如く白峰山脈も、亦古生層山の特色を標式的に呈示してゐるが

(1)　他の日本の古生層山脈

のやうに、日本邦土の形態に隨つて、縱に弓形、適切に言へば、彎形に延びず、横に、直線的に、單刀を直入してゐる、飛驒山脈と共に、日本の邦土を南北に兩斷する大障壁と言はれたのも、故ありと思はれる。

それから、も一つ、他の日本の古生層山脈と、異なるところは、北上、阿武隈、秩父山脈、或は山城、大和、伊賀、近江邊の山脈のやうに、年代に銷磨されて、老朽の腰を卑くする低山性に、落魄せずに、昂々然として、日本一の大山脈、又高山脈の威嚴を保つてゐることである。

同じく日本大アルプスの一派

(2)　飛驒山脈

と比較するに、飛驒山地の基盤は、古生層地であるにもせよ、花崗岩、石英斑岩、玢岩などが、噴いて、容貌恠

奇の峰、穂高、槍、大天井、燕、奥常念などを尖立てゐる、その外に新火山岩の大噴出が内側に行はれて、御嶽、乘鞍、焼岳（硫黄岳）などが、崛起してゐる、赤石白峰兩山脈に至つては、純粹水成岩の皺から折り成された大山岳で、火の氣を交へてゐない、之を人格に例へて言へば、火食をしなくて、仙骨秋に聳ゆる潔白な行者である、この意味に於て、自分は白峰を、日本第一水成岩山の最も高き山、且つ最も美しき山と信ずる。

併しながら、飛驒山脈は、火山岩や、火成岩の噴出が多いだけに、山側は、堆積物で濶く、隨つて谷も廣い上河内のやうな、廣濶な狹流は、決して此方には無い、赤石山脈の方は、未だ解らぬが、白峰山脈の峽流は、至つて峽い、能呂川の「廣河原」（白峰の北岳と、地藏岳と、當面に相對する間の峽流、）大井川の支流、東俣の「廣河内」（農鳥山の支脈と、赤石山脈の間ノ岳と、額を向き合はすところ）などは、比較的白峰山脈の峽流としては、濶い方であるが、それでも、長さに於て上河内の何分の一にも足らぬ、幅もさうである、山が迫るから谷が狹い、谷が狹いところを水が浸蝕するから、崖が切つ截つやうにそゝり立つ、即ち眞正の「深山幽谷」を作つてゐる、その代りに、上河内から穂高山を仰ぐやうにして、白峰（但し東方面を仰ぐ）や赤石を仰かうと思ふと大方は、失望する、谷又谷、山又山の上に、否その背後に、頭角を見せるだけである、飛驒山脈中、之に比べ得るものは、高瀬川と黒部川の峽流位なものであらうが、白峰山脈には、猶多く無名の高瀬川と、黒部川がある。

飛驒山脈は、概して南方が高く、北方が低い、南方御嶽、乘鞍、穂高、槍、奥常念、大天井、燕の邊が、皆三千米突又は以上の最高點を作つてゐる、それから北へ偏つて、笠ヶ岳、鷲ヶ岳、火打岳、祖父ヶ岳、餓鬼岳大黒山から白馬立山の連峰になると、白馬を除いては、三千米突から、可なり下るやうだ、さうして立山から大斷崖を作して、日本海に盡きてゐる、併し概して言へば、平均三千米突前後の大屏風を（よし南が高く北に低くとも）立て續けてゐると言つてよい。

白峰山脈は、同胞の赤石山脈と共に、之に反して北が最も高く、南が最も低い、さうして南北標高の差は、飛驒山脈の平均同高度を有せるに比べて、甚だしく遞減して行く、先づ白峰山脈は北岳、間ノ岳、農鳥三山の

第一列が最高である、赤石山も、間の岳（白峰山脈の間の岳とは別の山）から始まつて、赤石山に到るまでの最北部が最高の第一列で、これを直角三角形の垂線とすれば、それから後は、二山脈とも、南行するに隨つて斜邊のやうに、段々と標高が落ちて來る、西側の天龍川の大傾斜をなして下るが如くに、この山脈高度の漸減が烈しくなる、即ち三千米突の高距が、赤石山脈では、池口、梶谷岳の如く二千二百米突となり、黑法師の二千百米突となり、黑倉山の千五百米突となり、青崩の千百米突、秋葉山の八百米突、光明山の四百米突に減じる、白峰山脈では、三山から低下して、二千五百米突、二千米突と低下し、阿倍嶺（一千四百米突）龍爪山（一千米突）德間岳（八百米突）椿峠（四百米米突）と減ずる、此點に於て、飛驒山脈は、M字に尖り、赤石山系は〉形に殺げてゐる。

峰の變化と、山勢の雄大と、氷雪の壯嚴と、火成岩の迸發とは、白峰、赤石は、飛驒山脈に及ばない、併し火成岩とも水成岩ともつかぬ結晶片岩や、片麻岩で、磊々たる大塊を作ること、恰度歐洲の中央アルプス大山脈に類似してゐる、點と、水成岩の純美――日本では唯一の――と、山稜の屈折の激しいのでは、白峰赤石兩山脈を推さぬわけにはゆかない。

(3) 木曾山脈　附甲斐駒山脈

と比較すると、赤石山系は東に、木曾山脈は西に、對峙して共に、南々西より北々東に走つてゐる、併し木曾山峰を構成する岩石は、花崗岩や片麻岩が多く、山の形態は、圓頂の坊主が、蒼い木立笠を冠つて、蹞くまつてゐるやうで、駒ヶ岳惠那の二峰を除いて、末流は、支離滅裂、殆んど山相を呈してゐない。

木曾山脈北部の高點と、比較してよいと思ふのは、白峰の最北を、能呂川で隔てられて、その北岸から崛起する、藥師、觀音、地藏、鳳凰、駒ヶ岳、鞍掛山等の一脈である、この一脈は、從來の地理書を讀むと、悉く白峰山脈の一部分として、一味の連判狀に加盟させてある、自分は地質學を專攻したことがないから、假にこれ等の大花崗岩塊を取り除けて、臺地の構造を調査するとしたら、それが正しいのかも知らぬが、山を觀るの

と、筍を掘るのとは違ふ、山相上から言へば、これは木曾山脈に對して、甲斐駒山脈の名を作つて欲しい、長短の相違はあるが、特立させる價値があると思ふ。

自分の想像するところでは、白峰が、北へ行くだけ高く凸起して、自分の所謂甲斐駒山と相對するところへ行き詰まると、平均三千百米突の白峰三山が、突兀として挺ん出るまでに、壯容を作るに至つたのは、この連嶺の褶曲波が、進行する途で、甲斐駒山脈といふ堅硬な大花崗岩の屏風立に遮られ、以北に進む途を梗がれてしまつたゝめ、こゝに堆朶して、大鷄冠塊を簇々尖立したのでは無からうか、さうして甲斐駒山脈と、白峰山脈との繼ぎ目が、硬軟兩岩の岐れるところで、シックリ漆合しないため、口を開けて、平行的に分裂することになり、其裂罅に、能呂川溪谷が流れたのではなからうか、今能呂川に沿うて、白峰、地蔵兩山麓を歩むと、一川を挾んで左岸は古生層岩石に充ち、(下流富士川となつて、この岩石が碎片になつてゐる)右岸は花崗岩の微赤褐色、雪白色、胡麻鹽色が洗ひ晒されて、骨のやうに、折れ重なつてゐるのを見るであらう、どう考へても、白峰山脈と、甲斐駒山脈との關係は、立山火山脈や、常念山脈の頂上に、花崗岩が、部分的に、迸發したのとは大分に違ふやうに思はれる、故に白峰山脈と、甲斐駒山脈とは、どうしても別になるものだと思ふ。

但し奥仙丈岳(奥仙丈岳の名稱に就きては、本號雜錄の拙文參照)は、純然たる白峰山脈の一峰である、北岳の餘波が、やゝ低くなつて、駱駝の背のやうな瘤が三つ並んでゐる三峰山に、山稜傳ひにつゞき、こゝで谷があつて、奥仙丈岳と切れてゐるが、奥仙丈岳は、その外貌から判斷するに、同じく古生層の高山で、白峰の最北を結んでゐる、否白峰山脈は地質學者に據れば、崑崙大山系の最北端であるといふことだから、奥仙丈岳は、その最尖北端の先登第一者として、總括りをつけてゐると言はなければならぬ、更に東北の釜無山脈、西北の伊那山脈の如きものは、赤石山系の一支派と見るに、格別差支は無いが、他の早川連嶺などゝ同じく、白峰山脈の本派からは、遠縁のものである。

今度は

との比較になる、白峰山脈は、短くて簡單である、概して東方に、主峰の大體を露出してゐる、甲府平原から、赤裸に仰がれるのも「甲斐が根」の總代名詞を得たのも、この位置の德である。

(4) 赤石山脈

赤石山脈に至つては、一層長くて、一層複雜で、更に一層深邃である、東方は最も高い白峰で、遮斷せられ西は天龍の大峽谷と、木曾山脈の二重圏に梗塞されてゐる、山足の川筋に、若干の街道があつても、青崩山脈、弓張山脈、山住山脈などいふ幾多の支派に離隔されで、この大山脈の屋根ともいふべき、赤石山の顏は、幾んど見ることが出來ない、先づ日本で、赤石山ほど、山岳の圏に包圍されて、其中心離核に占座する山は無い、此點に於て、赤石山脈は、白峰山脈より、更に多く深山幽谷的であらう。

五　白峯連嶺の美

白峯山脈の美は、高原に架する一段高の連山嶺から、幾つとなく峯が峻立してゐるところにある、三山は勿論のこと、その農鳥山に達するまでには、自測二千五百米突位から三千米突に達するかと思ふ峯が、隨分と多い、三山を第一線とすれば、第二線に當るところに、三千米突に垂むとする無名の峯が、又三つ四つ立つてゐる、これ等は孰れも風化作用に抵抗の出來る堅硬な岩石で、太古以來、石の生存競爭に、淘汰されて、今の世までも屹立して、今後何千年の後までも、このやうに屹立するのであらうと思ふと、無生の石ながら、敬意を表さずにはゐられぬ、併しかう屹立してゐる岩石は、附近の敗亡者より、取り殘された僅々の生存者である、故に大なる峯の影には、壞敗、衰頽といふやうな、哀しい俤がつき纏つてゐる、沈みゆく夕日に、冴え〳〵霽れる雪の日に、これらの悲壯なる峰を、天の一方に仰ぐと、自然といふ偉人は、絕大の犧牲者を供しながら、自分もやはり、零落せずには、居られぬものかと、泌み〳〵はかなくなる。

その峰の中にも、悠揚と富士より急に、槍ヶ岳より緩やかな斜線を引いて、盛り上つたのは北岳（主峰甲斐

が根）で、この山は、東面又は西方から見ると、鈍い尖を立てた、楕圓形の、最も壯大な形狀を呈してゐるが南の方農鳥山、間の岳方面から見ると、富士式の圓錐形（但し峰が三つに別れてゐるのが分明に見える）で、最も傾斜の峻急を示してゐる、おそらく北岳が、最も壯嚴に見えるのは、間ノ岳から大傾斜して、一旦凹みながら、又蜿蜒として刻ね上り、大斜線を北天の一角に揮ひ飛ばしたところにあらう、槍ヶ岳に似て、その更に絶大なるものである、間ノ岳を下り切つて、北岳の直下から見ると、下つたゞけに尖りが隱れて、肩以下の肥えた硬い肉が、曲線に漲つて、何となく優美の感がある（『山岳』第二年第一號、コロタイプ版北岳の絶巔參照）併し側へ行くと、磊々累々たる石の大塊が山盛りだから駭く、北の方面甲斐駒ヶ岳から見ると、北岳は傾斜が又一層峻急となり、その尖頂は、立烏帽子形に突いてゐる、要するに北岳は、南北に急に、東西に緩やかな格好に見える峰である。

併し此三山の凸起とても、もとは大意匠家なる自然が、白峰大連嶺の單一線、等高線を防ぐために、外貌を巧に彫刻して、脆い生地を刳り拔き、胴から頸を峰巒的に浮き上らせたまでゝ、山脈の骨髓は、同一岩石で連續してゐることは勿論である。

このやうな峰を載せた、連嶺が、褶曲山の特性で、腰から下が曲がり拗ねつて、互ひ違ひに足を踏み出す、足と足との間に、峽谷がある、中央大山系で、おそらく最も谷の多いのは、大井川と天龍川とで、この二大川に谷の多いのは、このやうに凹凸出入のある赤石、白峰から、瓜々の聲を擧げるからであらう。

その連嶺の弧線に富み、圓頂の山に富み、圓頂の山から、山を繫ぐ山稜の美に至つては、白峰山に登つたものでなくては解らぬ、自分たちが、言ひ合せたやうに、相顧みて『我今にして初めて水成岩山の大を知る』と絶叫したのは、第一に峰、第二にこの山稜の美である。

白峰大山脈は、まことに小さくて短い縱谷や、又は横谷（末はいづれも大井川――天龍川となる）のために切斷せられて、幾列の山脈を作つてゐる、山稜は畝ねつて、馬の脊を分けるやうに列なつてゐる、それが曲折上下するに隨つて、赤石白峰連山が、浮沈する、西又は西北に木曾山脈や、飛驒山脈や、それに包まれる平原

や、東又は東北に、甲府盆地を隔てゝ、關東山脈、富士帶の大火山線、上毛の平野、南は太平洋まで、歩々に變化ある大パノラマを展開する、このやうな長大變化は、富士式の孤立山岳では、立脚地が狹いから、望み得られぬ。

普通峰といふと、特別に挺ん出た大岩石のやうに考へる人がある、槍ヶ岳や鳳凰山の地藏佛、金峰山の五丈石などは、いかにもそれであるが、白峰式の連嶺となると、この區別が頗る曖昧で、山稜が蜿ねつて、峰となつて天に朝し、峰の先が尖つて、冠を天に刺してゐる、遠望する山のスカイラインは、畵冢の引く線のやうに、簡單なものであるが、近くへ行くと、ペン先でも疊に突つ徹したやうなギザ〳〵を作つて、薄ッペラで嶮しい、併し愈よ傍へ行くと、孰れも累々たる岩石の鋭角で、思つたほど鋭くはないが、此種の山稜は、富士の劒ヶ峰や、八ヶ岳の赤岳に小部分（無論岩石は違うが）の類似を見るだけで、それとて、白峰の狹長薄迫なる山稜には匹敵せぬ、先づ日本アルプスを通じて、自分の知れる限りでは、他に比を見ない、藥師、地藏、鳳凰を通ずる連嶺（リッヂ）、駒ヶ岳の花崗爛砂の連山は、概して幅が濶く、尖つたところがない、飛驒山脈の北方を、自分は知らぬが、燕、大天井、常念の連嶺（奥常念岳から蝶ヶ岳へ下だる一角丈をを除けば）も、大同小異である、金峰、奥千丈、國司の關東山脈とても、おそらく岩石の同性質から考へると、略ぼ差違はあるまいと考へられる、どうしても白峰三山のやうな、ヒイラギ的山稜は、先づ日本アルプスにも、少ない方であらう、これは單に横壓力を受けて、地層が褶曲をしたといふだけだが、唯一の原因とは考へられない、結晶片岩などの結晶質岩石に、風霜雨蝕の鑪をかけて、山稜を一層尖らせたのであらう。

その山稜は、かくの如く狹くて長い、東に面する外側は、概して凸形に、斜腹を作つてゐる、同行者の一人が、長さだけは、白馬のに劣らぬといつた大雪田が、二里位の蜿ねりを作つて、谷へ白龍の如く這つて、水を呑んでゐる、いや吐いてゐる、農鳥山の水鳥や、その附近の晒され物――岩の髑髏、氷の大肋骨――は、皆この雪が塗たくつた繪畵である。

これほどの雪が、氷河にならないのは、他の日本アルプスを通じての、大遺憾であるかも知らぬ、が自分は

さうとばかりも思はない、氷河の寫眞や、繪畫で見ると、登山家といふ連中が、羊群の如く「剛力」なる牧童に引かれて、從順に首を垂れて行く——屠所へ？と言ひたくなる、それから鶴嘴を擔いで、五七人、腰繩で珠數繋ぎになつて引かれて行く——監獄へ？と問ひたくなる、自由、獨立、奔放、原始の空氣が、縱橫無盡に充ち滿ちてゐる山岳の中で、何といふざまだと、言つてやりたくなる、氷河といふものが、このやうに人間を慘虐するなら、無くても宜い、或は無い方が宜いかも知れぬ、日本には、古から「高嶺の雪」といふ言葉があつて、皎潔、無垢、淸白な品位を代表してゐる、自分はこれで滿足する。

白峰三山の山稜の西方面は、山形からいふと、內側の凹部に當つてゐる、こゝに雪は更に多い、さうして山崩れや、崩雪（ランドスリップ・アヴァランチ）の作用から、藥研のやうにえぐられて、彎曲に落ちこんで、窪崖（スカア）類似の凹みを作つてゐる、それが間の岳の最高點、三角測量標の東面の直下、前山の西側との間にある。

高山植物は、この山稜を這ひ——偃松や、白花石楠花の下に——さては兀々とした絕壁から、その斜腹へと五彩七色の瀧を漲らせる、石の上、雪の下に、群簇して黃紫朱白の珠を點綴してゐる。農鳥前山の裏白金梅脈々たる黃波系を長いこと曳いてゐる、殊に間の岳から、北岳絕巓を踰え、北の方へと下つて行く間の、約二里間は滿山悉く長之助草で、是の踏むところもない、岩壁も、倒石も、悉くこの美いしい、白い花と、車葉とで埋まつてゐる、自分たちの知つてゐる限りの日本現存の、裏白金梅、及び長之助草の最大產地は、白峰連嶺であらう。

それから連嶺によく見られる、峨壁（パツテラス）は、北岳の絕頂なる、露宿地から直下、大樺谷の源流に下るところに、標式的に裸かになつて現はれてゐる、こゝに垂直的大斷崖があつて、その下に白樺の若木などが、押し潰され狼藉として算を亂してゐる、瞰下すと身の毛悚立つよやうな峨壁（パツテラス）——水蝕から削り成された硬岩の山岳が、軟い岩の臺地、又は谷地から、殆んど垂直的に削立してゐるところを Butteras といふ——は、日本南アルプスの容易に近づき難いことを、偶然にして、人界に向つて宣告してゐる。

只だ併し、白峰赤石兩山脈に、缺けてゐるのは、山麓の裾野や、山腹の高原である、木曾山脈、駒ヶ岳の中

原や、飛驒山脈御岳の田の原や、乘鞍山腹の千町原、山下の蕨原、常念岳下のクマンド原、立山の彌陀原の如き、高原は、見ることが出來ない、尤も赤石山麓には、大宮原六道原などいふ、片麻岩地の高原が、狹いながら、あるけれど白峰山には、全く無い。それは飛驒山脈は、前に述べた火成岩逆發の外に、前後にその發展を梗塞するほどの、大山脈が無いのに、白峰は、前に早川連嶺を帶び、後に赤石大山を負ひ、赤石山は又前に白峰にふさがられ後に天龍の峽谷を隔て、木曾山脈が至つて近くに迫つて、發展の餘地を奪はれてゐるからだ、我白峰山脈は、それだけ迫つてゐる、それだけ尖つてゐる、それだけ深くなつてゐるのである。

スラテツパ
北方より見たる白峯北岳東面の峭壁

この變化は、富士式の孤立火山を、片切つて上下したのでは見られぬ、たとひ赤石白峰兩山脈にしても、蓋安方面から、單に最高點なる北

岳を上下し、又信州大河原から赤石山を上下しただけでは、その垂直的偉大を知ることは出來るが――又それだけでも不足は無いが――大山脈としての連嶺を知つたとは、言はれぬ、飛驒木曾兩山脈にしても、亦さうであらう、無限の變化を覗ひ得られるのは、只夫れ連嶺の縱斷にあると言つては、惡いでせうか。

六　白峯三山の名稱

白峯三山の名稱は、白峯の名を知るほどの人は、誰れでも知つてゐやうが、地圖や地理書には、北岳、荒川岳、農鳥山、間の岳、南岳、別當代などいふ、名が列記されて、紛らはしいから、一言する、多くの人は、間の岳と荒川岳と、同一山と思ひ、南岳と農鳥山と、同一視してゐる、自分も實は登らぬ前までは、さう信じてゐたのであるが、今回同山脈縱斷旅行を遂げたところに據つて、判ずるに、三山の名は、北から順に言つて、北岳、間の岳、農鳥山と、確定してよいと思ふ、荒川岳と南岳とは、三山の列には入らない、入れたくば、荒川岳を北岳に、南岳を農鳥山に隷屬さするより外はない。

三山に關係ある圖籍を調べて左の表を作る。

（農商務省廿萬分一甲府圖幅）

（參謀本部廿萬分一甲府圖幅）

- 北岳
- 荒川岳△△△
- 農鳥山
- 南岳

（大日本地誌築三卷）

- 北岳
- 荒川岳△△△
- 農鳥山
- ナシ

（甲斐國志）

- 白峰（甲斐が根）
- 間の岳（一名中の岳△△△農鳥山）
- 別當代△△△
- ナシ

（大日本地名辭書）

- 北岳
- 中△岳（一名農鳥山）
- 南△岳（一名別當代）
- ナシ

（御料局技手川上參次甲斐國全圖）

- 北岳
- 荒川岳△△△
- 中△岳△（農鳥山）
- 南岳

備考――△印を附したるは誤謬と考へらるゝ名稱なり

これで見ると

（第一）が北岳、又は白峰、甲斐が根、これは悉く一致してゐる、白峰山は三山の總稱といふよりも、三山及び其附近三千米突内外の、高山に與へられた總括名詞であらう、が普通は、白峰三山と稱してゐる、中にも北岳のみを、白峰といひ、或は白峰の本岳といひ、甲斐が根ともいふ、何れにしても妨げない、只「表」には擧げなかつたが、蘆安村役場よりの返書に『白峰は（村の）西に當る故、西ノ岳といふ』とあつたのは、自分には初耳である。

（第二）が荒川岳説と間の岳、又中ノ岳説とある、農商務省參謀本部諸地圖、大日本地誌等、悉く荒川岳としてある、蘆安村役場の返書に『白峰と農鳥との間にある故、間の岳といふ、別に荒川岳といふものなし、然れども、荒川は農鳥山、西尾根より出づる水なるにより、農鳥の西の角を荒川岳といふ人あるやも測り難し』と『甲斐國志』に據るも荒川岳が、白峰三山に數ふるに足らぬことは、分明であらう、即ち

荒川岳　早川の西に在りて白峰の枝山なり、奈良田に屬す、御林あり、栂、樅、黑松、唐松、五葉松、唐檜、比曾樹等を產す。

自分は間の岳から、北岳を望んだときに、二山の間といふより、白峰の方から低い支山があつて、滿山悉く樹で埋まつてゐるのを見た、二千五百米突以下の山であらう、この木山を一里半も下ると、荒川の溪流に出る、後に能呂川に合するものだ、故に自分は、第二を間の岳と斷じ、荒川岳説を斥ける、もし加へて宜ければ、荒川岳は、白峰、間の岳間の、一支山として、附屬させるべきである。

（第三）は農鳥山説と、南岳、又別當代説がある、第三が農鳥山であることは、殘雪の農鳥山といふ極印があるので知れる『甲斐國誌』には『中岳を間の岳又は中の岳と稱す、此峰下に、五月に至りて、雪漸く融て、鳥の形をなす所あり、土人見て農候とす、故に農鳥山とも呼ぶ』とある、これで見ると、間の岳と農鳥山とは同じやうである、吉田東伍氏の、『大日本地名辭書』等、大分その説を襲つたのが多いが、併し農鳥を現はすところは、スケッチ圖にもある通り、分明に北から第三峯に當る、決して第二峰の間の岳ではない、かく立派な

證據品のあるものは、今爭ふ餘地を殘して居らぬ。

次に南岳は、蘆安村邊の人は、其名をすら知らぬ、地圖に記すところの南岳所在地は、農商務省參謀本部廿萬分一圖に據ると、農鳥山より遙に南の山脈で、都川村の管轄になつてゐる、蘆倉、奈良田、湯島等、三山の麓を離れて、三山の緣は全く切れてゐる、都川村や三里村より西に仰ぐ高山を、此邊で、笠ヶ岳といつてゐる地圖に所謂、南岳といふのは、位置からは、是れに相當してゐる、自分は南岳なる山岳の、存否を知らぬが、あつたにしても、農鳥山以南の山脈中に加へられた名であることは、疑ひない、別當代といふのは、農鳥山の南から出る、澤の名である。

結末として、自分の信ずる白峰三山の名稱表を作れば、左の如きものである。

文中所挿、本誌三頁續の本版スケッチは、本年八月廿八日、午前六時半、榎谷徹藏氏が、富士山劍ヶ峯絶頂にて、寫生せられたもの、飛驒山脈中の或部分に、補線としての、タッチを施されたるは、その邊の褶皺の、殊に鮮明なりしためにて、甲斐駒の少し下方の大塊の山に、鳳凰、地藏、藥師の名を記すべかりしなり、穗高岳と槍岳には、最多量の殘雪を認められたる由。

赤石、白峯兩大山脈、木曾山脈、飛騨山脈、即ち日本大アルプスの障壁を、一望に眺めたるものにして、本文第四章「白峰水成岩の美」を參照せられたし。

（結　完）

雜錄

劍ヶ峰の最初登山者

越中の劍ヶ峯は、昔しから登ることの出來ない山としてある、余は昨年密々に此山に攀躋を試みやうと、野心を起してゐたが、病氣で中止した、去年の越中の新聞に、陸地測量部の役員が登攀せられたことが載せてあつて、余等同人は山岳會で先鞭を着けぬのを、非常に遺憾に思つた、然るに一昨年(三十九年)十月刊行の『風俗畫報』第三百五十に號據ると、一昨年九月に佐伯某が探險してゐる、余等同人は、今年五月の山岳會第一大會紀念繪端書の解說に、千古神秘の劍ヶ岳など〻記して、東京の眞中で發行した雜誌の記事を、一年八ヶ月餘も知らないでゐたのは、誠に汗顏の次第である、左に全文を揭げて參考に供する。(式)

○越中劍山の探險　瓦山人

越中の劍山は立山と並立して、而も刀鋒の如き奇岩を以て組み立てたる如く、いかに苦心するとも之を登攀する方便なく、住古より其絕頂を極めたる者無き事は、世人の皆知る所なり、然るに上新川郡蘆峰寺村の佐伯某と稱するは、先年來鑛山事業に從事し專ら其鑛脈を探險の爲め、越中の諸山を跋涉する者なるが、今度(本年九月)同村志村德助(二十二)なる者を俱して、鑛物を探り遂に大日ヶ嶽の絕頂に登れり、(是も立山に等しき高山なり)此處より劍山を望み視るに、數層の巉岩累々として、其さかしさ言ん方なし、されど此山いかに嶮なりとも、又人間の登り得ざる事よもあるまじと、好奇心勃々として起り自ら禁ずる能はず、やがて志村にも其旨語りければ是も亦同じ志し在て、共々に其登山口を百方調査しけるに、此の山の裏毛手勝谷(ケカチダニ)の東北面に當る所、案

外にも傾斜の緩なる所を認めける故、兩人勇を皷して此所より登り行くほどに、傾斜やゝ緩なりと思ひしは比較的の言に過ずして、進む事暫時忽ちに塹岩掌を立てしに似たる所に出たり、尋常の岩石なりせば到底登攀するに由なしと雖ども、斷岸一面に高さ尺餘のハイ松の鬱茂せるを幸ひ、之を天然の梯子に代へ、辛うじて此難所を登り盡せば、約半里の傾斜地あり、之を過れば頂上に出づ、絶頂は平坦なる所なきにあらねど、奇岩大小となく此所彼處に屹立してあり、先づ携ふる所の握り飯を喫して、暫く疲勞を休めたるが、鑛物は銀鉛銅の類多く、鐵の如きは全山殆ど一帶をなせる位にて、實に劍岳は鑛物豐富の山なるを認めたり、里數は毛勝谷より絶頂まで約三里半、いかに健脚と雖ども辛うじて登山に一日、下山又一日を要す、登降とも猿猴の所爲を擬する事なれば、食糧は腰にするの外、一物をも携ふる事能はず、此劍山の麓に一大洞穴あり、我等は此洞穴に四日の宿泊を爲したるが、是より更に黑部谷に向はんと思ふなりと語り、さて此冒險談を聞し人々、兩氏の壯行を稱讃し、斯る深山を徒涉するに毒蛇惡獸の難ある事あらん、之を防ぐにいかなる武器を所持せらる乎と尋ねけるに、我等は固より武器を所持せず尤も斯る高山の深林などには、彼等の食すべき木の實もすべての動物も、甚だ稀なるゆゑ、其食すべき物なければ、又彼等も栖せず、偶々熊などを見る事あれども、予等が姿たを見れば、忽ち影を隱くして再度出づる事なし、依て斯る煩はしき物は所持するの要なきなりと答へしとぞ。

越中劍岳先登記

越中の劍岳は、古來全く人跡未到の劍山として信せられ、今や足跡殆んど遍かられんとする日本アルプスにも、この山ばかりは、何人も手を著け得ざるものとして、(事實然らざりしは前項を見るべし) 愛山家の間に功名の目標となれるが如き感ありしに、會員田部隆次氏は、『劍山登攀冒險談』なる、昨四十年七月末『富山日報』に出てたる切拔を郵送せられ、且つ『先日山岳會第一大會に列席して諸先輩の講演、殊に志村氏の日本アルプスの話など、承はり、頗る面白く感動仕候、その中に、劍山登り不可能の話有之候に就きて、思ひ出し候間、御參考迄に別紙切拔き送り候、……猶小生の其後、富山縣廳の社寺課長より聞く所に據れば

蘆鱗寺にては、劍山の道案内を知れる者有之候へ共秘傳として、漫に人に傳へず、極めて高價の案内料を貪りて、稀に道案内をなせしことあるのみなりしが、今回の事にて、全く其株を奪はれたる事になりしとか申候、此記事が動機となりて、今年より多くの登山者を出すを得ば、幸之に過ぎずと存候、と言へる書翰を附して編輯者まで送付せられたり、(其後辻本滿丸氏も、此記事の謄寫を、他より獲て送付せられたり)聞く所によれば『富山日報』のみならず、同縣下の新聞にも大概出でたる由にて、劍岳を劍山と、新聞屋の無法書きは、白峯を白根、八ヶ岳を八ヶ峯などゝいふ筆法と同じく、可笑しく感ぜらるれど、ともかくも登山史上特筆する價値あれば、左に全文を掲ぐ(K、K、)

生は去三十日我國三山の一なる立山に攀躋せんと、午前四時室堂を發し、白雲を蹈破して先づ淨土山、權現堂を難無く超え續いて別山の絶頂に到り、双眼鏡を取り富士、淺間、白山、其他飛信の諸山を望み、次て古來人跡の入らざるてふ劍山の絶巔を望むに不思議や三角測標の建設しあるを見る、思はず快哉を連呼したりむかし弘法大師が草鞋千足を費してさへ登り得ざりしと傳ふる彼の嶮峻に登りしは如何なる勇士か、冒險奇譚こそ聞かまほしけれなどゝ思ひつゝ下山せしに三十一日立山温泉場にて端なく參謀本部陸地測量官柴崎芳太郎君に遇ひ、當時の實況を聞くを得たり、左に其要を掲ぐ、柴崎測量官は山形縣北村山郡大石田町の出身にして三十一歳、沈着の人なり(午山生)

余は三十六年頃より三角點測量に從事して居ますが、去四月二十四日東京を發して當縣に來る事となりました、劍山に登らんと企てましたのは七月の二日で、先づ蘆鱗村に赴き人夫を雇はふと致しましたが、古來誰あつて登つたと云ふ事の無い危險山ですから、如何に高い給料を出して遣るからと云つても、生命あつての物種、給料には易へられぬと云つて應ずる者がありません併し是非とも同山に三角測點を設けざるべからざる必要があると云ふのは、今日既に立山には一等測量標を、大日山と大窓山とには二等測量標を建設してありますけれども、是だけでは十分な測量か出來ませんからで、技術上是非劍山に二等測量標の建設を必要とするのであります、前年來屢次登攀を試みましたが毎時登る事が出來ず失敗に歸しましたが、其爲めに今日では同地方の地圖は全く空虛になつて居る次第であります、是れは我々の職務として遺憾に堪えぬ次第で

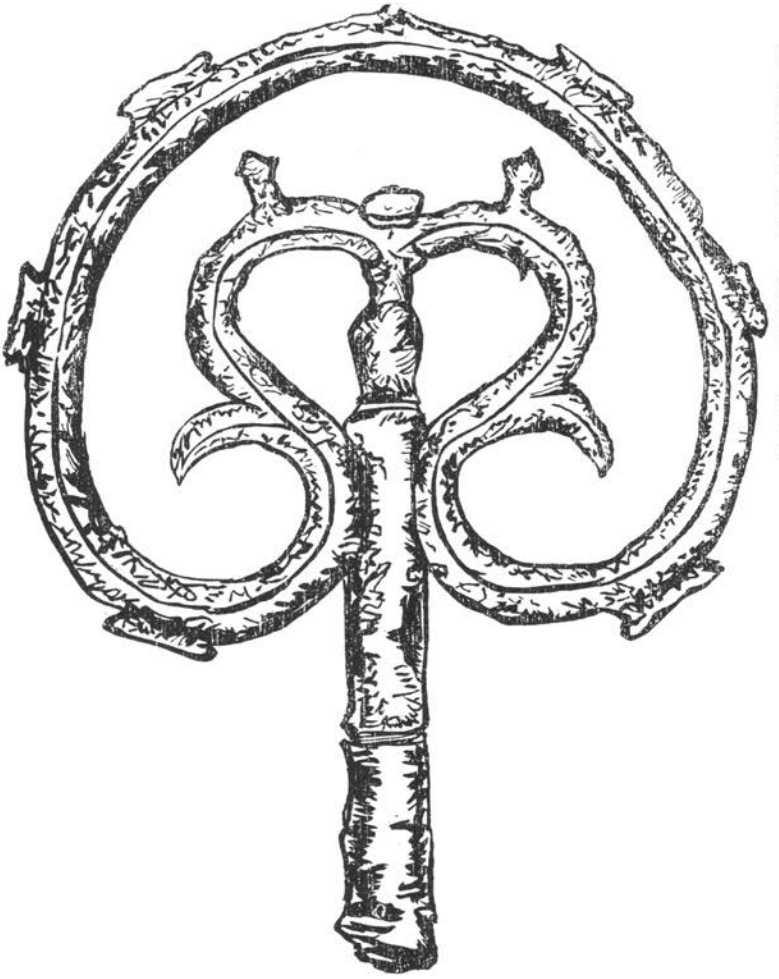
國家の爲め死を賭しても目的を達せねばならぬ譯であります、其處で七月十二日私は最も勇氣ある

測夫　靜岡縣榛原郡上川根村　生田　信　(二三)
人夫　上新川郡大山村　山口久右衛門　(三四)
人夫　同郡同村　宮本　金作　(三五)
人夫　同郡福澤村　南川吉次郎　(二四)
人夫　氏名不詳

の四名を引率して登山の途に就き、同日は室堂より別山を超え、別山の北麓で溪を距る一里半許りの劍澤を稱する處で幕營し、翌十三日午前四時同地を出發しましたが、此處は別山と劍山との中間地で黑部の上流へ落合ふ溪流が幅三突米許り、深さ六七尺もありました、尙其地方は落葉松等の周圍一丈許りもある巨樹、欝蒼として居ますが幸に雪があつたから渡たれたものゝ、雪が無かつたら危險地で迚も渡れ無いだらと思ひます、其より半里許り東南の谷間を下り、其れから登山しましたが、積雪の消え無い非常な急坂がありまして一里許りの雪道を約五時間も費やしました、其の雪を通過すると劍山の支脈で黑部川の方向に走れる母指との間の樣な處に出ました、尤も此積雪の上を徒涉するのに什麽しても滑りますから鐵製の爪あるカンジキヲを穿いて登るのであります。

劍山の頂下にて發見せし槍身　(原形二分の一縮寫)

此積雪地よりは草木を見ず、立山の權現堂より峰傳へに別山に赴く山路の如く一面に花崗片麻岩にてガサガサ岩の斷崖絕壁削るが如く一歩も進む能はず、引卒せる人夫四名の中氏名不詳とせし男は此處より進む能はずとて落伍しました殘りの一行は更に勇を皷し一層身輕にし双眼鏡、旗、綱の外は一切携帶せずに進むことゝなりましたが、其苦しい事は口にも述べられぬ程です、上の方に攀登るのに綱を頭上の巖にヒヨイと投げかげ、其れを足代に登りかけると上の巖が壞れて崩れかゝると云ふ仕末で、其危險も一通りや二通りでは



劍山の絶頂にて發見せし錫杖の頭　（實物大）

有りません、斯んな處が六十間もありましたが、其處を登りますと人間の稍休息するに足る塲所がありましたからホッと一休みしました、又其處よりは立山の權現堂からフジと云ふ處を經て別山に赴く程の嶮路で花崗片麻岩のガサ岩ばかりであります、斯くて漸く絶頂に達しましたのは、午前十一時頃でありました此絶頂は圓形のダラ〳〵坂で約四五坪もありましよう、むかし何時の時代か四尺五尺位の建物でもありましたものか、丁度其位の平地が三ヶ處ばかりありました、併し木材の破片などは一切見當りません、一行が此絶頂に於て非常に驚いたのは古來未だ曾て人間の入りし事の無いてふ此山の巓きに多年風雨に曝され何とも云へぬ古色を帶びた錫杖の頭と長さ八寸一分、幅六分、厚三分の鏃（前頁に掲げしもの之れなり）とを發見したことである、鏃は空氣の稀薄なる爲めか空氣の乾燥せる山頂にありしが爲めか左程深錆とも見え無いが、錫杖の頭（前頁に圖する物之れなり）は非常に奇麗な綠青色になつて居ります、此二品は一尺五寸ばかり隔ててありましたが、何時の時代、如何なる人が遣して去りしものか、槍の持主と錫杖の持主とは同一の人か若し違つて居るとすれば同時代に登りしものか、別時代に登りしものか、是等は頗る趣味ある問題で、若し更に進んで何故に是等の品物を遺留し去りしか、別に遺留し去つもたので無く、風雨の變に逢うて死んだものとすれば遺骸、少くも骨の一片位は無くてはならん筈だが、品物は其儘其處に身體は何處か溪間へでも吹飛されたものか、此秘密は恐くは誰れも解くものはあるまい、尙不審に堪えざるは其遺留品ばかりでは無い、此絶頂の西南大山の方面に當り二三間下の方に奥行六尺、幅四尺位で人の一二人は露宿し得る樣な岩窟がある、此窟の中で何年か焚火した事があるものと見え蘚苔に封ぜられた木炭の破片を發見した事である、此外には這松の枯れて石の樣になりたる物二三本と兎の糞二三塊ありしのみである（午山生云く兎糞は別山の頂きに於ても之を見たり）、此劍山の七合目までは常願寺川等にある樣な滑澤の大さな一枚岩であるが、上部は立山の噴火せし際降り積りしと思はるゝ岩石のみである、東南の早月川方面の方は赤褐色を帶べる岩で、北方は非常の絶壁で其支峰も孰れも劍を立てたるが如く到底攀づる事が出來ない、斯くて一行は當日午後一時に下山し始め同四時に前夜の宿營地に無事引上げ茲に第一回の登山を終つた、第二回には三角點測量標を建

設せんものをと

測夫　鳥取縣東白郡市勢村　木山　竹吉　(三六)

人夫　中新川郡大岩村　岩木鶴次郎　(二四)

其他を率ゐたが、二等三角點を設けんとせしも、名にし負ふ嶮山とて機械及材料を運上ぐる事能はず、止むを得ず四等三角點を建設する事とした、其れも四本を接合せて漸く六尺位になる柱一本を樹てたに過ぎ無い、此接合せる樣にしたのは無論運搬が困難であるからであります、立山の高さは不明でありますが、立山に居りて見れは劍山の方が高く見えますけれど劍山では立山の方が高く見えます、大抵同樣の高さかと思はる、立山の高さですか、其れは二千五百米突以上と云ふ事になつて居ます云々

午山生云ふ　此測量は危險地でも靈地でも處嫌はず跋渉せざるべからず、人夫は熟練を要するものなるに、迷信深き人夫共は兎角同業に從事するを嫌ひ少しく馴れし時分に他に轉じて歸らざるには困り居れりとなり、又測量官の一行は目下立山溫泉場を根據とし、多くは露營若しくは小屋住居をなし居れるに、偶溫泉に歸る事あるも至極不待遇にて、余の訪問せし時の如きは押入の如き處に押込められ居りしには見るも同情の感に堪えざりき、職務とは云ひ死を賭して深山嶮岳を跋渉しつゝある人々なれば、何とか相當の便宜を與ふる事にしては如何。

立山雜談

○自分が山好きと成つたのは、今から十年餘りの昔、志賀矧川先生の『日本風景論』に依つて登山趣味を覺醒せられたのが、重なる動機で、殊に立山火山脈の一節は最も好奇心を刺激したのである、勿論其以前から山は好きで、富士、箱根、伊豆及近畿の山へ登つたことはあつたが、山岳的智識は今の自分に比べても、甚だ幼稚であつたことを記憶する。

立山の名と「自然の大」と云ふ詞は、其時から深く腦裡に刻まれて忘るゝことは無かつたが、之を親む機會は容易に來らず、漸く十年後に至つて、此渴望を癒すことが出來たのである、夫故自分は、此登山に就て最も多くの愉快を覺えるので、山上の狀況が已に先輩に依つて書き盡されてあると信ずるに係らず、何か下らぬことでも書て見ねば氣の濟まぬのは全く斯樣な因緣からである。

○噂に聞たよりも良かつたのは我立山である、天下の

高山多しと雖とも、斯迄變化に富んだ工合の良い山が又と他にあるであろうか、先つ蘆鱗寺を出離れると、荒蕩たる常願寺川に沿ひ、藤橋を渡れば材木坂の急坂がある、ブナ平の深林がある、日本一の稱名瀑を眺めて開豁なる彌陀ヶ原にかゝる、立山は此廣原ありて已に大觀の基礎を得たりとは大平氏の至言、左大日岳、右鍬崎山、二千五百メートルに餘る大岳が、殘雪を帶て雲表に屹立せる光景は、已に愛山家の嬉し涙を禁じ得ぬものであろう、而も當面の主峯は、猶ほ深く前山の後に隱れて輕々しく形を現さぬ、一旦姥懷又は一ノ谷の谿谷を横ぎり、鏡石を經て大横手に至ると、光景は一變して、立山三峯は初めて其全景を開展し、巉岩稜々、殘雪皚々、幾度か雪田を横ぎつて室堂に着く、室堂四邊の光景は、高山的で實に痛快である、若し夫れ山上の大觀に至ては、世の定評あることゝて玆に記す迄も無い。

然し立山の景物は是丈に止まらぬ、まだ地獄谷もある、湯川の谷には名高い温泉もある、苅込の池もある温泉から川筋を蘆鱗寺に歸る路は幽邃なる谿谷である雨後山拔けのあつた時此處を通ると道路は消滅して命懸で嚙り渡る斷崖が少なからず新造され、眠氣醒しには餘程振つた御馳走に預ることも出來る。

○立山は比較的記文に豐富な方であろう、學術的專門のものを除いて、今自分の讀んだものを記して見ると左の如しである。

ウエストン氏　日本アルプス登山探險記（明治二十九年）
風雲兒氏　立山躋攀錄（旅之友、明治三十一年）
久保天隨氏　立山登躋錄（七寸鞋、同三十三年）
大町桂月氏　立山の三夜（一蓑一笠、同三十四年）
寺崎留吉氏　越中立山（少年世界　同三十五年）
大平晟氏　越中立山の偉觀（山岳、同四十年）
志村烏谿氏　越中立山（やま、同年）

單行書として立山のことを記したものは「立山權現」（淺地倫氏著、明治四十年第三版）及「立山案内」（大井冷光氏編、明治四十一年六月發行）の二つがある。

○立山の山開きは七月二十一日で、神官は二十日に登山して室堂に泊り、翌日頂上に登つて積石を取除け、雄山神社を開扉して、慢幕を張り、酒菓を供へ、次の祝詞を讀みて山開の式を終る。

祝詞

白雲乃千重乎於志和計天曾々理神代奈賀良乃雪毛消奈

手甚母畏伎此乃立山乎宇志波伎座須皇神等乃御前爾社掌某拜美恐美白左久往昔餘里仕奉來志例乃隨爾今月乃今日生日乃足日止齋定手山登里乃祭仕奉手止志手立奉留幣帛乎安幣帛乃足幣帛刀平介久所聞食天天皇乃大御代乎足御代乃茂御代爾幸倍給比生座皇子等乎母永平久守里給比萬民我取作禮留五穀乎八束穗爾令實給比白須辭別天白左久富山縣乃知事鄉乎平久同縣爾仕奉人乃諸彌進爾進米給比天諸國諸方余里參詣人々乃諸過犯罪事乃在手乎婆神直日大直日爾見直志聞直志座手昆虫乃災老久高津神乃崇老久藤橋乃畏伎渡里恙老久磐木根乎良履別手登良布足乃躓老久聳由留坂路衝杖乃手乃躓老久軀乎健然爾煩必伎事无久峯上乃宮乎始米朝日乃夕日、直刺日向山或波別山乎毛令拜竟給手神稜威乎毛多斯爾令知給比手其國々處々爾歸武日萬天波夜乃守日乃守爾守里給比矜給比世乃富世乃饒乎毛不足事无久令榮給倍刀拜美恐美毛白須

○神官は大抵十日目交代で、室堂に出張し、盛り時には二人となる、而して毎朝登拜者の先導をして、淨土山と雄山に登る、之は二人が隔日にやるのである、然し出張が長びくと、隨分體が弱りますとは、神官氏の述懷であつた、雄山神社に至つた時には、神官は略緣起と祝詞を讀んで聞かす、祝詞は前に記した山開きのものに大差ないが、略緣起は次のものである。

略緣起

夫立山延喜年中官社所祭ノ古社ナルコトハ、世人ノ能ク知ル處ナリ、抑立山不二白山ノ三山ハ、日本高山ノ靈地ニシテ、神威海外ニ卓立シ、神德普ク、人民陰害ニ落チ入ラントスルニ當リ、一度祈誓スレバ大明ノ陽地ニ導キ、人苦狂惡ヲ其ノ身ニ近ヅケズ、男子ハ剛膽力量ヲ增シテ、其ノ男子ノ氣性ヲ全フセシメ、一世無害長命ヲ守リ給フ、廣大無量ノ神德ナリ、是ヲ以テ一度ビ立山ノ峯ニ參詣ノ人々、各自神前ニ玉串ヲ捧ゲ其心ヲ神慮ニ通シ、永ク思賴ヲ仰ゲハ、死後之ヲ導キテ安樂ノ幽地ニ至ラシムベシトハ、開山有賴公ニ向ッテ、神詫アリシ所ナリ。

○七月二十四日には奉幣使と云つて、富山縣廳から知事又は其代理が登山し、二十五日頂上に登つて、社前に玉串を捧げる、此日麓の蘆辭寺は祭禮であるそうな。

○今年山開きに登山された神官は、佐伯英貞と云ふ人で、氏の厚意に依つて種々の便宜を得た、前年大町桂月氏が登して「立山の三夜」を書かれた時の、所謂祠

官は實に同氏であつたそうで、其後桂月氏から贈つて來た太陽（右紀行文所載）を人に示すのを樂みとして居らるゝ、此紀行は嘗て讀んだことがあつたが、英貞氏より態々示されたので、又た一讀して見た、名山に登つて名文を讀むのは愉快である、殊に此文には出鱈目方角が全然書いて無いのが最も有り難い、暗夜姥懷で困難された狀況は巧に書かれてある、之が人盛りの立山であつたからよかつたものゝ、若し日本アルプスの中央無人の境であつたら、迚も無事に濟まなかつたろうにと覺えず汗を握つたのは、矢張り氏の名文に魅せられた爲めであろう。

○頂上の雄山神社は、通常南面と記されてあるが、實は少しく西偏し正南では無い。

○雄山の頂上神社の側には、丸い河石、又は海石が澤山ある、之は立山が加賀の白山よりも馬の沓一束だけ低いと云ふ口碑に基き登拜者が一寸でも本山を高めたい眞心から、態々持參し來つたものだそうな、然し近來の測量に依ると、本山の方が白山より二百メートル餘も高いから、全くこんな必要はない、巉岩重疊飽迄雄拔な本山の頂で、丸い石を見るのは、目變りであるから、宜く總てを黑部の谿谷に向つて、一掃して然るべきものと思ふ。

○一の越以上で、不淨を戒め、本社參拜の時草鞋を脱ぐのは贊成だが、中には此處で古草鞋を取り換る人もあると見へて、去年の遺物らしいのが散亂して居るのは甚だ見苦しい、何卒一切室堂で取換ることにして、本山及淨土、別山の三つは、斯樣な人間的穢物から、淸淨に保ちたいものである、木曾の御岳に登ると、途中に草鞋を穿き換へさせる場所があつて、何百足とも知れぬ腐れ草鞋が壘々として不快の臭氣を放ち、嘔吐を催さしめる、我立山にこんな處のないのはまだしもであるが、假令へ僅かな事でも、何んとか注意を願ひ度ひのである。

○雄山に最初登つた時には、北の方がよく見へた、翌日又た登つた時には、南の方がよく晴れて、富士も鮮かに見へた。劒もいゝが槍も矢張り良い、烏水兄への御世辭でも何でもなく正銘此の如しである、其外氣に入つたのは笠と藥師である、御岳、白山などはトウトウ見へなかつたが、二回の登山で眺望は、先づ八分の成功を喜で居る。

○七月下旬にはまだ雪が多い、室堂の四周は白皚々と云ふ冬景色で、雄山に登るにも一の越までは大部分雪

田を履むのである。本誌第二年第二號に載せられた志村氏の雄山全景（八月中旬撮影）に比べても、餘程雪の多いことが分る。

○同じ誌上に志村氏が「越中立山より祖父岳を望む」として掲げられた山を、自分が富士の折立から方向を指して見たのに、凡そ東南に當つて居つた（志村氏は多分神社下より撮影されたるものと考る）、今農商務省二十萬一圖に依つて見ると、丁度針木嶺の北、後立山の南に來るべき山で、同山の祖父岳には適合せぬ、勿論此邊の山は名稱も甚だ判り難いから、何山だか自分には確言出來ぬ、只だ一寸所見を紹介して置く、序に言て置くが、此山は此連山中で餘り高い方でない。

○雷鳥には度々出會つた、雄山に二度目登つた時、神社の下で雛を連れて遊歩して居る雌を見かけた、中語は只一擊と、杖を取つて岩角を飛び下つたが、自分は此平和を殘害するやうに忍びなくて、極力止めたのである、年のせいか馬鹿に氣が弱くなつた。

○室堂の柱は尺角と云はれて居るが、自分の實測した處では、正九寸角である、尤も之は總ての柱を一々測つたのではなく、手近の十二三本に就て得た結果であることを玆に附記する。

山開き早々の室堂は、ガラ空きで普通の登山者は、まだ始んどない、山路も一年振りの休止で、實に清淨なものである、人込み最中登山して室堂で苦めらるゝのは愚策である。

○農商務省二十萬分一圖富山圖幅は餘程正確であるが、夫でも淨土山と龍王岳の位置は、全く轉倒して居る、此點に於て參謀本部二十萬分一圖の方が却て正しい龍王岳は淨土山の略東南にある岩壁の雄峯で、淨土山と山背は續いて一山塊を成して居る、天狗樣が住つて御座つて登るものは無く、强て登ると屹度誤が出來るとは、後に聞た話だ、暇さへあつたら、其天狗樣に御目にかゝりに行くのであつたが、餘裕が無かつたのは殘念である。

○黑部の小屋から一の越にかゝつて登つて來る人が極く稀にはあるそうだ、して見ると針木方面から溫泉に出ずに、直接登山することは必ずしも不可能でないらしい、參謀本部の圖に、針木路が雄山と淨土山との間に通じて居るのも、右のやうなことが原因であるまいか。伊折の方面から早月川に沿ふて、大日岳と別山の間を越へ室堂に來るものもあるそうだ。

今の登路の外に、稱名川を溯つて彌陀ヶ原に出る路を

造つたらどうだろうと云ふ話もある、瀑見物を兼ねて中々面白かろう。

○室堂まで電話を通ずるとか、途中に街燈を樹るとか云ふやうなことを一寸耳にした、自分は登山の道でないから、相當の設備は望む處であるが、適度にやつて欲しい急用があつたり歩かれそうもない人は成る可く始めから山登りなどせぬが量も怜悧である、歐洲アルプスは設備が完全であるとか、或は俗了されたとか云はるゝが、夫でも雪線以上に人工を加へぬことになつてスウイスの崇嶺は未來永劫「自由の表章」として自然のまゝに保存せらるゝそうである、日本人が西洋の眞似だか何だか知らぬが、高い山へ電車を引き上るとか、ホテルを建るとか騒ぐのは下らぬ話で、そんなことに骨を折るより、外の事に盡力した方が餘程國益に成るだらう。

○蘆嶺寺では、豫て大平氏の紀行で承知して居つた佐伯忠胤氏の御厄介となつた、義道君も居られた、氏は極めて磊落快活な人、自分は少なからぬ愉快と便宜とを得たのである、茲に此機會を利用して厚く御禮を申し上る。

（辻本）

日本北アルプス中央部横斷の旅行談（一）

小島烏水氏の云はるゝ如く、日本アルプスなる名稱の下に飛驒山系の他に赤石山系、木曾山系の二ッのものも含まるゝものとして、自分は日本アルプスを便宜上三ッの部分に分ちたいと思ふ、即ち赤石山系を日本南アルプス、木曾山系を日本中央アルプス、飛驒山系を日本北アルプスと云ふ樣に分ッのである、併しこゝに云ふところの南とか、北とか、又は中央とか云ふのは何も緯度などを詳しく測定して何度何分から何度何分までを中央としそれより南のを南、北のを北と名づけたと云ふわけでも何でもなく、たゞ便宜上此等の三ッの山系に分ッて其の比較的南部にある赤石山系を日本南アルプスと呼び、比較的北部にある飛驒山系を日本北アルプスと稱し、其の間に位する木曾山系を日本中央アルプスと云つたまでゞあるから從て日本北アルプスと稱するものゝ中の南部のものは或は中央アルプスと呼ぶものゝ北部のものよりも却て緯度等に於ては南にあるものもあらうし又日本南アルプスと云ふものゝ

常　念　山　(辻村伊助氏撮影)

中で最北に位する山岳などは中央と稱するものゝ南部に位する山岳よりも北にあるものもあると云ふ樣になるであらうが、此の分け方は單に大體の觀念によつて南、北、及び中央と定めたものと御承知ありたい、扨て今こゝに表題に掲げたところの日本北アルプスと云ふのは、即ち前に述べた意味で名けたのであッて、御嶽から始まつて北方親不知に至つて其の脚を日本海に投ずる、信濃、飛驒及び信濃越中の境上を走るところの山岳と、これに越中立山の連山、信州に於ける常念岳、二俣の天上(宛字)等の連山、及び此等の附近の山岳を加へたものゝ總稱で、今述べやうと云ふのは此の日本北アルプスの中央横斷旅行談即ち槍ヶ岳附近の登山旅行に關した出來事や感想であると云ふことを豫めおことはり申して置く次第である。

元來自分は身體が餘り丈夫な方ではないので、從て脚も强い方ではないから山天狗なゞ自負して峰から峰、谷から谷をどん〳〵

走りまはつて行くことなどは思ひもよらないのである、それであるから自分がさん〴〵に弱ッてしまつて僅に身一つをもてあましてぶらりぶらりと這ふ樣にして歩いたのも棚に上げて、猥に日本アルプス横斷又は縱走に成功の二字を掲げ、大言壯語をことゝして敢て世に誇らうなどゝ云ふ氣は少しもないが、ともかくもこの槍ヶ岳や常念岳の邊は近來中々有名になつたものだから一度は是非行つて見たいと思ッて居つたところ丁度機を得たので本年の七月下旬に出かけることゝなつたのである、東京を出發したのは七月の二十日、其の日の夕方松本で汽車を下り、荷物を人力車に乘せて自分等は徒歩、二荒山の金剛杖を音高につきならして車の後に從つて淺間温泉に向ふ、其の有樣は餘程異樣であつたのであらう、行きかふ人は振り返つて見る、自分等も亦振りかつて見たが此日は雲が一面に蔽つて居るので常念岳のつゞきは少しも見えない、淺間橋の附近まで來ると雨がポッ〳〵降つて來た晴天の日に此の淺間橋の附近に來て見ると鍋冠、蝶ヶ岳を先陣として常念、横尾鳥(宛字)二俣の天上(宛字)が中軍に控へて後軍は遙かに燕岳にまで連つて、有明山は遊軍となつて其の側を守り隊伍堂々として峙つて居るのが見られる。併し槍ヶ岳は此邊から見えない、穗高山の一部とも思はれるものが常念と蝶との間の低くなつたところから一寸顔を出すばかりである。

翌二十一日、汽車に乘り遲れさうなので人力車に乘つてあわてゝ松本停車場にかけつけると汽車はすでに來て居つて今發せんとするばかり、急いで乘り込んで明科に向ふ、此の日も雲で何も見えぬ、たゞ有明山が雲の間からボウッとして大きさうに見えるばかりである、明科停車場に下車したのは午前の九時頃、明科館へ托して馬を雇ひ、荷物をつけて宮城に向つて出發した、犀川の長橋を渡ると有明山は正面に聳え、其の頂の邊は白雲が閉ぢたり開いたりするに從つて隱顯する中の鄕で左折して十日市を經、十二時に高瀨橋を渡る雲が深く鎖して常念はどの邊だか少しも見えない、宮城には有明山の神社がある、可なり立派ではあるが近年新に建てたものである、人家は僅かに數戸でこゝに中房温泉浴客荷物運搬所があつて浴客の荷物を一貫目十錢程の割合で引受ける、明科から宮城まで三里と云ふものは馬も通ふし平な道であるが、宮城から先き中房までの三里は中房川に沿ふて隨分惡るい山道である六時二十分信濃坂(宛字)の一軒家に達した、この少し

手前に岐路がある、木標に題して左下り宮城道、右下り栗尾道とある、栗尾道と云ふのは牧村の方へ行く道で、この道は宮城道に比してややよい道であると云ふことである、こゝで川は二派し、信濃坂を越えて其の向つて右のものも沿ふて進むとやがて中房に達する。

其翌日は吉井菊一なるものを導者として有明山に登る、菊一は小島氏を案内して常念に登つた導者畠山善作の兄である、前日の道を戻ること數丁、八時三十分左折して登山道にかゝる、このところに石碑がある、行くこと少許で瀧の側を過ぎる、瀧は三段程になつて落るので可なり大きなものである、ツガの林中を攀ぢて五合目の附近に至ると岩石が崩れかゝつたところ所謂ナギがあつてこゝには清水が岩の隙を通して流れて居る、又此のところから正面に二ノ俣の天上、及び常念が眺められる、八合目邊で道は二岐して、左折すれば奥の院と稱するところに至り、右折すれば即ち絶頂に至るので、すでに此の邊は樹木が短小となり、岩石が累々と横つて居る、やがて頂上の一角に出ると有明權現の社と鳥居とがある、絶頂三角柱の下に達したのは十一時三十五分、尚進むこと十分許で又一つ社があつて其の側の岩穴を下れば清水が滴つて亞鉛製の容器に滿ちて居る、午後二時頂上を出發して下山の途につき、四時三十分中房に歸着した。此の夜横澤類藏並に前記の菊一が來て登山に關する手はずを定めた。

二十三日は雨、且つ荷物及人足の都合により一日滯在。

二十四日、午前七時三十分中房出發、人足五人をつれ、總勢九人、いよ〳〵燕岳に向ふ、中房川に沿ふて行くこと十分許で左折して濁澤に沿ふて登り、又行くこと十五分許で溪流を離れて尾根に向つて登る、ツガトウヒ等の林中を進めば樹下にはチマガリザヽが漸く多く、十一時半頃に至つて遂に針葉樹林を出た、此の森林中で自分はミヤマチドリを得た、このものは會員武田久吉氏が日光女峯山に於て發見せられたもので學名をPlatanthera Takedai, Makino. と云ひ Platanthera 屬の珍品であるが、この燕岳附近は未だ眞の植物學者で採集に來たものがないから（自分の管見では）それでこのものがこゝに產することが知られなかつたのであらう、勿論近年に至つて此の附近の山岳は大分登山者があるやうだから或は植物採集の胴亂を肩にして來た人の一人や二人はあるたらうが、元來此ミヤマチヽリはキソチドリに近似して居るから採集さへすれば植

物學者と心得へて居る連中には見別けがつかないので採集はしても、矢張りキツチドリだと心得て居るのかも知れない、兎に角何も辨へない自分が、山岳會々員の名譽を負ふところの植物の新產地をこゝに報ずるの榮を得たのを多とするのである。

濁澤の頭と云ふところの三角測量標の側へ達したのが十二時、中房より四時間半を費したのである、小島氏の登山談を見ると、このところまで約二時間半とあるが、自分等は二時間程遲れて到着したことになる、勿論小島氏のは人足が殆空身であるに、反して、自分等は荷物多く持つて來たし、それに人足自身の荷や、一行の食料を加へると一人の人足が凡そ六七貫も負ふ割になつて居つたから、幾分か多くの時間を要すべきではあるが、それにしても此の間で二時間も達ふと云ふのは、今更ながら小島氏の健脚に敬服せざるを得ない、この濁澤の頭と云ふところへ來てはじめて殘雪を踏み、又ハヒマツを見た、少時休憩して十二時四十五分にこゝを出發して、約一時間で燕岳の下のハヒマツで作つた小屋の邊に來た、濁澤の頭からこゝまでの間は尾根又は山腹を傳つて來るのであまり著しい上下はなく、ハヒマツが多く生じ時にミヤマハンノキやナ、カマドが雜はて居て、樹下にはミヤマメシダが多く、其の間にオクヤマワラビも雜居して居る、オクヤマワラビは Athyrium に屬する羊齒で、深山に產する種である、自分はこの羊齒を曾て白馬ヶ岳附近の鑓ヶ岳で採集し、武田氏は矢張り白馬ヶ岳附近のショウズヶ岳で該羊齒を得られたから此の羊齒は白馬ヶ岳附近に產することは明であるし、又自分は先年乘鞍岳でも此の羊齒を得た　かくの如くに此の種は比較的採集をする人の登つたことのある山に產しながら、白馬ヶ岳附近にしろ又は乘鞍岳にしろ、自分等より前に採集の爲登山した人が一言も此の羊齒に及ばなかつたのは、此のものゝ形貌がかの高山に普通なるミヤマメシダに類似せるが爲にそれと混同せられて居つたのではあるまいか、白馬ヶ岳附近に精通せるを以て自認せらるゝ某採集家の如き、その採集品を精研したまはゞ、或はミヤマメシダの標品中、鱗片の褐色なるものを見出し給ふことがありはしまいかと思ふ。

又此の附近に至る途中、オホサクラサウの生じて居る

ところがあるが、さすがに此の邊はまだ濫採家の手にかゝらぬと見えて、非常に多く且つ美しく咲き亂れて居つた、さてこのハヒマツの小屋から、燕岳の絶巓迄は約一時間ばかりで往復し得られ、花崗岩の崩壞せる狀が、甲斐の駒ヶ岳にやゝ類して居るが、駒ヶ岳の程壯觀ではない、人足は荷が重いからと云ふので燕岳の絶頂へは行かず直ちにこゝから二ノ俣へ向け出發し、自分等四人は三角標の下まで赴いた後、其の後を追ふて行つたので、どの邊がゲーロ岩やら判然とは知ることが出來なく、やがて中川の切通しの少し手前で人足等に追ひついた、中川の切通しへ來たのは五時五十分二ノ俣の天上は頭上を壓せんばかりに峙つて居る、大分時が遲れたので人足は天上中腹から二ノ俣の小屋へ向けて急行し、自分等のみ、其の頂上へ向けて登り六時三十分頂上三角標の下に達した、燕岳より中川の切通しまでは尾根を傳つて行くのであるから多少の高低はあるが概して樂な道で、小島氏が「日本アルプス中斯の如く氣骨の折れずして、サッサと進行し得るところは、他に類多かるまじ」と云はれたのも最至極と思はれる、併し二ノ俣の天上の登りだけは中々急で且つ積み累なれる岩石が墜落する危險が多く、常念より南は知らざれど、燕岳より常念の絶頂に至るまでゞは、此の連脈中此の登りが一番の難所であらうと思ふが、勿論險絶無比とか何とか最高級の形容を用ふる程のところではなく、自分等の知れる範圍でもこれ以上の嶮路は少いこともないやうに思ふ、こゝから二ノ俣の小屋までは約四十分の下りで、この小屋は此の附近に於ける唯一の泊り得る小屋ではあるが周圍の石壁大山分損じ、屋根は破れて殆其の用をなさない、此のまゝにして置いたならば或は數年を出でずして全く泊ることが出來なくなるだらうと思はれるが、何とかして山岳會でゞも修繕をしたいものである。

翌二十五日、朝小屋の前の小高きところに登つて日の出を見る、東の方一帶には地平線に接して、橙黃色の空に眞黑な雲が柵引いて居つて、淺間山は正面に頭をもたげて烟を天にはき、其の左に連つて四阿山、白

○雜錄　日本北アルプス中央部横斷の旅行談

根山とも思はるゝ山々があり、又一層左には黑姫、戸隱、妙高の諸山が見える、振りかへつて西方を跳めると槍ヶ岳、穗高等の山々は其の頭を雲の幕に入れて顯はさず、たゞ其の胸の邊より以下をあらはして居るのみで、やがて太陽が出ると、此の雲の幕に虹があらはれる、朝虹は天氣が變はると云ふ間もなく、電光一閃雷鳴萬叡に響き渡つて、夕立がザッザ降つて來た、此の日の豫定は常念へ登つて槍ヶ岳の麓の赤澤の小屋まで赴く筈であつたが、不意の風雨で出發が出來ないから小屋に這ひ込むと屋根が破損して居るので頭から濡れる、仕方なく簑を着たり油紙をかぶつたりして小屋の中に蹲まつて居るばかり、ろくに身動きも出來ない始末であつたが、幸にも午前中に雨が止んで晴天となつた、そこで常念だけへ行つて來やうと思つて人足を一人連れて二ノ俣の小屋を出發したのが午後の一時三十分であつた、小屋を出て少し上ると、横尾鳥山から常念岳が眼前に展開する、横尾鳥山の中腹を廻つて南に向つて非常に下りやゝ平な處へ來ると常念が高く頭上を壓して峙つ、一休の後、いよ〳〵奥常念目がけて登りはじめ、午後四時十五分遂に其の絕巔に達した、この登りは可なり急で且つ岩石が累々として居るが、之を前日の二ノ俣の天上の登りに比較すると餘程安全である、やうに思ふ、この頂から眺めると此の方には、二ノ俣の天上が儼然と半空に屹立して居る、小島君は奥常念がこの山脈中の王位を占めて、天上などは是に比較して恭しく臣禮を執れるに過ぎないと云はれたが、どうも常念よりは二ノ俣の天上の方が高いやうに思へる、この頂上から見ても天上の方が高いやうだし、又兩山の殆中間とも思はれる二ノ俣の小屋より少し登つたところから、南北を眺めても奥常念の方が天上よりも低く見える、且つまた山容から云ふても天上の方が大きく、位置から云ふても天上は槍ヶ岳に相對してこの山脈の中央に位し、且つ南面して常念、横尾鳥、蝶ヶ岳（天上の頂より蝶は見ゆるや否やは知らざれど其の位置より）に對するなど二ノ俣天上の方がむしろこの山脈中の王位を占めて居るとではあるまいかと思ふ、又前常念と云ふのは東の方に突出した一角に過ぎないもので、奥常念に比しては遙に低いもので、一に東常念とも云ひ、それに對して奥常念を一に西常念とも呼ぶ、『やゝ』について居る地圖に東常念と、前常念とが別々に記してあるが、これは多分誤であらうと思ふ尙南には蝶ヶ岳が連つて見えるが、常念よりは可なり

に低いやうで樹の中々に茂つた山である、しばらくこの山上に居つた後、來るときと同じ道を過ぎて七時頃二ノ俣の小屋に歸着した、横尾烏には有名な例の凍死者の骸骨があると云ふことであつたから探ねて見たが連れて行つた人足は知らぬと云ふことで、又類藏もよくは知らぬ樣である、しかし今でもあることは確なので、會員辻村太郎氏は昨年行かれた節に見られ、又北澤基幸氏は今年自分等より數日の後に常念へ登られて矢張りこの骸骨を見られたと云ふことである、これで二ノ俣の小屋まで歸着したから一とまづ休息して、槍、笠、穗高、等の話は次號に讓ることゝする（河田生）

甲州仙丈岳と奥仙丈岳
附白峯の新登路

農商務省地質局調査廿萬分一地形圖、甲府圖幅を見るに金峰山と國司岳との間に、奥仙丈岳なる名あり、二千四百九十七米突を標記し、金峰山より五十四米突低く國司岳より七十四突低けれど、此三山は、至つて密接して、國司より奥仙丈を挾んで金峰まで通算するも、圖幅欄外日本里のスケールに依れば、直徑一里と少し位なるべく思はる、しかして國司ヶ岳より金峰までに到れる行程を記したるものは、余の寡聞の及ぶ限りに於て、本誌第二年第二號に故荻野音松氏の『甲州國司嶽紀行』一篇を見るのみ、氏は國司嶽の絶頂、三角點の在るところより、林中に入りて急坂を下り（國司金峯山間に於ける最も長き阪路なりと）一窪地に着し、是より路上下し、或は山背を傳ひ、或は山腹を穿ち、時に眺望壯快なるもの無きにあらずと雖も、大概は喬樹欝蒼と茂れるのみ、かくて巨岩累々として偃松匍匐せるところに出で、

> 此處奥仙丈山の絶頂にあらずやと疑ひしも、由來奥仙丈山は、全山樹林に蔽はれ、之を遠望すれば、其頂上を指點し得るも、愈よ山中に分れ入れば、絶巔は那邊にありしや、殆と要領を得ず、されど、余は恐らく其の山頂を踰えたるにはあらざるべく、其の南腹を廻行したるものならんと想像す、要するに此山、奥仙丈の名は極めて森嚴なれども、山容敢て奇なく、爾く壯大の趣なし。

と言はれたり、蓋し氏は前記廿萬分一圖幅等によりて國司岳及び金峰山の間を、奥仙丈と思惟せられ、その名の森嚴なるより、一個の峭拔したる深且尖の一峰を期待せられたるものなるべく（恐らく奥仙丈の名を聞くものは、誰しも同樣の想像を抱くべし）しかして、

長阪や森林の中をのみ行きたるため、その南腹を迂回したるならむと自ら疑はれながも『要するに』山容の他奇なく、壯大の趣なきに失望せられたるなり。

余は此失望を以て、如何にも無理ならぬことなりと同情すると同時に、奥仙丈岳なる山は、果して前記廿萬分一圖幅に記載する所と、同一位置にあるべきものなりやといふ疑を抱き初めぬ。

松平定能撰するところの『甲斐國志』は、今より百餘年前の編著にして、その緻密精確に於て、恐らく甲斐國地理書類中のオーソリチイを以て許さるべきものなるべし、同書卷の二十二に曰く、

奥仙丈山　本郡（山梨郡）の極地にして其北は信州武州の界十文字嶺（山脊南北へ延て徑路東西へ亘る故に名つくといふ）に接す三州交界の處を三國山と云、山内東西七里許、南北十餘里と云、東は栗原筋の雁坂嶺に連なり、西は本郡の北山筋に接し、金峰鐵ヶ嶽の東、三繋の下流荒川を界し、南の方川窪村、荷坂、瘠尾、帶那道を限りて、奥仙丈と云、仙丈とは千丈の義か、他州にも同名あり、高峭の謂なり。

とあり、又別に荒川の條に、「金峰の東、三繋の南より發源す、其東は、西保、帶那の奥仙丈とて、深山幽谷なり」とあり、本文に據りて見るときは、第一、奥仙丈山は山梨郡の極北なりとあれど、謂ふところの山梨郡は、今東山梨、西山梨に別たるれども、甲府圖幅の所謂奥仙丈は、東西山梨、孰れの郡より見るも極北にあらず、之を極北と言はゞ、國司金峰も、亦皆極北ならざる可らず極北とは圖幅に見ゆる國司嶽より東北甲武信岳（『甲斐國志』に所謂三國山是れなり）に亘れる地點に該當するを如何、第二、山内東西七里許南北十餘里といふ三國山に接する地域、及びその東西南北の境界線は、一も現に圖幅に言ふとこの奥仙丈岳としては、相當することなし、第三、千丈といふは高峭の義にして奥仙丈は、高峭更に深邃を意味す、名稱自詮と共に、名實相反の山岳あること故、一概には謂へざれど、奥仙丈を以て、國司金峰間の阪地、且つこの二峰より低窪なる一小地點とすれば、余は故荻野氏と同じく、其名の森嚴なるに似す、其實の平凡なるに、慊焉たらずんばあらず。

然らば國司金峰二山の間を、奥仙丈といふことは、全く謂れなきことなりやと言へば、こゝに同じく『甲斐國志』に「奥仙丈の東へ續ける絶頂を國司嶽と云」といへる一句あり、恐らく二山の間の窪地を、奥仙丈と稱することは、是より濫觴したるならんも、奥仙丈岳の意義は、前述の如く高山深谷、重疊にして、地域を

以て言ふも、北は信武界の十文字嶺に接し、東は雁坂峠に連なり、西は金峰の東なる三繋の下流、荒川を境し、南は帶那道を限れる連嶺地を總稱したるものなるが故に、國司岳が奥仙丈の東へ續けるといへる一事を以て、奥仙丈は國司の西、即ち金峰の東に介まれる山背一塊の、小地點なりと言ふこと能はざるべし。現に『甲斐國志』第二十一卷、帶那山の條にも「北は西奥仙丈の高展風、玉小屋に到り云々」とあるを以て見るも奥仙丈なる名は、蜿蜒せる長壁に附したる總括的名詞にして、狹少なる一地點に與へられたる限定的名詞にあらざることは、特に西奥仙丈なる部分的名詞を有するにても、知らるべしと信ず。

余はこの山脈に於ては、金峰山外の他を知らざるが故に、勿論斷言は出來ざれど、奥仙丈の名稱が、吾人に與ふる直覺感と、前記『國志』との記事に據りて、金峰國司間の連嶺を、奥仙丈の一部分として許するに吝ならざるものから、奥仙丈の全體並びに最高點は、この區間にありと考へざるのみならず、『國志』奥仙丈の條の終に記して『凡そ此筋奥仙丈の諸山、皆連貫一脈にして金峰の羽翼なり』とあるをも併せて、奥仙丈の區域は、雁坂、甲武信（即ち三國山）十文字等より、金峰山に至るまでの關東山脈、西南端の連嶺長壁を指さし、圖幅の所謂奥仙丈は、その一小部分にして、國司岳は寧ろその一支脈なるなからんやと惑ふものなり余は斯く解釋して、初めて奥仙丈の名を悅ばざらんと欲するも得ざるなり。

しかし實を言へば、余は圖幅に所謂、奥仙丈よりも甲斐の中巨摩郡、信濃の上伊那郡に境せる奥仙丈を以て、より多く奥仙丈的なりと思ひ、彼に「奥」の名ありて、是に其名なきを以て、高低深淺の名と實とを、顚倒せるやの感なきを得ざりき。

本年白峰山脈を踏破し、間ノ岳や、北岳、又は地藏鳳凰諸岳より峻秀にして壯大なる仙丈岳と相對する毎に、余は内心かく叫びぬ「汝を措いて何物か敢へて奥仙丈岳の名を抗するものぞ」と、果然、此山は奥仙丈岳なる名稱を有せることを、後に至りて知り得たり。

余は前年、蘆安村に宿して獵師より奥仙丈なる名を耳にしたることあり、しかも當時は心こゝにあらざるを以て深くも心に留めず、本年白峰山脈に就きて調査したきことあり、蘆安村役場に照會したるに、その返書の一節に曰く

本村の奥に岳數ヶ所あり、第一北にあるを鳳凰山といひ、其續き

に地藏岳、觀音岳、藥師岳と引續き、それより西に奥仙丈岳あり と。

余が本年の白峰登山に先だち、信州高遠方面より、白峰山に登り、間の岳に到りて、雨のため引き返へしたる林務官の一行あり、其一行中に加はれる某氏の說に據るに、奥仙丈の麓には、小仙丈、大仙丈なる小名あり、そこには森林もあれば、伐木小屋もあり、孰れも高遠方面より白峰山に登れる路に當れるところにして岳は土地の人、悉く奥仙丈岳と呼べりといふ。

蓋し此仙丈岳は、海拔殆んど三千米突に垂んとし、地藏、鳳凰、駒、白峰、及びその山下の溪谷圍繞せられ、奥の奥なる峻峰にして、金峰山脈の所謂奥仙丈を拔くこと實に五百米突に近く、奥仙丈の名もし許すべくんば、實に此峰を推して適稱となさゞる可らず、要するに、金峰山脈の奥仙丈は、長さと廣さに於て勝り、此奥仙丈は高さと深さとに於て勝ると言ふべく、兩ながら名山たるを辱しめず、余は改めて、此山を奥仙丈の格に上し、彼の金峰山脈の奥仙丈と區別するため、甲と信との駒ヶ岳に、東西の別を立てたる前例によりて、金峰山のを東奥仙丈岳と呼び、白峰山脈のを西奥仙丈岳と稱せんと欲す、猶一言附加すべきは、信州人は此山に對して仙丈もしくは奥仙丈なる名を唱へず單に前岳なる平凡なる名稱を以てせり、蓋し駒ヶ岳の前岳（高遠方面より見て）といふ意義なりといふ、奥仙丈岳は、高さに於ては（既成地圖に據れば）甲斐駒に僅僅三十米突を輸する如くなれど、孤高自ら守り、群山彙を獨り峻絶するところ、特立獨歩の名山なり、前岳の如き屈從的名稱を與ふるは、吾奥仙丈を誣ゆること甚だしと言ふべし（甲州人が昔より深山幽谷地に「仙丈」なる名を呼べるは、余のいたく悅ぶところなり。）

蓋し此奥仙丈岳の名を知る人稀なるは、未だ登山したる人の紀文、世に公にせられたることなり、さすがに詳悉なる『甲斐國志』すら、冷然

仙丈ヶ岳　白峰の西北に在りて能呂川北澤を隔てたり、是亦伊奈郡に界する高山なり。

離緣狀より二行少なき筆墨を與へて止みたるにて、一般を知るべきのみ。

信州高遠方面より奥仙丈岳を登り、山麓の森林や、溪流を跋涉して、白峰北岳に登攀し、間ノ岳農鳥山を極むるは、白峰山脈縱斷の新登路とも言ふべく、且つ存外安樂なる道筋なる由なれば、余は後遊者のため、聞けるまゝを左に記し置く、多少の誤謬もし有りたり

とすれば、余は後遊者の是正を謹んで俟つ。

中央東線にて茅野驛に下車し、杖突峠を踰えて、上伊那郡藤澤、長藤を經、西高遠町に一泊し（旅館は木曾屋可ならむ）翌日三峰川に沿ひ美和村溝口を經て、黑河内に到り、黑川を溯り（本誌第二年第三號「白崩山に向ふ記」參照）池ノ平峠に上るや、地は信州より甲州に入る、是より七八丁を下り、野呂川水源、北澤の小舍あり、就いて一宿するを可とす、翌日下ること一里半許、右に折れて上となり、奥仙丈の麓となる、此邊小名にて大仙丈小仙丈等あり、御料局調査小舍あり（奥仙丈には此邊より登るらしけれど不詳）此小屋より左へ登ると約一里半にして、右へ入り、藪澤を登ること二里半にして、白峰北岳の頂上に達し得、北岳より間ノ岳農鳥山は、山傳ひにて半日を費やせば到り得べく、農鳥山頂、又は山下には、適當なる野宿地あり、北岳以南のことは、次號に委しく記すつもりなり。（烏水生）

八ヶ岳山上の禁札

近來高山植物の濫採益々甚だしく、珍種は遠からずして絶滅に歸せんとは、一般の杞憂する處なるが、其防遏手段として、今夏八ヶ岳山上に、左記禁札の樹立せられたるを見る。

掲　示

一八ヶ岳國有林内ニ於テ高山植物ノ採取ヲ嚴禁ス

但學術研究ノ爲メ採集ヲ要スルモノハ當署ノ許可ヲ受ケ其證ヲ携帶スベシ

明治四十一年七月

長野大林區臼田小林區署

掲示されたる場處は、夏澤峠の頂上、及横岳に各一ヶ所なりしと記憶す。斯る一片の辭句が、果して事實上有効なりや否や、疑問に屬すれども、有るは無きに勝れるものあらむ。猶ほ他に適切の方法あれば、當局者に於て、實行されたきものなり。餘事ながら、本澤溫泉には「高山植物採集案内」てふ珍奇の肩書を有する中村喜太郎君あり、高山植物の本場は、流石に違つたものと感心せり、此種の案内は、同君が日本にて嚆矢なるべし、故に一寸紹介し置く。（辻本）

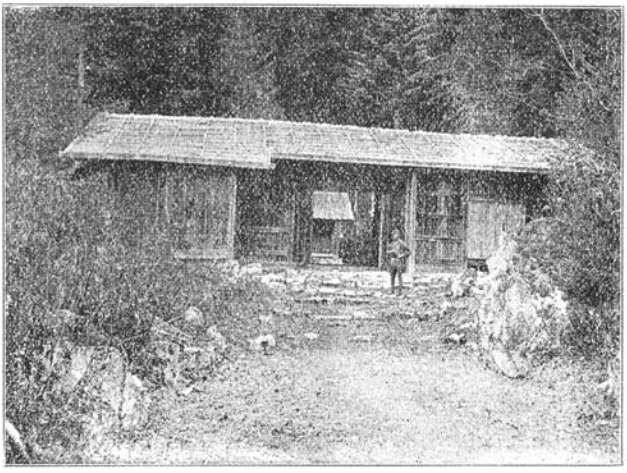
金峯山御室及駒ヶ岳屏風岩小舍の燒失

九月初め甲州御岳に詣でたる折、金峰山御室燒失の由を聞きしが詳しき事を尋ぬる暇なく其儘歸京し、後

○雜　錄　金峯山御室及駒ヶ岳屏風岩小舍の燒失

同地大黒屋旅館に照會して左の通知を得たり。

御室の燒失は本年五月八日頃にて原因は登岳せる盆栽採りの過失なり、再建は明年五月頃竣功の見込にて大小は未定なれども多分前同樣のものなるべしと云ふ



燒失前の金峯山御室　（高野鷹藏氏撮影）

元來御室は御岳金櫻神社の本宮即ち金峰山奥宮の社務所にて金櫻神社の所有に屬し、右燒失せる御室は正德年間建築せるものなりと。

本邦高山の室堂中屈指のものとして知られたる建築物を登山者の不注意に因り一朝烏有に歸せしめたるは惜みても猶ほ餘りありと云ふべく再建の一日も速かならんことを祈ると共に一層登山者の公德心の養成を切望す。（本誌第二年第一號高野鷹藏氏「秋の金峰山」參照）。

（辻本）

又甲州駒ヶ岳表山に於ける屏風岩の小舍はもとは頗る立派なる小舍にて、近年大破に及びしも、尙其の形骸を存し、幾分か宿泊に便利なりしも、昨年の秋燒失して、跡をもとゞめずと云ふ、其の原因につきて、臺ヶ原の者の云ふところを聞けば、元來此の小舍は臺ヶ原に屬せるものなれば、臺ヶ原の近隣なる横手の者は、横手の登山道より登るもの少くして、獨り臺ヶ原のみ繁昌するを妬みて此の小舍に放火せしなりと云ふ、もし此の事實にして信なりとせば、其の卑劣なる考より衆人の利益を損ふの所業惡むべきの至なりと云ふべし。（河田）

硫黄岳登山

昨冬來噴煙常に斷えず、一時諸新聞紙に噴火の誤報を喧傳されし硫黄岳(燒岳)は、其報告に比較しては、さまで噴烟の狀態甚しからず、被害と名くべき程のものもなく、噴烟當初に於ては多少の降灰ありしが如くなれど、今日に於ては唯だ亞硫酸臭の瓦斯と水蒸氣を噴出するのみにして時に多少の鳴動あるものゝ如し。

山は飛驒、信濃の兩國に跨り、上高地溫泉場より、半日にして上下し得べく、今夏七月下旬上高地に會せる本會々員の數七名の多きに及び、臨時に燒岳(硫黄岳)登山隊を組織し八月一日朝九時上高地を發し登山の途につく、此日南曇記者倶樂部の發起せる燒岳探險隊は同志四十餘名松本を出發し白骨に向ひし日にて越へて三日白骨方面より登山せり、上高地溫泉場より白骨道を行く事數町右折して中尾峠に向ふ、道は奥飛彈中尾に通ずる峠道にして、硫黄岳の北穗高の餘勢のつくる所の鞍形の地を通ず登り一里、常に森林中を進む、一時間にして峠の頂き、飛驒信濃の國境に至る、硫黄岳は此所より南折して登るべし。

峠の頂き、東望すれば梓川を望むべく、穗高、霞澤山を見るべく、西望すれば高原川流域を眺むべく笠岳は亂雲に包れて其上半を出さず信濃飛驒兩國界の標木二本、立てる傍らより笹をかき別けて登る數町にして樹林を出で、岩石崩壞せる所に至る、此れより上數町皆な斯くの如し、ハヒマツ枯死して赤く、岩は分解して赤く、青く、硫黄は其表面に附着して黄色を呈す、思ふに此邊昨冬の噴烟の結果なるべく、諸々岩石の間隙より硫氣を出す、崩壞せる岩石なれば足掛り極めて惡しく南へ〳〵と登る、途上岩の陰にシャクナゲの開花せるあり、僅に舊時の面影を存す、十一時頂上噴火口の北壁に着く、噴火口は直徑二町もあるべきか、深く擂鉢狀をなして三個の峰環聳せり南の一峰に三角櫓あり噴煙の中に隱見す、西南壁最も低く、噴火口内の傾斜も此方面に緩なるが如し、附近ハヒマツの枯死せるもの一面にして、降灰、堆積して地は一面の灰色を呈す、噴火口内には數多の硫氣孔ありて合して一段となりて上昇するものゝ如く、常に轟々の音をなす、噴煙は亞硫酸臭を有し、耐ふべくもなし。携へたる標木を此地に樹て、山岳三年一號(硫黄岳の記事ある號)と本會規則書を桐油紙に包み、燒岳山神に献ずとなして附置して去る、標木は上高地より携へしものにして、

表面には、燒岳登山紀念、山岳會の字を書し裏面には年月日を書す、高さ四尺巾一尺蓋し、山岳會の登山紀念としての標木の嚆矢なるべし。

十二時半來路を降る、中尾の村里は眼下に指摘すべし笠岳は依然として尊容を示さず一時峠の頂きに着し二時半上高地に着し無事硫黄岳登山隊を解散す。

余輩、燒岳登山紀念を書し硫黄岳の字を用ひざりしが、飛驒方面に於ては此山を硫黄岳と稱し、信濃方面にては燒岳と云ふものゝ如し、活火山を呼んで燒岳と云ふ敢て此一山を指して云ふべきものならざるが如くなれど此附近に於ては唯一の火山にして燒岳とし云へば此山を云へり、余輩は信濃方面より登山せるを以て敢て燒岳の文字を用ゐ、本文に於ては前々號との連絡上硫黄岳の文字を用ゐたり。

假に此山を地圖上の燒岳となさば更に其南に硫黄岳なかるべからず、然るに余は其南方乘鞍岳との間に於て火山的形態を有せる山を見ざりしなりされば、此山は地圖に於ける硫黄岳にして、地圖上の燒岳は中尾峠の北二三十間の所にある硫氣孔のある地を指せるなるべく林並木氏の紀行（本誌一年三號）中「中尾峠は燒岳の絶巔に當り、其南に急峻なる硫黄岳、猶千餘尺を拔いて頭上に聳ゆ」云々は蓋し地圖上の燒岳硫黄岳の關係を明示せるものと云ふべし、硫黄岳の名は其方面を異せる名稱にして、信人の白馬岳を越人の蓮華と云ふが如くなるべし。

「山岳志」の燒岳（同書二七九頁）も思ふに中尾峠の頂きを云ふものなるべく、中尾より一里十八町にして至るべし、とは余が聞ける中尾、より峠迄の道程と一致す、且つ同書の硫黄岳は中尾より二里にして至るべしと、峠上より硫黄岳頂上迄は半里には過ぎざるべし即ち同書の硫黄岳は此硫黄岳を云へるなるべし、然るに同書に引用せる風景論の一節に曰く

「燒岳、笠岳、硫黄岳、三岳相連續して一大山塊をなすも燒岳を以て主幹とす」云々此れ或は燒岳硫黄岳の名稱を轉倒せるものにして、地圖上の硫黄岳を燒岳と稱し、燒岳を硫黄岳と稱せるものにあらざるなきか。

越へて三日白骨方面より同岳に登りし探險隊の諸士に聞くに頂上附近降灰堆積し歩行極めて困難なりし由思ふに此山には、中尾峠より南折して登るを可とするものゝ如し。

八月下旬此山に登られし會員大平晟氏の一行及び石川光春氏も亦吾人の樹てし標木の健全なるを報せり。

（高野）

劒山を見ざりし記

「逝水滔々去莫還　春風秋月老江山
不知浮世塵埃裏　幾箇閑人落得閑」……蒙齋

阿波航行

旬餘の閑を儲け得たる我は、漫然清世の一閑人を氣取りて、輙ち身を阿波航行の汽船に投じぬ船室狹隘にして這般閑脚を伸す處なし、去つて甲板に坐し、烟波渺然、吾が「再度富士」の影、朦朧として消え行くを觀れば、只だ恐る身閑にして心未だ閑ならざるを、蜿蜒蟠伏、海に臨んで起るは淡路の群峯なり、俯仰すれば乾坤水に浮び、水晴天に浮んで、碧瑠璃！已にして鳴門海峽の側面に出づれば、風雨驀然、驚濤駭浪、船に薄て鞳鞳として聲あり、黃昏德島に着し、終列車に乘じて船戸に泊す。

一宇河溪

翌黎明、腕車を驅つて雨中貞光に到る、朝食雨を冒して一宇河溪を沿ふて南す、木綿麻橋を渡り、左岸を行けば、對岸の連峰黛の如し、蓋し青山なり、峭崛多くして削るが如く、水色正綠にして透徹、岩に激して轟々として聲あり、一雨一晴、白雲青松相映じ、清婉眞に愛すべきなり。

瀑布鳴瀧

溪の兩岸三々五々、山腹に散亂せる茅舍、悉く煙草を培養す、蓋し此の谷煙草を以て天下に名あればなり村落悉くる處、溪流を距てゝ遙に瀑布の奇崖に懸るを觀る、飛流數段、幾十丈、即ち名高き鳴瀧なり。

碧潭怒釜

行くこと十餘丁、橋下隱々として雷鳴あり、即ち怒釜なり、蒼岩窪を成して、碧潭深きこと幾尋なるを知らず、渦水沸々、恰も釜中熱湯の煮ゆるが如し、故に名あり、岩頭に伏して下視すれば、溪流奔逸、猛虎の勢を以て澗中に瀉く、跳珠濺玉湍激聲あり、毛骨を寒慄ならしむるに至る、眞に壯觀なり、茶亭に憩ふ、食已土釜に沸煮せし、茶を啜る、味頗る佳。

一宇閑村

橋を渡り溪の右岸を行く、新道壞れて通ぜず、轉じて舊道に上り、山腹を西すれば、一宇の舊村なり、四五の茅屋宛として幽致あり、而も寂然人聲なし、屋下の碧流は日夜往て歸らず、屋上の青山は永久に靜なり。

「門外紅塵尺許深　兒童抵死競浮沈

誰知一寸茅簷地　天付閑人値萬金」

山中に入つて、初て閑を知る。

"Far from the madding cowd's ignoble strise,
Their sober wishes never learnad to stray;
Along che cool sequestered vale of life
They kept the noiseless tenor of their way."

峽中小市

遂に又た新道に下りて、古見に出で、溪橋の側に宿す、橋は一支本流に合する邊に架す、巨岩細石、一種のデルタを形成するを以て、水輙ち激起沸、白浪を成す、聲甚だ壯なり、溪の片岸、居民稠衆隱然たる峽中の小市なり、晩食鷄肉味甚だ美なり、此の夕月を見ず。

「因隨芳草行來遠　爲愛淸山歸去遲
獨步獨行仍獨坐　初凉天氣來寒時」

黑山雲陣

蚊軍蚤兵襲來誠に畏るべし、半夜を過ぐるも眠り得ず、山雨溪聲を怕れ聽きて天明に至る、南窓を開けば濁流滔々、橋板を洗ひ去つて、巨岩に衝突し、飛沫瀾を起す、眞に偉觀なり、沿道の溪河悉く漲つて、進むこと難し、黑山雲陣、知らず、劍山幾雲嶺を隔つるかを遺恨我れ劍山を見ずして歸る。（塚本樂山）

○雜　錄　十和田湖談

十和田湖談

日本の脊梁分水山脈に沿ふて走れる、那須火山脈配下の噴火口で、陸中の鹿角郡と陸奥の上北郡とに跨れる山湖が十和田湖である。

四十一年七月、余は陸中鹿角郡小坂鑛山を觀るの好機を得たので、序に十和田の仙湖に步を向けた、時に午後一時半である。鑛山背後の高地は甚だ眺望の好い所である。南方嵩高な紫の山岳が、頂上の半面に白雲を涌かして居る。これは燒山火岳彙や森吉山の一脈で、容易に忘るべからざる壯大な光景である。

小坂よりの道路は、二三本もあれど、藤原村を通るのが一番近い、單に十和田道と言つて聞いても、人によりて別々に敎へるから、最初に藤原を尋ね、藤原に行つて十和田を問ふ方が安全と思ふ。左樣しないと、僕の樣に同じ所を往復せねばならぬこともある。

小坂を見るの必要ない方は、大舘に下車し、扇田、毛馬内、大湯を經、溪流山坂を越えて、湖の南岸發荷に行くのが順路で、毛馬内までは馬車もある。

藤原も過ぎて、愈よ登路となり、白樺の見え初めた

頃、一人の同級生が急いで僕に追ひ着いた。
程なく十和田に歸る若い者とも一所になつた。道傍に方言五月苺(舊五月に熟する故なりと)云ふのがある。なか〳〵味が好い。これは歐洲に多いクーズベリに相違ないと、同級生は喜んだ。此頃北海道からも出るそうだ。丈餘もあるいたどりが、さら〳〵と風に鳴つてもや〳〵した霧が飛んでくる。山路が下りとなつて間もなく、白い霧の切間から、飽くまで青い湖水が、ちら〳〵見える。山奥にも海があるかの如く妙な感じである。海面は陸地に比して遙かに大きい、然るにかゝる深山にまでも、こんなに大きな湖水がある。地球の表面は愈々水鏡が多いと思つた。日光の山坂を越えて、中禪寺湖に接した時と同感である。
蓊鬱した山路を二里程も下つて、漸く湖岸に着いた。恰も中禪寺の湖畔にある樣な、老大な濶葉樹が森々と繁つてる。岸に沿ふて北に進むこと半里ばかりに、十和田村、和井内氏の家に着いたのは、三時半、小坂より六里もあらう。同家は十和田湖の養魚の經營に從事してゐる内で、此家の外には宿舍はない。團體なら四五十人も泊められるそうだ、主人の弟は南岸の發荷に居つて、矢張人を泊めて鯉を澤山池に養つて居ると聞いた。夜半湖邊に立ち、汚身を清め、明日の清遊を思ふの念が頻に動く。
宿帳を見ると少し前に、遲塚麗水氏も來られたらしい「雲外の仙湖」と題し、同氏の東北紀行の載つてゐる都新聞もある。宿の人の言ふには、東京の麗水と云ふ人が、馬に乘つて來て、三晩も泊つて十分の探勝をやつた、精しい紀行文は『太陽』に出さうと言はれまして丸顔で鬚の生えた方ですと。
寢心が何んとも言ひ得ない。自分の境遇を換えて、こんな所に永住するものとしたら、果してどんなだらうとも思つた。
翌朝霧が深いが晴天の前兆である、奥まで見るには一日を要すれど、僕等は懷と云ひ、時間と云ひ、半日を以て見なければならぬ。船を雇ふて愈々湖面に乘り出して、中山の岬に向つた、朝日の照ると共に、濃霧が次第に消え失せて、殘霧は尙ほ椀狀の湖壁に帶狀に丸く輪になつて動かない。それも空氣の吸熱上昇につれそろ〳〵とちぎれて何處へか去つた。
周圍十三里、湖岸湖底些の土壤も出來て居ない、凡て水を濁らせない砂と礫とである。石は青いのが多く、白いのも混つてゐる。水の色は一種特別で、深海の沖

○雜錄　十和田湖談

に見る如き、濃い碧藍色の玻璃を、透明に磨き上げた樣に、何處までも清澄で、湖底の石の大小が青く白く奇麗にはつきり數へらるゝ程である。水色は確かに中禪寺以上だと思ふ。白い石も多少青味がゝつて、湖心に映れる天の青色も、幾分藍色に同化されんとする樣だ。松島は遠望に適し、近く見るべきでないが、こゝの島や岬は遠望は左程でないのに、着いて見ると何人も感嘆せずに居られない絶景が幾らもある。繪端書は餘りよくとれてゐない、却て實景を損する位だ、富士の胸突八丁邊や、鳥海の頂上附近の怪巖奇石を、湖中に積み重ね、老大の樹根を以て嚙み縛つた樣な所もあれば、六角柱狀龜裂の玄武洞（繪に見たるのみ）の如きを水中に投げ出し、古木の冠を被せて、絶壁に黃色なみやまきんばいの花を飾り付けたものもある。宿の若者が御前さんたちあそこへ行くと、とても離れられないと言つたも無理がない。此等は皆中山の岬半島附近である。此奥にもつと好いのがあるそうだが、如何せん正午までに宿に歸らねばならぬ。まあこれで十分である。昔時さる名僧の籠れりと云ふ自籠の入口に船を横たへ、鐵の梯により、危うく重なれる巖石の上に登る、湖面が益々碧い、湖畔一帶濶葉樹のみなれど此の半島附近のみは、姫小松、五葉松、赤松等の針葉樹を混じてゐる、秋の紅葉が松の綠に引き立つてあらう。高砂の浦、惠比須島、兜島等の綠の影を縫ふて、鎧島の邊から半島に上陸し、綠點滴たる小暗森を通り十和田神社に着く、熱心にスケッチをやつてる二三の青年も居つた。扁柏の大木もある。木曾には澤山あるが、此邊では珍しい木である。

もう時間も經つた。早速乘船して自分も漕いで、歸り路を急いだ。日はぢり〳〵熱い、忽ち水浴が始まつた。生れて以來、こんな奇麗な水に浴した事はない、餘程の光榮である。實に清遊清浴をやつた。夏は何時もかやうな機會を欲しいものだ。

十和田湖に對して一つ惜むべきことがある山は深い、湖岸の峭壁も高い、所謂雲外の仙湖で、周壁の森林も鬱蒼として、湖心に綠翠の山影を宿して居るが、殘念な事には、樹木は濶葉樹のみ、言はゞ雜木に類するので、日光湯湖の樣に、日光樅、いとゝもみ、栂、白檜等の如き、何となく深山の感を惹起せしむる、森嚴暗綠な針葉樹がない。杉羅漢柏もない。從つて幽邃の感に乏しい。周圍の山は高いが湖面は低い。千五百尺か二千尺位であらう。位置は北方であるし、三千尺もあつた

ら青森とゞまつ、白檜なども生え得るであらうに、それもない。針葉樹と云へば、前に述べた通り、半島や島上の松類あるのみ、これも船材にするため、稀れに盜伐されるそうである。風向によつては、小坂鑛山の烟が湖面を蔽ふこともあるさうだ。

僕はまだ富士の八湖を知らない。聞く所によれば、富士の山中湖畔には「ばらもみ」(別名はりもみ、つがもみ)の單純林があると云ふ。其幽邃の光景が想像さるゝのである。然し十和田湖の島の景色は松島も及ばない。水色と石の色とは中禪寺、湯湖以上である恐らくは富士の八湖もこれ以下であらう。所謂山水明媚の本尊である。故に山岳を愛し山湖を戀する先輩諸士、殊に本會々員の探勝を望む次第である。

十和田から最も近い停車場は、青山縣の大鰐と聞いて津輕街道により、午後から七里の山坂を上下し、落日と共に大鰐の向になつてる藏舘溫泉の宿舍に着いた。湖畔の山を越えるのが一番難儀であつた。其外に一里位の山坂が幾何もあるから、山路に慣れない方は毛馬内か小坂を經て大舘驛に出る方が得策である。

(山本頭坊)

震災豫防調査會に望む

八月の『地學雜誌』に、「夏期登山者の好參考書」なる標題の下に、火山の美を說き、且つ登山者に學術的參考書の必要なる所以を論じて、文部省震災豫防調査會報文の、最も火山研究者に必要上缺くべからざる資料なるとを敎へられ、附するに其調査報文の目次列擧を以てせられたり、吾人は記者の親切なる示敎を謝すると同時に、下の如くに問はざる可らず、「我等はいづこより件の震災豫防調査會報文を求むべきか」と、此報文は丸善書店にて、取次販賣すとは聞けど、我等の知れる限りにては、同書店にて目下發賣せるは、岩木、鳥海、御嶽等に過ぎず、森吉火山の如きは、最近の出版なるに係はらず、販賣はおろか、同店員は、その名をすら知らざるほどにて、『御嶽』の分すら、新聞の寄贈書目に其名を見てより、二三週間の後、むだ足を二三度させられて、漸く購入し得られたるほどなり、富士、箱根兩報文の如きは、言ふに及ばず、其他も殆んと凡べて絕版同樣にて、之を購求するの難きは、想像に及び難きものあり、近頃は現社會に、さまで用なき陳籍腐書にても、少しく名の知れたるものは、續々飜刻せられ、不自由を感ぜざる程なるに、地學上須急にして、又需要必ずしも少しと言はざる本書册の如きが、市場に售物の影を絕ちたるは、讀書界一方の不滿足不自由、いかばかりぞ、震災豫防調査會に於て、一向增版に著手する模樣を聞かざるは、いづれ相應の事情も、理由もあることならむが、吾人渴望のあまり、焦燥の情禁ぜざるものあり、偶ま「地學雜誌」記者の老婆心に對して、吾人は「敎へられたり、然れども與へられず」と答ふるより外に致し方なし、在京の人は、圖書館に通ひて借覽する便利はあらむも、地方の篤志家に對しては當分先づ見込なしと答ふを可とせむか、もし震災豫防調査會に

○雜　錄　飛驒叢書の出版、山岳寫眞と松本市保里寫眞館

して、其報文は某學府に納むる用として、著作したるものにして、一般公衆に頒付すべき性質のものにあらず、公衆にして其頒付の不足を訟うるが如きは僭越の沙汰なりと言はるれば、それまでの話なれど、まさかにさやうに狹隘なる見解を抱かるゝにあらざることは、既往公衆に發賣を許せるにても知らる、故に吾人は同會に於て、絶版の本報文を、適當なる方法を以て、再刊增刷の擧に出でられたきを、懇請するものなり農商務省地質調査所(?)編、廿萬分一地質圖等に對しても、吾人は同一の考へを抱かざるを得ずしかして吾人の確信するところによれば、之を再刊したる曉に於ては、相應員數の購入申込者を得ることは、決して至難にあらず、今日の專門圖書購賣力は、十年前と同日の比にあらざるが故に、再刊に要する費用位は、優に償ひ得て費用上の迷惑(もし從來絶版のまゝ、再版せざりし理由が、單に費用の點にありたりとせば)は、免るゝを得べからむと、非耶。(小島)

飛驒叢書の出版

飛驒は、山岳國中の山岳國にして、東に御嶽、乘鞍、槍ヶ岳、笠ヶ岳等の、所謂飛驒山脈を控へ、西には白山火山脈を走らせ、瀑布には日本で第一と稱する白水瀧あり、嶮河には大白川(下流射水川)高原川(下流神通川)等あり、ウエストン氏の如きは、叫んで、風景遠く瑞士の溪流以上にありとなせり、只だ地、僻遠にして、行旅の客少なく、岐阜縣の一部に編入せられて、愛山家の視聽を惹かざりしは、一はこの國の山川を紹介する書册なかりしに因る、否書册なかりしにあらず、刊行の圖籍なかりしに因る、今回飛驒出身の諸氏相計り、飛驒の史籍に最も精通の聞えある、岡村利平氏を編纂主任に推し、同國出身の諸文學士、之か補佐となりて、飛驒叢書を發行するに決し、第一篇として(飛州志)を出版すべしとなり。

『飛州志』は、享保延享の頃、飛驒高山の代官たりし長谷川忠崇が、幕命により、編述したる大著にして、あらゆる古今の史書を渉獵し、之を地理に照らして考證し、全部十册、飛驒三郡の山川形勢、國郡都村、神社佛閣の由緒來歷は勿論、物産、風俗、人情に及ぶまで、飛驒に關する一切の緣起沿革を網羅詳說し、材料豐富、叙事精透、飛驒の歷史地理研究書として、缺く可らざる好著なり、然るに此書は、從來著者の遺族が獻上したる內閣記錄課本、東京帝國大學圖書館本、及び之を傳寫せる二三本あるのみにて、飛驒研究者には、大なる遺憾なりしに、今回岡村利平氏は、內閣本を原本として、大學本、及び其他の異本を校合したるものを與に史實の錯誤を考證訂正し、原書の特色をそのまゝ保存すると共に、訂正補遺をも附せられたれば『飛州志』として、耻かしからぬ完本なるべし。

猶本叢書は、此山岳國に關する、地理歷史文藝諸般に亘りて、珍本を陸續刊行すべしといへば、吾人はその計畫の半途挫折せざるやう希望し、且つ『飛州志』よりも、一層浩瀚なる、富田禮彥の『斐太後風土記』『聞くところによれば僅に內務省に一部、岐阜縣廳に二部の寫本あるのみなりといふ)にも、着手して、世の渴望を充たさむことを希望す。

因にいふ『飛州志』全十册は、飛驒叢書第一册に悉く活版刷了さるべく、定價一圓郵稅八錢を添へて、同國高山町安川通住伊書店、同所升重書店、同二之町平田書店の、孰れへなりと申込めば、代金着順に送本すべしと。(小島)

山岳寫眞と松本市保里寫眞館

「山の寫眞は無いか」と常に至る所の寫眞屋を獵るので

あるが、何處でも一向にあつた事がない、松本は日本アルプスに入る關門の地であれば此地にある數軒の寫眞店には定めし珍しい印畫もあらうとは、誰れしも想像するであらうが、事實は此れに反して、誰だ僅に保里寫眞館にあるのみである、(同市辰巳町)此れとても主として白馬方面に限られて、他のは餘りないのではあれど、同館では此等の寫眞を寫す爲めに技手が十八日も白馬山頂に籠居したさうである、蓋し同館技手の得意とする所で山岳寫眞としては、美事なるものが多い、且つ該館では追々と各地山岳の寫眞を撮影して、登山客の爲めには、特に廉價に販賣すると云ふ事である、吾人は一日も速に然かあらん事を希望して止まぬのである、登山客は此れによつて紀念とすべく、商賈は以て利を得べきである。(高野)

山岳圖書批評

立山案内

冷光大井信勝氏編、富山市清明堂發行、四六版百十二頁、正價四十錢。表紙には雄山の外形を現し、其下に朱肉にて環内に立山案内と印刷せるは、體裁を得たり、紙質良好、印刷詳明にて、先づ申分なく、卷首の口繪には、寫眞銅版十二枚を揭げて、山中の名所を示せり。

内容は緒言に始まり、立山の名稱、位置、標高、緣起、開基者等より、地質、鑛物、植物、鳥獸に及び、詩歌、文書、氣候を擧げ、劔岳登山談、稱名滝探險及び更々越と針木峠に就きて記し、立山に關する種々の雜事、及び山下寺院の緣起を述べ、次に詳細なる登山案内を揭げ、末尾に登山の準備及び心得の一項を附し、猶ほ附錄として「絶頂の日の出」なる一文を添へたり、記事簡單を主とし、行文平易なるは本書の題目に適へり、鑛物、植物、氣象等の記述に一々引用せる原文を明記せるは編者の忠實なる態度を見るべく、劍岳登山談(富山日報より)及び稱名滝探險(本誌第二年第二號、大平晟氏紀行より)を轉載せるは、最新事實を網羅するに勉めたる苦心を窺ふに足るべし。

單獨の山岳に關する文書は、震災豫防調査會報告を除き、從來獨り富士山に就て之を見るに過きざりしが、前年槍ヶ岳乃美觀の發行あり、其内容に就ては兎角の非難もありしが、一山に全書を提供せる著者の勞は多とすべく、又た一快心事たるを失はず、次で昨年阿蘇山に關する著書の發行せらるゝあり、想ふに今後此種の單記錄は、漸々各地の山岳に普及すること疑なかるべしと雖ども、現今御岳、如き、白山の如き著名なる山岳にして、猶ほ一案内記の出版すら無きもの甚だ多し、余は本年金澤市に於て白山の繪端書を尋ね是さへ皆無なりしに呆然たりき。由來山麓に住する人士は、其山岳を記錄するに於て、遠地のものより幾多の便宜を有し從て比較的之を完備ならしむること容易なる故、余は少なからず此等人士の著書を歡迎するものなり。本書は素より案内記として、編纂されしものなれば、完備を望むは無理なる注文にして、稍や前記要求を滿足せるものとして、之を立山登山者及一般山癖家に推薦す。

本書讀過の際、目にま止りたる二三の事項に就き、編者の教を乞ふも無

益ならざるべし。七頁「近來流行する日本アルプス山脈なる語は、即ち飛驒山脈を主とし、他の富士帶及赤石、木曾兩山脈を總括して附せし名稱なり」とは近來の珍說なり、勿論日本アルプスなる名稱は、學術上意味あるものに非らざれども、余の寡聞なる、未だ富士帶が之に總括さられたることを知らず、又た飛驒山系を主として、赤石山系を輕視すべきものと云ふことも聞かざるなり、又た同頁中に、飛驒山系の山名を記せる中に、常念、穗高等を擧げて著名なる槍ヶ岳を除けるは、何か理由あることにや。十五頁、「立山の絕頂は其當時の噴火口の殘壁なり」とあり、花崗岩なる立山が火口壁なりとは余の如く地質學に暗きものには、如何なる理由か分明せず。二十八頁、長之助草の記載中「其後、赤岳、八ヶ岳にも產する」云々とある、此赤岳は八ヶ岳以外の山にや、然らば特記すべき新產地なるべし。四十四頁立山を記せる文書を列記しながら、紀文の表題と氏名を掲げたるのみにて、何書又は何雜誌所載なるかを略されしは、參照の便とならず、不親切の嫌あり。九十一乃至九十二頁、絕頂の眺望を記す項中、「日本風景論」の文を引用するに其誤謬まで、丁寧に移轉されたるは見苦しく、且つ讀者を誤るべし、越後の妙義、飛驒の藥師岳など大抵の登山家に、尋ねても知らぬこと受合なり、其上此處誤植多く八ヶ岳を七ヶ岳、全平原を金平原、頓悟を收悟などゝせし滑稽あり、再版の時訂正を望む。

本書に地圖を附せざりしは、多少讀者に不便あるべし、七十五頁所載のものより、今少しく確實に、且つ範圍廣きものを、卷尾にでも附加されたき心地す。(辻本)

○雜錄　富岳志

富岳志

靜觀道人著　東京堂發賣

著者の敍によれば、富士に登臨すること四たび「世事に緩くして、富嶽に急なり」と、熱心なる富士崇拜者なるを知るに難からず、第一編、總論、紀行、各方面の望岳記（敍論、東海道の富士、駿河灣の富士、武藏野の富士、御坂の富士、西行坂の富士、十國嶺の富士、蘆湖の富士、姥子の富士、乙女峠の富士）八湖の記（本栖湖の富士、精進湖の富士、西尾冷湖の富士、西湖の富士、川口湖の富士、明見湖の富士、山中湖の富士、須戸湖の富士）登岳日記（夜中登岳風雨難の記、富士川を下るの記）第二篇詩歌（和歌、俳諧、漢詩）第三篇山志、第四編科學觀要略、第五編案內（登山地理案內、廻麓地理案內、登山の心得）等に別たる、別に附錄としては、養氣說、登山全記、富岳研究圖書目錄あり、附錄の內、圖書目錄は、山志、傳記、紀行、繪書、地圖、地質、氣象、植物、動物、洞穴湖水、外人著書に別ちたるなど、氣が利きて親切なり、（但し孚原元常の東藩日記を、和文紀行の中に挿入したるは、編入の誤謬なり、同書は全く漢文なり）登岳全記は、漢文なれば、讀まず、（余は正直支那人に示す場合を別として、日本人が、漢文を作る必要と理由とを、認むる能はざればなり）第五編の案內記、簡にして要を盡くせり、科學視察は、著者のあまり得意ならざるところと見え、富士圖幅の抄錄、三好博士植物景觀、野中至氏の氣象觀測を拔抄せしに止まれり、古今詩歌は、廣搜博羅苦心のほど思ひやられたり、登岳日記は、滔々數萬言、漢文の素養ある人とて、博言と雄文とは感ずべしと雖も、漢文直譯調にて全篇を一貫せることゝて、吾人の耳には他國の山物語を、他邦人より聞かさるゝ心地す、汽車にて小佛峠のトンネルを潛り『所謂天上、天牢、天羅、

天陷はまた何の險ぞ』といへる如き、頂上を巡りて『朝日岳に上る、此岳また中天臺と稱す』といふ如き（吾人は富士にて、中天臺といへる地名を聞きたることなし）又駒岳を「斧劈折帶」と、支那臭く形容し、北極峯なる峯（これも吾人の知らざる所なり）に上り「砂篩坂」（或は砂走ともいふとあり、これによると、砂節坂といふ方、通稱なる如しを下られたる由にて、著者は何の必要ありて、好んでかく明治の人間に、耳遠き名稱を列ねらるゝか、其の必然の結果として、誇大妄想、左の如き文字を列ねらるゝに至る。

斯岳（富士）其中央に挺立す、正に以て此海灣中より、噴出して幾千萬年を經て、遂に今日の觀をなせしを、追想するに足れり、顧ふに此岳、西の方崑崙喜馬拉耶山と宇宙の天柱なり、……清正公か朝鮮に在り、額手遙拜せしもの此巔なり。

富士噴起の年代は、史籍に所謂孝靈天皇時代云々は、無論妄誕なりとするも、富士山の如き新火山岩の噴起は、まさかに幾千萬歲の昔にはあらざりしなるべく、喜馬拉耶と宇宙の天柱は、ローマンチックの空想と見れば、格別差支へなからむも、理性ある人は肯んぜざるべし、清正公が朝鮮より此峰を遙拜せられたるものとすれば、朝鮮よりも、此山は見える筈なり、何とて「山麓及び十三州一眸に收むべし」と視力の限界を縮小されたるぞ。

要するに本書は、その蓄積と、準備とに於て勝りながら、逆比例に、讀者に與ふるところは尠かりしが如し、但し著者が、富士山に對する崇楮敬心は、楮表にあらはれ、富士狂の名あるも宜なるかなと思はる、その意氣と、計畫と、信念とは、吾人の敬服するところにして、著者の如き愛山家の、續々世に出でかゝる書册を公にするを望むや切なり、又文體によりて察するに、著者は青年壯年の時代を過ぎられたる人なるが如し、もし然りとすれば、その意氣の盛なる、愈ゝ當代稀に見る人として、敬するに足るべし。（小島）

荻野音松君を憶ふ

本年七月三十一日、自分は高頭君と、一緒に天龍川下りの舟を下り、東岸の滿島といふ村落に上陸して、田村嘉輔といふ旅舍に泊まつた、さうして友人に七八枚のハガキを書きなぐつて投函した、無論荻野音松君に第一に宛てた、荻野君が、大井川の上流田代山奥を横斷せられたのは、自分が『日本山岳志』の赤石に增補した六號活字一行から思ひ立つたのだと、『山岳』に書かれたことがあるが、實をいふと、自分が荻野氏に負ふところは、更に以上のものがあつた、第一に大井川上流を溯つて、白峰三山に入るに至つたのも、同君の、あの紀行文に興味を有したゝめである、第二、西山溫泉を起點としたのも、比較的好案内人をそこで雇ひ得たのも皆同氏紀行文によりて教へられたのである、第三にこの田村族店に投宿したのも、又同君が前號に載せた『天龍川を下る記』の通りを履行したのである、今回の自分たちの旅行は、荻野君の先蹤を踏んだと言つてもよいほどで、それが幸ひに完成に近づかうとしたの

だから、自分は愉快で〳〵堪まらない、いの一番に君のところへハガキを出した、荻野君がもし在宅せられて、あのハガキを讀んだら、先年の興を憶ひ起して會心の笑を催うしてゐられるであらうと思つた、何だか荻野君の會心の笑が、自分の胸まで、刹那に反響して來るやうな氣持がした。

歸つてから又ハガキを書いて、爾後旅行の經過を報告したが、君はもう旅へ出られたことと、直覺で決めてゐるから、格別は返事の來ないのも氣に留めてゐなかつた。

スルと端書が來た、おもてに「音松父荻野勝五郎」とある、何だかをかしいと思つた、ひよいと裏返へすと悴音松事、廿八日急性腦膜炎にて死去……自分は茫然して了つた、驚愕といふほどの彈力などがあるものかあの荻野君が、今自分の敷いてゐる布團に座つたことのあるあの荻野君が、この室で粗末な食事をしながら、山の話で、夢中になつてゐた二人、その對手のあの荻野君が……、まあどうして死なれたのであらう、かうなると現實と夢の線が怪しくなつて來る、人は一度より多く死ぬことは出來ぬから、自分で自分の死に對面することも隨つて出來ない、併し親友の死んだときに初めて親友を通して自分を通して、自分の死に對面する氣になる、恰度この時の自分が、そのまゝの感じた。

荻野君が山岳會の特別會員になられて、間もないときのことであつて、自分に宛て、大井川の上流を、白峰山脈から赤石山脈へとかけて、横斷したといふハガキを寄せられた、この紀行を『山岳』に載せたいと思つたから、在京の幹部員某氏に原稿をもらふやうにと依頼した、某氏は特別會員といふところから、荻野君の門搆へらしい邸宅を豫想して、東京市日本橋區……町……番地を搜した、それらしい宅がない、尋ねあぐんで、側の燒芋屋に寄り、この邊に荻野いとふお方がお出でゞすかと訊ねると、私し處が荻野で……某氏はその意外に驚きながら、二階に通されて、初めて荻野君に對面したと後で自分に通信したことがある、今想ふと、荻野君は非營利事業なる山岳會の、成立を危ふみながらも、どうか潰したくないといふ一心から、進んで特別會員に入會せられたらしい、荻野君は凡べての點に、さういふ情誼の温かい人であつた。

大井川の紀行といふのは、『山岳』第一年第三號日本アルプスの卷開卷第一に載てゐる『田代山奥横斷記』がそれである、あのとき、赤石岳のスケッチ（ペン畫）

一葉を自分に送つて寄こされた、おもしろいから『山岳』に出さうと照會すると、あんなマヅイものを出してくれては困ると言つて、峻拒さたので、そのまゝ中止した、その後自分が『甲斐山岳の形態美』を本誌に書くとき、あの書を是非欲しいとねだつたところが、君は承諾した、新に描いてよこされた（拙著『山水美論』にも轉載されてゐる）荻野君自身の文には、氣に入らないから載せなかつたもの、友人なる自分の請求に對しては、荻野君自らを犧牲に供されるつもりで、不本意を忍んで描いてくれたのである、荻野君の意氣が自分は泌々嬉しかつた。

荻野君が『山岳』に書かれた文章は、左の三篇である。

駿州田代山奥横斷記。（並に地圖一葉）　十八頁
第一年第三號

甲州國司岳紀行。（並に地圖一葉スケッチ畫二葉）　廿一頁
第二年第四號

天龍川を下る記。（並に地圖一葉）　廿　頁
第三年第二號

この中で『田代山奥』は、おそらく荻野君が初めて足跡を印した第一旅客、又第一紹介者であらう『國司』も、同君によつて最初に世の愛山家に紹介されたのである、同君の文を作ること、周密精緻、字劃といひ、字配ばかりといひ、版に摺つたやうである、さうして屹度手許に原文通りの複本を準備して置かれる、原稿が編者の手に渡つてからも、第何枚目表第何行目第何番字の某字は某字に改められたしなどと、注文して來る、どうかすると、一日隔位に、訂正の注文狀が、一通位來ることがある、いつか活版職工のあやまちで、氏の原稿の末尾を一枚紛失したことがある、氏に照會すると、例の複本から引き離して、直ぐ原文に繼ぎ合はしてくれた、かういつた綿密なところは、大概な人には、眞似が出來ないことである。

そのくせ、荻野君は、毎年脚氣で惱まされてゐられる歩行も遲々とする方だし、體格も頑丈どころか、精々十人並と行くか行かぬか位である、登山旅行をされても、人が三日で終るほどの道筋に、五日か、甚だしきは七日位も費されることがある、あれで、どうして登山旅行が出來るであらうと、自分のことを棚に上げて平常から不思議に思つてゐた。荻野君の父君の手紙に、

天命如何とも致しがたき事と、強て諦め候へ共、學業も凡そは成

○雜錄　荻野音松君を憶ふ

りたる今日、他に兄弟も無き一人の相續人の事とて、期待することも有之候ひしに、空に歸り候次第、御推察を仰ぎ候……

……。

事實に於て、音松事は、幼少の頃より、今に及ぶ迄、一般普通の人よりは、殆と變人を以て目され、小學時代より、朋友とするものなく、自身却て得意に候程故、高等商業學校在學中は、一種別物との趣も見え候へ共、一向意に介せず、實は小生に於ては、本人が品行嚴正にて、輕浮の風なく、卒業を急がず、平々凡々たる所に、望を囑せし次第に御座候、此點に於ては、或は親馬鹿の類ひにも候はんか。

又音松事は、十四五歳より、旅行を好み、時には深山幽谷にて、道を失せし樣なる事は、聞及び候へ兵、多少の教育ある身、其性行に徴しても、無謀の事も致す間敷と思ひ居候故に、乞ふが儘に其都度快諾致せし次第に候。

故荻野音松君

と、自分はこの自然兒を、一夕にして、褫ひ去られたことを、訟へるところもなく、ことも出來ないのを、痛恨する、聞けば君は高等商業の本科を、卒業され、專攻部に入られて多年の造詣を一論文に集中され、脫稿提出後俄にこの世を去られて了つたといふことである、遺憾のきはみではあるまいか。

こゝに父君より贈られた二枚の寫眞の中旅姿の君を掲げる、金釦の製服をつけた方を載せずに、此方を掲げたわけは、君の『田代山奥横斷記』に『余は黑飛白の單衣を着し、雜囊を肩に掛け、着莫座を纏ひ、麥稈帽子を戴き蝙蝠傘を携へたる等、登山旅行に似合しからぬ扮裝なり』とあるを憶ひ出して、往時の君の俤を偲びたいからである。

君の死は我が山岳會の一大損失である——自分たちの

ことばかり言ふやうたが――君の生彩ある文章は、二度と我が誌面に見ることが出來なくなつた。考へれば考へるほど、殘念でたまらない。

自然は何といふ冷たい仕向けをするのであらう、どうせ泣いても、悶いても、人は自然に敵はぬものだ、と思ひながらも、自分の胸から、荻野君の一毛を拔くことは出來まい、と今度はこつちから自然を冷笑してやりたくなる。

荻野君の墓地は築地本願寺地中の久寶寺にある、墳塋の中から、君はおそらく唯一の友人なる我が山岳會、の前途を心配してゐられることであらう、山岳會も微力の我々同志者と、同好諸君の俠助によつて、飽くまで維持する決心である安らかに眠りたまへ、君。

（小島）

雜報

本年の富士初登山

（登降七時間山櫻と紫躑躅の眞盛り）

近衛歩兵第一聯隊第三大隊にては、戰鬪射擊及び大隊教練の實地演習として五月三十一日より富士の裾野、字那須の高原に出張し、日々の教課を執行せしが、六月七日に至り、連日の勞を慰むる爲め一日の休暇を得たりしかば、同隊の一等卒三國彌之助、坊迫建造、寺本助四郎、淺田淺次郎、野田元次郎、井上倉吉の六名は、まだ山開は一ヶ月の後にあれど、此の折を利用して本年第一の登山者たらと申し合せ、何れも十分に結束し、其の日の午後零時十五分といふに幕營地なる那須を發足し、同四十五分に馬返しに着き、二時五十分といふに五合目まで辿りつきしが、六人の同志中野田井上の兩人は、足を痛めて絶頂までの登山覺束なかりしかば、此處に殘し、殘る四人は更に滿身の勇を鼓して登りたり、三合目までは富士名物の紫躑躅今を盛りと咲き亂れ、五合目には山櫻時を得顏に開き揃ひ、實にや此山の姫神の御花畑と思はれて、塵の世の花とは異り、其の美しさ目を覺るばかりなるに、我を忘れて恍惚と打ち眺めつゝ、次第に六合七合と進み行けば、寒風堂と絶頂より吹き下ろして、岩は吼え雲は舞ひ、時には雪崩の音さへ凄く聞えたるが、八合目より上は、全くの雪にして、歩む毎に膝まで踏み入れ、其の困難一方ならず、漸く胸突八町を登りて、五時十五分といふに絶頂に着したり、絶頂の内院外院は總て降雪に埋もれ、烈風人を吹き倒さんばかりなれば、お鉢廻りを中止して、淺間神社に參詣し、十五分間休憩の後、同三十分に絶頂を發して下山の途につき、八合目より沙走路に入り、雪の上を辷り降りること都て六回、長きは七百米突を一氣に降り、短かきも五十米突を辷りつゝ、絶頂の雪を土産に山櫻躑躅の花をも戰友への家苞として、無事に幕營地に着きたるは七時三十分なりしと云ふ。

富士山と最高齢者

「萬朝報」は本年六月懸賞して、全國最高齢者を募集したるに、其結果第一の高齢者として當選したるは、御殿場より三里弱奥に入れる富士裾野印野村に住める鈴木さだ（百十一歳）第二の高齢者もまた、甲州吉田口に近き富士裾野の瑞穗村に住める、百十一歳の老爺某にして、その上駿河灣を擁せる御前崎村よりは、第五の高齢者なる百八歳の老媼某を出だせり、「萬朝」記者の高齢者訪問記に曰く、

抑も富士の白酒と云つば、昔駿河國三保の松原に仙女が天降つた時、伯龍と云ふ漁夫、松ヶ枝にかゝれる羽衣を拾つたが縁で夫婦となり、その

○雜　報　富士山の最低温度、富士登山の新道（實は舊道の修理復活）

仙女の乳房から絞り出した甘い汁が最初の原料で、之を飲めば齢を延ぶると云ふことが、廣く流行して居る端唄の文句にある、固より荒唐無稽の言ではあるが、恁かる不思議な傳説が古くから今に及んで居る所以を究めると、これには面白い根據がある……こんな樂園のやうな土地に住んで居る人が、五體も精神も自然に同化されて長命をするのは當然の話だ「白酒」の端唄の作者が舞臺を此處に撰んだのも、蓋し偶然ではあるまい富士の靈嶽を中心とした此附近の地は、神代ながらの清い空氣が野に充ちて居るのではあるまいか。

富士山の最低温度

中央氣象臺に於ては毎年夏期富士山頂に於て氣象觀測を施行しつゝありしが、昨年該觀測結了下山の當時、同山久須志神社拜殿内に懸重し置きたる最低寒暖計は、本年登山の際驗せるに示度氷點下三十二度五に下降し居たり、之れを昨年の示度に比すれば三度八低く、亦既往八ヶ年平均に比すれば、六度六低く、殊に八ヶ年中の最低たる三十七年の氷點下二十九度に比するも尚ほ三度五の低度にして、本年前同山頂に於ては例年より氣温著るしく低下したり。

富士登山の新道
（實は舊道の修理復活）

富士登山と云へば、何れも大宮口、御殿場口、須走口、又は吉田口より登り、須山口なるもの有るを知らぬが多し、此須山口は、最も古く開通し、且其道筋には古蹟に富めり、今回同地方の有志が、舊址舊蹟の頽廢を憂へ、舊道を修繕して車馬を通ぜしめ、登山者の便を圖り居れり、殊に此の須山口は、他の登山口よりも山頂迄の距離最も近く、佐野驛より頂山迄七里（佐野驛より須山迄三里須山より頂上まで四里）なり、今沿道の名所舊蹟を列記せば次の如し

▲佐野原神社　は建正二年箱根竹の下の戰に後醍醐天皇の皇子尊良親王を奉じ賊將足利尊氏と戰ひ討死せし左近衛中將藤原爲有親臣を祭る（佐野驛より僅二丁）▲佐野瀑園　は園内に五瀧あり曰く雪解の瀧、富士見の瀧、銚子の瀧、狩衣の瀧（佐野驛より十二丁、佐野ホテルあり和洋の料理宿泊ともになす）▲景ヶ島　は聖德太子の開基にして天然の岩石へ觀音の像を刻したるなり堂宇古し、▲屏風岩　は景ヶ島附近にあり宛然屏風を建てたる如き天然の岩石あり▲桃園親王の陵　は鈴木農場内にあり親王は清和天皇の皇子桃園貞純親王を祀る皇子嘗て富士駿東二郡を領せられ延喜十六年此富岡村桃園に薨ぜらる▲宗祇法師　は紀伊の人にして常に連歌を好み自然軒と言ひ心敬宗砌等に就き就學したり所謂古今集なるものは實に法師の蘊蓄に出づ文龜二年七月年八十二にして享す挑園の山中に現存しあり▲堂ヶ尾神社　は須山村西北一里を隔て昔時石井常右衛門が此神社に誓願したるとありと里俗の口傳あり祭神瓊々杵尊▲氷穴　は須山村大字十里木附近にあり常に結氷しある穴は木造二階家の如くにして各八疊敷三間宛あり▲腰切塚　は建久四年源頼朝公富士牧狩の當時炊事場の跡なり馬白水御釜塚抔の稱あり其釜は現今沼津町なる日枝神社の寶物として同社に保有す▲須山口胎内　は入口九尺方にて奥行三十間穴の奥に子安神社あり祭神は木花開耶姫命▲須山口一合目　は雲切不動尊の肖像を役行者の彫刻したるあり又御室淺間と言て丹正神社あり▲寶永山の鶴巣　と言ふ口傳あり數仞の嶮岩にして人足の不及所に巣形のもの見ゆ是を稱して鶴の萬年巣と云ふ。

飛驒山脈の晩雪

本年七月七日夜、飛驒國大野郡吉城郡の奥山、所謂飛驒山脈なる槍ケ嶽穂高山、乘鞍岳等に降雪あり、七月の雪は、古來稀なる事實なりと、同地方の古老は言ひ合へりとぞ、同月八日の岐阜發電に曰く、吉城郡上寶村地方は、本月一日以來寒氣强く、三日夕景より、硫黄嶽槍ケ嶽笠ケ嶽は、何れも盛に降雪あり、斯る事は古老と雖も未だ聞かざる所なりと。

外人の淺間登山談

巴里なるニユルソン出版會社々長にして、金子子爵賛助の下に日本案内記を編纂すべく來朝中なる獨逸人シロムバツハ氏は、ツエルフエルド氏外一名と與に六月五日淺間山噴火探險に赴き、此程歸京したれば記者は同氏を訪ひて左の談話を聞くを得たり（報知新聞）

余等一行は先づ輕井澤に赴きたるが、上野を午前六時に發して同地に着し、午後十一時萬平ホテルにて、案内男一人と馬三頭を雇ひ入れ、午前二時にヲカザレの茶屋に着す、豫れて東京より一切の食物は持參したる事とて、此の茶屋にて若干の飲食を爲し、これより徒歩にて終夜山頂に向つて進みたるが、午前三時半ごろには一大鳴動を感じ、地震ありし如何に勇を鼓するも内心には何時大破裂の來らずとも限らずと心配しつゝ何となく不安の念ありき、中途よりは一面燒石多く、歩行甚だ難く加ふるに深夜の事とて一人が少しく歩速を强むれば見失ひ、互ひに聲を擧げて同行者三人間の連絡を保ちつゝ何度となく仆れたり、山上は日出は無論なるが、四時廿二分に於て日出で余等に一大快感を與へたり、八千五百尺の高さにありて太陽の第一光線を受くるの美は到底市に生存せる安樂黨の享受し難きものなり、四時四十分初めて山頂に達すれば燒石バラ〳〵と落下し來る中には拳大のもありて危險極まりなく帽子は大分損ぜられたり、偖て山頂にては硫黄の氣强く、呼吸甚だ困難なるより各自手布を口にあてがひ、白煙を吐きつゝある噴火口に接近して其の周圍を一周したるが、恰かも三十二分を費せり、噴火口の内方を覗きたるが三人は各々紐を以て身體を縛し、覗きつゝある者を後方より保護したり、此場合呼吸は硫黄氣の爲め少しも出來ず、危さと苦しさは口にて述ぶる能はざりき、而して噴火口の奥には地獄の火の如く紅色の火は炎々として湧きつゝある光景は凄きと極まりなかりき、山頂にて空腹を感じたるも硫黄氣の爲め流動物の外、口に運ぶ能はず、流動物すら飲んとすれば仲々苦しかりき、然れども此の大苦痛に伴ふ愉快は亦た絶大なると同時に淺間山より草津へ出づるの道を歩すれば恰も天國の如く美にして、世界の漫遊客に對して淺間山訪問は勸告せざるべからざるものなりと思へり。

淺間山實況踏査

五月廿六日午前九時北佐久郡に强烈なる地震あり、爲に淺間山噴火口の周圍に一大龜裂を生じ、坑内に陷落せんとするの狀況にて、萬一陷落せば更に甚だしく噴火すべく、往時天明年間の慘狀を再演せんかと、山麓部民は戰々恟々たり、今精密なる踏査の結果左の實況を報告す。

▲噴火口の一部、銚子口の龜裂　但上州に面したる部にて、一は十間、一は五間程龜裂の最も廣き部分も幅一寸に過ぎず

▲牙山中間の一小角岩の崩落

▲長坂の手前大澤左手の岩石崩落

▲前鉄山第二期噴火壁約廿五間の崩落

▲黑斑山鐘岩の上部の一角盡く崩落　疊四枚敷位の岩石三個二疊敷程のもの數個を認む

牙山以下の崩落は地震の爲の崩落にして今後の噴火に何等の關係なし。只關係は上記の龜裂なれども小部分に過ぎざれば、全部陷落するも多少の鳴動はあるべけれども、要するに左の結果たるべし

▲世人の危惧する天明の二の舞の如き慘劇の虞ある狀を認めず。

淺間山は何時破裂するか

△大噴火は四五年の內？　近頃信州淺間山の噴火口附近に大龜裂を生じ山麓の諸地方に强震があつて以來祖先以來遺傳的に淺間山を恐れて居る附近の人々はヤレ牙山（第一期火口丘）が飛んだの、大噴火の前兆だのと種々の說を傳へて心配して居る樣である、同山過去の噴火の歷史によると恰もこゝ四五年間が生憎大噴火の時期になつてる。

有史以前の事は判らぬが有史以後の最初の大噴火は白鳳十四年、三月で即ち今を去る千二百十九年、其れより大永七年四月の大噴火に至る迄約八百四十餘年の間に一回の噴火の記錄もないのは噴火はあつても記錄に洩れたのではないかと云ふ說である、大永以後明治三十二年に至る三百七十餘年間に大小廿五回の噴火があつたが其れを平均すると約十五年毎に一回の割合となる、最近の小噴火のあつた去る明治三十一年から數へるとこゝ四五年內は怪しい樣に思はれる、然し火山の活動は算盤で割り出した樣には行かず其れより早いか遲いか奈落に續く噴火口底の神秘は到底人間の力で確かと判斷し得るものでない。

△噴火の多いは上半年　試みに白鳳以來明治年間に至る同山噴火の月を調べて見ると一月から六月迄に十六回、七月から十二月迄に十回即ち上半年が一番噴火が多い、中にも正月と四月とが最も多く六、七、八、九月等は少ない方であるが、彼の有史以來の最大噴火と稱せらるゝ天明度の噴火の如きは其の小ない七月に起つて大慘狀を極めたのである。

△烟が止まると危險　天明三年即ち西曆千七百八十三年の七月に於ける淺間山は未曾有の大爆裂で當時の記錄を讀んだばかりでも覺えず悚然とする位である、其の大噴火前の淺間は如何であつたかと云ふと約五年程前から噴烟が止まつてしまつて天明三年の春から少しづゝ復た出始めた、其の煙を見ると西方に消えて行くので『煙が西へ行くは噴火の前兆!!!』と云ふ古來の傳說を信じて居る山麓の人々は非常に心配をして居た、スルト果然七月に入つて大噴火が初まり赤熱した熔岩は四方へ流下し大地は絕えず鳴動し、硫煙は十里四方を鎖して、捲き立つ黑煙迸る水蒸氣の間から閃くは電光！火山彈の雨熱湯の川、草木を燒き盡し人畜を果たし最早此の世も終りと見えた光景は何なであつたらうか。

△東京に灰を降らす　天明の大噴火の際淺間山麓を圍んでる小諸、御代田輕井澤其の他の町村が如何なる慘害を被つたかは詳しく云ふ迄もない、直徑一尺計りの赤熱した岩石の雨が降つた爲めに輕井澤村で約五十戶の家が破壞されたのでも判る、熔岩の爲めに、『無限の谷』が埋つてしまつて第二外輪山なる前掛山（二四九五米突）と同じ位の高さの山に變じたのでも知れる、犬や猿、鹿等は皆熔岩に打たれて根こぎになつた草木と共に利根川に流れ出した、其の時吹き散らした灰は非常なもので輕井澤で四尺、碓氷峠で五尺坂本宿で四尺高崎で一尺東京へ一寸許り積つたとやら、當時上州方面へ大害を與へた六里ヶ原の熔岩道は『鬼押し出し』に名を止めて黝黑の怪岩永く當年の慘況を語つて居るではないか。

△崩壞せんとする噴火口　地學上の淺間山は此所に說く積りはないが、

同山は本邦最高の活火山である事は記憶して居て貰ひたい、有名な九州の阿蘇山は海拔僅かに一五八三米突、霧島山一六七七米突『めあかんふすま』で名高い北海道の雌阿寒嶽の如きも標高五千三百三十六尺といはれて居る、例の磐梯山は一七七七米突、吾妻山は六千五百十一尺であるに淺間山に至つては實に八千百八十四尺、噴火口は直徑一千尺、周圍二十町深さ一千尺許り上州の方に向つて少し傾いてる、寫眞にある銚子口は火口壁の重要な部分で此所から岩角に縋つて噴火口底の物凄き光景を窺ふことが出來る例の淺間宗の人世不可解連が焦熱地獄に飛込も此所から行のでは右手の岩の側に其等厭世狂の爲めに供養の塔婆が立つてる、實際此邊は噴火口に突き出て居て地下何尺かの下は刳つた樣になつてるから今度の樣に大龜裂を生じれば頓て居大坑の底深く猛火の内に陷落するに違ひない、嘗て其の一角に立つた自分は是を想ふと一種云ふ可からざる感に打たれる、何時崩壞し陷沒するか、而して後淺間は如何になり行くであらうか（中央新聞、神東生）

中禪寺湖中に包める秘密

△死體を隱せる神秘の水　六月四日、香港駐在英國陸軍大佐マーテン氏は日光中禪寺湖に舟遊中、颶風の爲めに轉覆溺沒し、死體捜索に非常に苦心せるが竟に發見せずして止みたり、何がさて日光の山奥に湛えた千古の碧水、無心の雲を映し天上の星を湧す寂寥たる神秘の氷の底深く沈み去つた異鄕の人の屍一つ、暗き〳〵底の藻屑の間に今如何に横はつて居るであらうか、

△地學家の談話と新聞の誤謬　椿事の發生と共に部下の諸新聞に掲げられた記事は中禪寺湖の深さに於て水質等に於て等しく同樣の誤報をして居る、其れ故記者は此の際を以て同湖の學術的秘密を紹介し樣と思ひ日頃異彩ある地學家として本邦唯一の湖沼學著として尊敬して居る田中阿歇麿氏に乞ひ最近の研究談を聞いた、

△恐るべき水深　中禪寺湖は周圍六里二丁、面積千二百四十九反七畝二十歩大さは丁度箱根の蘆の湖に似て湖岸線は更らに長い、海拔千三百六十米突即ち約四千四百八十八尺の地點にあるので有名な大谷川の源をなし、例の華嚴瀧直下九十七米突三十六（三百二十餘尺）が其の落ち口にあることは誰も知つたる通りである、其の水は非常に深い爲めに從來誰れも測つたものはない二十年程以前某外人が百米突の繩を下げて見たが底迄届かず後水産講習所の生徒が行つて百五十米突の繩を下げて見たが矢張り最深の所は測り得なかつた、斯くの如き次第で中禪寺湖は遂に底知れぬ湖とまで謂はるゝ樣になつたが三十九年に田中阿歇麿氏が約百ヶ所、四十年に丸川久俊氏が百ヶ所總計二百餘ヶ所を測量した結果湖底の有樣は初めて判り永い間の疑問が解かれたのであつた。其れに依ると湖水の奥即ち千手ヶ原に寄つた大半は比較的底も平で深さも百米突前後であるが華嚴瀧に寄つた一半は非常に複雜で凹凸多く泥土もあり岩石もある中央部は先づ百六十米突（五百二十八尺）の深さの場所大區域を占め上野島の東に於ては實に百七十二米突即ち五百六十七尺六寸の最深點に達するのだ即ち華嚴瀧の高さよりも尙ほ百四尺六寸も深いのだから驚く、本州には澤山の湖水があるが深さに於て是れ以上のものはない。

△不思議にも冷たき水　此の湖の他の湖に比して特色のあるのは其の深さはかりでない其の水の溫度が不思議な程に冷たい事である、田中氏の觀測の結果によると三伏盛夏の候でも尙ほ攝氏十八度で是を蘆湖の二十四度五十讀訪湖の二十八度に比ぶると如何に此の湖水が冷たく寒いかゞ判る、深い所へ行くと溫度も次第に低く深く深さ四十米突（百

○雜　報　中禪寺湖中に包める秘密

三十二尺)乃至五十米突(百六十五尺)の邊に至ると四度に降る、秋になると水の表面九度位になる頃は丁度夏の間表面に受けた溫度が初めて、下の方に傳達する時で下の方は比較的溫かになり四度の溫度は百米突(三百三十尺)以下になつてしまふ其れから後比重の關係と冷却の有樣とにより水溫は混亂して遂に全水層悉く四度となり、二月より三月にかけて表面更に冷却して零度前後となり二十米突(五十六尺)の深さに至つて初めて四度となる、それから段々と春に向ひ日增に溫度加はるに從つて全層再び四度となり初めの如く繰り返すのである盛夏湖上に舟を泛べて遊ぶとき深層の冷水を採水壜に酌み上げ一盃飲むと氷水にも勝る程の靈水が飲める見れば只藍の濃つた樣な靜かな水に斯くの如き不思議なカラクリのあるとは愈々面白い。

△然し冬も氷結せず　嚴冬には諏訪湖も氷つて人の遊べる位になり東京の眞中の御濠さへ氷結するのに諏訪湖よりも寒冷な此の湖は云ふ迄もなく厚氷に張りつめられるだらうと思ふと大間違！事實は丸で反對で不思議にも冬凍つた事はない、其の原因は無論水の深い爲めと水溫の對流作用と曰ふことの爲めに全體の水が常に上下循環して居るからである。然し明治十八年に季候の非常に寒かつた爲め湖の華嚴に寄つた方が半分氷結し中宮祠から向ひの合瀉に人が渡つた事があるコンナ事は前後タツタ一度である。

△落たら上れぬ　淡水は鹹水より比重が輕いから泳ぐに困難な事は云ふ迄もないが此湖の水質は比重特に輕く殆んど蒸溜水に比すべきだ漁夫も一度落ちては只泳いだ所で容易に上れないものと知つて非常に恐れて居る又是れ迄落ちても決して上つた例がない、其れ故死ぬまでに持つて來いと云ふ場所で袂に石を入れないでも死體の浮き上る氣遣はないのだが此所には未だ一度も投身者がなく却て流れ口の華嚴の方が繁昌するのも不思議と云ふ可しだ。

△華嚴瀧へ隧道　此の湖の流れ口は大尻で其所から急に淺い河となつて八町許り流れ華嚴の瀧へ落下するのであるが水量の多いのは夏の內ばかり冬湖面が低くなると瀧の水は減じて遂には落ちなくなつてしまう、然し其所に不思議なのは瀧の中程から出る澤山の水で誰も初めは清水が湧き出て瀧となるのだと思つて居たが能く〳〵調べると面白い、其の實は瀧と中禪寺湖との間が孔だらけの熔岩になつてるので水の爲めには丁度好い隧道斯くて上水は明い所を通つて華嚴の本瀧となり下水は壓力の爲めに此の粗鬆なる暗い孔を潛つて中途から迸り合して大谷川の清流となるのだ。

△凄い程透明　尙ほ水に一の特色のあるのは非常に透明で濃藍色を呈して居る事で夏季は一體有機物が多い故水の不透明な時なるに係はらず冷たい爲めと極めて色の濃き爲めとで透明で直徑二十五サンチ(八寸二分五厘)の白色の板を沈めると凡そ十四米突五十(四十七寸八尺五分)の邊迄明らかに見えるか斯くの如きは一般の湖沼には殆と類例が少ないのである。

△高山養魚地　此の湖には昔は一尾の魚類も居なかつたのであるが近年次第に繁殖して今では漁業で生活をする事も出來る樣になつたそれに水が前に曰つた如く冷たいので水產局で鱒其他の魚を孵化放流し年年捕獲する事になつてあるが其れも水が深い爲めなが〳〵困難だと云ふ話である鱒や何かの上等の魚を避暑外人の食卓に上り『あかはら』の樣な下等の魚を足尾邊へ出す樣になつたそれから昔ては米國產の魚を放つた事もあるので時々名も知れぬ不思議な魚が網にかゝることがあるさうな、此の點に於て是れも日光にある高山植物園に對し高山の養魚地と云つてもよい。

△血の如き水　此所には一種固有の浮遊生物が或る季節になると發生する其の分布は奥よりも口元の方に多い、其れは風の爲めにも依るが又人家が多いので自然飼料が澤山あるからでもあらう、盛んに發生した時は一面血の池の如く赤くなつて濾過せれば飲めない程だ、そして濾過すると布迄が赤くなつてしまう。

△湖底の大半は暗黑　斯くの如く物凄い湖の底の大半が常に暗黑であると聞いては更らに恐ろしく感じられる一體最も感光度の高い夜間星の光まで感ずる樣な寫眞の種板も普通には深度二百米突(六百六十尺で最早日光に感じなくなるので深度百米突(三百三十尺)になると餘程薄暗くて鼻をつまゝれさうである、然かも一日中に此の深度で日光の照射を受くる時間は極めて短かいのであるから如何に底部が暗いかと云ふ事も又死體の捜索の困難も推察せらるゝ、それから水中に植物を見るのも日光透達の限界と略ぼ一致して居り且つ綠色の藻が繁茂して居るのは深さ六十尺乃至九十尺が關の山であるから非常に深い所には藻がない筈である。(中央新聞、神東生)

筑波山上の紀念圖書館

故山階宮殿下には金枝玉葉の御身を以て畏くも高山觀測を思ひ立たせられ、去る三十五年一月以降海拔八百七十米突の筑波山上に模範觀測所を設けさせ給ひ、熱心に氣象學を御研究あらせられ、數年來の御經驗は我が學界の爲めに著しき功果を齎らさんとせしに不幸にも殿下は今年夏の初めに當りて御薨去遊ばされたれば、御經營の觀測所は將來如何に成り行くべき乎と、心有る者はいたく憂慮しつゝありしが、茲に永く宮殿下の御紀念として此山上に圖書館を設置せんとの計畫は端なくも茨城縣下の有志者間に起り、同時に殿下の御銅像をも建て奉なんとの議略ぼ決定したりといふ、該圖書館には、主として氣象學に關係ある書籍のみを集め、又故宮殿下御遺書の御寄贈をも仰ぐ筈にて、既に其許可を得たる由、而して右御遺書の大部分は、氣象天文に關する獨逸の原書亜に雜誌等あるやに承はる、但し殿下御經營の觀測所の方は、今猶故宮家の手に在りて、今後茨城縣官民の經營に屬すべきや、或は中央氣象臺の直轄に屬すべきやは未定なり、故宮殿下が氣象學に御熱心なる御病中一日も天氣圖を手離し給ひしとすら無き程なりしかば、故宮家にても去る九日の百日祭までは、毎日中央氣象臺より、特に御送付申上げ居たりし天氣圖を必ず御靈前に供へ奉りたりとぞ、因に震災豫防調査會は、豫て筑波山上に設置したる大森理學博士發明の地震計を、近日更に大改良を施して改設すべく、又茨城縣は此處に物産陳列所を設けんと計畫中なれば、今後筑波山は、實に好個の學術研究所となるべし。

燒岳の話

八月七日「東京日々」の記する所、左の如し。

信飛の國境なる燒ケ嶽は、從來休火山なりしが、昨年十二月十日俄然噴煙し、本年二月五日に至り大鳴動と共に島々、波多等八九里を離れたる地點まで、熱灰を降らせしことは當時既載の如くなるが、數日前記者が親しく探檢したる所を報ぜんに。

▲燒ケ岳の性質　燒ケ岳は元信州地方にて唱へし名にて、飛驒にては硫黃ケ岳と稱し、高さ八千百八十七尺ありて、飛驒側七合目邊の線を信飛の境界とし、山質は銀鑛、鐵鑛等を含むものゝ如く、麓には熊篠丈餘に及び、五合目邊までは雜木生長し、其れより七合目邊までは高山植物にして、這ひ松と稱する丈け低く幹太き松樹一面に繁茂し、地表層は砂

利なれど、數尺を掘下すれば褐炭に似たる地層を有せり。

▲噴火の光景　同地安蘇小林區署の山崎森林主事の談に依れば、噴火の際は蒼空に一片の雲も無かりしが、午後突如として幅一間餘の雲の如く白煙、燒ケ岳の頭上より發し、島々より松本附近に及び、熱灰は五分の厚さに積りしが、爾後宛ながら鞴の如き音響を發する毎に、硫黄の惡臭を伴ふ熱灰を、一日一回位撒布したり、然れど當時は幸に積雪ありし爲め、火災等の災厄は、之を免れ四月頃やゝ鎭靜し、昨今再び噴煙を高めたりと云ふ。

▲噴火後の燒ケ岳　記者が調査したる所に依れば、頂上の地熱は四十一度二分(攝氏)氣壓五百七十、二にて氣溫は二十度噴煙の度を計らんとせしも最高溫度四十五度の計器なりしため、遂に精確に調査する能はず、跳足にて七合目邊より頂上へかけ歩行するに、地熱のため歩む能はず、雪解けも例年より一ヶ月早かりし由にて、六月十二日に露が全く降りずなり、山頂の遺ひ松、先づ枝葉より枯れ、記者の登山したる時には、稀れに水草に似たる草の葉は枯れ、莖のみ青きがありしも、七合目以上には植物悉く枯死し居たり。

▲噴火坑と動物　噴煙は硫黄質の瓦斯に熱灰を交へ、噴火坑は中央の大なるもの、直徑四五町に亘り、此の大火口を圍みて六峰あり、其の四方に無數の岩穴ありて、此處よりも熾んに噴煙し、三時間に一回位の鳴動あり、鳴動の際は特に硫黄瓦斯を放散し、此が爲め前記植物の枯るゝ他に、動物も殆ど全く山を降りしものゝ如く、終日山地を跋渉して僅に兎一匹と、蛇の死骸を一つ發見したるのみなり、尙ほ噴煙の際は、火口より硫黄交りの熱泥土を流出する爲、南側の溫湯せる谷川を埋め居たり。

箱根初花の瀧

東海道の或旅宿には、獺次郎兵喜多八の御宿を誇りとせるがありと聞きたるが、こゝに淨瑠璃本にて名高き、壁勝五郎に因みたる、初花瀧といふものこそあらはれたれ、勝五郎の事實詮索などは、今更言ふもくだなり、その瀧の何物なるかを「都」新聞より、左に拔萃す

箱根八里はナアの雲助唄を古松に絡む蔦の葉風に昔を忍んで函嶺の古道を須雲村まで登れば、雜木林のお美代の茶屋老い耄はいて尙ほ昔を忘れぬ木地盆片手に、澁茶溫めながら双子の帶雲切れたれば、明日も天氣宜しと、元氣好く詣る媼の掛茶屋より、岩を嚙む奔湍白き須雲の激流を隔てゝ、千尺の絶壁より醇蒼たる綠を破つて、萬斛の水晶屑の倒瀉する三段の瀑布見ゆ、是ぞ箱根の富豪田中庄吉翁が、十五年の苦心に拓き得たる初花の瀧、忍瀧なり、翁は箱根古蹟の保存に力を盡し、早雲寺の維持を講じたるが、紅葉があるのに雪が降ると野邊に草打つ里の童の戯れ唄にも膾炙する、壁勝五郎夫婦が雨露凌ぐ蒲鉾小屋、差掛けし場所と云ひ傳ふる巖も、文久元年十一月和宮君江戸御降嫁の荷物、御道中に妨げとあつて、道の傍への谿底へ轉び落し、巨杉老檜根を穿たれて、名殘なく取拂はれ終りたれば、切めては烈女初花が三七日間夫の業病平癒の爲め、箱根權現に身を捧げて水垢離取し瀧に昔を偲ぶ便もありなんとて、或は口碑を尋れ、或は絶壁を攀ぢ、漸く二段の瀧を踏査し得たれども、削るが如き懸崖に危岩亂立し、更に楓柏の鬱蔓すれば、近き難く見へたれど、毫も屈せず、石を拓きて路を通じ、溪にも橋を架け渡し、十有五年の經營慘澹の末、五段の瀧を二段までは瀧壺まで登らる、やうになし得たり、即ち第一段は忍の瀧、幅は約三十尺瀧の落口より瀧壺まで凡二十間、瀧は二道に分れ、右は華嚴式、左は奈

智式にて、淙々と落る水聲四邊に反響して、物凄く水煙は陽光に映じて虹を現はし、美觀壯觀、共に塵世のものにあらず、更に絶壁の棧道を攀づれば、忽より尚十間も高けれど、球簾式の和き瀧は、勝五郎の妻初花が、終日瀧壺に身を浸して、夫の平癒を祈りしところと傳へし初花瀧なり、第三段は水勢猛けく逞ましき平山式の瀧なれど、道嶮しくて登るべからず、其上の兩個の瀧は、唯青葉隱れに轟々の音を聞くのみ、然れば田中翁は初花忍の兩瀑布を拓き得たるを一段落とし、忍瀧壺の邊に數寄を凝らせし山莊を設け、此處に老を樂しみ居るが、箱根の古道を過ぎた時、此瀧を見んと思はゞ、翁は喜んで瀧の水汲み、苦茗を煮て夜と共に昔を語るなるべし。

岩手山登山會

東北の名山岩手山は、鄕社岩手山神社を祀り、古諸侯伯の崇敬篤く、社領の寄進あり、社運盛大を極めたるも、維新後全く社領に離れ、三千二百町の境内地も、上地を命ぜられて、財源の大半を失ひ、刻下衰頽に及びたるを、社司小原兄廣氏、一意その恢復を計り、寢食を忘れて奔走したる結果、朝野の諸名士の協贊を得て、三千圓の寄附金を募集するを許され、經營の效空しからず、本年七月四日を以て、岩手山神社竣工式を擧げられ、盛會をきはめたり、當時參列せる盛岡市長某の祝詞の中には「今や身體の鍛錬に、精神の修養に、學術の研究に、高山峻嶺に攀登するの氣風邦内に勃興し、山岳會なるものゝ成立をさへ見るに至れり此時に際して、此土工の竣成に遭ふ、歡喜何ぞ堪へむ、伏して願はくば山神の長へに登山者の安泰を守らせ給ほんことを」などいふ文句、見えたり。

この期を外さず、廢手毎日新聞社發起となり、八月一日、二日を以て、岩手山登山會を擧行する事となり、募に應ずるもの約百三十名、之を四部隊に分ち、「登山歌」なるものを謠ひて、勇ましく登山したりといふ、歌は「勇敢なる水兵」と同譜にして左の如し。

一

そそり立ちたる大嶺は、
奥の國原ふりさけて
かしらただちに雲に入る、
七千尺の岩手山。

二

花みな匂ふ躑躅の
つづく一路をふみさくみ、
明暗ここに二を分かぬ
天のはてまで登らまし。

三

なびく山なみ、綠牧、
いかに、我等が行くを見よ、
光の爽霧、黑曜の
岩根にうたふ歌を聞け。

四

はざまを駈ける山風も、
麓をめぐる雷狼も、
こだまに返へせ、あゝ寶坐、—
無上とたたふ歡喜を。

猶小原祠司は、岩手山登岳を盛大にするため、及び岩手山神社の宏壯を昔日に回復せむために、屢ば上京して熱心に有志者の間に奔走したるが場合によりては、名流を聘して岩手山に關する講演や、文章を乞ひ、その傍聽料や册子販賣等より得たる收入を擧げて、維持費又は道路開拓費に投じてまでも、素志を貫かむ覺悟なりと云ふ。

大山石尊の秋祭

日本武尊が東夷征伐の折此の山の頂に登り腰を休められた其の廢石が俄かに撥ね返つたので、尊は此石尊しと仰せられたとか土地の口碑に殘つて、大山石尊は千有餘年來靈山と崇められ、阿夫利神社と祀られ、富士の淺間神社と一に並べ、特に東京附近の人の信仰を集めてゐる、されは大山町千八百の住民は土地に格別の生産物もなくて、只此石尊樣の餘澤

に浴してゐるので毎年夏季登山期中の繁昌謝恩の爲め春秋二季に大祭を執行する例になつてゐる、本年も去る八日から三日間祭禮を擧行したが、元來此祭は全町六ヶ町が各々年番で執行するので、年番に當つた町は假宮を拵へ、舞臺を設けて祭事一切を負擔することになつてゐる、扨て八日には町民は麻社衣、御師は束帶で太鼓、大旗、小旗、鉾、眞榊など式の通り俗人の樂に伴れて神輿に隨ひ、肅々と練り出す、總勢二百餘人長い石段道の大山町を練つて假宮に着、其夜は神前に能樂があり、舞臺では神樂が上る、翌日一日假宮駐輿祭典がある、神官の祓祠大麻行事、總べて壯嚴を極めたものだ、それが濟むと舞人舞童、白拍子の舞がある、其夜も神樂が上り、翌日前のやうな行列で還宮となる、都て莊嚴と古雅に始まり、壯嚴と古雅に終るところが、誠に奥床しく思はれた。

蝦夷富士の大火

後羊蹄山(蝦夷富士)は六日より山火事起りて今は燒つゝあり、原因は雨乞の迷信より點火したるが爲なり、此外各地の官林にも山火事盛に起り、乾燥せる爲め、消火し難く、降雨を待つの外なし。

臺灣山岳の鳴動

臺北特電に曰く、八月三十日午後一時より臺東廳バトラン蕃界の西北に方り、山岳鳴動し、二日朝に至りて、歇む、後山頂に陷落の箇所あるを認めたり。

高山植物界會の流行

高山植物の採集は、頻年流行の兆あり、本年も各種の催あるが中に、小石川植物園の牧野富太郎氏は、八月一日講習會員を引率して、富士に登山をなし、更に八日頃より信州白馬岳に登るの企あり、日本園藝研究會にては八月初旬會員を募集し、志村烏嶺前田曙山兩氏先導となり、信州八ヶ岳の各峰頂に攀ぢ登り、採集を試むべく、千住の原田八十七氏は陸中の早池峰山に登山すべしといひ、猶ほ夏期休暇を利用し、遠くは滿洲千島樺太等に旅行し、珍卉異草を採集せんとする篤學も尠からずと聞く、又六月初旬薫風園主人藏石氏は、五尺餘の積雪を踏破し、八ヶ嶽の絶頂に達し、布袋闊敷十株を採集歸京したるか、是れ恐らくは本年の先第一なるべし、又此程山草同好を團子坂下の薫風園に開きたるに會員の出品數十種の多きに達したるが、中に澤勘三郎氏の白花うてうらん、及びえそぼうふさとはくさんふうろの寄植、玉川ほとどす草、田島氏のひとつばしようま奥野市次郎氏の姫みづいちやう、大畑多左衛門氏のいわいんちん、藏石氏のなろこすげ、小川公證人のくもまきんばうげ又はあさぎりそうとあきぎやうの寄植ゑんびせんのう、橋本氏の砂糖楓樹等最も珍らしものなりき。

投書一束

雜誌『山岳』に對する意見

「山岳」の發刊し始めた當時は、非常に面白く讀んだ、けれども近頃になつて、何だか振はなくなつた樣な感である。これは敢て壹人の感ではないので、他の會員や會員以外の人にも、同じ樣な事を云ふ人がある。さうして見ると、或は數百の會員の一部の人が、こんな考を抱いてをらるゝのではなからうか。果して然らば本誌の改革上、一刻も猶豫すべき事でないだらう。僕は聊か其原因を檢べ、其改善策を講じたい。勿論編輯せらるゝ諸氏も、本業以外に、僅かの暇を以て、御盡力下さるので

編輯上に起因した缺點ならば、我々は出來るだけ、我慢もしてやるし、又そんな缺點は、大して障りもしないと思ふ。然し僕の缺點と思ふのは編輯上の缺點でなくつて、根本的の缺點である。

元來山岳會の設立せられたる主意は、山に關するあらゆる事物を、あらゆる方面から研究する事で、其方面が科學にのみ偏せられればならぬ必要もなからうし、文學的の觀察でも差支へ無いわけである。然し僕の最も面白くないと思ふのは、科學的記載でもなく、それかと言つて文學的の著作でもない樣な、記事が、近來の山岳に載つてゐる事である、尤もそれが、記事の一部分をなしてゐるならば、兎も角、卷を盡して比々皆此記事ならざるなきに至つては、僕も非常に失望する次第である。この點に於て、發刊當時の「山岳」は、多少此區別が附いて居たかの樣に思ふ。否ついて居ぬ迄も、屢は專門家投稿があつて、非常に美事であつたが、近來は其の樣な記事も稀になる、後には餘りに秀逸な記事がなくなつて、只紀行文の內から山岳に關する者を選び出したのを集めた樣な觀がある。然り日本の有名なる山岳（山岳と名のつく山）は、高が知れてゐるから、一通り紀行文を揭げ終ゐ、と其種が無くなる樣なわけである。勿論一つの山に明るくなるには、一通りの紀行文で充分ではなからう。時節にもよるだらうし、登路も澤山ある事であるし、其時の天候も種々變つてゐるだらうから、幾個紀行文を揭げたつてもよい樣なわけであるが、只無秩序に紀行文を雜誌に載せたのみでは、讀者が興味を以てこれを讀む事は、到底出來ぬ、且山岳會の機關雜誌として、餘りに價値なき感があるではないか。僕はそれ故に思ふに、記事に、多少制限を設ける、即ち文學欄には文學的研究の作物を揭げ、科學欄は或はこれを數小欄に分ちて、植物に關する記事は植物の欄とか動物學上の記事は動物欄とか（尤も欄の設け方法は種々ある故、識者の選ぶ所たるべし）云ふ工合に分ちて、各欄に適當なる記事を集める樣にしたらば、自然、以前の「山岳」に見えた樣な、なまじい文章を避け得ると思ふ。何しろ今迄の樣な箱の內にゴッチャゴッチャに種々の物を納れるよりは、箱の內に區劃をして、物を納れた方が良い樣に、記事が整頓せられて、讀者に與ふる興味も深く、讀み厭くと云ふ事もない。一向まとまらぬ意見であるが、これは僕の熱誠から出た言葉である。若今の樣にして進行したならば、前途大に憂ふべきものであると思ふ。敢て諸員の一考を煩はし度き次第である。（札幌農科大學孫科生原田三夫）

會員章を造りては如何

……尙ほ賞意を得たきことは、本會にても何か會員の章を、御造りに相成候ては如何のものに候や、嘗て承はれば、アルプス倶樂部等にては、雪割章？の記章を造り、會員は、それをつけて登山するとのことに候へば、本會にても何か記章を造り、全國の會員に實費を以て頒付することに成されては如何、さもなくば、會員なりとも、名簿の外何等の章とては無く……たとへ高山大岳に登り候とも、本會々員なれば、特別の扱ひあるときも、章なきため、不幸の取扱を受くること無きにしもあらず、宜しく御高案の程願上候。（岩手　小笠原謙吉）

北海道高山の初雪

九月二十七日「北海道タイムス」の報ずるところによれば、其前日上川なる同社記者よりの電話に、二十四日本道の高山なる上川郡ヌタツクカムムシュベ山に初雪あり、數日前より陰雲に蔽はれし山巔の昨朝に至り、霽れたれば、初めて之を發見したるが、例年より四日遲く、昨年より十日遲く、而して昨年の降下當日は、最低溫度攝氏九度二分にして、

本年の廿四日最低溫度七度九分なりし、今最近三ヶ年に於ける同山の初雪を擧ぐれば、三十八年九月十七日、三十九年、九月九日、四十年九月十四日にして、同山の初雪後約一ヶ月にして平地に初雪を見たる例とせば、今後平地の初雪は、十月三十日頃なる可く、尙ほ昨年に於ける、各測候所管内の初雪を擧れば、上川、札幌、釧路、十勝、函館は孰れも十月二十六日頃次は、壽都の十月三十一日、網走十一月一日根室十一月十四日、襟裳十一月十八日、紗那十一月三十日なりと、尙ほ倶知安なる後方羊蹄山巓には昨朝初雪ありたりと、同地通信員より電報ありたりといふ、翌二十八日の同紙は又記して曰く、倶知安なる後方羊蹄山に、一昨廿六日初雪ありたる事は、既報の如くなるが、初霜は本月六日に降下し爾來數回の降霜あり、二十三日以後、頗る寒冷を覺え、二十五日午後よりは、更に一層の冷氣を感じ羊蹄山巓には濃雲を認めたるに、二十六日朝雲霽るや、山巓一帶白雪皚々たる初雪を見るに至れりと。

交換を望む

一コホロギランの標品あり他品と交換を希望す（但三名限り）

一同上生品あり他品と交換を希望す（但二名に限り試培中活着せざれば交換謝絶）

愛知縣名古屋市南區大手

會員　後藤關治郎

會　報

特別會員荻野音松氏逝く

特別會員荻野音松氏は、本年七月廿八日、午後十一時に逝去せられたり、氏は明治十五年九月一日東京日本橋區に生れ、二十一年七歳にして初めて小學校に入り二十七年東京府尋常中學に入校、卒業後、高等商業學校へ入學せられ、三十八年本科卒業、次いで專攻部に研究せられ、四十一年六月論文提出に及ばれたるが、前記の日を以て、急性腦膜炎に罹られ、頓に溘焉長逝せらる、行年二十七歳、訃音に接して本會よりは、弔辭を送れり。

會員登山彙報

○會員北澤基幸氏は七月下旬より中房温泉を發して燕岳に登り、常念、大天井を經て二ノ俣より上方地へ降り同地に會せる會員數氏と燒岳に登り、松本に出でらる。

○會員三枝威之介氏は、七月二十日より白馬に登り、日本アルプスの最外壁を南走する事數日、殆んど先人未踏の諸山五龍大黑等の諸山を越へて大町に降らる。

○會員高野鷹藏、三枝威之介兩氏は上高地に滯在する事數日附近の山岳を撮影し、同地に會合せる會員數氏と燒岳に登り尙ほ白骨に出で同地より乘鞍に登り松本に出でらる。

○會員山川詢氏は德本峠を越へ上高地より槍ヶ岳に登らる。

○會員增田吾助、角倉邦彥、田中健太郎の三氏は七月下旬木曾駒、八ヶ岳等に登らる。

○塚本永堯氏は、八月十一日伊豫國貞光より劍岳に登らんとして風雨のために引返し、十三日一宇川に沿ひ再び劍山に登攀を企てられ、桑平より頂上に達し、「御花畑」の美「平家の馬場」の壯をきはめ、夜に入つて下山一宇村字古見に一泊し、劍山の上下を終へられたり。

○赤木樟一氏は、本年五月、雪の岩手山に登攀せられ次いで早千峯をも窮めらる。

○飯柴永吉氏は、本年八月八ヶ岳及び戸隱に登り、歸途日光の女貌山に登らる。

○會員山本德三郎氏は、本年七月廿九日羽後福島巢より、八里にして高畑に到り、三十日森吉火山の絕巔を極め、翌日下山せられ、九月五日羽前の湯殿山より、月山にかけて登らる。

○會員榎谷徹藏氏は、八月五日、有明村古厩より有明山を中房へ乘越し、同所に八日間滯在專ら寫生を試み十四日燕岳、大天井岳に登りて二俣小舍に一宿、十五日常念蝶ヶ岳に攀登して上高地に下り、附近の山岳を寫生するを九日、偶、會員大平晟君の乘鞍を踰えて來るに會ひ、廿一日共に燒岳の噴口を窮め、廿五日德合峠を越えて島口より松本に出で、別れて甲州に入り、廿七日吉田口より富士山に登り、翌日大宮新道を鈴井へ下る、この行、寫生畫、スケッチ併せて六十六個の獲物ありたりといふ。

○會員前田曙山氏は八月初旬、高山植物研究會員を引

率して、信州八ヶ岳に登らる。

○會員岡野金次郎氏は、八月二日より甲州駒ヶ岳を上り、四日信州八ヶ岳を茅野方面より攀ぢ、後轉じて飯田に向ひ御阪峠を踰えて歸東せられたり。

○會員大内武次、成川秀行兩氏は八月中旬甲州駒ヶ嶽に登り（風雨の爲め絶頂を究むること能はざりしと云ふ）、宮田より木曾駒ヶ嶽を攀ぢて上松に下り、歸途八ヶ嶽に登山せらる。

○會員山本滿丸氏は、七月下旬越中立山に登り立山溫泉より小鳶山を攀ぢ、八月下旬信州湯川より立科山、同本澤溫泉より八ヶ嶽に登山せらる。

○會員川島祿郎、辻村伊助、那須皓、河田默四氏は七月廿二日より有明山、燕岳、二ノ俣の天上、奥常念、槍ヶ井、笠ヶ岳穗高岳の諸山に登り八月四日歸京せらる。

○會員小島久太、高頭仁兵衞、田村政七三氏は、食橋藤次郎氏と俱に、七月十九日甲州鰍澤を發し、七ツ峠を越えて西山溫泉に宿し、白萩山に登り、駿州東俣（大井川の上流田代川）を溯りて、廿三日農鳥山の三角點下に露營し、翌日間ノ岳、北岳を極めて能呂川の上流に下り、二十八日地藏、凰鳳を攀ぢて、青木鑛泉に宿し、上諏訪、辰野を經て飯田の附近時又より、天龍川を舟して、濱松に出でられたり。

○會員大平晟、夏目新治兩氏は、八月中淺間山、八ヶ岳、木曾駒、御岳、乘鞍岳、燒岳、槍ヶ岳に登られたり。

○會員志村寛氏は、八月八ヶ岳、御岳、白馬岳に登られたり。

○長谷川天溪氏は、八月中、十和田湖に遊ばれたりと

○田山花袋氏は、八月中、九州に向ひ、霧島山に登山せられたり。

○加藤竹三郎氏は、八月中、信州白馬岳に登らる。

○大下藤次郎氏は、七月中旬日光山に向ひ、尾瀨沼に遊び、水彩畫數點を得て、歸宅せられ、その紀行を『時事新報』に出たされたるが、水彩畫は、今秋の文部省展覽會に出品せらるべしと。

○小島久太氏は、八月二十一日須山口より富士山に、第六回登山を行はれたり。

○岡野金次郎氏は、八月二十一日、御殿場口より富士山に登られたり。

○會員高松誠氏は同志二人と、七月下旬、松本より上京地を經て、槍ヶ岳、常念、燕等に登らる。

○會員石川光春氏は、八月下旬、中房溫泉より燕、常

念、大天井より槍ヶ岳に登り、同岳より尾根傳ひに笠岳に登り至り中尾に降り燒岳に登り高地に出でゝ歸らる。

○石崎光瑤氏は、八月一日立山へ第二回登山を試みられ、二十日間立山連峰に植物の寫生と、風光の揚影を試みられ、二十日立山溫泉に下り、黑部川を涉り、針木嶺を踰えて大町に出で、四谷の北城村より、白馬岳に登り、植物寫生を試みられ、絲魚川より、伏木に歸らる。

雜件一束

○本誌明年の初號には、第一年一號より本號に至る總目錄を附すべし。

○例に依りて次號には會員名簿を附錄とすべく、轉居或は誤謬脫漏（本年一號に附せる名簿）等發見されし御方は至急事務所宛一報ありたし。

○事務整理の必要上、本會圖書携出せられし方は、十一月末日迄に事務所迄御返却ありたし。

○會員宿所異動の節は、新舊宿所を明記し、直に御通知ありたし。

○改姓改名の場合も、新舊姓名御通知ありたし。

○回答を要する書狀は、必ず返信料送附ありたし。

○會費の領收證を要せらるゝ向は、必ず返信料御送り願たし。

會員登山の通信を望む

毎々希望する事なれど、會員諸士の登山報は必ず御通知ありたき事にして、後遊の者は爲めに大なる便宜を得べく研究者は良好なる材料となるべし。會員諸氏の登山地より通信は、本會は一冊として永く紀念帖を作らんとす、會員諸君の通信を望む。

新入會員

明治四十一年十月廿五日發行

寄贈書目

東京教育博物館一覽　東京教育博物館
大橋圖書館第六年報　大橋圖書館
大橋圖書館和漢圖書分類增加目錄　同上
京都帝國大學圖書館案內　京都大學附屬圖書館
博物之友第五十二號五十三號　日本博物學同志會
名古屋新聞十數葉　種田保彥氏
Alpine Journal Vol. XXIV No 180　The Alpine Club

校正者　梅澤親光　高野鷹藏

明治四十一年十月二十二日印刷
明治四十一年十月二十五日發行

定價金參拾五錢

新潟縣三島郡深才村大字深澤
發行兼編輯者　高頭仁兵衛

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　市川七作

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所

東京市牛込區新小川町二丁目二十番地城方
發行所　山岳會事務所

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

小島烏水 山水美論

定價七拾錢
郵稅八錢

製本 四六版　意匠は南歐某カタログの體裁に模して、堅實淸楚を旨とせり、名取春川氏裝。

挿畫 四六二倍大、コロタイプ版信州上河内梓川の上流より、活火山燒岳を望む—大下藤次郎氏作。

内容 明治三十六年より、四十年に至れる、著者の「自然」殊に山岳を主題とせる論文紀行文を、輯錄したるものなり、内容は、甲斐山岳美—富士帶と中央大山系—雪中富士登山記—不二一山の繪畫—不二山と淺間山—北日本アルプス談—山を讃する文—晩秋の風光—芒の美、平原の美溪流の純美と水の姿態—紀行文論等主なるものなり

批評

某畫家は言ふ 某文士は言ふ **日本風景畫論也 山水美學也**

東京朝日**評**……就中甲斐山岳のドッシリとして居る其他富士山、北アルプス、紀行文、晩秋の自然、芒川などに關する論文、取々に面白い、舊作が多くて議論に形態美は一番ところも有るけれど**服し難い**ふこと此著者の如きは、稀であるから、讀んで行く中に**自然を味**はされる樣な氣がする。**一種の魔力に迷**

發行所 東京市日本橋區下槇町十二番地（振替貯金口座六四三五番）　**如山堂書店**

志村鳥嶺先生著

高山植物採集及培養法

近刊豫告

高山植物採集法及培養法に關する本邦唯一の新著

高山植物とは何ぞや　一、高山植物分布の由來如何　一、高山植物培養法　一、高山植物の活着せざる理由　一、如何なる培養土を用ふべきか　一、如何なる肥料を施すべきか　一、給水法如何　一、如何なる場所に置くべきか　一、ロツクガーデンの構造如何　一、冬季の保護法如何　一、主要なる高山植物の産地　一、同上登路如何　一、各高山所産の高山植物　一、採集の時期及方法　一、標本製作及保存法　以上の外高山植物の採集及培養法に關する幾多の疑問に解答を與ふるものは本書なり

明治四十一年十月中發賣

東京日本橋區通三丁目十番地

成美堂